
スマブラ & 仮面ライダーズ+

郡司侑輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマブラ&仮面ライダーズ+

【Nコード】

N7120M

【作者名】

郡司侑輝

【あらすじ】

亜空事件とライダー大戦から1年後、ファイターとライダー達はスマッシュシティを護る事に。様々な出会いに別れ、そして破壊者の登場。主人公である五代友樹、彼の瞳に何が映るのか…。
矢吹健太郎（代表漫画【Black Cat】【To Loveる】）
画と想像してください

人物設定（前書き）

はじめまして！

郡司侑輝です（。 。 ） /

初投稿 初作品

どうぞよろしくお願いいたします。

人物設定

人物設定

2010年6月1日現在（スマブラの世界）

五代^{ごだい} 友樹^{ゆうき} 16歳（誕生日前） 8月15日生 一人称僕 性別（男）

仮面ライダークウガ。メンバーの中でリンクと同じ位強い。恋人として、仮面ライダーアギトこと津上彩香がいる。コーヒーが好きで、皆に飯のお供に飲ませたりしている。けど、爬虫類・両生類がキライ。穏やかな性格だが、怒るとテラ・クラス並に怖い。一応リンクも同じ位怖くなる。一応主人公。クウガの世界の人間。暗い過去あり。容姿は某種割れの主人公。

リンク・ヤマト 17歳（誕生日後） 5月18日生 一人称俺 性別（男）

ハイラルの勇者。トアルだかトウル村出身。メンバーの中で、メツチャクツチャ強く、友樹と同じ位というか、同格。恋人としてゼルダ姫とお付き合いをしている。平和主義な性格。

津上^{つがみ} 彩香^{あやか} 16歳（誕生日前） 1月21日生 一人称私 性別（女）

仮面ライダーアギト。友樹とは恋仲で、ゼルダ・ピーチ・サムスとは親友。ゼルダとユニット、「ピース・エターナル」を組んでいる。友樹同様暗い過去を持つ。アギトの世界の人間。ちよい天然。容姿は某種割れの歌姫

ゼルダ・クライン 16歳（誕生日前） 2月5日生 一人称私 性別

別（女）

誰に対しても敬語で話す。やや天然気味。津上彩香とユニットを組む程の美声である。機嫌が悪いとシークになったり、殺人鬼みたいな目になる。怒りだすとちと怖い。まあ、リンクと友樹よりマシ。リンクとは恋仲。

リンク・トゥーン 12歳（誕生日後）4月30日生 一人称おい
ら 性別（男）

もう一人のリンク。名がややこしいので、トゥーンと呼ばせておる。リンクのことを慕っている。子供団副リーダー。

ピット・リー 14歳（誕生日後）5月21日 一人称ボク 性別
（男）

エンジェランドの天使。背中の上は飾りに等しい。ちなみに、子供団リーダーである。

湯口 シンジ（ゆぐち しんじ） 17歳（誕生日後）5月18日
生 一人称オレ 性別（男）

仮面ライダー龍騎。写真を写すのが好きで、時々メンバーを写している。元ジャーナリスト。龍騎の世界の人間。容姿は某通常の三倍の人。

尾上 マキ（おがみ まき） 16歳（誕生日前）9月3日生 一
人称私 性別（女）

仮面ライダー555（ファイズ）オルフェノクだった彼女は、ライダー大戦（クウガからWまでの11人のライダーの戦い）の後、純粹な人間になった。が、怒る度に左腕がウルフォルフェノクの腕となる。555の世界の人間。容姿は、金髪のショートカット。

剣崎 舞湖（けんざき まいこ） 16歳（誕生日前）3月1日生 一人称私かオレ 性

別（女）

仮面ライダーブレイド。時々、ポーカーをしており、宣言するだけで、ロイヤルストレートフラッシュが出る。女性なのに口は悪いが、根は優しく、子供団の姉貴分。ブレイドの世界の人間。容姿は、某種割れの砲撃仕様の女性パイロット。

ガノンドロフ 36歳（誕生日後） 4月4日生 一人称俺 性別（男）

何年にも渡り、ハイラルをしたりしたおっさん。成人メンバーの中で、1番酒に強い。ここ最近では無くもつと前からではあるが、リンクとゼルダと和解している。

笠井 ヒビキ（かさい ひびき） 17歳（誕生日後） 5月14日生 一人称オレ様 性別（男）

自意識過剰で自信過剰で馬鹿で弱い。ライダーの中では雑魚に等しい。が、ピット等子供団より強い（？）仮面ライダー響鬼で、響鬼の世界の人間。容姿は某種割れのクローンのクローンの人。

マリオ・マリオ 26歳（誕生日前） 8月18日 一人称俺 性別（男）

キノコ王国を守り、ピーチ姫を救い、キノコ王国のヒーローとして崇められている。ピーチとは恋仲である。

ルイージ・マリオ 26歳（誕生日前） 8月18日生 一人称ぼく 性別（男）

マリオの弟。ほぼ空気人間で、特徴が無いに等しい。マリオより背は高い。

ピーチ・アブリコット 24歳（誕生日前） 7月7日生 一人称ア
タイ 性別（女）

キノコ王国の姫君：なのだが、そのかけらがなく、怒らせると、キリが無い。

天道てんどう 舞まい 16歳（誕生日前）8月19日生 一人称私 性別（女）
仮面ライダーカブト。ちよつと鼻に来る少々ヤナ奴だが、笠井ヒビキよりマシ。時々おじいちゃん語録を出す。カブトの世界の人間。容姿は、某太陽炉の茶髪の女の子。

野上のがみ 佑一ゆういち 16歳（誕生日前）8月10日生 一人称オレ 性別（男）

仮面ライダー電王。モモタロス・ウラタロス・キンタロス・リュウタロスの四体のイマジンと友人関係にある。それぞれのイマジンに憑依されると、それぞれの性格が表れる。モモタロスなら、ヤクザ。ウラタロスなら、ナルシストのナンパ師。キンタロスなら、関西系のヤーさんに。リュウタロスなら、ダンス好きの子供。の様になってしまう。電王の世界の人間。容姿は、某親父にもぶたれたことが無いのに少年。

サムス・アラン 25歳（誕生日前）9月19日生 一人称私 性別（女）
バウンティハンターである。酒に強いが、朝に弱いので、メンバーの中で1番遅く起床する。けっこー強い。ここ最近ではファルコンに心を委ねる傾向あり。

紅くれない 佑井ゆい 16歳（誕生日前）9月21日生 一人称私 性別（女）
仮面ライダーキバ。人間とファンガイアのハーフ。父が人間、母がファンガイア。バイオリンをこよなく愛しており、時々メンバーの前で何度か演奏をする。キバの世界の人間。容姿は、某08小隊の主人公と混浴した人。

ネスティ・オーヴェン 12歳（誕生日前） 8月31日生 一人称
おれ 性別（男）

PSIを使うエスパー。通称でネスと名乗っている。独身能力も使えるが、本人は嫌っている。レポートや色々使う。子供団メンバ
ー。

門谷 慎吾 16歳（誕生日前） 8月12日生 一人称俺 性別（
男）

仮面ライダーディケイド。元世界の破壊者。首にトイカメラをぶら
下げている。「大体分かった」を口癖にしている。あまり笑わない。
以前、クウガからキバの世界を旅し、歪みを断ち切った。ディケイ
ドの世界の人間。尚、ディケイドの世界でライダー大戦が起こった。
容姿は、某万死に値する人。

クッパ・ビビンバ 30歳（誕生日後） 5月2日生 一人称ワガハ
イ 性別（男）

元ピーチの誘拐犯、子持ち、その上傲慢である。ガノンの次に酒に
強い。マリオとは元ライバルで現在親友（？）ついでにピーチから
は、手を引いている。

ワリオ・ワリオ 27歳（誕生日前） 12月29日生 一人称オレ
サマ 性別（男）

馬鹿。アホ。よくバイクに乗っては、周囲に迷惑をかけまくってい
るのは、屋敷内でバイクを走行の為。その度友樹から半殺しにされ
るのもしばしば。

黒坂 大樹 16歳（誕生日前） 10月27日生 一人称ORE
性別（男）

仮面ライダーディエンド。ディエンドこと慎吾と共にクウガからキ
バの世界を渡ったが、ほとんど慎吾の邪魔をする。その邪魔が7割

を占め、残りの3割が手助けをした。ディエンドの世界の人間。容姿は、某狙い撃つぜな人。

左 ^{ひだり} 薫 ^{かおり} 16歳（誕生日前）6月17日 一人称私 性別（女）

仮面ライダーWのジョーカー・トリガー・メタルサイド。探偵である。推理力はまあまあではあるが、相方がいればあのホームズをも超える推理力が出来る。が、最近全く、探偵らしい事はしていない。Wの世界の人間。容姿は、某種割れの発進どうぞの人。

右 ^{みぎ} 佑理 ^{ゆり} 16歳（誕生日前）6月19日生 一人称私 性別（女）

仮面ライダーWのファンゲ・サイクロン・ルナ・ヒート側。探偵・左薫とはよき相方同士。が、ちよいと不思議ちゃんに近いか遠い。頭の中にある「地球の本棚」にて検索が出来るとか。左薫と同じく、Wの世界の人間。容姿は、某種割れの赤髪のお嬢様。

リユカ・ウラキ 12歳（誕生日前）8月27日生 一人称ぼく
性別（男）

ルイージよりマシな位のいじいじ君。PSIを使う少年。心優しいので、イタズラが嫌い。子供団メンバー。

C・ファルコン 27歳（誕生日前）10月10日生 一人称俺
性別（男）

F・ZEROLEーサー。松〇修造並に、熱い男。今日も「俺のこの手が真つ赤に燃える」やら、「勝利を掴めと轟きさげぶ！」と、いつも叫んでいる。ここ最近、サムスの視線を感じるようで。

ヨッシー・ザ・ドラゴン 16歳（誕生日後）4月16日 一人称わたし 性別（男）

恐竜なのに、大食いで料理も出来て、楽器も扱える。男 ^{オス}なのに、卵を産む。

ドンキー・コング 18歳？（誕生日後）4月27日生 一人称おれ 性別^{オス}

ネクタイを付けたゴリラ。

デーディー・コング 10歳？（誕生日前）12月15日生 一人称オイラ 性別^{オス}

帽子を被ったゴリラ……じゃなくておさる。子供団メンバー。

ポポ・アーシタ 5歳（誕生日前）12月1日生 一人称ポポ 性別（男）

アイスクライマー。ナナとはよき相方。子供団メンバー。

ナナ・ピアノ 5歳（誕生日前）12月2日生 一人称ナナ 性別（女）

アイスクライマー。ポポとはよき相方。子供団メンバー。

オリマー・オリマー 36歳（誕生日前）10月10日 一人称私 性別（男）

ピクミンを大量生産したりしなかったりしている人。毛が薄い。実は妻子持ちで、月に一度手紙やらメールを送っている。普段は穏やかな性格だが、全員の弱点を記している弱点張を所持している。

フォックス・マクラウド 16歳（誕生日前）6月20日生 一人称俺 性別（男）

雇われ遊撃隊リーダー。銃火器には、それ相応の知識がある。狐。

ファルコ・ランバルディ 16歳（誕生日前）9月9日生 一人称俺 性別（男）

フォックスのチームメイト。トリ。

ウルフ・オドネル 17歳（誕生日前）7月3日生 一人称オレ
性別（男）

宇宙では、お尋ね集団の頭。口調はヤクザで性格もそれに近い？強さは、リンクと友樹の次に強い。根は優しいヤツ。オオカミ。

アイク・ユイ 15歳（誕生日前）8月18日 一人称オレ 性別
（男）

グレイル傭兵団団長。いつも無表情であるが、やるときはやる男。力強い技を使うが、リンクと友樹どころか、ウルフにさえ、敵わない。スマブラ屋敷ではルイーダの次に目立つ。（？）

マルス・セアック 15歳（誕生日前）11月7日生 一人称ボク
性別（男）

どっかの国の王子。2、3回入浴すれば、シャンプーとリンスが空になる。大アホ。ナルシスト。でも、実力は中々。

レッド 13歳（誕生日前）9月6日生 一人称オラ 性別（男）
ポケモントレーナー。ゼニガメ・フシギソウ・リザードンを手持ちにしている。出身はマサラタウンだとか。

ピカチュウ 10歳（誕生日前）3月21日生 ^{オス}性別
デンキネズミのかわいいやつ。子供団の作戦参謀に当たる。

プリン 10歳（誕生日前）10月10日生 ^{メス}性別
フーセンポケモン。子供団メンバー。コイツが歌うと全員寝てしまう。

ルカリオ 19歳（誕生日前）8月16日生 一人称某 ^{オス}性別
唯一口の利くポケモン。というより、テレパシーで会話をする。メ

タナイトと共に修業をしているとか。

ロボット ?歳 制作日数及び制作年不明 一人称ボブ
型式番号HCVI210。全て片言で話す(まあ、ロボットなら当然)。主に機械修理を得意とする。あだ名ボブ。

MrG&W ?歳 不明 一人称私
平面の人。影虫を出す、今は出ない。

星野 カービィ(ほしの カービィ) 8歳(誕生日後) 4月27
日生 一人称ボク 性別(男)
ピンク色の地球外生命体。大食いであり、周囲を困らせている。子供団メンバー。

デデデ・フォン・タイラント 30歳(誕生日前) 9月9日生 一
人称ワシ 性別(男)
通称デデデ大王。子供団の保護者。

メタナイト・フラガ 21歳(誕生日前) 1月7日生 一人称私
性別(男)
仮面を付けた剣士。その仮面を取ると、カービィの色違いになっている。ルカリオと共に修業をしている。

人物設定（後書き）

スネークとソニックは次回出します！

そして、読み辛くって

すいませんでした！！！！！！

人物設定 + (前書き)

一日で二度の投稿です)。。() /
こんなんで、ごめんねごめんね

人物設定+

ソリッド・スネーク 30歳（誕生日前） 8月14日生 一人称オレ 性別（男）
重火器類を扱っている伝説の傭兵。好きな物は段ボール。たまにそれに入っている。

ソニック・ザ・ヘッジホッグ 16歳（誕生日前） 6月14日生 一人称オレ 性別（男）
音速のハリネズミ。カナズチ。英語交じりの日本語を話している。

部屋割

ここスマブラ屋敷では二人が生活する「二人部屋」三人の「三人部屋」四人の「四人部屋」の三種がある。
二人部屋の住人

101 リンク&ゼルダ

102 ネス&リユカ

103 友樹&彩香

104 薫&佑理

105 ドンキー&ディーディー

106 ナナ&ポポ

107 佑井&舞湖

三人部屋の住人

201 サムス&ピカチュウ&プリン

202 デデデ&カービィ&メタナイト

203 ルカリオ&スネーク&ウルフ

204 アイク&マルス&レッド

205 マリオ&ピーチ&ルイーザ

206 ビビキ&ピット&トウーン

四人部屋の住人

301 慎吾&シンジ&佑一&ガノンドロフ

302 フォックス&ファルコ&ソニック&MrG&W

303 オリマー&ファルコン&ヨッシー&クッパ

304 ワリオ&大樹&マキ&舞

屋敷の構造

6階〜4階 3人部屋4人部屋。 204〜304

4階〜2階 2人部屋3人部屋。 101〜204

1階 居間・玄関・食堂他有り。

地下以降謎

バイク所持者及び専用バイク

友樹 ビートチエイサー

彩香 トルネイダー

シンジ ドラゴン

マキ オートバジン

舞湖 マシンブレイダー

ヒビキ ヒビキ号

舞 カプトチエイサー

佑一 ライナーバイク

佑井 キバード

慎吾 マシンディケイダー

大樹 マシンディエンダー

薫&佑理 Wギャリー

ワリオ ワリオバイク

マリオ マリオチエイサー

ピーチ ピーチハーター

人物設定 + (後書き)

いかがでしたか？
次回をお楽しみに！

一話 今日一日からの戦い 6月1日(前書き)

妄想オープニング

流星のナミダ

一話 今日一日からの戦い 6月1日

朝日が差し込んだ時間はAM5:40分。この時間に起床する人は…。

友樹「朝か……。ようし、朝ご飯作るか」

彼は、朝食当番なので、いつもの服に着替え、下のキッチンへと向かった。

友樹「よし……。やるか」

今日の朝食は、卵焼き・みそ汁・白米・納豆・おひたし（ほうれん草）であった。30分で出来る。

やっと出来終えた友樹は、外へ行き、体を動かす。そう、朝食を作って、その後に一時間程体を動かすのだ。

リンク「おはよー！友樹！！」

友樹「おっ！？やぁリンク。早いね、少し特訓する？」

リンク「おっし！じゃあやろう」

その後、皆が起床したので、朝食の時間。

ヨッシー&カービィ「「いっただっきマース！！」」

ヨッシー「ガツガツガツ！！」」

カービィ「バクバクバク……！」

トウーン「うっわぁ……！」

ピット「いつもながらゴージャス……！」

ウルフ「ちったぁ落ち着い喰えってんだ」

ヒビキ「それでもムリだろ？カッカッカッ……グフツ……！」

サムス「るっさいわよ……！」

Ｃファルコン「ハツハツハー！ヨッシーとカービィは大きく育つぞ
お！」

アイク「……………」

友樹「…ん？どしたアイク」

アイク「肉が……………無い」

マルス「朝から肉はダメでしょう？」

マリオ「ああそうだな。ってオイワリオ！俺の卵焼きを取るんじゃ
ねえ……！」

ワリオ「うっせー！わっはっはっはー……！」

マキ「死にたいんですか？」

ウルフォルフェノクとなった左腕をワリオに見せるマキ。その別の場所では。

モモタロス「おーい、コーヒー煎れてくれえ！」

ウラタロス「先輩、もちつと静かに出来ませんか？」

キンタロス「ごっそさん。ウマかったでえ、文句無しや」

リュウタロス「ボクもごちそーさまあ」

友樹「おそまつさま」

彩香「ホント美味しいわね。って、友樹ったら…頬にご飯粒つけちゃってえ。少し慌て過ぎなんじゃない？」

友樹「イヤ、これでも控え目だけど…」

彩香「取りあえず、付いてる物は付いてるの。ほら、取ってあげる」

友樹「いいよ、恥ずかしい…」

友樹が言うのも聞かず、彩香が彼の頬に付いてた米粒を手で取り、自らの口に入れた。

カシャッ

慎吾「いいのが取れた。お前ら、部屋が同じだからってソレは止める。ここには独り身が多いんだかな」

友樹「…ごめん…」

シンジ「謝ってもらおうと、皮肉っぽくなっから…いつも通りでいいんだよ」

彩香「そうよ友樹。いつも通りにしましょ」

友樹「そだね。そろそろ片付……」

ビーツ！ビーツ！

警報がなると、ロボットことボブがアナウンスをかける。

ボブ「西ノ海岸ニテぐるんぎガ二体出テイマス。友樹サン、行ツテ下サイ」

友樹「今日のアナザーはグロンギか…」

アナザーとは、このスマブラの世界を破壊する巨大規模の戦闘集団で、友樹達はその集団の壊滅するべくこの屋敷で生活している。

友樹「…行つて来ます」

そう言つと、友樹は車庫に止めてあるビートチェイサーで行こうとしたが…彩香の手が友樹の手を掴む。車庫の中で。

友樹「大丈夫だつて……僕は死なない。今日も……丈夫な感じで帰つて来るよ」

彩香「でも心配で………」

涙を浮かぶ彩香に友樹は抱いた。それが数時間と感じる位の。

友樹「生きて帰って来る」

そういうと、右手でサムズアップし、ビートチェイサーに乗り、西の海岸へビートチェイサーを走らせた。

現場 西の海岸

現場に、二つの黒い影があった。

ン・ガミオ・ゼダ「……………リントを抹殺しようか？」

ゴ・キブリ・ダ「だが、ここにもクウガがいる。その時は真っ向から殺るか？」

と、そこに…。

友樹「やっぱりお前か、ガミオ!!」

ン・ガミオ・ゼダ「お前……………リントではないな」

友樹「ああ。僕の名は友樹！」

そう言って、友樹は腰にアークルを体の中から出した。

ゴ・キブリ・ダ「あっ、あれは!」

友樹「またの名を…仮面ライダークウガ!!」

友樹は左腕を左腰に置き、右腕を左側に突き出して右側へ流し叫ぶ。

友樹「変身っ！！」

すると、友樹は右側に伸ばした右腕を左腰に流し、重なった両手で、ベルト左側にあるスイッチを押して、両手を下に広げた。

するとどうだろう、友樹の姿は黒いボディに赤いプロテクトと目を付け、クワガタの様なツノを生やした姿になった。

この戦士こそが、友樹の変身したクウガである。現在マイティフォーム。

ゴ・キブリ・ダ「リッ、リントがクウガにつ？！」

ン・ガミオ・ゼダ「ほう、やはりあの時の小僧か……」

クウガ・M「行くぞ！」

ン・ガミオ・ゼダ「行け……」

ゴ・キブリ・ダ「ああ！ハっ！」

戦いは激しいものだった。

クウガ・Mのパンチのラッシュがキブリを打ち、キブリの攻撃をクウガ・Mが避けるの繰り返しだった。

ゴ・キブリ・ダ「クウガ……お前え……」

クウガ・M「トドメだっ！」

そう言うと、クウガ・Mは走り出した。キブリ目掛け……。すると、クウガ・Mはキブリの150?手前でジャンプし、空中で一回転し、繰り出した右足がキブリに当たった。これぞ必殺・マイティキック。

ゴ・キブリ・ダ「ううう……があああああ!!!!」

ドーーーーーン

「断末魔の叫びを上げ、爆死した。尚、グロンギはクウガにだけやられるとクウガの封印のマークが浮かび爆死する。」

ン・ガミオ・ゼダ「ほう、やはりディケイドと組んで我を殺したあの小僧だな?」

クウガ・M「ああ、そうだよ」

ンガミオ・ゼダ「あの時は、お前一人では我を殺すどころか、怯ませることさえ出来なかったお前……クズって言うのではないのか?」

クウガ・M「ゴチャゴチャ言っで………ケリ決着を付けようじゃないか?」

一方、スマブラ屋敷では。

リンク「………遅い………」

ガノンドロフ「さしずめ………二体相手に倒されただろう」

バンツ

慎吾「んなこと言うな！あいつは……あいつは、大切な仲間を……グロンギ達との戦いで……失ってしまったんだ！」

レッド「それって……どういう……」

慎吾は話した。

友樹の世界は、平和な世界だった。しかし、グロンギの出現によりその平和も崩された。

そんな時、友樹は家に代々伝わるアークルでクウガとなり、グロンギ達と戦った。皆の笑顔を守る為……。

慎吾「そして……大切な仲間……共にライダーとなった幼なじみと共に戦ったんだ。その中の一人一人が……俺達ライダーズと瓜二つだったんだ」

彩香「まさか……友樹は私達を、幼なじみで守りきれず死んでしまった人と重ね合わせてたんだ」

ゼルダ「大方そうでしょう……。ですが……また新たに出会った皆とその笑顔を守る為に戦っているのですしょう」

ネス「友兄の私物にたまたま触れて……その通りのビジョンが見えたんだ」

リュカ「ぼ……ぼくも……」

ウルフ「ま、それくらい、振りきらねえとなあ」

フォックス「大丈夫かな？」

戻って海岸

クウガ・M「うわあああああああ！！！！」

ドガッ

クウガはガミオの一撃により、マイティフォームから最弱のグロ
ーイングフォームへフォームダウンしてしまった。

ン・ガミオ・ゼダ「フンッ！弱い、弱いぞお！リントの戦士よ！！
あの時は仕留め損ねたが……いまここで貴様に引導を渡してくれる
！！」

ン・ガミオ・ゼダの拳が、ベルトのバックルに入ってるアマダム
に向かってふりかかろうとした。が、ガミオは拳を止めた。その後、
クウガに背を向け、去って行った。

クウガ・G「ま……て……」

バタッ

クウガ・Gから強制的に変身が解けてしまった。

友樹「彩香……………ごめんね」

数時間後、心配になった彩香と子供団が友樹を屋敷へ連れ帰ってつ
た。

くづつ

一話 今日一日からの戦い 6月1日(後書き)

妄想エンディング

泪のムコウ

二話 対ガミオ戦 6月1日(前書き)

今回は

たーぶん

グダグダ×三千万

だと思いません。

二話 対ガミオ戦 6月1日

ガミオに負けた友樹はあの後彩香と子供団によって、運ばれた。体中がボロボロの雑巾のようになっていた。

見舞いとして、子供団と彩香（まあ、ルームメイトだから）と慎吾が来ている。

慎吾「大体わかった。ガミオが現れ戦ったのはいいが、ボッコボッコにしてやられたって訳か」

ピット「えっ！メンバーの中で強いより最強の二人の友樹さんが負けるってことは……スゴイ強いつて訳ですか!？」

トウーン「だとしたら……おいら達!!」

カービィ「次来たら絶対死んじゃうって!!」

次第にわーわーと叫ぶ子供団。

とその時、入り口のドアが開くと中年の男が立っていた。

????「……負けた様だな……」

友樹「……うん」

????「……それでも仮面ライダーか？」

ピット「イキナリ入って来れば、アナタは一体ダレなんですか?!」

すると父・エツオは…。

エツオ「よしつ、じゃ外行くぞ」

友樹「はい！」

二人は外へ出た。そのついでにメンバー全員が、酒やら菓子やら持ってきている。

オリマー「ふうむ。これについて、弱点帳の出番は無しかぁ」

G&W「あんた、何やってんですか？」

友樹とエツオは向かって立っていた。

友樹は腰にアークルを出して、エツオもベルトを出した。

そして二人は構えをとり叫ぶ。

友樹「変身！」

エツオ「変っ身!!!」

やがて、友樹はクウガに変身し、エツオは黒い仮面ライダーに変身していた。

ブラックRX「俺は太陽の子仮面ライダー
ブラアアアアアアアアアアアアアアアアアア
クウガM「だったら僕は太陽の孫だ!!!」

慎吾「イヤ、そーゆー事はちがうだろオイ!!!」

クウガ・Mの放ったばけを慎吾が適切にツッコミを入れる。

ブラックRX「素手で勝負だっ!!」

クウガ・M「はいっ!」

ブラックRX「だあああっ!!!!」

クウガ・M「はあああっ!!!!」

ドンッ!!

ルカリオ「拳と拳がぶつかった?」

メタナイト「それだけではない!見ろっ!二人の足元が窪んでいるぞ!!!!」

ディーディー「あれドンキーより強いんじゃない?」

ドンキー「分かんないよう!」

すると、二人の拳が離れ、数メートルバックし、力を溜めて前に勢い良く出て、空中でどちらも一回転して……。

ブラックRX「ライダー……キック!!!!」

クウガ・M「はあああああ!!!!」

ドゴッ!!

ブラックRXのライダーキックとクウガ・Mのマイティキックでも相殺してしまう。

それから2時間たって、決着は着かないのであった。

ブラックRX「成長したなあ……………ハア……………ハア……………」

クウガ・M「父さんこそ……………ハア……………ハア……………」

そして、二人揃って息が上がり、変身を解いた。

と、そんな時!!

ビーツビーツ

ボブ「山岳部ニテぐるんぎ1、めとろいど1、あんのうん1、すもーるさいずノごーまモ1ツツ発見!友樹サン、サムスサン、彩香サン、リンクサン、出撃して下さい!!」

リンク「ごっ、ゴーマあ?!?!」

サムス「行きましよう!!」

彩香「はい!行きましよう友樹!!」

友樹「うん(多分……………ガミオが出るに違いない!!)」

四人が現場へ向かおうすると。

エツオ「俺も行くぞ!!」

父・エツオも加わりました。

やがて現場に到着すると、ゴーマに虎のアンノウンにメトロイド
そしてン・ガミオ・ゼダの四対が山を降りようとしていた。

友樹「変身！」

腰にアークルを出した友樹はクウガ・Mに変身した。その隣では
彩香が構えを取り、叫ぶ。

彩香「変身！」

そして、両方の腰を同時に叩くと、ベルトを中心に眩しい光が発
光すると、彼女は金色の仮面ライダーアギトになった。因みに今は
グランドフォーム。

エツオ「変っっっ身!!！」

ベルトのバックルがこれまた強く光り出し、その光に包まれてブ
ラックRXに変身した。

ブラックRX「俺は太陽の子仮面ライダーブラー……ックRX
!!！」

ン・ガミオ・ゼダ「ヌツ?!小僧、懲りずにまた来たな？」

クウガ・M「来て悪いか!!！」

リンク「とつとと倒しちまおうか？」

サムス「メトロイドは私に任せて!!！」

アギト・G「アンノウン……覚悟!!」

ブラックRX「行くぞ!!」

クウガ・アギト・リンク・サムス「うおっけいっ!!」

リンクはゴーマを相手にし、サムスはメトロイドを相手したが……三十秒でゴーマとメトロイドはやられたので、リンクはクウガ・MとブラックRXの援護に向かい、サムスはアンノウンを相手になっているアギト・Gの所へ走った。

リンク「強いな……コイツ」

クウガ・M「そだね……父さん!!」

ブラックRX「なんだ?!」

ガミオの一発一発の攻撃を避けながら、ブラックRXはクウガ・Mに耳を傾ける。

クウガ・M「雷の力を使うから……あいつを……あいつの注意を僕から放してくださいますか?」

ブラックRX「あの力か?ああ使え!リンク君、少々苦しいが二人であいつの注意を引き受けよう!」

リンク「はっ……はい!」

クウガ・Mが力を溜めている中、クウガの相手をさせない為にガ

ミオの注意を引き付けるブラックRXとリンク。

リンク「喰らえっ!!」

リンクが、ガミオに向け勇者の弓を当てるが。

ン・ガミオ・ゼダ「効かんわぁ!!」

なんと、最大溜めた弓も、ガミオの前には無に等しい。

リンク「なっ?!効いてない?!?!」

ブラックRX「ヤツは攻撃防御共に高い!今は注意を引き付ける事を優先しよう」

リンク「ハイ!!」

そして、二人がガミオに応戦していると、クウガ・Mに異変が起きた。

それは、ベルトのバックルに入ってるアマダムから雷ががほとばしり、右足へと流れ金色のアンクレットが現れ、体には金色のラインが入った。

これこそ、もうひとつのマイティフォーム…その名も……ライジングマイティフォーム。

クウガ・RM「二人とも離れて!!」

ブラックRX「ようし!かましてやれっ!!」

リンク「行ってやれえ!!!!」

すると、クウガ・RMは、ガミオ目掛け走り出した。その走っている時、右足はバチバチと電流が走っていた。

ガミオの1メートル手前でジャンプと空中で一回転し、右足を出した。ここまでは、普通のマイティキックなのだが、ライジング化するすると、マイティの五十倍のパワーがあるため、ある程度のグロング等の怪人にとってはたまったモノじゃあない。

そのキックがガミオに当たった。

ン・ガミオ・ゼダ「うう……リントよ……闇が……晴れるぞ……」

クウガ・RM「アナザーがいる限り、その闇は晴れない」

ン・ガミオ・ゼダ「ぬっ……ぬあああああ……!」

ドガーーーーンッ!!

ガミオは爆発四散した。捨て台詞を残して。

一方、アギト・Gとサムスの方も決着を着けたようだ。その後、屋敷にて。

エツオ「また俺は旅に出るし、たまあにここにも寄る。……まあ、なんだ……頑張ってけよ?」

友樹「はい。父さんのほうこそ……」

エツオ「フツ……。ではサラバ!」

とまで言うと、愛用のバトルホッパーで去って行った。

その日の夜、風呂場にて。

友樹「（…………ガミオって事は…………ダクマも？）」

友樹が深く考えてると…。

モモタロス「俺、参上！！！」

ドツポオーーーーーン！！！！

バシヤッ

友樹「……………」

ウラタロス「先輩、あまりしぶきを上げないで下さい（友樹君にかかってちゃってえ）」

キンタロス「せやでえモモの字い？」

ドツポオーーーーーン！！！！

バシヤッ

友樹「……………」

ウラタロス「（馬鹿！人の言えてないだろう！）」

リュウタロス「わーい！ボクもボクもー！！」

バツばーーーーーん！！！！

バツシャア

友樹「……………(ぴくっ)……………!!」

佑一「オイ！何やってるんだよ！入る時は静かにしないと」

ウラタロス「(君ナイス!)」

佑一が言うのも聞かず、騒ぎまくるイマジンス(例外あり)。しかし、その近くで、どす黒いオーラを放っている友樹。

そして……………。

モモタロス「俺、サイコー!!!!!!!!!!!!!!」

ぷっちん

突然、何かが切れる音がした。

それは、佑一とイマジンスの耳に響いた。

モモタロス「あん？何の音だ？」

ウラタロス「な、何だろうねえ？」

キンタロス「何やちょっと怖いオーラが……………すんねんけど……………」

佑一「(自業自得だ)」

すると、右腕だけマイティフォームの友樹がイマジンスに近寄って来た。

それを見たイマジンスは、腰を抜かす程の恐ろしさを感じたとか

…。

友樹「ちよーっとな…静音にしようねえ…」

モモタロス「や、止める…お…落ち着け…」

ウラタロス「……………うん。オワタ…」

キンタロス「……………か…かにん…かにんしてえな！」

リュウタロス「ユルシてユルシてえ!!！」

友樹「(ニコツ) 問答無用」

「…………ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

その後、別のグループが入った時には…イマジズは、湯舟に浮かび虫の息であった。

ピーチ「…………愁傷様です」

ナナ「友兄を怒らせたのかなあ？」

サムス「大方合ってるでしょう」

マリオ「アーメン」

ポポ「友兄を怒らせたから、こんな事が…」

「Cファルコン」まあ、いつかあ

ついでに、ここは屋外温泉で、混浴である。メンバーはそこら辺は了承したが、ワリオ等の大騒ぎするヤツが多く、好まないヤツもいたりする。

イマジンズ「……………」

半殺しにした張本人の友樹はというと、自室のベッドの中で読みかけの小説版の○棒を読んでいた。ルームメイトの彩香は先程風呂へ行ったのだ。

とそこへ、だれかが入って来た。

マスター「いよっ」

友樹「あ、マスター。どうしたんですか、こんな時間に」

時計の針は午後10時半を指していた。

マスター「うむ、明日新人が6人入って来る……」

友樹「6人……また騒がしくなりそうですね……」

マスター「ああ。で、お前には……」

友樹「僕が手合わせしろと……」

マスター「鋭いなあ。ああそつだ。んじゃ」

友樹「ハイ、お休みなさい……」

その後、彩香が戻って来た頃には、もう友樹は寝ていたのであつた。

くづ

っ

二話 対ガミオ戦 6月1日（後書き）

次回入って来る新メンバーは金銭感覚がウルトラズレしている金持ちの屋敷で働くウルトラ不幸な少年が主人公の作品です。

どうぞお楽しみに。

三話 新人さんいらっしやい!! 6月2日(前書き)

今回 はっちやけます。

新人が入ります。

答えは後書きにて!!

ハヤテ「僕はハヤテと言います。これでも男です」

ナギ「私はナギだ。ハヤテは私の執事だ」

歩「私は歩って言います。ジムカスタム並に普通ではありません」

アテネ「天王洲アテネと言います。先程の普通の人とは違います」

歩「ちょっと！普通って無いんじゃないかな？！」

ネス「でもさつき、自分で普通って言いましたよ？」

歩「あうっ！」

自滅しました（笑）

ヒナギク「私はヒナギク！ハヤテの彼女です！！」

こいつらは普通ではなかった……、後一人は…。

マリア「私はナギのメイドのマリアと申します。まだ17歳なので、あしからず」

最後の方を強調したマリアであった。

その後、友樹ノクウガ・Mによる、手合わせ乱闘をし、ナギ&歩はボロボロで敗退した。その他のハヤテ・アテネ・ヒナギク・マリアの4人は、少々どころかとても強い。が、友樹には歯が立たなかった。

んで、問題が起こったのは、部屋決めであった。

一人の男を巡り四人の女（ナギ・ヒナ・アテ・歩）が一人の男の両

手両足を引っ張っているのだ。

マキ「みみっちいので、クジで決めたら？」

ナ・ア・ヒ・歩「……その手があったか?!」「……」

デデデ「ん?そういうえばスネークはどうした？」

確かに、スネークの姿が見当たらない。

そここうしてる内に、部屋割が決まったらしい。

オリマー「また弱点帳の出番かなあ?」

怖いよあんた。

部屋割の結果、ハヤテ・ヒナ、ナギ・マリア、アテネ・歩になったとかあ……。

ビーツビーツ

ボブ「みらーわーるとニみらーもんすたー三体発見!!!シンジサン
慎吾サン行ッテ下サイ」

また、アナザーが出現したようだ。

シンジは鏡に向け、龍のエンブレムの入ったデッキケースを掲げ、
いつの間にか出たベルトにデッキケースを入れた。

シンジ「変身!!!」

そう言うと、仮面ライダー龍騎に変身した。

一方、慎吾は白い箱の様なものを腰に着け、バックルを開き、一枚

のカードを手を取った。

慎吾「変身!!」

そう叫び、カードをバックルに装填。バックルを閉じると電子音が響く。

カメンライド デイケイド

その音が鳴ると、九つのホログラムが慎吾を中心に現れ、慎吾に重なる黒いスーツが慎吾を包んだ。

バックルから七枚のプレートが顔に刺さり、体にマゼンタカラーが施された。

ボディは黒とマゼンタ。左腰にはカードケースなのに、剣や銃にもなるライドブッカーがある。

これが仮面ライダーデイケイドである。

ナギ「二人揃って仮面ライダーなのか?!」

友樹「いや、僕に彩香にマキに舞湖にヒビキに舞に佑一に佑井に薫に佑理もライダーだよ」

ヒナギク「……羨ましい」

ハヤテ「大丈夫だよヒナ。ライダーの力が無くても、僕達二人はもつと上へ行けるから……ねっ」

ヒナギク「ハヤテ……」

ハヤテ「ヒナ……」

と、そんな二人に三人の女が突っ込んだとか。

デイケイド「シンジ、先行ってる」

龍騎「あいよ」

そう言うと、龍騎は鏡の中へ入って行った。

すると、デイケイドはライドブツカーから一枚のカードを取り出し、バツクルに装填した。

カメンライド 龍騎

その電子音が鳴ってデイケイドの姿から龍騎の姿に変わった。
ベルト以外。

D・龍騎「っしやあ！」

そして鏡の中へ入って行った。

ビーツビーツ

リンク「なっ、」

ボブ「屋敷前方ニきんぐどどんごノ大群数20接近!!リンクサン・ガノンサン・友樹サン・マキサン・ハヤテサン行ッテ下サイ!!」

リンク「ドドンゴって確か御先祖様が子供の頃に退治したと言っ…」

ガノンドロフ「ああ、アレ俺が作ったんだ。でも今、何処のドイツ

が量産したんだ？」

ガノンドロフの戯れ事が終わると、五人は館の前で、ドドンゴを待っていた。

友樹「変身！」

友樹は腰にアークルを出し、クウガ・Mに変身した。

マキはベルトを腰に巻き、変わったケータイの5のボタンを三度押した。

スタンディングバイ

電子音の後、マキはケータイ……もといファイズフォンを天高く掲げ、叫ぶ。

マキ「ヘンシン！」

そして腰に巻いていたベルトにファイズフォンをセットした。

コンプリート

体に赤いラインが走る。すると眩しい光が彼女を包む。光が止むと、顔はギリシャ文字の を象った仮面ライダー555に変身した。

クウガ・M「何か……棒は……あった！」

クウガ・Mは、そこら辺に落ちてた少し細長い木の棒を取り、変身の構えを取り、叫ぶ。

クウガ・M「超変身！」

すると、クウガは赤いマイティフォームから青いドラゴンフォームになり、持っていた木の棒は専用武器、ドラゴンロッドに変わった。

ガノンドロフ「さあて、総攻撃じゃああー!!」

555&ハヤテ「ハイ!!!」

クウガ・D&リンク「おう!!!」

一方、ミラーワールドでは、D・龍騎と龍騎がゲルニユート二体と大蜘蛛一体を相手にしていた。

D・龍騎はゲルニユートを、龍騎は大蜘蛛を相手にしていた。

D・龍騎「ハッ!こいつでとどめだ!」

と言って、ライドブッカーからカードを一枚取る、バツクルに装填した。

アタックライド ストライクベント

すると、何処からか龍の頭が、D・龍騎の右腕にすっぽりと入った。

D・龍騎「昇竜突破ああ!!!」

そう叫ぶと、龍の口から火炎放射が放たれ、ゲルニユートは消滅した。

一方、龍騎は。

龍騎「これでとどめだ！」

バックルにあるデッキからカードを一枚取って、ドラグバイザーにセットした。

ファイナルベント

その電子音の後、龍騎は宙に浮かび、キツクの体制を取る。その龍騎を、無双龍・ドラグレッターの火炎弾の勢いに乗り、必殺技・ドラゴンライダーキックが大蜘蛛に当たり、大蜘蛛は爆発四散した。

D・龍騎「帰る？」

龍騎「うん」

戻って外の5人は。

ガノンドロフ「だああありゃあああ！！！！」

ズドーーーーーン

キングドドンゴ「「「「「「「「「「「「ゴギヤアアアアアアアアアア！！！！！！！」」」」」」」」」

ガノンドロフの一発が、6体のキングドドンゴを消滅した。

リンク「爆弾投！」

ヒュッ

キングドドンゴ「パクっ……………!!」

ドゴン

リンクの投げた爆弾が、キングドドンゴの腹の中で爆発した。

リンク「シエアアアアア!!」

そのドドンゴに回転斬をかまし、ドドンゴは絶命した。

一方、クウガ・Dは5・6匹を相手にしていた。

クウガ・D「ハッ!やあ!でえい!!」

ドラゴンロッドを振り回し、ドドンゴを圧倒して、封印のマークを浮かばせ、一掃していった。

クウガ・D「おっしやあ!!」

サムズアップし、マイティフォームに戻して、555の援護へ行った。

一方その555は。

555「10秒間相手してあげる」

555は、左腕にある腕時計の様なものから、ミッションメモリを取り、フェイスフォンにセットした。

コンプリート

すると、555の胸のプレートが、肩へスライドした後、黄色い目が赤く変わった。これこそが、555アクセルフォームとなった。そして、腕時計…もといフェイスアクセラーのスタートボタンを押した。

スタートアップ

その電子音になると、555は通常の三倍ならぬ、千倍の高速移動でキングドドンゴをボッコボコにしていた。

321 タイムアップ

555「時間切れかあ…」

そう、アクセルフォームは、発動して十秒しか使えないのである。そこにクウガ・Mが駆け付けた時には、もうハヤテが、残り9体まで減らしていた。

クウガ・M「さあて、残りは大物だあ」

ハヤテ「そうですねえ」

と、そこに。

スネーク「よう！友樹！」

クウガ・M「スネークさん！すみません。拳銃貸してくれますか？」

スネーク「ああ！アレか。ホレッツ、マグナムだ！」

ハヤテ「(拳銃?何に使うんだろう?)」

クウガ・M「超変身!」

そう叫ぶと、緑の戦士のペガサスフォームになった。それと同時に、マグナムがペガサスボウガンになった。

クウガ・P「行きますっ!」

銃口をドドンゴに向け、必殺技・ブラストペガサスを乱射すると、ドドンゴ9体は、消滅した。

そして、クウガと555は変身を解き、6人揃って帰っていた。

おまけ

ヒナギク「ハアヤテええ~~~~!!」

だきっ

ハヤテ「ヒ、ヒナ!？」

ゼルダ「リンクー!!」

だきっ ギュッ

リンク「ゼルダ?!」

彩香「お帰りい！」

友樹「ただいまあ！」

く づ っ

三話 新人さんいらっしゃい!! 6月2日(後書き)

答えはハヤテのごとくの6人でした。

ではサラバ!

四話 ブレイド響鬼カフト電王キバ出撃 6月7日(前書き)

前回から、書き方を変えました。
あらかじめ御了承下さい。

四話 ブレイド響鬼カブト電王キバ出撃 6月7日

今日は朝からアナザーが攻撃を仕掛けて来た。

舞湖「あなたも、剣を使うのね」

ヒナギク「ええ。木刀だけど（苦笑）」

舞湖「まあいいか」

そういうと、箱のようなもの……もといブレイバツクルにスペードのカゴデリーエースをセットし腰に当てた。すると、バツクルから赤い帯が出て、ベルトになった。

そして、舞湖は構えを取り、叫ぶ。

舞湖「変身！」

ベルトのレバーを引くと電子音が響く。

ターンアップ

電子音が鳴ったらバツクルから青いゲートホログラムが現れた。

舞湖がそれをくぐり抜けると、カブト虫と剣をモチーフにした仮面ライダーブレイドに変身した。

ブレイド「まさか、アンデットローチが四体現れるとは……」

そういつて冷汗をかくブレイドに、ヒナギクは笑った顔で、言った。

ヒナギク「だったら、…ちやつちやと終しましょ？」

ブレイド「だねっ！」

一人で二体つつアンデットローチを殺っていました。

一方、屋敷でまたアナザー反応があり、ヒビキと舞が出撃した。

ワーム・サナギ態「きゅるるる！」

ウカ・ワーム「ギャギャギャギャー！」

ヒビキ「っしやあ！！行くぜ！！！！！」

舞「……………（うざい）来て、カブトゼクター！」

舞はそう叫ぶと、何処からともなく、朱いカブトムシのカブトゼクターが、彼女の手にとまった。

ヒビキ「ならオレ様も」

と言うと、ぼっけの中から音叉・音角を取りだし、角の部分を展開し、右手で持ち、左手の甲に軽く叩き、額に寄せた。

すると、額に鬼の紋章が表れ、その後には体中に紫色の炎が彼の体を包み込む。

「ハアアアアア……………ハアッ！！！」

その炎の中から、ヒビキが変身した、清めの音・音撃を司る鬼の仮面ライダー響鬼であった。

続いて、舞も専用のベルトを巻き、カブトゼクターを構えた。

舞「変身！」

そう叫ぶと、ベルトのバックル部分にカブトゼクターがセットした。

ヘンシン

その電子音で、彼女の身体は一瞬にして、仮面ライダーカブト・マスコドフォームとなった。

すると彼女は、カブトゼクターのツノを少し動かすと、カブトの装甲が少し浮かぶ。

カブト・M「キャストオフ」

そう言って、カブトゼクターのツノを反対側に動かした。

キャストオフ

その電子音の後、カブトの装甲が全て吹っ飛び、そのバラバラとなった装甲が、二体のワームに当たった。そして赤いツノが頭にくっついた。

チェンジビートル

これぞ、仮面ライダーカブト・ライダーフォーム

響鬼「行くぜ」

と、音撃棒 烈火を持つ響鬼。

カブト・R「はいはい（やっぱすごい）」

その後、ウカ・ワームはカブト・Rのライダーキックの餌食になり、サナギ態は響鬼の必殺技・音撃打 爆裂強打の型が決まり、勝ったそうさ。

一方、ブレイド（舞湖）& a m p・ヒナギクも終わって、帰りが被ったという。

屋敷に着くと、マスターがいた。

マスター「乱闘やるぞー！」

友樹「久々だなあ」

マスター「四人対戦だ！友樹VSピットVSワリオVSウルフ！」

友樹「おっ、やり甲斐があるなあ」

ピット「うへえ……」

ワリオ「がっはっは〜！大蒜をた〜〜んと喰ったから絶対的に勝てるのだあ！！」

ウルフ「ほう…友樹が相手とは…。ハッ、殺りがいがあるってもんよう！！！」

ウルフ「ステージは戦場！アイテムは無し！！ストックは1だ！！！」

その時、ピット以外は意気揚々として、ピットはほぼ抜け殻になっ

ていた。
んで、戦場。

クウガ・M「ウルフさんは最後にしよつと」

ウルフ「オレも友樹を最後にするか…」

ピット「ううゝ三位にすらなれないや」

ワリオ「がっはっはっはゝゝ！！」

乱闘開始

ワリオ「ガハハハゝ！そおれワリオバイク！！」

それをその場で避けたクウガ・Mとウルフ。しかし、ピットには、
モロ直撃（笑）。

ピット「ひでこっ！！」

吹っ飛びはしなかったものの、少々ダメージをおったピットに更なる悲劇が…。

ピット「何この「おみくじ引いたらいきなり大凶でした」感は…？
」！

ウルフ目掛け、マイティキックを繰り出すが、避けられピットに当たる。

ピット「ファラオッ！！」

更にウルフの放ったプラスターがワリオに当たらず、避けられ、これもピットに当たり、ワリオのショルダータックルにピットが当たり、四位になった。

一方観客

ハヤテ「ピットさん弱いですね」

トューン「でも、子供団の中では強い方だよ。ナギさんは？」

ナギ「私か？少なくとも……」

サムス「あら？もうワリオやられちゃったわ」

ナギ「私の話は無視か？」

戻って

クウガ・T「でやあああ！」

ウルフ「どほおおお！」

クウガのカラミティタイタンを喰らい、ダメージが増えるウルフ。

ウルフ「オラオラア！！！」

クウガ・T「ぐうううう！」

ウルフのラッシュを喰らうクウガ。

クウガ・T「よしっ！今だ！」超変身！」

クウガ・タイタンはクウガ・アメイジングマイティにフォームチェンジし、ウルフにとどめのマイティキックを繰り出し、クウガの勝ちとなった。

しばらくして…。

友樹「そろそろ行くかな」

そう言つて、友樹は屋敷の裏側へ走って行った。

ピカチュウ「ピ？ピカピ？」

レッド「え、友樹さんは何処へ行ったって？左さんは知ってませんか？」

薫「いや。佑理は知ってる？」

佑理「いずれ分かるわ」

W探偵、役に立たず。

ナギ「マリア、ハヤテ、行ってくれぬか？」

マリ& amp・ハヤ「行って参ります」

ルイージ「（確か…ああ、あれかあ）」

何かを思い出した様子のルイージ。が…。

ワリオ「どけどけ〜!!」

ドガツ!!

ルイージ「ごはあっ!!」

屋敷内をバイクで走行していたワリオは、このあと左腕をオルフェノク化マキにぼっこんぼっこんにされた。

ハヤテ「今帰りましたー」

マリア「途中で気付かれましたー」

ナギ「何をやっておる」

とその時、少し土臭い友樹が、両腕一杯に、ピーマン・トマト・胡瓜・茄子を抱えていた。

友樹「丁度、菜園に行ったら、いい具合に実ってた野菜を採って来ましたあ」

Cファルコン「おお! 実にいいトマトだ! (ガブリ) うん、味もいい!」

友樹「でしょうか? じゃあ、ゼルダとサムスさん、これで、今日の昼食をお願いします」

サムス「ええ、有り難く使わせて頂くわ。さ、やりましょ、ゼルダ」

ゼルダ「はい。リンクも手伝って下さい」

リンク「ああ、喜んで」

ハヤテ「では僕も…」

マリア「それでは私も」

数十分後

ボブ「あなざー発見！西ノ海岸ニテ、もーるいまじん十四体デス！

佑一サン佑井サン出撃デス！」

佑一「行くぞ、モモタロス！」

モモタロス「おうよ！」

するとモモタロスは佑一に憑依した。その証拠に、髪の毛は逆立ち、一部赤いメッシュが入っている。

M・佑一「じゃあ、行って来るぜえ！」

すぐさま、M・佑一と佑井は、ライナーバイクとキボードで出撃した。

んで現場

M・佑一「行くぜ！変身！」

M・佑一は腰にベルトを巻き付け、パスをタッチした。

ソードフォーム

すると彼の体は白いプラットフォームになり、その上から、赤い装甲がついて、更に桃型の電仮面がスライドし、割れた。

電王・S「俺、参上！」

決めポーズも決まったのは、仮面ライダー電王。

佑井「行くよ、キバット」

キバット「よっしゃー！キバって、行くぜー！ガブッ」

佑井の人差し指にキバットが噛み付くと、彼女の顔にはステンドグラスのような模様が浮かび、腰には止まり木のあるベルトが現れた。

佑井「変身」

そう言つて、掴んでいたキバットをベルトに装着すると、体中が変わり、仮面ライダーキバに変身した。

電王・S「俺は最初っから、クライマックスだぜ！」

キバ「な事やってないで、行くよ！」

電王・S「おうよ！」

そんな感じで、バツタバツタとモールイマジンを倒した所で、頭の登場。

ライオン・イメージン（L・I）「スマブライダースだな？」

電王・S「ああ、そうだぜえ」

電王・S（こいつ、多分まずい！モモタロス勝てよ！）

キバ「この部隊の頭ですか？」

L・I「ああ、まあ……………今ここで貴様達二人を殺す！！」

そういったL・Iは、二人目掛け走りよろうとしたその時！

???「リザードン、火炎放射！！」

リザードン「ごあああああ！！！！」

リザードンの放った火炎放射により、L・Iは怯んだ。
そのリザードンに指示を出したのは…。

レッド「佑一さん佑井さん！今です！！」

電王・S「おうよ！！」

そう言うと、パスをバツクルにタッチすると電子音なる。

フルチャージ

キバ「キバット、トドメをさすよ！！」

すると、キバはキバットに赤いフェッスルをセットする。すると周囲は暗くなり、月も出た。

電王・S「必殺…俺の必殺技！」

ザシュツ！

電王の技が決まった。

その上空で、右足のカテナを解放したキバが急降下し、必殺技・ダークネスムーンブレイクも決まった。

「L・E」ぬっ！……ぬおおおおお！！！！」

ドッガーーーーン！！！！

ライオン・イマジンは消滅した。

そして、二人は変身を解いて、レッドも連れて屋敷に帰って行った。

く づ っ

四話 ブレイド響鬼カフト電王キバ出撃 6月7日(後書き)

次回は、新入りメンバーの設定を自分流に書きます。

新入りキャラ設定（前書き）

キャラ設定です。

アテネの生年月日を知らないの、そこら辺を、御了承下さい。

新入りキャラ設定

綾崎 ハヤテ（あやさき ハヤテ） 16歳（誕生日前） 11月1日生 一人称僕 性別（男）
見るからに不幸の星の下で生まれた様な人間。特技として、家事全般にサバイバル。尚、ヤクザから逃れる内に、目茶苦茶強くなってしまう。桂ヒナギクは彼女、天王洲アテネは元カノ。

三千院 ナギ（さんぜんいん なぎ） 13歳（誕生日前） 12月3日生 一人称私 性別（女）
チビ。金の感覚がズレ、100万で安いは当たり前。3億でも安いだとか。ハヤテはこやつの執事。頭脳明晰であるがその他はダメダメ。世間知らずで、迷子になり易い。

桂 ヒナギク（かつら ヒナギク） 15歳（誕生日前） 3月3日生 一人称私 性別（女）
ハヤテの彼女。頭脳明晰、運動神経抜群。が、お化け&高い所はNG。禁句は「ペツタンコ」と「まな板」で、それを口にすると、半殺しにされるとか。

マリア（まりあ） 17歳（誕生日前） 12月24日生（？） 一人称私 性別（女）
三千院家のメイド。赤子の頃、マリア像の下で三千院の人間に拾われて、その日が彼女の誕生日である。禁句は、実の歳より上に見られる言われると、これまた半殺しにされる。

西沢 歩にしざわ あゆむ 17歳（誕生日後） 5月15日生 一人称私 性別（女）
語尾に「かな」を付けている。元ハヤテのクラスメイトで、いつかハヤテを手に入れたい普通の人。

天王洲 アテネ（てんのうす あてね） 17歳（誕生日前） 10
月8日生 一人称私 性別（女）
ハヤテの元カノ。ドS。今でもハヤテを引きずっている奴。こいつ
もいつか手に入れるとか入れないとか。幼い時は、同じベッドの中
で、ハヤテと寝た仲。別名金髪ドS姫。

新入りキャラ設定（後書き）

次回はカップリング設定です。

設定です。

特に害はありません！

CP設定 + 新部屋割 真面目に見ると、背後に……

リンク&mp・ゼルダ

お互い心配しあう仲。現在ベッドは一つで、二人して寝ている。稀にケンカをして、早くてその日、長くて三日で仲直りする。よく二人で風呂に入る仲であるが、いつも背中を合わせるだけで会話する位。

友樹&mp・彩香

ライダー大戦の後、彩香と友樹の告白が同時であったので、恋仲となった。変身した二人のコンビネーションは、ガレオムが十機かかって来ても10分でかたを付ける事が出来る实力を持っている。時々二人で風呂に入るが、友樹はいつも目のやり場に困るが彩香はそこから辺は気にしないらしい。因みに、友樹はガンヲタ（軽度）なのだが、彩香はそこから辺は慣れている。

マリオ&mp・ピーチ

二歳差のCP。ピーチの少々がさつな所をマリオがカバーしているとか。時々バイクでツーリングをしている。なにせよ、ピーチの尻にしかれているマリオ。コンビネーションは、ドンキー&mp・デイデーより上、ワリオ&mp・クッパよりも上。

ハヤテ&mp・ヒナギク

お互い信頼しあう仲。それを見兼ねていると言う人がいたりいなかったり。コンビネーションはマリオ&mp・ピーチより上。友樹&mp・彩香より下。稀にケンカをする。

新部屋割表

二人部屋

101 リンク&amp;ゼルダ

102 ネス&リユカ

103 友樹&彩香

206 ヲヅキ&pp・ピット&pp・トウーン

四人部屋

301 慎吾&pp・シンジ&pp・佑一&pp・ガノン

302 フオックス&pp・ファルコ&pp・ソニック&pp・ゲームウオッチ

303 オリマー&pp・Cファルコン&pp・ヨッシー

304 ワリオ&pp・大樹&pp・マキ&pp・舞

305 モモタロス&pp・ウラタロス&pp・キンタロス&pp・リュウタロス

CP設定 + 新部屋割 真面目に見ると、背後に.....(後書き)

お粗末様でした！

五話 久々の休日 6月19日(前書き)

今回すごい駄文です！

五話 久々の休日 6月19日

朝友樹が目覚めると、隣のベッドで寝ていた彩香も目を覚ました。

友樹「おはよ。よく眠れた？」

彩香「うん。よく眠れたよ。友樹は？」

友樹「まあまあだね。朝食作るけど……どう？」

彩香「言われ無くとも、手伝っわ」

そう言った二人は、普段着に着替えて、キッチンへと向かった。

二人が着くと、マリアとハヤテが下準備をしている途中であった。尚、現在午前5時半。

その後、朝食と片付けを終えた友樹は、バイク（ビートチェイサー）の整備をしていた。

友樹「ウーン……。うっし、出来た！整備完了！！」

と、そこに彩香が来た。

彩香「ねえ友樹、今日何か予定入ってる？」

友樹「いや、無いよ。一体どうしたの？急にさあ」

彩香「買い出しよ。ついとして、ハヤテとヒナギクも来るって。どう？」

友樹「うん、いいよ。でもちょっと待ってて、手を洗って来るからしばらくして、四人は玄関先で集合し、出発した。その道中で。」

友樹「…で、何の買い出し？」

尋ねる友樹にハヤテが言う。

ハヤテ「え〜と…「レアモノの同人誌」「トイレットペーパー」「シャンプー」「リンス」「茸茶の茶葉」と、その他あり…ですね…」

彩香「同人誌なんて、ダレが頼むのかしら？」

ヒナギク「多分ナギよ。あの子ちょっと変だし…」

そんなこんなで、街に到着。

頼まれたモノはあらかじめ揃えたので、ここからは自分の欲しいモノをかう事に…。そして、帰り道。

友樹「ねえハヤテ…」

ハヤテ「はい？」

友樹「女の子…って、どうしてこつ沢山買っちゃうモノなのかな？」

リンク「だよなあ。なーんか必要無いモノ買ってるんだよなあ」

マリオ「そーゆーモンだよ。女ってのはな」

いつの間にかマリオ& amp; ピーチ組とリンク& amp; ゼルダ組が合流し、女達は前を歩き男達は後方で女達の荷物を持っていた。丁度、街を出ようとしたら…。

ターンアップ

「……………ん？」「……………」

どこかで聞き覚えのある電子音。そして、その方向を見ると…。

カメンライド…

大樹「変身…」

デイエンド

二人の青いライダーが、十三体のアンデット（雑魚）を相手にしていた。

デイエンド「剣崎い、痛みは一瞬だ」

そう言ったデイエンドは、デイエンドライバーにカードを一枚セツトし、銃口を前にスライドする。

ファイルフォームライド ブ・ブ・ブ ブレイド

その電子音の後、ブレイドを撃つと、ブレイドは大きな剣、ブレイドブレイドに変形した。

マリ・ピー・ハヤ・ヒナ「「「何アレ!!」「」」

友樹「あっ、そういえばリンクとゼルダ以外言ってますね。ディ
ケイドとディエンドは、特殊なカードファイルフォームライド…つまりFFRカードで、ク
ウガからキバそしてWを武器・別の生き物・半分こになったりしち
やうんです」

リンク「説明長いな……」

とか何とかしているうちに…。

ファイルアタックライド ブ・ブ・ブ ブレイド

ディエンド「でやあああああ!!」

ズシャアアアア!!

アンデット共「のごおおおおお!!」

アンデット共は殲滅した。

その後、変身を解いた二人は、友樹達に気付き、帰りを共にした。
その道中。

舞湖「のっバカッ!!断りの返事も無しに使うなドアホッ!!」

大樹「別にいいだろう?アナザーは排除出来たんだからさあ」

舞湖「だったら、オレを召喚して使えばいいだろうが!!」

ゼルダ「女の子がそんな口を利いて良いものなのですか?」

リンク「フツー、ダメだよね……」

ピーチ「フツーで無くてダメー!!」

マリオ「あ、そういえば今日はガン ムXがやる日だったな……」

ハヤテ「そういえばそうでした……って、オロ?」

ヒナギク「どしたの?」

ハヤテ「あ、いや僕達の持ってた荷物と、友樹さんと彩香さんが……いつの間にか居なくなってる……」

確かに、いつの間にか二人と荷物が無くなっている。

大樹「アレ?言っでなかつたっけ?」

大樹の一言で、その場にいた舞湖以外の6人は首を傾げていた。

舞湖「友樹はガンヲタなんだ。ホラ、もう屋敷に着いてるし」

その屋敷の中でガン ムXのOPが、微かに聞こえて来た。

大樹ら八人が入ると、大画面のTVを占領しつつも、コーヒーを飲みつつ、ガン ムXを、子供団と共に観ていた友樹がいた。

ポポ「友兄、面白いねえ!」

友樹「だろう?奥が深いんだなあ」

三十分後、ガン ムXが終了して、ニュースを見るメンバー達と、ここでヒビキが言う。

ヒビキ「何かさあ、とんでもないニュースって無いかなあ…」

ルイーダ「例えば？」

ヒビキ「アナザー達が大集合して、強大な組織になっちゃいましたー……なんて」

クツパ「ナイナイ…」

イマジンズ『同感』

ヒビキ「だよなー…なはははははは！！」

そのヒビキの笑いに連れ、周囲も笑ってしまう。が、それが崩れてしまう時が来た。

TV<…！？…たった今入ったニュースです。先程、スマッシュ・シティを侵略しているアナザーと仮に名付けている集団が、各地に潜んでいる秘密組織を集結して、新たに宣戦布告したとの事です！
！！>

友樹「なっ…！！」

シンジ「なんだって！！」

TV<情報によりますと、新たな組織の名は、グラウンド・ショッカ―と名乗っていました。組織の幹部の内、ブラッドファルコン、ア

ンドリユー・オイッコニー、ゲラコビッツ、リドリー等他数の幹部がいる模様です>

Cファルコン「何だと!」

フォックス「オイッコニー?!」

ファルコ「おいおい…」

ウルフ「……………」

マリオ「ゲラコビッツだとお!!」

クッパ「誰だっけ?」

ピーチ「以前、アタイやあんたを苦しめた奴よ」

ルイージ「まったくもって、そんな通りよ!」

サムス「まさか……………まだ生きていたと言うの?」

どうやら先程の連中の中に自らの強敵がいたようだ。

その後、マスターが、全員を特別会議室へと呼び、グランドシヨッカーに対する会議を始める事にした。

ここから先は会話ばかりに。

マスター「では、これより、対策会議を始める。まず先に、私が入手した情報によると、グランドシヨッカーは偽ライダーの量産をして、過去にやられたアナザーを復活させまた使う等、他あり。これに対し、誰か意見は?」

ウルフ「一つ聞きたい」

マスター「何だ？」

ウルフ「奴らは、戦闘機で攻めて来る事は？」

マスター「ある。主に戦車位だ。次、誰かいないか？」

歩「一ついいかな？」

マスター「何だハムスター？」

歩「ハムスターじゃない！！！！で言いたい事は、こちらの戦力レベル上げる事はしないのかな？」

ナギ「指導する人間がいたとしても、リンクと友樹以上の奴がいれば……」

友樹「一人いますよ」

ナギ「誰が？」

友樹「僕をここまで強くしてくれた武術の師匠（先生）が」

アテネ「いるとしても、どこにいるの？」

友樹「この屋敷の裏の山の山中で一人で暮らしています」

ハヤテ「どんな人ですか？」

ルカリオ「それなら某も知っている。彼の名はおおとりゲンと
って一号ライダーだという」

メタナイト「ああ、私も友樹の紹介で会った事がある」

リュウタロス「ねーねーどんな人お？」

ヒナギク「ハヤテと同じ質問をしないで！」

マリオ「落ち着いた方が得だぞ」

マリア「そうですよ。ついでに紅茶を煎れて来ました」

ウラタロス「ありがとう」

キンタロス「やっぱり、この紅茶は泣けるで！」

モモタロス「ついでにプリン食いてー！」

プリン「プー!!」

レッド「大丈夫。モモが言ったのはお菓子の方だから」

ピカチュウ「ピイカ、ピカチュウ」

ヒビキ「だよなあ、リュウタからズレたなあ」

マキ「で、そのおおとりって人は、ここに来てくれるのですかね？」

リンク「どつだろっね?」

トウーン「出来れば来て欲しいなあ」

ゼルダ「どなたか、連れて来るって事は?」

ガノンドロフ「だったら止めとく」

ワリオ「ならオレサマが行ってやるぞ。子分一号二号も来い!」

マルス& amp; アイク「誰がだ!」

ドンキー「山だったら、おれも行くぞ」

デイディー「オイラも行くよ」

ポポ「ポポも!」

ナナ「ナナも!」

リュカ「ぼくも行くよ!」

Cファルコン「道案内として、友樹も連れて行けば良い」

オリマー「他は?」

ヨッシー「わたしも行きますよ!」

彩香「私も行くわ!」

佑理「あの二人はいつも一緒になるの？」

薫「さあ？」

大樹「ま、十人もいれば充分だろ」

サムス「その人が来るまで、残りの皆でトレーニングをした方がいいわね。喧嘩とか乱闘とか」

舞「おじいちゃんが言った。十人以上で行く時は、頭を決めておけて」

ネス「おれも行くよ！」

佑井「じゃ、おおとりさんが来るまでは決定として…」

ルイージ「後はどうするの？」

クツパ「こつちには、ランドマスター三機、アーウィン二機、ウルフェン一機の六機しか無い」

慎吾「野上、デンライナーで応戦出来るか？」

佑一「出来るよ」

ピーチ「デンライナーって？」

フォックス「さあ？」

ファルコ「教えてろ！赤鬼！！」

モモタロス「デンライナーは、時を走る列車で武装もしてあんだ…
つて、オレはモ・モ・タ・ロ・スつて言うんだよ！ンのおトリ！」

ファルコ「んだとお！」

ソニック「大勢で敵が攻めて来た時は？」

カービィ「その時はボクが吸い込んでじゃうよ！」

デデデ「全力でダメだ！腹壊すぞ！」

ピット「こっちはイカロス達に聞いて来ます」

シンジ「オレが言えたギリではないが…」

舞湖「どした？」

シンジ「イカロスって役に立つのか？」

ピット「立ちますよ。……………多分」

ピッッピッッ

会議（？）の途中でアナザー改め、グラントショックカーがセンサー
にかかった様だ。

ボブ「本屋敷前方500m先二ぐらいどしょっかー発見！！数八三、
内一体八でーたべーすニモ存在シナイたいぶデス！友樹サン、彩香
サン、リンクサン、ゼルダサン、マリオサン、ルイーダサン、行ッ

テ下サイ！」

友樹「生きましょう！」

彩・リ・ゼ・マ・ル『ええ（はい）（）（オウ）（）（）』

そして、六人は現場に急行した。

これが、新たな闘いになるのも知らず……。

く　づ　っ

五話 久々の休日 6月19日(後書き)

誰か こんな自分に 力を下さい!!

六話 その名はグランドシヨッカー 6月19日(前書き)

今回本当に駄文です

六話 その名はグランドシヨッカー 6月19日

友樹「何なんだあれは…？」

現場に到着した、友樹、彩香、リンク、ゼルダ、ピーチ、ルイーダ、そしてマリオの六人が見たモノは、アンノウン二体に、見たことの無い怪人がいた。

体は白く、右手がカマ状になっていた。

シュバリアン「我が名は怪魔・ロボットシュバリアン！グランドシヨッカー特殊攻撃隊長なり！」

マリオ「て事あ、敵って事に間違えねえってことか…」

リンク「でも、三対六ってのは…フェアじゃねえよな」

リンクがそう言ったその瞬間、シュバリアンの背後に灰色のカーテンが出現し、その中から三体のファンガイアが出現した。

ゼルダ「グランドシヨッカーは凄い物をお持ち何ですね」

シュバリアン「お褒め頂き光栄です」

彩香「そんなことより……………」

友樹「今は戦う事を優先しよう！」

彩香はオルタリングを、友樹はアークルを出し、構えを取り叫ぶ。

彩香・友樹「変身！」

彩香はアギト・Gに変身し、友樹もクウガ・Mに変身した。
するとクウガは、ビートチェイサーの起動キー兼検棒のビートアク
セラーを取り出した。

クウガ・M「超変身！」

そう叫ぶと、クウガは紫色の大地の戦士タイタンフォームに姿を変
え、持っていたビートアクセラーもタイタンソードに変形した。
それと同時に、アギトもグランドフォームが焔の剣を使うフレイム
フォームへフォームチェンジした。

クウガ・T「彩香とゼルダはアンノウンを！リンクとマリオさんと
ルイージさんはファンガイアを！僕は何とかシュバリアンの相手を
します！」

アギト・F「ええ！行くわよ、ゼルダ！」

ゼルダ「ハイッ！」

リ・マ・ル『合点承知！！』

シュバリアン「少年よ！君にこの怪魔・ロボットシュバリアンが倒
せると言うのかね？」

クウガ・T「どうだろう？でも……やって見ないと分からない！」

シュバリアン「フツ、気に入ったぞ少年！」

クウガとシュバリ안의戦闘が始まったその時、アンノウンを相手にしていたアギト・Fとゼルダはと言つと。

アギト・F「秘技・炎月斬三日月」

ザシヨツ

タイガーロード「うがああああ!!!!」

ゼルダ「デインの炎!!!!」

バッファローロード「がああああ!!!!」

たった一発でアンノウンをやっつけたこの二人。その近くでは、マリオとルイーダがファンガイアを一つに固めていた。

マリオ「ルイーダ行くぞ!!」

ルイーダ「OK!兄さん!」

マリオとルイーダは背中合わせになり、マリオは右手をルイーダは左手を、前にいるライオンファンガイアとシースターファンガイアに向けた。

すると次の瞬間、二人の手から、赤い焰と緑色の焰が次々に勢いよく豪快に出続けた。その二色の業火により、二体のファンガイアは消滅した。

マリオ「これぞ……」

ルイージ「必殺……」

マリ& amp ;ルイ『Wファイヤー』

その隣のリンクも、残ったアリゲーターファンガイアを、超回転・満月斬でやつつけた。

アンノウンとファンガイアが全滅する少し前には。

クウガ・T「中々やりますね…！うりゃあああああ…！」

シュバリアン「ふはははは！せりゃあああああ…！」

先程から、攻撃を繰り返しては避けられ、出されたら避けるの繰り返しで、双方も体力が尽きそうである。

クウガ・T「ハア…ハア…。強い……」

シュバリアン「ふうむ。少年よ、名は？」

クウガ・T「友樹………五代友樹だ！」

シュバリアン「覚えておこう。では、さらばだ…！」

そう言うと、シュバリアンは灰色のカーテンの中へと消えていった。シュバリアンが去った後、友樹は変身を解いた。

リンク「どうだった？」

リンクがその場で座り込んでいる友樹に問う。

友樹「ほぼ互角……だね。こりゃ師匠にたっつっつぷりじこかれないとなあ」

と友樹が後頭部をかき、苦笑いをしながら言った。

マリオ「にしても…ハラ減ったな……」

マリオの言う通り、他の五人も空腹になっていた。尚、現在午後3時30分。

とりあえず、六人は帰る事に…。

友樹「そういえば昼飯……まだでしたっけ？」

マリオ「多分まだだったと思う……」

ルイージ「……………帰るべ」

んで、一行は屋敷に着いた。
その夜…。

友樹「（灰色のカーテン…グランドショッカー…そして過去に倒した怪人達…）」

友樹はただ一人で、深く考えていた。露天風呂にて…。
と、そこにマリオとリンク、更にハヤテの三人が入って来た。

マリオ「よっ、一人で考え事？」

友樹「ええ、まあ……」

リンク「ま、考え事っても想像出来るわな」

ハヤテ「そうですね。大方グランドシヨッカーでしょう？」

友樹「……………当たり前」

四人は景色を見ながら話していた。

話のネタが無くなる頃には、ぼうつと外の景色を見ていた。と、ここでマリオが喋る。

マリオ「そっぴゃあ、おひとりって人にはいつ会いに行くんだ？」

友樹「明日です。風呂に入る前に電話でアポを取ったら「明日来い」
とだけ」

リンク「クセのある師匠なのか？」

友樹「ん〜〜……………何と言うか、ある意味スゴイ人なんだ」

ハヤテ「修業メニューはどういう事を？」

友樹「それは言えない。師匠曰く、「オレと同じ釜の飯を食う仲でないと言えん」ってさ。でも、ある意味死んじゃう位だよ」

この時、マリオとリンクとハヤテの脳裏には、『地獄』『死』があった。

く づ っ

六話 その名はグランドシヨッカー 6月19日(後書き)

お粗末でした

七話 師の存在 6月20日(前書き)

今回も駄文です

七話 師の存在 6月20日

友樹「それじゃ……」

その他十人『行ってきまーす』

リンク「気をつけて行ってらっしゃいー!」

リンクに見送られ、午前5時30分に出発したメンバー達は裏山に向かった。

30分後

ワリオ「おいまだつかねーのか?」

友樹「まだですよ。あと2時間と30分です。ポポ、ナナ疲れてない?」

ポポ「つかれてないよー!」

ナナ「オールおっけー!」

現在、山中を進行中。

彩香「リュカクン、ネスクン平気?」

ネス「大丈夫だよ。リュカは?」

リュカ「ぼくも……」

更に30分後

アイク「……まだか？」

マルス「あと2時間だよ。ねえ、誰かおぶってくんない？ボク王子だし」

ドンキー「おら、行くぞ！」

ディディー「(ぶぶつ)」

今現在、どこからか薔薇を取り出し、わがままを言うナルシスト王子。皆ソレを半分無視していた。

すると呆れた表情の友樹がマルスの下へ歩み寄った。

マルス「おっ、やってくれますか？」

なんてマルスが言つと…。

友樹「とつとと歩こうねえー」

と言いながら右腕をマイティフォームに変えていた。笑顔で。

マルス「がつ、頑張るであります！少佐殿！！」

友樹「じゃ、行くよ」

友樹の恐ろしさに、やっと真面目になったマルス。その後更に1時間後。

友樹「よし！皆あ、もう少しで着くよー！！」

ドンキー「おおー！」

デイディー「もうそんなにー！」

ポポ・ナナ『あっと少し！あっと少し！』

アイク「……………ぬうん」

マルス「あと1時間……………」

ネス「おおとりさんかあ……………」

リュカ「会って見たいなあ……………」

ワリオ「……………ん？」

彩香「何か来る……………！」

すると、茂みの中からグランドシヨッカー戦闘員が百体飛び出て来た。そう、ワリオと彩香はこの気配に気付いていたのだ。

友樹「やるしかないよね……………」

彩香「ええ」

友・彩『変身！』

いつも通り、クウガとアギトに変身し、他の九人も戦闘体制に入ると……。

????「出たなシヨツカー!!」

その声に、周囲の連中は声のする方へと顔を向けた。そこにいたのは……。

????「ライダーあゝ……変身っ!トウツ!」

クウガ・M「おおとり師匠せんせい!!」

そう、おおとりゲン事、仮面ライダー1号であった。

1号「おお、友樹!」

クウガ・M「お久しぶりでございます!それより今は……!!」

1号「分かっている!君達も行くぞ!!」

残りの十人「ハイ!」

40分後

ゲン「……分かった。要はスマブラ屋敷へ行って、ファイターとライダーを鍛えればいいんだな?」

友樹「はい、その通りです。また指導の程、宜しくお願いします!」

どうやら話が通ったようだ。

シヨツカー戦闘員を追っ払った後、ゲンに指導を頼み、今こうしてOKが出たのだ。

2時間30分後、屋敷にて。

友樹「では師匠、指導の程をお願いします!」

ゲン「うむっ!全部で…53人…か…(ニヤツ)」

ゲンの紹介をした後、ゲンはメンバーを見て不敵に笑う。そして懐から、何か書かれた一枚の紙を出した。

ゲン「今日の練習メニューは、組み手19時間!その次はここから裏山の頂上まで往復50週のランニング!今日はこの二つだ!!さあ開始だ!!」

全員『ハイ!!』

全員外へ出て、ファイティング体制に入った。

友樹「変身!!」

彩香「変身!!」

シンジ「変身!!」

スタンディングバイ

マキ「変身!!」

コンプリート

舞湖「変身!!」

ターンアップ

ヒビキ「ハアアア……………ハアツ!!」

舞「変身!!」

ヘンシン

カブト・MF「キャストオフ!」

M・佑一「変身!」

ソードフォーム

キバット「気張って…行くぜ!ガブツ!!」

佑井「変身!!」

慎吾「変身!!」

カメンライド デイクライド

カメンライド…

大樹「変身!!」

ディエーンド

サイクロン

ジョーカー

佑理・薫『変身!!』

サイクロンジョーカー

電王・S「俺、参上!!」

ライダー組が全員変身したところでゲンが入って来た。

ゲン「いいかー？よく聞けえ!!」

全員『ハイ!!』

ゲン「さつきも言った通り19時間の組み手だ!!休みも無し!もし休んだら……」

ナギ「休んだらどうなる?」

ナギの問いにクウガが口を出した。

クウガ・M「本人の嫌な事や嫌いな物を見せる……ですよね?」

ゲン「その通り!修行時代と同じやり方だあ!!」

以前クウガ・M(友樹)が言った「オレと同じ釜の飯を食う仲でな

いと言えん」とはこのことであつた。
と、ここでヒナギクが反論する。

ヒナギク「ちよつと待って下さい！それは無いんじゃないですか！
」

ゲン「黙ってヤレ！ペツタンコ！！まな板！！」

ヒナギク「はうっ！！」

ゲンの精神攻撃（？）により、ヒナギクは33万のダメージを負つた。効果は抜群だ！

ゲン「さあ！組み手ハジメ！！」

クウガ・M「ハイ！！」

残り『はっ…はいつ！！』

かくして、壮絶なる組み手は

始まったのである。

く づ っ

七話 師の存在 6月20日(後書き)

誰か、感想下さい

八話 修行の業火 6月20日〜6月21日

かくして、ゲン考案の修行と言う名の地獄が始まった。

ナギ「今の内に逃げる…!!」

龍騎「逃げんじゃねえよ!」

ファイナルベント

逃げ出そうとしていたナギにいきなりとどめのカード、ファイナルベントをかます龍騎。今まさに当たる当たろうとしたその時!

ファイナルフォームライド リュ・リュ・リュ 龍騎

龍騎「おわわわ!!」

ディケイド「スマンシンジ」

R・ドラグレッダー「門谷の野郎…」

必殺技を決める前に、R・ドラグレッダーにFFRさせられてしまった。

別の所では…。

マルス「あーっ!ファルシオンがー!」

リュカ「わー!棒っ切れがー!!」

ファルコ「ブラスターがねえ……！！！」

愛用の武器を無くしたマルスとリュカとファルコ。
この三人の武器は今……。

クウガ・M「ちょっと借りてるよー」

マ・リュ・ファ「ええええ！！！」

いつの間にかクウガが三人の武器を握っていた。

クウガ・M「超変身！！！」

すると、クウガの赤いプロテクトが黒に変わり、両足には金色のマイティアンクレットが二つ着いた。

マルス「どええ〜！アメイジングマイティ！！！」

ファルコ「てめえ！殺す気か？！」

リュカ「ていうか……ファルシオンとぼくの棒とブラスターが……」

リュカの言う通り、それぞれがタイタンソード、ドラゴンロッド、ペガサスポウガンへと姿を変えた。すると、その三つは合体した。形はタイタンソードの柄とペガサスポウガンの裏側の間にドラゴンロッドがアジャストしてあった。

クウガ・AM「じゃ、そーゆーことで」

そういうと、別の所へ去ってった。

マルス「ファルシオン返せー！ー！！」

一方アギトは…。

アギト・S「ハアアッ！」

アイク「なんのー！！」

アギト・ストームフォームでアイクと戦っていた。
そこに…。

スタートアップ

555のアクセルフォームにより、少々ダメージを負って行くアギト・Sとアイク。

アギト・S「(なら…!!)」

咄嗟に右腰を叩き、三位一体のトリニティフォームへと姿を変えた。

アギト・T「来なさい！」

一方、ブレイド・響鬼・カブトは一騎打ちをされていて、そこにヒナギクとリンクも加わり、てんやわんや。

ウラタロス(先輩！交代して下さい！)

電王・S「ああ！」

そういつと、電王・Sはベルトの青いボタンを押し、パスをタッチした。

ロッドフォーム

その電子音の後、電王からモモタロスが抜けてウラタロスが取り付いた。

ソードフォームからプラットフォームへ戻り、青いアーマーが装着し、海亀型の電仮面が変形し、それが顔にアジャストされた。

電王・R「君、僕に釣られてみる？」

ピーチ「お生憎様。もう相手がいるのよ、アタイは「どうやらピーチと戦っていたようだ。

またまた別の所では…。

キバ「来て、ガルルセイバー！」

そういつと、ガルルフエッスルをキバットに差し込む。

キバット「ガルルセイバー！」

奇妙な音楽の後、キバの左手に蒼い狼に似たガルルセイバーがあり、胸部と左腕部が蒼くなった。

これぞ、ガルルフォーム。

キバ・G「さ、やりましょアイク…！」

アイク「（組み手……だよな…）ああ！」

先程、555とアギトから逃げ、キバと対決中のアイク。
そして…。

ディケイド「シンジ、少し借りるぞ」

R・ドラグレッダー「何が？」

アタックライド ストライクベント

空からドラグレッダーの形をした武器がディケイドの右手にすっぽりに入った。

ディケイド「さて、ウエルダンがお好みかな？」

アテネ「残念、ミディアム派なのよ。破壊者クン！」

ディケイド「久々だなあ、その呼び名。覚悟はいい？金髪トS姫さんよう！」

そういうと、二人は一騎打ち状態に…。
また別の所では…。

W・C「え、黒坂？」

W・J「何の用なの？」

Wの前にディエンドの登場！

ディエンド「さあな？って、後ろにルカリオが…！」

W・C・J『!?!?』

後ろに振り返ったWはディエンドに背を向けた。
そこを狙って、

ディエンドがディエンドライバーにカードを一枚装填してWにその銃口を向けた。

ディエンド「ちつと痛いよ?」

ファイナルフォームライド ダ・ダ・ダ W

W・C・J『あひっ!』

その後、Wは半分ずつのサイクロンサイクロンとジョーカージョーカーに変わった。

W・C・C「薰…これって…」

W・J・J「黒坂……どーゆーつもり?」

するとディエンドは。

ディエンド「気にすんな」

と言って、ドンキーのいる所へ去ってった。

ここまで約1時間経ったので、18時間後。ライダー達は変身を解いた。

ゲン「次、ランニング始め!!」

友樹「ハイ!」

残り『はいっ!』

全員身も心もへとへとなのに、ランニングを開始するメンバー達。
現在午前5時前後。

ランニングはその10時間後の午後3時に終わった。

ゲン「よおし!今日はこれまで!!」

友樹「ありがとうございます!また、次回もお願いします!!」

残り『……………えっ?』

三食分の食事を取り損ねたので食事の時間。

Cファルコン「にしてもスッゲー辛えなあ。友樹は慣れてるからス
ゲエよ。あいつは富士山だよ、うん」

マリオ「確かにあの強さの秘訣はあの指導によつての強さか…………で、
友樹は?」

ピーチ「ならキッチンよ。三食分のご飯を作ってるわ。その間にお
風呂に入っている人も多数」

確かに風呂場からメンバーが上がって来た。

ヒビキ「そついやあ、カービィ達はやけに大人しいな。どうしたんだ？」

舞湖「どつと疲れて寝ちゃってるよ。姉貴役は疲れるよ」

ヒビキ「そらごころーさん。まつ、オレ様だったらラクショーだい！」

十分後、友樹が飯を持って来た。

友樹「飯出来ましたー、ドネルケバブです」

友樹がメニューを言うと、ほとんどのメンバーが頭を傾げていた。その中から、シンジが「なにそれ？」と尋ねた。

友樹はケバブを持って、皆に見せて説明する。

友樹「このケバブの上に二種類のソースをかけて……ナンを巻き……食べる。そしてポテチを取り……食べる」

マリオ「まあ、最期のポケは置いといて……。何と何のソースなんだ？」

友樹「ヨーグルトとチリですよ」

その後全員が食べ終わり、友樹の煎れたコーヒーで一服し、佐井のブラッディローズ（バイオリンの名）で心を休ませていた。するとそこに、一人の男が来た。

エツオ「どーもあー！」

友樹「と…父さん…」

エツオ「よう友樹。それとゲン先輩、お久しぶりです」

ゲン「久しぶりだな、ブラックRX…いや、五代エツオよ…」

その時！

ビーツビーツビーツ

ボブ「市街地ニテ、あんのうん三・ぷりむ十四・めたりどりー一出現！！彩香サン・友樹サン・マリオサン・サムスサン、出撃シテ下サイ！」

ゲン「何いつ！ショッカーか？」

エツオ「…の、様ですね。友樹、俺達も行くぞ！」

友樹「うん！師匠も行きましよう！！！」

そして、現場に着くとすでに街はボロボロで、今もアンノウンとプリム…そしてメタリドリーが暴れていた。

友樹「赦さない！僕は…僕は…！！！」

友樹が感情的に出したアークルの中心部のアマダムが黒くなっていた。

ゲン「取り敢えず落ち着け！」

その一声で友樹は落ち着き、アマダムは黒から紫色になっていた。友樹はビートアクセラーを抜き、彩香もオルタリングを出した。

ゲン「ライダーあああああ……」

ゲンの掛け声に続き、エツオと友樹と彩香も構えを取り叫んだ。

ゲ・エ・友・彩『変身!』

一号、ブラックRX、クウガ・RT、アギト・G、マリオ、サムスは目標に向け、攻撃を開始した。

クウガ・RT「はあああ!」

グサツ!

メタリドリー「メギヤアアア!」

クウガのライジングガラミティータンが決まり…。

サムス「チャージショット!!」

ドガアン!

メタリドリー「ゴ……ガアア……!!」

さらにサムスのチャージショットも決まり、メタリドリーは絶命した。

一方アギトはトリニティフォームにフォームチェンジして、三体のアンノウンと戦っていた。

アギト・T「はああああ！」

エレファント・ロード「ごはああああ！」

キヤット・ロード「ぎえええええ！」

パンテラス・ロード「うおおおおお！！！」

アギトの必殺技・ファイヤーストームブレイクによって、三体のアンノウンは消滅した。

一号「行くぞ！」

ブラックRX「ハイ！」

二人はジャンプし、空中で一回転して片足を前に出した。そこにマリオも加わり……。

一号・ブラックRX『ライダー・W・キイイック！』

マリオ「+ファイヤーキイイック！」

この技により、十四体のプリムは全て消滅した。

その後、変身を解いた友樹達は遺跡の様な荒れ果てた街を見ていた。崩れた家屋、泣き叫ぶ人々、そして多数の死傷者。中には重傷の母親と共に救急車に乗った少年もいた。

他の所から亡くなった人の名前が、次々に聞こえて来る。

友樹「結局僕は……何も……守れなかった……」

肩を崩し、地に平伏せていた友樹に、ゲンが寄って来た。

ゲン「確かに、守れなかった人が沢山いた。しかし、中にはお前に守られた人もいるんだよ」

友樹「師匠……ハイ……」

くづっ

九話 異世界の破壊者 6月28日(前書き)

ゲスト出ます

九話 異世界の破壊者 6月28日

写真館の大きなスクリーンに、三人と一匹は首を傾げていた。

士「どこの世界だ？」

ユウスケ「知るかよ！大体、何であのスクリーンにクウガからデイケイドのマーク…Wのマーク…そして中央にある中心のズレた十字に切れ目があるボール。まさか、オレや士以外クウガとデイケイドが?!」

キバーラ「ちよいちよい、長いよ」

夏海「確かにそうですね。一旦外へ出ましょう」

そういうと、半ば強制的に士とユウスケを連れて外へ出た。

一週間前のショックから立ち直った友樹は、まだ起床していない皆の朝食を作っていた。

友樹「(皆には、けっこう心配させちゃったからな。そろそろ、本当に立ち直らなきゃね)…ていうか、マリアさん」

マリア「ハイ、何でしょう?」

友樹「ハヤテ遅いですね。地下室が妙だとか言って…」

マリア「確かに……あつ、来ましたよ」

地下室のあつた所から、ハヤテが現れた。が、見慣れぬ三人の姿が見える…。

友樹「ハヤテ……そのお三方は？」

友樹がハヤテの後ろの三人が何者か問うと、後ろの三人が口を開く。

士「俺は門矢士。通りすがりの仮面ライダーだ」

ユウスケ「俺は小野寺ユウスケ。士と同じ仮面ライダーだ」

夏海「私はこの二人の家主です」

友樹「そ…そうですか…」

その後、メンバー全員が揃い、士達三人にこの世界の全てを教えた。自分達はグランドショッカーからここスマッシュシティを守り続けている、ここに住んで生活をしていると。

一方士達は、色々な世界を旅し、士の世界を探していると言う。

士「大体分かった。お前ら十三人がライダーで、今のグランドショッカーと戦っているんだな。ソコにいるファイター達と」

友樹「ハイ、そうなんです。っていうか、ユウスケさんもクウガなんですかあ、何か他人と思えません」

ユウスケ「えっ！そうなの？へえ、いくつ？」

友樹「今年で十七になります」

ユウスケ「ええっ！高校生でライダーなの？オレ二十」

友樹「へえ……」

クウガ繋がりなので仲良くなる二人。

士「お前もディケイドなのか？」

慎吾「ああ、そんなもんだ」

こっちも仲良くなってるし。

しかし、その近くでは……。

ハヤテ「やめて……やめて下さい！……」

ナギ「何を言っ……」

歩「せっかください……」

アテネ「女装させようかと……」

夏海「なちゃったりするんですよ……」

残り（ヒナ抜き）女達『覚悟しなさい……！』

ヒナギク「やめて！！イヤ、ホントにやめて！！」

せつかなので、ハヤテを女装することに……。しかし。

ビーツビーツビーツ

アナザーセンサーが反応しボブが告げる。

ボブ「本屋敷前方二、あんのうん五、めたるぷりむ六、じゃいあんとぷりむ八、いまじん四デス！友樹サン、佑一サン、マリオサン、ルイーザサン、クッパサン、慎吾サン！行ッテ下サイ！！」

友樹「土さん、ユウスケさん、行きましょう！」

土「仕方ない」

ユウスケ「行くぜ！」

その後現場に着くと、先に到着していた佑一は、バイクから降りた。

佑一「行くよ、キンタロス！」

キンタロス「いくでえ！」

そういつたキンタロスは佑一に取り付き、ベルトを腰に巻き、黄色のボタン押した。

K・佑一「変身！！」

パスをベルトにタッチして。

アックスフォーム

その電子音の後、斧型の電仮面が変形しアジャストした。
今、黄色の電王・Aアックスの登場だ。

電王・A「お前の強さに俺が泣いた。俺の強さに泣けるで！」
すると、友樹達も来た。

ユウスケ「行くぞ！」

友樹「ハイ！」

二人はアークルを出し……叫ぶ！

ユウ・友「変身！！！」

ユウスケはクウガ・Mに、友樹はクウガ・RDに変身した。

士「行くか……」

慎吾「ほーい」

二人はディケイドライバーを腰に巻き、ディケイドのカードを持ち
……。

士・慎「変身！！！」

ディケイドのカードを装填してバツクルを閉じる。

カメンライド ディケイド

たちまち、二人の姿はディケイドになった。

士・ディケイド「こいつで行くか」

そういうと、電王のカードを装填した。

カメンライド 電王

慎・ディケイド「こっちはこれだ」

フォームライド 電王・ガンフォーム

これで役者が揃った。

マリオ、ルイージ、クッパ、クウガ・RD、クウガ・M、D・電王・S、D・電王・Gの八人は攻撃を開始した。

ジャガーロード「ぐるるる…」

パンテラスロード「ふしゅうう」

モールロード「チュチューー！」

キャットロード「ふしやああ！」

オーガロード「ぐううう」

このアンノウン達には、クウガ・RDとクウガ・Mが相手をする。
クウガ・RDは落ちてた棒をライジングドラゴンロッドにした。

クウガ・RD「行きますよ！」

クウガ・M「行くぞ！」

二人は襲い掛かるアンノウンをキックしたり、パンチしたり、ラリアットしたり、ジャイアントスイングをしたりしてアンノウンにダメージを与えていた。

一方、マリオ兄弟とクツパ、14体のプリムを相手にしている。

マリオ「行くぞ」

ルイージ「いつでもOK」

クツパ「ワガハイも行くぞ！」

三人はプリム達を囲むような形となり、マリオとルイージは右手に力を溜め、クツパは大きく息を吸い込み、解き放つ。

マリオ「合体必殺！！」

ルイージ「トリプル・ファイヤー！」

クツパ「ザ・エンド！」

三人の合体技により、プリム達は消滅した。

電王・A「そろそろとどめやー！」

D・電王・S「じゃ行くぞ」

D・電王・G「行くか…」

フルチャージ

ファイナルアタックライド デ・デ・デ 電王

三人揃って四体のイマジンに向け、必殺技を仕掛けた。

電王・A「とりゃあああ!!」

ザシユツ

バット・イマジン「が…があああ!!??」

ドオオオオオオオン!!

バット・イマジンは爆発した。

電王・A「ダイナミックチョップ」

後でいうんかい!

D・電王・S「オリヤアアア!!」

D・電王・G「でえりゃあ!!」

コブラ・バード・モール「がぎいああああ!!」

ドユガアアアアン!!

そして、ユウスケのクウガ・Mと友樹のクウガ・RDは、トドメに入るうとしていた。

クウガ・M「友樹!」

クウガ・RM「ユウスケさん!」

いつの間にか、クウガ・RDはRMに超変身した。二人は五体のアンノウン目掛け、走り出す。

M・RM『トウツ!』

直前でジャンプし、空中で一回転して片足を繰り出して…。

M・RM『マイティ・ダブルキイイツク!』

その合体技が、五体のアンノウンに当たると、アンノウンは消滅し、その場所には半径十数メートルがクレーターと化した。その後、全て片付いた事を確認し、屋敷へと帰った。

友樹「……何があつたんだろう?」

帰って来た一行が目にしたのは、精気を失いかけたハヤテが床に倒れ込んでいて、その側にはヒナギクが起こそうとしていた。居間を見ると、ハヤテを女装しようとした頭の四人が酒にやられていた。

ユウスケ「やつぱり……」

士「情けない。未成年にも飲ませるとは……」

と、ソコに三種の笑い声が聞こえて来た。

ガノンドロフ「じじいの癖してよう飲めるなあ！」

栄次郎「いえいえ……。しかし、未成年の三人に飲ませちゃっていいんでしょうか……？」

サムス「いいのよいいのよ！サービスサービスう！」

犯人はこの三人でした。

士「じいさん……」

慎吾「あの四人に飲ませてたとは……」

ユウスケ「何か疲れた……」

友樹「僕も……」

佑「もう、どーでもいいや」

マリオ「酔い覚めのアレ、そいつらに飲ますぞ」

ルイーダ「やるやる」

クツパ「臭くて堪らん」

その後、マリオ達により四人を元に戻した。
そもそも、マリオの言っていたアレとは…。

アテネ「うう……コーラで酔いは覚めたけど……」

歩「まだ気持ち悪いかな」

ナギ「かなじゃないだろ。…吐きそう」

コーラで酔いを覚まそうとしても、この三人には無理だった。

夏海「いやあ、助かりました。マリオさん、ありがとうございました」

士「（夏みかんが治ってどーする）」

その後、昼食の時間。

カービィ「おなかへったあ！！はやくはやくう！！！！！！」

舞湖「大丈夫だからねえ、もうちょっと待とうね？」

これで少しはカービィも落ち着くだろう。

ハヤテ「……男なのに」

ヒナギク「大丈夫よ！！貴方は充分男だからあ！！」

カ〇ーユ君のような精神崩壊をしたハヤテを元に戻そうとしている

ヒナギクであった。

リンク「皆出来たよー！」

ゼルダ「冷や麦ですう」

昼食後、奇跡的にアナザー反応が無かったので、それぞれ自由にしようとしたら…。

大樹「ああ!？」

慎吾「どった？」

士「何があつた？」

まだいたりするんですねえ。

大樹「OREのディエンドライバーが…ねえ!!」

確かに無くなっていた。

ユウスケ「イヤな予感……」

その予感は的中した。

????「探し物はこれかな？」

士「この声は…」

ユウスケ「何で…」

夏海「うつそお…」

その三人が振り返った先にいたのは…。

海東「やあ、土。いつぐらいかな？」

大樹「ヲオイ！！OREのディエンドライバーを返せ！」

大樹が、侵入者の海東大樹に自分の変身アイテムディエンドライバーの返却を求めた。

海東「ここだけど」

確かに、黒坂大樹のディエンドライバーが海東の左手に握られていた。

土「おい、二つ目はいらないだろう？」

土がツツコミを入れても…。

海東「やだね。別世界のディエンドライバーはいいお宝さ」

そんな海東に舞と歩が口を尖らせた。

舞「おじいちゃんが言った。人の物を盗ると、自分のもっと大切な物が無くなるって」

歩「確かに、舞ちゃんの言う通りだよ。返した方がいいんじゃないかな」

二人が恰好の良いことを言っても…。

海東「イヤだと言っているだろう。どうしてもって言うならば…」

そういうと、友樹を指差した。

海東「ソコのショートシャギーの少年」

友樹「僕ですか？」

自分の髪型を特徴として呼ばれた友樹は少々驚く。

海東「彼が僕に勝つたら、この黒坂のディエンドライバーを返すよ。
勿論ライダーバトルだね」

友樹「（えええ〜〜）」

はたして、友樹は勝てるのか？

く づ

九話 異世界の破壊者 6月28日(後書き)

お粗末でした！

十話 海東VS友樹/その後の昔話 6月28日(前書き)

今回ちょっと長いかもしれません。

海東VS友樹の始まりです。

十話 海東VS友樹/その後の昔話 6月28日

屋敷の前で、海東と友樹が向かい合うかのように立っていた。もとはというところ、海東が黒坂大樹のディエンドライバーを盗んだのが事の始まりであった。

士「しかし……海東のやつ、珍しいな」

ユウスケ「ほんと。条件付きで人の物を返すなんてなあ」

夏海「同感です」

光写真館の三人は、これまで海東の行った行為を見ていたので、今度の事が本当に珍しいのだ。

海東「じゃあ行くかい？ショートシャギー君」

友樹「僕は友樹です」

カメンライド……

海東「そっか、覚えとくよ。変身！」

ディエンド

海東がディエンドに変身し、友樹も腰にアークルを出した。

友樹「変身！」

アークルの中心が黒くなり、アメイジングマイティへ変身した。

「デイエンド」では行こうか」

クウガ・A M「行きますよっ！ハアツ！」

クウガはデイエンドにパンチを繰り出すが、受け流されてしまった。デイエンドもパンチを繰り出すが、これも同じように受け流される。そして、それが少し長引き、デイエンドがデイエンドライバーにカードを一枚装填した。

カメンライド イクサ

召喚されたのは、イクサカリバーを持ったイクサバーストモードであった。

イクサ「その命、神に返しなさい」

クウガ・A M「やだッ！」

そういうとイクサの下へ走って行き、イクサの持ってたイクサカリバーをぶん取って、ライジンググタイタンソードに変えて、イクサをぶっち切った。

イクサ「ゴハアツ!!」

そのイクサは塵となって消えた。

「デイエンド」あらら。じゃ、兵隊さん行ってらっしゃい」

カメンライド ライオトルーパーズ

ディエンドライバーの銃口から三体のライオトルーパーが召喚された。

ライオトルーパーのカードは、ディエンドにしか使えない。その理由は、あくまで召喚用なのだから。さらに、一枚につき三体召喚出来るのだ。

ライオ・？「はあああ！」

ライオ・？「やあああ！」

ライオ・？「でやああ！」

三体一斉にクウガに襲い掛かる。

ナギ「あんなザコいの、今の友樹には無力だろうに」

ハヤテ「そうでしょうね。……ってアレ？マリオさんとピーチさんは？」

リンク「二人ならバイクで出掛けたよ。というより、今の友樹を試してみな」

ナギ& amp; ハヤテ『ん？』

その先に見えたのは…。

ライオ・？「うりゃー！」

クウガ・A M「うわああ！」

ライオ・？「せやつ！」

クウガ・A M「がはっ！」

ライオ・？「ハアッ！」

クウガ・A M「ぐふっ…！」

何とクウガはライオトルーパー達の攻撃を喰らっていた。

デイエンド「つまないなあ。よし、トドメとしよう。」

ファイナルアタックライド　デイ・デイ・デイ　デイエンド

その電子音の後、三体のライオトルーパーはデイエンドライバーに吸収された。

デイエンド「バイバーイ」

言うと、デイエンドは引きがねを引いた。

激しいシアン色のビームがクウガのいた所をえぐった。しかし、そこにクウガはいなかった。

デイエンド「なっ！何処だ…！？」

慌てふためいていたデイエンドとファイター達。しかし、土とリンクだけはクウガが今何処にいるのか知っていた。

士「海東、上を見る」

ディエンド「上?」

士に促され、上を見るディエンドとファイター達。そこにいたのは
…。

クウガ・AM「はあああああ!!」

何と、先程撃たれたかと思われていたクウガが下突きの態勢で急降
下していたのだった

ディエンド「ならば!」

アタックライド バリア

使用したカードの能力で防ごうとしても、急降下の下突きには無意
味と化し、それが直撃してディエンドが負けとなった。
その後、大樹のディエンドライバーは無事返された。

アテネ「友樹……君だったかしら?」

友樹「ハイ、何ですか?」

アテネは、戦闘後原っぱで寝っ転がっている友樹に話しかけた。

アテネ「何でライオトルーパーの攻撃を受けたの?」

友樹「ああ、アレですか?ワザとです」

その返答にアテネは驚く。

アテネ「何で？アメイジングマイティのタイタンソードで…」

友樹「斬ろうとしても、出した本人の射撃に当たるから、ワザと当たって、油断させてからの…」

アテネ「吸収されたのを見計らって、高くジャンプして、下突き…」

友樹「ま、そんなもんですよ」

と言うと右手でサムズアップして見せた。その行為を見たアテネは問う。

アテネ「というか、何故その行為を？」

友樹「あ、これ？何故か気分が良いと、ついやってちゃって…」

アテネ「ふうん…」

と、そこに土が来た。

土「全く、無茶をするんだな」

友樹「昔からですよ」

土「マスターハンドがお前を呼んでいた。そろそろ戻るぞ」

三人は屋敷へ戻った。

海東「僕はそろそろ帰るよ。じゃあねえ、特にシヨートシャギー君」

友樹「だーかーらー、僕は友樹です！」

結果的に、名前を覚えて貰えなかった友樹であった。

そして、海東は何処かへ去って行った。土達も、その後皆に別れを告げ、また別の世界へと旅立った。

マスター「友樹、ちつと来てくれ」

友樹「ハイ……」

皆が集まっている中、マスターハンドは友樹を呼んだ。

マスター「取り合えず、目をつむりなさい」

そう言われ、目をつむった友樹に、マスターハンドは指鉄砲の体型を取った。

マスター「ちつと痛いぞ……」

そう呟くと、一筋の光が友樹の右肩を貫いた。それを見たメンバーは驚愕の表情をしており、中には泣いてたりしている人もいた。光が止むと、友樹は平然と立っていた。

マスター「ちよい外出るぞ」

友樹「はーい」

とそこへ、カービィが友樹の耳元へ飛んで来た。

カービィ「(ねえ友兄い、右の肩痛くないの?)」

カービィがそう囁くと…。

友樹「(イヤ。むしろ逆に力がみなぎってる感じ)」

外に出たマスターと友樹は、向かい合って立っていた。

友樹「ん?彩香あ、どしたの?」

彩香「だって、右肩撃たれて心配しない人はいないでしょ!」

友樹「ごめん…」

マスター「オーイ、何かを想像してみる」

友樹「はい」

マスター「その次は、私の隣の位置に視点を置け」

友樹は小さく頷き、マスターの左隣りに視点を置き、両手を大きく叩いた。

マスター「最後に、地にその手をつ!」

友樹が地面に触れたその時、置いた両手から電流が走り、マスターの左隣りまで行くと、一つの石像が出来た。

その石像は、メンバー全員が三段に並んだまるで集合写真の様な石像であった。

彩香「友樹…これって…」

友樹「うん。長い間…皆と写真…撮ってなかったしね」

マスター「ほう、中々良い出来だ。友樹、これを錬金術と言う。何に使うか、自分で考える」

友樹「はい」

そこへ街の方から、マリオチェイサーに乗ったマリオとピーチハーターに乗ったピーチが帰って来て、屋敷の中から皆も出て来た。勿論、1番目を引いたのが石像である。

モモタロス「おお!!俺カッコイイ!!」

ウラタロス「僕も良く出来てるね」

キンタロス「俺もや!こいつは泣けるで!」

リュウタロス「ほんとだあ!」

シンジがカメラをセットし、皆に言う。

シンジ「おーい!皆さま、その石像通りの位置についてくれ!写真撮っから!」

皆が位置に付く中。

ガノンドロフ「何故俺も入らねばならぬ」

デデデ「我慢せいや。というか何故ワシとガノンの間が…」

アテネ「そっちこそ我慢してよ。というか、何でハヤテを中心に私等四人がいるの？」

ヒ・歩・ナ『さあ？』

シンジ「今タイマーをかけた。後十秒でシャッターだ！」

そして十秒後…。

カシャッ！

使用したのはデジカメであったので、皆が一斉に取り掛かる。

その夜、夕食の後マスターが映画を見ようということで、マスター秘蔵のコレクション（DVD）から流すと言う。

メタナイト「所で、何の映画なのだ？」

マスター「相○だよ」

友樹「やった、大好きなんだよなあそのドラマ」

そして、マスターがその映画を上映した。

その2時間後。ほとんどのメンバーが風呂に入り、その場で談笑しているのが多かった。

そんな中、メンバーより先に上がって自室のベッドの上で友樹は読書をしていた。…そこにノックがかかり、友樹が気付く。

友樹「はい、どうぞ」

入って来たのは…。

歩「こんばんは。ちょっとお邪魔するね」

友樹「西沢か…何の用？」

歩「用って程でもないかな。あつ、そうだ！」

友樹「何？」

歩「彩香ちゃんのドコが好きになったのかな？」

友樹「へ？」

歩の突然の問いに、顔を少し赤らめた友樹。そしてまた尋ねる歩。

歩「ねえねえ！ドコなのドコなのかな！？」

もはや…というか既に目がヤバい歩であった。

友樹「ドコ…っても……中身とか性格とか……それ位」

歩「へえ。ドコで知り合ったの？」

友樹は、窓の向こうの月を見た。

友樹「あれは…一年前の夏。門谷君が、僕の世界でやるべき事を果たして、一ヶ月の事だった」

話している内に、友樹の顔は思い出に浸る様な表情になっていた。

友樹「気晴らしのバイク走行で出掛けてる途中目前いきなり灰色のカーテンが現れて、それに飲み込まれた。次に目を覚ましたら、山の中の広い所だった」

歩「そこがライダー対戦の世界かな」

友樹「うん。その世界で門谷君や、他の世界の皆に出会ったんだ。そこで初めて彩香と出会った。流石に十人全員と戦うのには戸惑った。そしたらその近くでまた灰色のカーテンから現れた人に「闘え。でないと自分の世界が無くなる」って」

歩「その人は誰だったの？」

友樹「知らない。それで戦ったよ。でも無意味だって気付いたんだ。その人にも言ったら、いきなり怪人をいっばい出すもの…」

歩「それはハヤテ君でも辛いかな…」

歩はしみじみと言った。そんな中、彩香が風呂から戻って来た。

彩香「全ての怪人を倒した後、変身を解いて、解りあったんだよね」

友樹「うん。そして、皆のいない所へ彩香を連れて告白したんだけど…」

歩「だけど？」

友樹「同時だったんだ」

彩香「そう。まさか友樹も、私と同じ気持ちだったの」

歩「それ、何か羨ましいかな」

彩香「貴女も、そんな出会いが来ると良いわね」

歩「うん。話が聞けて良かった、また明日。お休み」

そういった歩は部屋を出て行った。

その後、二人は窓辺へと歩いていった。

友樹「あの日も……こんな月だったよね？」

彩香「ええ、そうね」

そして二人はベッドへ潜り夢の中へ落ちて行った。

おまけ

数時間前の光写真館

士「次はドコの世界だ？」

そういうと、スクリーンのチェーンをいじった。スクリーンはこの世界の絵からまた別の絵になった。そこには、Sとカブトムシの絵が描かれていた。

ユウスケ「次はどんな世界かなあ？」

夏海「きつと、土君の世界ですッ！」

キバーラ「そうかもね」

く づ っ

十話 海東VS友樹/その後の昔話 6月28日(後書き)

お粗末でした！

ありがとうございました！

十一話 Lの怒り/Nの心 7月4日(前書き)

今回ちょっと長いかもしれません。

十一話 Lの怒り/Nの心 7月4日

リンク「だから、違うって言ってるだろう!？」

ゼルダ「でしたら、何故ここ最近朝帰りなんですの!？」

この二人のケンカの原因は、最近リンクは部屋に帰るのがいつも朝で、ゼルダが今それを問いだしていた。

ナギ「面倒だな……」

マリオ「いつもああだよ。2・3日位したら仲が直るって」

マリア「いつもって……ちょっと激し過ぎでは……」

新入りの6人には、あまり見慣れない光景ではあるがそれを見慣れている。

ヒナギク「いつもって事は……どれ位？」

レッド「稀ですよ、ま・れ」

その時。

ワリオ「どけどけ〜!！」

ワリオが屋敷内をバイクで走行中。その行く先には……リンクとゼルダがいた。が。

ガシィ！

ワリオ「ぐえっ！」

たまたま通りかかった友樹が、右手をライジングマイティフォームにして、バイクに乗っているワリオの頭を掴む。

友樹「ワリオさん、僕言いましたよね？バイクは外で走行して下さいって………どうして守れないんです？」

するとワリオは反論するかの様に言う。

ワリオ「うっせー！ハイそうですかって、守る馬鹿なワリオ様ではない！！！」

すると友樹は、ワリオとバイクを外へ投げた。

ソニック「Ah…ちょっと怖いぜ」

リュカ「ぼくも、何か怖いを感じる」

そのリュカの予感は当たった。

友樹は、外にあるワリオとバイクに視点を合わせ、両手を叩き、地に付けた。そして出来たのは…。

ワリオ「出せえ！ここから出してくれえ！！！」

岩で出来たドームで、その中にワリオはいた。しかし、誰もそれに触れる人はいなかった。

リンク「だぁーかぁーらッ！ちがうってんだろ！」

ゼルダ「では一体、朝まで何をしているのですか？毎晩一人で過す身にもなって下さい！..！」

この二人の喧嘩は、まだ終わってなかった。

ヒビキ「おいおい、ちつとは落ち着こうぜ？」

ヒビキが割って入ると..。

リンク・ゼルダ『入って来るんじゃない!!..！』

ヒビキ「ごあつ！」

メッタメッタにされました。

シンジ「カービィ、二人を吸い込め」

カービィ「OK！」

しかし、カービィが吸い込もうとすると..。

舞湖「止めなさい。仮にやったとしても、腹の中で暴れて、お腹を壊すがオチよ」

舞湖に咎められ、カービィは吸い込みを断念した。
その時。

ビーツビーツ！

友樹「シヨツカー!？」

その友樹の声で、喧嘩しているリンクとゼルダも放送に耳を傾けた。

ボブ「本屋敷後方二いまじん4。サラ二同前方に、偽あぎと出現！
後方二八友樹サントアテネサン。前方二八リンクサント彩香サント
カービィ、行ツテ下サイ!!」

一気に二カ所で敵が見つかった。

出ようとするリンクを友樹は引き止めた。

リンク「何だよ、一体」

少しイライラしているリンク。

友樹「少しは落ち着こう。じゃないと死んじゃうよ」

リンク「わーっ たつての!!」

友樹「それと…」

リンク「まだあんのかよ」

友樹は目を鋭くし、リンクに言う。

友樹「彩香を………死なさないでよ!!」

そういうと、アテネと共にビートチェイサーに乗り屋敷後方へと走って行った。

リンクはあいよと言うような顔をしていた。

屋敷後方に着くと、友樹とアテネはバイクから降りた。

アテネ「さあて、どう料理しよう?」

友樹「じゃそろそろ…」

友樹は腰にアークルを出した。

友樹「行きますか?変身!」

友樹はクウガ・ライジングドラゴンフォームへと変身した。そして、手合わせ練金で地面から長い棒を取り、ライジングドラゴンロッドに変えた。

クウガ・RD「はっ!やっ!」

モールイマジン「ぐほっ!」

ラビットイマジン「げはッ!」

アテネ「てえい!やあ!」

ライオンイマジン「はっ!」

エレファントイマジン「おぶう!」

二人は徐々に、イマジンにダメージを与えていた。

クウガ・RD「ハアアアアア!」

モール・ラビット『ウワアアアア！！』

ドッゴオオオオン！！

モールイマジンとラビットイマジンに、ライジングスプラッシュド
ラゴンが決まり、爆発四散した。

アテネ「とおどめえ！！」

グササツ！

エレファントイマジンとライオンイマジンもアテネにやられて、爆
発四散した。

一方、偽アギトを相手にしているリンク・カービィ・彩香は。

カービィ「うわぁ、彩姉ちゃんと同じ位だよ！」

アギト・G「そうね。リンク、しっかりと援護頼むわ！」

リンク「ああ。友樹から君を死なすなって言われている！」

三人がフォーメーションを組み、偽アギトを翻弄している。しかし、
本物と偽者は攻撃パターンが瓜二つである。従って、リンクとアギ
トは少々苦戦するが、カービィにとっては、強敵である。

リンク「ちいつ。カービィ、いつかい俺を吸い込め！」

カービィ「りょーかあい！」

カービイはリンクを吸い込み、リンクカービイへ姿を変えた。二人は弓を構え、放ち続ける。

偽アギト「あん？」

二人の放った矢に気付いた偽アギトは、ストームフォームに姿を変え、ストームハルバートを回して矢を落とす。

偽アギト「あーしには、効かねえんだよ！」

アギト・F「……隙ありっ」

グサツ！

偽アギト「うおお……あーしが……このあーしが……！」

ドゴオオオオン！

偽アギトは、爆発して、塵と化した。
帰る途中、三人は一軒の喫茶店へ寄った。店の名はポレポレという。
中に入ると……。

友樹「やあ。お疲れ様」

先にカタを付けた友樹が、コーヒーをすすっていた。

カービイ「あれ？アテネさんは？」

友樹は店内の端っこの所を指さした。見ると、紅茶を口に行っているアテネがいた。

三人も少々小腹が減ってかカウンターに座る。

友樹「おやつさん、いい豆だねこれ」

玉四郎「いいかんだねえ。そうだよ、ここスマッシュシティから二つ隣の町で手に入れたやつだ」

友樹がおやつさんと呼んだのは、高田玉四郎。友樹がこの世界に来て、少々世話になった人物である。

リンク「このコーヒーは旨いな。……はあ、しかし俺は……」

出撃前、ゼルダとの喧嘩で反省し、落ち込んでいるリンク。それを見た玉四郎が口を開く。

玉四郎「ざんげしたいなら、今すぐ行った方がいいよ。女の心は山の天気並に厄介だからね」

リンクに助言をした玉四郎は、白い布でカップを拭いていた。そのカップは、鏡の様な輝きをしていた。

その助言を聞いたリンクは、コーヒーに映る自分の姿を見て何かを決心し、残ったコーヒーを飲み干した。

リンク「俺……謝りに行って来ます。お代、ここに置いときます！」

そういつて、屋敷の方へ戻ったリンクであった。

友樹「……大丈夫かなあ？」

彩香「何が？」

友樹「仮に、今もまだかんしゃくのゼルダが……リンクを許すかなあ？」

彩香「多分大丈夫よ。スグ仲が直るわ」

友樹「どうしてさ……」

彩香「理由をちゃんと聞く人よ。ゼルダは」

友樹「……ふふ。流石、ピースエターナルだね」

彩香「ふふふ……とーぜんよ」

そして、屋敷では……。

リンク「ゼルダッ！！ゴメン、俺が悪かったっ！！」

いきなり走って帰って来たリンクは、真っ先にゼルダのいる所へまっしぐらに走って行き、頭を下げた。

ゼルダ「私の方こそ、ごめんなさいっ！ついカツとなつてしまいました。実を言うと、トューンから訳を教えて貰いました。日が登るまで、稽古をつけてくれたのですね？」

リンク「ああ。あいつ、強くなりたたって無我夢中でさあ、俺もそれに乗っちゃって……あはは……」

冷や汗をかき、後頭部を右手で掻きむしるリンクと笑顔のゼルダに

佑理が歩み寄る。

佑理「でもね、トューンが何故急にやる気を、二人は知っているかい？」

リンクとゼルダは首を傾げていた。この二人にも他のメンバーにも、トューンは真相を知らさない様にしていた。が、佑理だけは知っていた。

続けざまに、佑理は言葉を続ける。

佑理「彼は、先日の乱闘でナギにフルボッコにされて、歳が近いから余計に恥ずかしいから、強くなりたかったからだってさ」

彼女の発言により、周囲の視線は一斉にナギに向かった。

ナギ「仕方なからう！ハヤテも何か言っただれ！！」

ハヤテ「お嬢様、少し加減というものを覚えて下さい」

マリア「私もそう思います」

ナギ「って私に言うのかあ！？」

ルイージ「トューン君も何か言いな」

いつの間にか、ルイージがトューンを連れていた。

トューン「もっかい勝負だ！おいらはアニキとの特訓で強くなった。ついでにヒビキさんとピットをつけて四人対戦だ！！」

ヒビキ・ピット『おまけかよー！ついでかよー！』

友樹と彩香とアテネとカービィが帰って来た頃には、トューンとヒビキの一騎打ちとなっていた。

ステージは戦場でストックは3で始まって、今のところトューンとヒビキの残りストックは1であった。

響鬼「中々やるなあ。続けて…ハアツ！セイツ！」

トューン「なんのっ！」

響鬼のパンチとキックをぎりぎり避けていた。

リンク「うん、良く活かしてる」

ゼルダ「そうですねえ。それにしても、響鬼の方はまあまあですね」

数十分後には、ヒビキの勝利となった。

その夜温泉にて。

友樹「あーっ、いい湯だあ……………だけど……………」

ワシャワシャワシャワシャ

友樹「マルスー！」

マルス「んっ、何い？」

友樹は髪を洗っているマルスに声をかけた。

友樹「君、何度洗えば……………気が済むの？」

マルスの周囲には、空になったシャンプーが三つあった。

マルス「だって、ボク王子だしね」

その回答は、全力でスルーされた。

もしここにリュウタロスがいたら、「答えは聞いてない」と言っていただろう。

く づ っ

十一話 Lの怒り/Nの心 7月4日(後書き)

ありがとうございました。

十二話 暑い日は… 7月10日

クウガ・RT「新必殺ッ、デイバイトタイタンクラッシュ！」

タウタウ「つつっーーーーー!!」

気温が高い朝、友樹は起きてすぐにスクランブルがかかり、出発した。

変身を解いた友樹は、ビートチェイサーで帰路についていた。その帰り道…。

友樹「(…ん?)」

キキイイー

何を見たのか、バイクを止め目をこらす。そこにあっただのは…。

友樹「(えっ?何?人が倒れてるんだけど!)」

そう思いつつも、ぶっ倒れている人物に近寄る。

つつん

突いてみる。

ゆさゆさ

揺さ振ってみる。

しーん

じっと見つめる。

そして、結果が彼の中で出た。

友樹は倒れてる人の顔を覗く。

友樹「なっ!？」

その顔は友樹が知っている顔であった。

友樹は倒れていた人物を後ろに乗せ、急いで屋敷へと向かった。

屋敷に着くと、友樹は倒れていた人物をピーチとサムスに任せ、広間のクーラーを浴びていた。

フォックス「なあ友樹、さっき連れて来たやつって誰なんだ？」

友樹は軽く答える。

友樹「弟。それで仮面ライダーギャレン」

その発言で周囲のメンバーはア然とした。

舞湖「ちょっと待て、あいつもギャレンなのか？信じられん」

その後、友樹の弟は集まったメンバーの前に現れた。

智「兄さんが、いつもお世話になっています。俺は弟の智です」

智：と名乗った人物は、旅の途中でこの世界に訪れたはいいが、食糧と水を失って三日経って、気絶して今日友樹に発見されたと言う。

ウルフ「ついてねえなあ」

智「更には一緒に旅をしている仲間とはぐれてしまいました…」

何と不幸なことだろうか。それを思い、周囲の視線は友樹へと向かった。

その時だった。

ビーツビーツビーツ

アナザーセンサーが鳴り、ボブが告げる。

ボブ「本屋敷後方ノ4km地点ニテあんどとトぶりむ発見！フォックスサン舞湖サン出撃シテ下サイ！」

舞湖「アンデット…」

二人が行こうとしたその時、ボブがまた告げる。

ボブ「同地点ニテ、応戦スルらいだーアリ。一ツハ一ツ。モウ一ツハ謎のらいだーデス！」

そのボブの報告に、智はハツとしていた。それを兄の友樹は見逃さなかった。

フォックス「アーウィンで出る」

行こうとしたフォックスの肩を友樹が掴んだ。

友樹「ついでに、智を連れてって。多分師匠と戦っているのは智の

仲間だと思っから」

その案にフォックスは賛成して、アーウィンの後部座席に智を乗せ出発した。少し遅れてマシンブレイダーで舞湖も出発した。現場では…。

一号「君、大丈夫か？」

一号は共に戦っているライダーに話かける。

???「ハイ大丈夫です！」

話かけられたライダーは武器である杖で応戦していた。

???「（智…来て…アタシ、もう無理…）」

杖を使っているライダーも一号も、プリム達によって体力の限界であつた。しかし！

ブオオオオオオン！！

轟音と共に舞湖の乗ったマシンブレイダーがその場に到着した。

舞湖「ゲンさん、今フォックスと連れが来ます。変身！」

ターンアップ

構えを取り、叫んでレバーを引いて、オリハルコンエレメントを出して、ブレイドに変身した。

「????」（別世界のブレイド…）」

ブレイド「ゲンさん、そのレンゲルは？」

一号「旅のライダーだそうだ！」

ブレイドは、必死に戦っているレンゲルの下へ行き応戦しながら話かける。

ブレイド「あんた、名前は？」

レンゲル「マリカ！奈美川マリカ！貴女は？」

プリムの攻撃を避けながら、ブレイドは返答する。

ブレイド「剣崎舞湖！」

そこに、全長4mの強化ビートルアンデット（以下PBA）が現れた。一号のライダーパンチが当たっても、ノーダメージであった。その時だった。

ビシユウウン

遅れて、アーウィンからフォックスと智が来た。

智「先輩！すいません、遅れました！」

レンゲル「そんなコトより変身よー！」

智は頷き、ギャレンバツクルにダイヤのカゴデリーエースのカード

を入れて、腰に付けるとベルトになった。
そして、智は構えを取り叫ぶ。

智「変身！」

ターンアップ

レバーを引き、エレメントを出してギャレンに変身した。

フォックス「雑魚のプリム達は、俺とゲンさんで片付ける！」

そういうと、二人はプリムの群れの中に飛び込んだ。

レンゲル「こいつは、並じゃないわ。視界を奪うから、二人はトドメを刺して！」

ブ・ギャ「オツケー！」

スモッグ

スモッグのカードでPBAのの視界を奪った。

PBAは少々動揺した。

ファイヤ ドロップ ジェミニ バーニングディバイト

ギャレン「おりゃああああ！」

ギャレンの炎の分身キックが決まり、PBAは怯んだ。

キック サンダー マツハ ライトニングソニック

PBA「ああああ!!」

ドガアアアアン!!

ブレイドの超高速の雷のキックも決まり、PBAは爆発した。フォックス達も片付ける事に成功した。その後、一行は屋敷へ向かった。リンク「おか……あ、ゲンさん!」

ゲン「よっ」

リンクが言うと、近くにいた友樹が来て、そのまま師弟トークぶっ放しになってしまい、彩香以外その場を離れた。

マリカ「剣崎さん、先程助けて頂き、ありがとうございました」

智「俺からも礼を言わせて頂きます。奈美川先輩、はぐれてしま…
…ゴフウツ!」

智が言い終わらない内に、マリカの右ストレートが智の腹部に直撃した。

マリカ「バカッ!」

智「うっ!」

マリカ「ちょっと目を放したスキに、ドコ行ってたの?! ったくう、今度したら〇肉バスターやっかんだから!!」

智「すいません。つか、兄さん!! 助けてよ!」

その友樹はと言うと…。

友樹「ここ最近蒸し暑いですね」

ゲン「ああ、まったくだ」

彩香「山にいるのに？」

まだトークをしていた。

その時、ネスとカービィ、そしてリュカの三人が、買い物袋を持って帰って来て、サムスに言われ、風呂に入った。

舞湖「あれ？お使いに行かせてたんですか？」

サムス「ええ、貴女が出てる間にね。流石姉貴役ね」

舞湖「アタシはそんなつもりじゃ……」

ヒビキ「なら、代わって……」

舞湖「ウザい！」

そして、智がまた別の世界へ旅に出ると言う。

友樹「弟の事頼むね」

マリカ「お任せ下さい。この奈美川マリカがついてますから。ね、智！」

智「はっ、ハイ！」

友樹は智にあるものを渡した。

智「兄さん、これは？」

友樹「僕の作ったラウズアブソーバーの試作品。使う時は、ダイヤのカゴデリークインのカードを入れて、ジャックのカードをスラッシュする」

智「するとどうなるの？」

友樹「それは言えない。負けそうな時に使うといい」

智「あいよ。兄さん、皆さよなら」

そういうと、二人は別の世界へ旅立ち、ゲンも帰宅した。夕食の後、友樹は外へ行った。外に出ると、無数の星が輝いていた。足元の草花も風に揺れている。

友樹「中にいるよりマシだな」

只今屋敷内のクーラーが故障してしまい、友樹は外に出たのだ。それにもうひとつの理由があるのだ。

友樹「そこにいるんでしょ？」

????「……やっぱり分かっちゃっう？」

友樹「分かっちゃっうのは仕方ないよ。生きてたんだ」

???。「まだ生きてるよ。この人間体は気に入ってるからね」

友樹と話している人物は、一見二十代前半位に見えるが、人間体と言っ単語からすると……。

友樹「グロンギの帝王……ン・ダクマ・ザバ……」

ダクマ「久しいなあ！その名前。しかし、ここで僕に抗うかな？」

二人が睨み合っているその時、屋敷の方からブザーが鳴った。

ダクマ「おっと、かかっちゃったなあ」

すると、彼は右手を上げると、地面からズ・ Gumn・バ、メ・ガリバ・バ、ゴ・ガトル・バの三体が湧き出た。

ダクマ「こちらら、まだやることあるし、今日の所は見逃してね」

友樹「させるか！」

友樹は手合わせ練金でダクマの進路を塞ごうとしたが、ゴ・ガトル・バが邪魔をした。

その時、二つの影が友樹の後ろから現れた。

R・ナギ「ねーねー、こいつらやつつけていいよね？答えは聞かないけど！」

リュウタロスに憑依されたナギと……。

Cファルコン「俺達のハートが真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！！」

やけに熱血過ぎてるCファルコンが来た。

友樹「变身！」

R・ナギ「变身」

ガンフォーム

友樹はクウガ・RMに变身し、R・ナギは電王・Gに变身した。变身してすぐに、クウガは地面を錬成し、ピストルを作った。

クウガ・RM「超变身！」

クウガはライジングペガサスに超变身した。それと同時に持っていたピストルもペガサスポウガンに変形した。

クウガは、電王・Gと共にズ・グムン・バ、メ・ガリバ・バ、ゴ・ガトル・バに向けて乱射した。

クウガ・RP「うっ！」

急にクウガの变身が解かれてしまった。

クウガの持つペガサスフォームは、制限時間は数十秒しかなく、制限時間が過ぎると強制的に变身が解かれて、その後2時間变身できないのだ。

Cファルコン「行くぞおお！新必殺っ、スーパーファルコンペアアランチ！！！」

フルチャージ

電王・G「吹っ飛んじゃえ！」

二人の必殺技が一気に、ズ・グムン・バ、メ・ガリバ・バ、ゴ・ガトル・バに当たり、三体のグロンギは消滅した。

友樹「帰りましょう」

R・ナギ「帰る帰る」

Cファルコン「…ン？」

友樹「どうしました？」

Cファルコン「いや、何でもない（屋敷の方から誰かに見られた気が…ま、いつか）どうやら、クーラーが直ったようだな」

その夜は涼しく眠れたメンバー達であった。

くづつ

十三話 夏の定番の場 7月17日(前書き)

海です。

前編です！

十三話 夏の定番の場 7月17日

スマツシュ海岸。

ここは、屋敷からバスとアーウィンとウルフェンで約30分で到着する。

一部のメンバー達で、海水浴に来たのだ。その上、客はメンバー達しかない。事実上貸し切りみたいなおことであった。

因みに、女性達全員水着だと飛べない天使は言う。男達は半分海パンの人、半分私服の人がある。

マリオ「泳ぐぞー！」

子供団「おー！ー！！！」

リンク「ははは、元気過ぎるなあ。…あれ、ハヤテ」

ハヤテ「ハイ？」

リンク「友樹は？」

ハヤテ「そういえば、どこでしょう？」

現在、ガノンドロフ・ワリオ・クッパ・G & amp; W・ボブ・メタナイト・ルカリオの八名は留守番なのだ。

しかし、友樹の行方が知れない。

レッド「ほんと、何処行ってるんでしょうか？」

オリマー「彼はかならずだよ」

オリマーは弱点帳を片手にしゃべっていた。

佑井「まジ?!」

佑理「その事は、私も知っている」

薫「で、その本人は？」

慎吾「あそこだ」

慎吾が示した先をその場にいるメンバーが見ると…。

ルイージ「助かるなあ」

友樹「いえ、良いんですよ。泳ぐより、こつしてゴミ拾いをして、皆笑顔になってもらいたいんです」

ルイージと共に、海岸のゴミ拾いをしていた。

どうせ、何処に行っても目立たないルイージがゴミ拾いをしていたのだ。そこに、友樹が手伝いに来たのだ。

ナギ「何気に良いことをしておるではないか」

マリア「そうですねえ」

チラッ

ナギ「ん？私の顔に何かついておるのか？」

マリア「いいええ。別にいい」

何だかんだあつて、昼飯の時間。昼飯代を節約しようと、事前に友樹とリンクが弁当を作ったのだ。昼食が終わり、一休みする人もいれば、張り切ってまた泳ぐ者もいた。

アイク「……なあマルス」

マルス「何？」

アイク「退屈だから……友樹とルイーダさんの手伝いしてくる。来るか？」

マルス「やだ！この王子の白い肌を黒くしてたまるか！」

アイク「それでも、俺は行く。第一面白そうだしな……」

そういうと、アイクは二人の所へ走って行った。マルスとしては、何が楽しいのか、謎だった。

しかし、その時鯨が一匹この海水浴場に入って来た。だが、普通の鯨よりメタリックな体であった。

幸運にも、今まで泳いでいたメンバー達は全員上がっていた。

シンジ「あの鯨……どこかで見たような……」

慎吾「多分アビソドンだ！見るッ！」

鯨が海面から離れると、マシン型の鯨、アビソドンが現れた。

シンジ「やるしかねえ。変身！」

すかさず龍騎に変身したシンジ。

慎吾「暇だしやるか。変身！」

カメンライド デイケイド

何気なくも、デイケイドに変身した。

すかさずとあるカードを一枚、デイケイドライダーに装填した。

ファイナルフォームライド リュ・リュ・リュ 龍騎

R・ドラグレッダー「グオオオオオオオオ！」

デイケイド「続けて行くぜ！」

フォームライド 龍騎サヴァイブ

デイケイドがDRS（デイケイド龍騎サヴァイブ）に変身すると共にR・ドラグレッダーもRドラグランザーに変身した。

R・ドラグランザー「行くぞ、慎吾！」

DRS「ああ、行くぞ！」

ファイナルアタックライド リュ・リュ・リュ 龍騎

その電子音が鳴ると、R・ドラグランザーはバイク形態に変形し、DRSがそれに乗った。

佑理「あれは…龍騎サヴァイブのファイナルベント！」

大樹「あの野郎、あんなコンボを使うとは」

そのコンボを使ったDRSは、周辺に向け、ミサイルやらレーザーやらを撃つて来た所に、DRSの攻撃が当たった。

しかし、この攻撃法に、意を唱える者がいた。

リンク「あれ、バイクの意味あるのか？」

ゼルダ「私も同感です」

この二人でした。なぜならバイク形態になりDRSが乗っているのに、R・ドラグランザーの口から火球をだすのだ。そして、アビソドンが破壊されたと同時に変身を解いた。しかしその時、海面に異変があった。

十三話 夏の定番の場 7月17日(後書き)

後編をお楽しみ下さい！

十四話 大決戦パニック！ふもっふ 7月17日（前書き）

後編の始まりです。

十四話 大決戦パニック！ふもっふ 7月17日

アビソドンを倒すと、海面が真つ二つに割れた。

マリア「なっ、なんなんですかあー!!」

歩「モーゼかな？これモーゼかな!？」

アテネ「立派なモーゼとやらよ」

ナギ「お、おいハヤテっ！何とかしろ!!」

ナギがハヤテに声を掛けたが、本人はそこにはいなかった。なぜなら…。

ハヤテ「すみません。今、友樹とルイーダさんの手伝いをしていたので…」

ナギ「って、をあい！何をしとるかあ!!」

ヒナギク「ついでに私も…」

アイク「……ぬっん…」

その時、割れた海の中から、猿の顔をした大型のメカと二つの腕が現れ、上空に浮いた。

????くはっはっはー！久し振りだな！スターフォックス!!！>

フォックス「なっ、オイツコーツ！」

ファルコ「ちっ、死んでなかったか！」

オイツコーニー<今度こそ！このアンドルフメカ改改カスタムが相手だ！！>

突然のアクシデントに、子供団は大騒ぎ。舞湖とマリアがなだめようにも、無と化した。

すると、上空には、アーウィン2機とウルフェン1機が応戦していた。

友樹「大丈夫かなあ？」

心配そうな目をした友樹。すると慎吾が口を開く。

慎吾「だったら変身だ。行くぞ、友樹と彩香、舞湖とヒビキ！」

友樹「変身！」

彩香「変身！」

舞湖「変身！」

ターンアップ

響鬼「はああっ！」

四人は順調に、クウガ・M、アギト・G、ブレイド、響鬼に変身した。

そして、いつの間にか、慎吾もディケイドに変身した。

ディケイド「ちょっとくすぐったいぞ」

というと、四枚のカードを装填する。

ファイナルフォームライド ク・ク・ク クウガ ア・ア・ア
ギト ブ・ブ・ブ ブレイド ヒ・ヒ・ヒ 響鬼

ディケイド「ふんっ！」

クウガ・M「あひっ」

クウガはクウガゴウラムに変形した。

ディケイド「でえい！」

アギト・G「あああん！」

アギトはアギトトルネイダーに変形した。

ディケイド「えいや！」

ブレイド「ああん！」

ディケイド「……」

響鬼「おっひょ〜！」

ブレイドはブレイドブレードに変形し、響鬼はヒビキアカネタカに

変形した。

K・G「じゃ、先行ってるね」

H・A「待て！待てやこの野郎」

クウガゴウラムとヒビキアカネタカが、少々苦戦しているアーウィンとウルフェンの所へ向かった。

A・T「すぐに行くわ。落ちないでね！」

ディケイド「OKい！」

アギトトルネイダーは、ブレイドブレードを持ったディケイドを乗せ、アンドルフメカ改改カスタムへと向かった。一方残ったメンバーは、オイッコニー部下に手を焼いていた。アパロイドに侵食されたプリムであった。

佑一「ちいつ！モモタロス、オレと変身だ！」

モモタロス「おっしゃー！」

するとモモタロスは佑一に取り付き、ベルトを巻いて、赤いボタンを押し、パスを持った。

M・佑一「変身！」

ソードフォーム

M・佑一は電王・Sに変身した。

ナギ「リュウタロス、私の体を使い!!」

ハヤテ「お、お嬢様!?!」

ナギ「許せ!」

リュウタロス「OK!行くよ、ナギちゃん」

リュウタロスはそういうと、ナギに取り付き、ベルトを巻き、紫のボタンを押しパスを持つ。

R・ナギ「変しいん!」

ガンフォーム

R・ナギは電王・Gに変身した。続けざまに、歩にキンタロスが取り付き、電王・Aに。そしてマリアにウラタロスが取り付き電王・Rに変身した。

マリオ「スマブライダーズ、ファイヤー!」

メンバー『ファイヤー!』

マリオの掛け声につき、メンバー達も掛け声をあげ、攻撃を開始した。

しばらくすると、Aプリムの一体が一つのガイアメモリを取り出し、スイッチを押した。

マグマ

ドスのきいた、電子音が鳴ると、そのAプリムはメモリを自らの右手の甲に付けた。するとAプリムは灼熱の体をしたマグマドープンに変化した。

W・J「なっ、ドープン!?」

W・C「今のうちにとどめよ!」

Wはジョーカーメモリを右腰にスロットインした。すると、風を纏いながら上昇するW。

M・ドープン「何をやる気だ!?!」

ジョーカー マキシマムドライブ

W・C・J「ジョーカーエクストリーム!!」

その電子音の後、右腰のスイッチを押す。Wは空中で回転し、両足を突き出した。マグマドープンに突撃する途中、サイクロン側が後ろにズレた。ジョーカー側のキックが当たると、遅れてサイクロン側のキックが当たる。キックが決まった時には、マグマドープンからメモリが落ち破壊され、Wは元通りになった。

一方上空ではクウガゴラムとヒビキアカネタカにより、両手は破壊され、アーウィンとウルフェンにより頭部はボロボロだった。

デイケイド「そろそろトドメだ!」

デイケイドは二枚のカードを装填した。

ファイナルアタックライド ア・ア・ア アギト ブ・ブ・ブ
レイド

デイケイド「でやああああああ!!」

ドツゴオオオオン!!

オイッコニー<うわああああ!アンドルフおじさああああん!!>

コンボ技、デイケイドエッジトルネードにより、アンドルフメカ改
改カスタムは大破し、オイッコニーは海の藻屑となった。
その帰りのバスの中。

マリオ「何か休み、取れてねーっていうか…」

ピーチ「逆に疲れが溜まったわ」

ポポ「そだったねえー」

ナナ「つまんないねえー」

この帰りのバスは行きと同じバスである。ほとんどのメンバーは夢
の中である。

因みに、行きはカービィの歌で、ほとんどが瀕死状態になっていた。
そのカービィは今、荷物置場の中にぼつんと一人でいた。

カービィ「出してよー!もう歌わないからー!」

くづつ

十四、五話 言つへき事 8月12日(前書き)

短編で特別です

十四、五話 言つべき事 8月12日

彩香「楽しかったわあ」

友樹「うん、僕も。門谷君も皆も、笑顔だったね」

今日は門谷慎吾の誕生日パーティーであった。出し物は色々あったが、中でもピースエターナルのミニコンサートに佐井のブラッティローズの演奏が一番だったと言う。

友樹「こんなに楽しい事が………いつまでも、続くと良いなあ」

そういうと、友樹の顔が曇りはじめた。それを彩香は見逃さなかった。

彩香「どうしたの、友樹」

彩香に呼ばれ、我を取り戻した友樹は重く口を開いた。

友樹「もし………もしだよ？クウガに似たグロンギが現れたら………」

彩香「現れたら……？」

友樹「………その時は、誰も手を出さないでもらいたいんだ」

彩香が「何で？」と尋ねても、友樹は「何でもない」と言って、目を閉じた。

友樹「おやすみ」

彩香「……………おやすみなさい」

くづつ

十四、五話 言つべき事 8月12日(後書き)

次回、グロンギの帝王現わる。

十五話 変わる者・地の石 前編 8月13日(前書き)

今回で

かなり

やばいっす

十五話 変わる者・地の石 前編 8月13日

クウガ・U「うわああ!!」

ドガッ

クウガらしき戦士が、グロンギらしい生命体と戦っていた。

クウガ・U「ダクマ!!何故屋敷を攻め入る!!」

ン・ダクマ・ザバ「用があるのはキ・ミ。さあ、行こう」

クウガ・U「ふざけるなあ!!」

クウガとダクマは、それ以降殴るだけの繰り返しであった。時々人間体に戻って見え、それでも殴り続けていた。

メンバー全員もこの戦いを見ていた。

ルイージ「あわわわわわわわわ……………」

ウルフ「まったく、我慢ならねえ!」

ファルコ「俺もだ、今行くぞ!!」

この二人が出ようとすると、彩香がこの二人の行く道を遮った。

ウルフ「何しやがんだ!」

ファルコ「俺達を行かせてくれ!」

二人が何を言おうとも、彩香の耳には届かなかった。それでも、ウルフとファルコの前に立っている。その彩香の口が開く。

彩香「友樹から、言われているの。「クウガに似たグロンギが現れたら、手を出さないで」って。だから今、邪魔をされたくないの」

その視線は、いつしかクウガに向けられていた。

クウガ・U「はああっ!!」

ドガッ!

クウガのパンチがダクマの腹部に当たる。

ン・ダクマ・ザバ「はははははははは!!」

ドゴッ!

ダクマのパンチもクウガの腹部に当たった。

その時、ダクマから少し間を取ろうとして、一歩下がったクウガに一筋の紫色の光線が当たる。

クウガ・U「ぐあああああああああ!!!!!!」

その衝撃により、アルティメットフォームから、マイティフォームそしてグロージングフォームにまで下がり、人間体に戻ってしまった。

それをダクマは人間体で見っていた。

ダクマ「ふふふ……あつはははははははー!ピグマくうんよくやつたね!」

フォックス「なっ!」

ファルコ「んのっ、ブウたあ!」

ウルフ「まあだ、生きてやがって」

そのピグマとやらは友樹の上空で小型ヘリで滞空して、そのヘリの下には黒い石が吊してあった。

マスター「あれはっ!地の石!」

ネス「地の石…?」

カービィ「それ何!それで何で友兄イがああなるの!」

子供団のメンバーが、マスターに詰め寄る。マスターは知っていることを、子供団に話した。

地の石は、霊石アマダムと並ぶ、聖なる石。別名キングストーンとも呼ばれていた。元々、ゴルゴムという組織が使用していた石である。

友樹「ぐあああああああ!……!……!……!」

ピグマ「ブヒヒヒヒヒ!もう、ええんちゃいまつか?そろそろ帰りまひよ」

ダクマ「それもそうだね。では、スマブライダースの諸君、彼は預かっておくよ。近い内に来るからね。じゃあねえ」

そういうと、灰色のカーテンが、ダクマとピグマそして、友樹を包み、消えていった。

彩香「ゆ……………うき…友樹……………グスツ……………友樹iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

少女の叫びは虚空に響いた。

く づ つ

十五話 変わる者・地の石 前編 8月13日(後書き)

次回破壊者再び

十六話 変わる者・地の石 中編 8月14日(前書き)

中編デス

十六話 変わる者・地の石 中編 8月14日

光写真館では、土、夏海、ユウスケ、海東、栄次郎、キバーラが新たに降ろされたスクリーンを見ていた。その絵には、茶髪の少年が上半身裸で、両腕を鎖で吊され、その頭上にはクウガのマークがあった。

土「あの髪型……どこかで……」

途端に、考える人のポーズをとった土に海東が口を開いた。

海東「多分、ショートシャギー君じゃないかな？ホラッ、クウガの」

ユウスケ「あー、友樹。つてか、また名前間違ってるし」

夏海「というより、外へ出れば何か分かるかも知れません。なので、おじいちゃんとキバーラは、お留守番お願いします」

キバーラ「まっかせてえ！」

栄次郎「いつてらっしやーい！」

友樹が連れ去られた翌日。メンバーは、いつもより暗い顔をしていた。いや、暗いというより少しやつれていた。

いつも遅く起きるサムスさえそうだった。この日は誰よりも先に起床していたのだ。

更には、もう朝食を済ませたかどうかさえ、思い出せない始末
ふと、リンクとゼルダが皆の前に姿を出した。先程まで、彩香を呼
びに行っただが、駄目だった様だ。

???「らしくも無い。一体どーしたんだ、お前ら」

聞き覚えのある声がある方をメンバー達は一斉に見た。そこにいた
のは、マゼンタのトイカメラを首に下げた…。

慎吾「土ッ！」

土「久し振りだな、慎吾」

同じデイケイドの二人は、同志を見つけた様な顔をした慎吾。

???「土君、先行きす……皆さん、お久しぶりです」

マリア「あら、夏海さん」

夏海「マリアさん！お久しぶりです」

夏海の後には、ユウスケと海東がメンバーの前に遅れて同時に出て来
た。

リンクとマリオは、土・夏海・ユウスケ・海東の四人に、昨日の出
来事を話した。

友樹は、地の石の光線を浴び、その上グラウンドショットカーへ連れ去
れたのだ。その為、彩香は部屋に閉じこもってしまったのだ。それ
につられてか、メンバー達も暗い顔をしていたのだ。

土「大体分かった。おいユウスケ」

ユウスケ「ああ、彩香ちゃんを元気付けて見る」

その後、土は口を開いた。

あの後、数多くの世界を回って土の世界に着き、同時に土の記憶も戻ったのだ。しかし、それは大シヨツカーの大首領であつた。その時に、ユウスケは土の実際の妹の小夜という少女の持っていた地の石により、ライジングアルティメットクウガになり、大首領の座を奪われた土を襲つた。

その後、ライダー達がダシヨツカーの怪人達と闘っている最中、小夜が地の石を壊して、ユウスケの意識が戻つたのだ。

そして、ライダー対戦の世界で、ユウスケを含めた全ライダーを倒した土は、夏海の変身したライダーキバラーに討たれるが、後に復活し、Wと共にスーパーシヨツカーを壊滅したのだ。

リンク「すごいんですね、土さん」

土「まあ、そんなもんだ」

一方、ユウスケはというと。

ドンドンドン

ユウスケ「彩香ちゃん、出て来なよ！」

ノックしても、呼び出す相手は返事をしない。

すると、ユウスケは部屋にいるだろう本人に、ドア越しに声を出した。

ユウスケ「オレ…さ、一度地の石で心と体を支配されたんだ。それ

で、土を一番始めに攻撃したんだ。でも、仲間達のお陰で、自我を取り戻せたんだ！だから……その……多分……じゃなくて……友樹も元に戻るよ！！」

そのユウスケの声が届いたのか、部屋から彩香が出て来た。そんな時だった、アナザーセンサーが鳴ったのだ。

ボブ「ホ、本屋敷前方に、ぴぐまめか1、更二、ユツ、友樹サンデス！！彩香サン、マキサン出撃デス」

ユウスケ「大変だ！彩香ちゃんツ！！」

彩香「ハイ、友樹を取り戻します！」

外に出ると、2mあまりのピグマメカの前に友樹が昨日と同じ服で立っていた。

彩香「友樹！！」

彩香が呼んでも、友樹は返事をしなかった。すると、ピグマメカからダクマの立体映像が出た。

ダクマ<無駄だよ。彼は今、身も心も地の石にやられているからねえ>

そう言ったダクマの映像が消えた。

友樹「……………へんしん」

ボソリと呟きながらも、友樹はライジングアルティメットクウガ・

ブラックアイに変身した。

RUクウガ・B「……」

マキ「彩香、友樹を任せた。私はブタメカをやるから」

彩香「うん（友樹、今助けてあげるね）」

彩香はオルタリングを出した。が、そのベルトには、ドラゴネイルがついていた。すかさずマキもベルトを巻いた。

スタンディングバイ

彩香・マキ『変身！！』

コンプリート

すると、マキはいつもの555にたいして、彩香は炎のアギト、アギトバーニングフォームとなった。

555「今日は特別のアイテムを使うわ」

そういうと、ベルトにあるファイズフォンを外し、手に持つ。そして、特別なアイテム・ファイズブラスターの5を三回押し、エンターを押した。

スタンディングバイ

そして、ファイズフォンをファイズブラスターに差し込む。

アウェイキング

その電子音の鳴った後、555の色は黒基調から赤基調の555・
ブラスターフォームとなった。

アギト・B「……………行きましようか？」

555・B「……………行きますとも」

とその時。

????「ライダー……」

アギト・B「その声は……一号のゲンさん!？」

555・B「後、エツオさんも!」

ゲン・エツオ『変身!!!』

何と、ゲンとエツオが参上し、一号とブラックRXに変身した。

ブラックRX「俺は太陽の子、仮面ライダーブラアアアアアアッ
クRX」

そして更に……。

智「兄さん!」

マリカ「やばいわ……智行くよ!」

智「ハイ！」

智はギャレンバツクルにダイヤのエースを、マリカはレンゲルバツクルにクラブのエースを入れ、腰にセットした。

智・マリカ『変身！！』

ターンアップ

オープンアップ

智はギャレンに変身し、マリカはレンゲルに変身した。
そして、戦いの火蓋は切られた。

く づ っ

十六話 変わる者・地の石 中編 8月14日(後書き)

次回！

太陽のアギト現れる！

十七話 変わる者・地の石 後編 8月14日(前書き)

妄想OP

Journey through the Decade

十七話 変わる者・地の石 後編 8月14日

ギャレン「兄さん！これで目を覚ませえ！」

ギャレンは、左腕にセットしてある、ラウズアブソーバーにダイヤのクイーンをセットした。

アブソーブクイーン

そして、ジャックのカードをスラッシュした。

ヒュージョンジャック

その電子音が鳴ると、ギャレンはジャックフォームに姿を変えた。まず、ピグマメカSide。

一号「行くぞっつ！ライダーーアアアアアアアキイック！」

ドガッ！

一号のライダーキックがピグマメカの腰部に当たる。

続いて555・Bはファイズブラスターの数字の内、5214を押した。

ファイズブラスター テイクオフ

するとどうだろう、555・Bは背中にあるスラスターから、ジェットが噴射され、宙に浮いた。そしてまたボタンの内エンターを押

した。

エクシードチャージ

更に、5523と打つ。

ファイズポインター エクシードチャージ

その銃口をピグマメカに向け、マーカーを発射し拘束した。

555・B「うおりゃあああああああああ！！！！」

555・Bの必殺技ブラスタークリームゾンスマッシュが決まった。

レンゲル「トドメは私が！！」

そう言ってラウズしたカードは……。

キック ブリザード マツハ ブリザードソニック

ブレイドのライトニングソニックのブリザード版のレンゲルの必殺キックが決まり、ピグマメカは豪沈した。

そして、RUクウガ・B Side。

RUクウガ・B「……………」

ブラックRX「リボルゲインッ！てやあ！！」

ブラックRXは、専用武器リボルゲインで、RUクウガ・Bを討とうとするが……。

パチンッ！

バリバリバリ

ブラックRX「なっ！」

RUクウガ・Bの手合わせ練金で、ガードされた。

ギャレンJ「だったら上はどうだー!!」

ギャレンは空中でファイアを三回、バレットも三回ラウズした。

ギャレンJ「あんたって人はあああああ!!!!」

ギャレンJ・J・ラウザーの銃口がRUクウガ・Bに向けられ、トリガーを引いた。銃口から焰の弾丸が三つ飛び出た。

しかし、RUクウガ・Bはジャンプして、焰の弾丸を腕で払い、ギャレンJの目の前にいた。

ギャレンJ「兄さ……ぐわっ!!!!」

空中からたたき落とされたギャレンJは、落下のショックで変身が解けてしまった。

アギト・B「でやああああ!!!!!!!!」

空中で滞空しているRUクウガ・Bにバーニングキックを繰り出した。RUクウガ・Bはそれに対応出来ず、クリーンヒットした。

アギト・B「やたっ！」

しかし、そのアギトの脚を掴み、空中でジャイアントスウィングを繰り返した。それにより、アギトは玄関に投げ飛ばされた。

アギト・B「がはっ！…うう…」

そして、返す刃で、ブラックRXに、手合わせ練金で錬成したピストルをRUペガサスボウガンに変えて乱射した。

ブラックRX「むおおおおお！！！」

しかし、奇跡的にベルトには当たらなかった。何故なら、先程ピグマメカを倒した三人が密かに攻撃が来ると伝えたのだ。

555・B「ちょっとやばいわ。けど、やるしか無いのよ！」

555・Bは、ファイズブラスターのファイズフォンにファイズアクセララーのミッションメモリをセットした。

コンプリート

すると、555・Bは555・B・Aになった。このフォームはファイズ計画の中で企画されていたが、中止されたと言う。

能力は、アクセルフォームの制限十秒を二十秒に伸び、通常の千倍から二千倍の速度に変化するのだ。しかし、これを挑戦したテストライダー達は二千倍の速度に堪えられず、死亡者が続出したと言う曰く付きのシステムなのだ。

555・B・A「やるしかない。でも、クウガを止めるには…や

るしかない、やるしかないのよ!!」

スタートアップ

RUクウガ・B「?」

超高速で走る555を目で捕らえる事は出来なかった。が、適当に足をチョンと伸ばす。

555・B・A「おうあ!!」

ズザザザー!!!

勢い良く555・B・Aは大いにずっこけ、その衝撃により、ベルトが脱げ落ち、変身が解けた。

RUクウガ・B「……」

相手がいなかったの、そのまま屋敷へと進んだ。

一号「ライダーパンチ!!」

RUクウガ・B「!?!」

一号のライダーパンチがRUクウガ・Bに当たろうとしたが、避けられた。

更にレンゲルが現れ、レンゲルロッドで攻撃を開始した。

一号「目を覚まさなかあッ!馬鹿弟子があ!!」

一号は何処かの武闘家の師匠の様な事を言っても、R Uクウガ・Bの耳には届かなかった。

二人がR Uクウガ・Bと闘っている最中、アギト・Bの倒れた場所では、異常な位の太陽の光が降り注いだ。

アギト・B「うう………何……？何か、暖かくて………優しい気持ちが増れて来る……」

すると、アギト・Bはゆっくりと立ち上がり、太陽の光を浴びた。

レンゲル「あれはっ?!」

一号「あれは………賢者の石が反応している!!」

そう、オルタリングのバックルには、アークルのアマダムと同じ様に賢者の石がある。それが太陽の光に反応し、バーニングの装甲にヒビが割れる。その下から、白銀の鎧があらわになった。

アギト・SH「新しい力………これなら!!」

アギト・SHはR Uクウガ・Bへシャイニングカリバーを持って走り出し、対するR Uクウガ・Bもアギト・SHへ走り出した。

そして、二人の距離が近くなった所でアギト・SHは変身を解いた。

R Uクウガ・B「!?!」

これには、R Uクウガ・Bもびつくりしてしまい、立ち止まってしまった。攻撃しようにも隙が無かった。

すると、彩香はR Uクウガ・Bに抱き着いた。

RUクウガ・B「……ああ……」

彩香「もう、やめよ。地の石の力なんて、私が……私達が壊して……
……それであなたを取り戻す……」

RUクウガ・B「ああ……や……」

彩香「私の名前を言って、友樹」

RUクウガ・B「……や……か……」

彩香「うん……」

RUクウガ・B「あ……やか……」

彩香「うん、うん……」

RUクウガ・B「うう……彩香……!!」

するとどうだろう。RUクウガ・Bの姿は、アルティメット……マ
イティ……グロージングそして、完全に変身が解けた。

友樹「彩香！」

彩香「友樹！」

二人は強く抱き合った。

マキ「（ありやりや……）」

智「につ、兄さん！？戻ったの!？」

レンゲル「(よかった)」

ブラックRX「みんな…まだ終わって無いぞ！」

一号「アレを見るッ！」

マキ、智そしてレンゲルは一号の指さす方向を見た。そこには、プリムヤシヨツカー戦闘員、更にアンデットとアンノウンがざっと100体位いた。その距離は、ここからおよそ300m先である。

マキ「ありやりや〜」

スタンディングバイ

マキ「変身!！」

コンプリート

智「変身!！」

ターンアップ

二人が変身すると同時に屋敷からメンバー全員が出て来た。それと同時に友樹からW探偵の二人に土とユウスケと海東の16人が一斉に変身した。ファイター達は乱闘で使うレイガン、ビームソード、ハイパースコープそしてバットの四種類の武器等を持っていた。

士ディケイド「コイツの出番だ!！」

すると士ディケイドは、黒とマゼンタの小型マシンを出して、クリアカードをそのマシン……もといケータッチに装填した。

クウガ アギト 龍騎 ファイズ ブレイド 響鬼 カブト 電王
キバ

それぞれのライダーマークをタッチした後にディケイドのマークをタッチした。

ファイナルカメンライド デイケイイド

今ディケイドはコンプリートフォームになったのだ。

士DC「ここからが、本番だ！」

マリオ「よし。スマブラライダーズ！ファイヤー……！！！！」

メンバー+ 『ファイヤー……！！！！』

それから、4時間後。

友樹「皆……父さん、師匠^{せんせい}、智、マリカさん……そして彩香。本当にゴメンナサイっ！！！！」

アレから、友樹はこの場にいるメンバーに頭を下げ、謝罪した。

モモタロス「なあに言ってんだよ。悪いのはグランドショッカーなんだぜえ」

ウラタロス「そゆこと」

キンタロス「せやで。友樹は悪くなんか無い！」

リユウタロス「そーそー。モモとカメちゃんと熊ちゃんの言つ通り！」

ユウスケ「その通り！だから友樹、もー皆怒ってなんか無い!!」

友樹「ユウスケさん……」

その日の夜。風呂場にて。

友樹「あ~~~~」

マリオ「どしたそのため息」

先に入浴していたマリオは、後に入って来た友樹が入浴した第一声がそれであった為、半分びっくりしたらしい。しかし、流石の友樹もこの度の一件で派手に疲れただろうとマリオは思った。そこに……。

士「友樹、マリオ、入らせてもらっ」

ユウスケ「お邪魔しまーす！」

士&ユウスケが乱入した。

友樹「もう地の石なんかで、誰かの流す涙なんて見たくない。皆には笑顔で生きてくれなきゃ……」

ユウスケ「オレも同じ気持ちだった」

友樹「次からは、ちゃんと自我を保つ様にしよう!」

海東「流石だねえ、ショートシャギー君」

士「海東、いつになったら名前を覚えるんだ?」

ユウスケ「土に一票!」

友樹「じゃ、僕も」

マリオ「あつ、俺も俺も!」

海東「ちよつと、それは無いでしょ!」

士「さあ?」

ガノンドロフ「よつ、友樹」

友樹「あつ、ガノンさん。御心配をおか……」

ガノンドロフ「もういい。何も言つな」

友樹「…ハイ」

海東とガノンドロフも乱入した。

ささやかながら(?)友樹を話題にした話は、本人にとって、少々こそばゆいものであった。

友樹はその後、同じベットの中で彩香と睡眠した。

く づ っ

十七話 変わる者・地の石 後編 8月14日(後書き)

妄想ED

輝

十八話 誕生パーティーの出し物は大切 8月15日(前書き)

今回から、ファイズの表記を555からファイズにします。

十八話 誕生パーティーの出し物は大切 8月15日

パパーン パパーン

友樹「……………へ？」

朝起きた友樹が居間に着くと、一斉にクラッカーが鳴ったのだ。今朝彼が起きた時彩香に「まだ寝ててねっ」と言われ、拒否はしなかった。

マリオ「えー、スマツシュブラザーズ代表、マリオ・マリオ！」

クツパ「ひっこめー！」

マリオ「るせー！…こほん。今日、8月15日、貴公五代友樹の誕生パーティーを始める！バースデーケーキを。あと、主役を席へ」

すると、友樹はネスとリュカに連れられ席に座り、キッチンからは栄次郎が6段ケーキを持って来た。

栄次郎「いやいやいや、苦労しましたよ。土君が、「どーせなら大型が大体良いだろう」って。まあ、作りがいはありました」

夏海「って、土君！おじいちゃんに何やらせたんですか？！」

土「別にいいだろ？」

夏海「よくありません！光家秘伝・笑いのツボ！」

ドスツ！

士「だーっはっはっはははは！！」

ユウスケ「あの二人はほつといて…」

サムス「切り取るから、欲しい人は言ってねー！」

ケーキは人数分に切り取られ、しばし談笑をした。

すると、龍騎のデッキから、Wドライバーを持った子供団が現れた。

ピット「これより、子供団によります、大変身祭を始めたいと思いますー！」

マリオ「いーぞいーぞー！」

ルイーダ「楽しみだなあ」

ヨッシー「見る価値はありますね」

この三人が興奮しているとき、サムスが友樹に質問をする。

サムス「ねえ、友樹君。なんで、クウガとアギトは抜かれているの？」

友樹はコーヒーを一口すすり言う。

友樹「僕のアークルと、彩香のオルタリングは、体の中に入ってるので、出せないんです。死なない限り」

サムス「ふうん。あつ、始まるわよ」

一番手はピット。シンジから借りた龍のエンブレムの入った龍騎のデッキを、等身大の立ち鏡にかざした。Vバックルが装着され、ピットは右腕を左上に上げ、叫ぶ。

ピット「変、身！」

Vバックルに龍騎のデッキを差し込むと、ピットは龍騎に変身した。しかし、背中にはピット自信の翼が生えているまんまだった。

P・龍騎「ヤッター！」

続けて、ネスがファイズギアを腰に巻き、ファイズフォンの5を三回押した。

スタンディングバイ

ネス「変身！」

コンプリート

すると、ネスの体に赤いラインが走り、みるみる内にファイズになった。

N・ファイズ「次はリュカのブレイドでえーす！」

ピットとネスは変身を解き、リュカにブレイバックルとスペードのカゴデリーエースのカードを渡した。

リュカ「……い……いくよ……」

リュカはブレイバツクルにカードをセットし、腰にセットしてベルトになると同時に、変身の構えをとった。

リュカ「……へ……へシンー!!」

ターンアップ

オリハルコンエレメントがリュカを包み、ブレイドへと、姿を変えた。

次に、トゥーンが音角を持って現れた。

鬼角を展開し、右手の甲に叩いて額に寄せた。

「ハアアアア………ハアツ！」

トゥーンが響鬼に変身したはいいものの、色は紫では無く緑色であった。

続いてはカブトなのだが、カブトゼクター自体が人を選ぶのだ。

カービィ「モモー!」

モモタロス「おう!」

デイディー「ウラ!」

ウラタロス「オツケー!」

ポポ「キン!」

キンタロス「行くで！」

ナナ「リュウ！」

リュウタロス「いいよー！」

モモ・ウラ・キン・リュウの四体が、カービィ達四人に憑依し、デ
ンオウベルトを巻き、パスを手にとった。

M・カービィ「へ！」

U・ディディー「ン！」

K・ポポ「シ！」

R・ナナ「ン！」

ソードフォーム

ロッドフォーム

アックスフォーム

ガンフォーム

四人は、それぞれの電王に変身した。
続きはキバなのだが…。

キバット「やだね。ファンガイアの血が少しでも入ってなけりゃ、
無理なんだよ！あー、腹が立つな！ジャ プ読んでくる！！！」

と言って、佑井の部屋のベッドに逃げ込んだ。

次は、デイケイドライバー（慎吾の）を持ったピットとディエンドライバーを持ったトウーン（大樹の）が向かい合う様に立った。

海東「何故か不安だ」

士「何がだ？（俺のケーキの苺をお宝と言って盗み食いやがって）」

大樹「OREも…」

慎吾「いずれ知るだろう」

カメンライド デイケイド

カメンライド デイエンド

P・デイケイド「ラストはあ！」

T・ディエンド「ポポとナナのダブルです！」

呼ばれた二人は、背中合わせに立っていた。

ポポがWドライバーを腰に当てベルトになると、ナナの腰にWドライバーが現れた。

サイクロン

ジョーカー

ナナ・ポポ『変身！』

ナナがサイクロンメモリを右スロットに差し込むと、メモリとナナの意識が、ポポのベルトの右スロットにスロットインされた。ジョーカーメモリをポポは左スロットに差し込み、バツクルを開いた。

サイクロンジョーカー

その電子音が響くと、ポポの体はW・サイクロンジョーカーになった。

やがて、ピットが閉会（子供団の出し物）を述べたと同時にレッドが思う。

レッド「（オラ行かなくて良かったー）」

と思い、ピーチ特製のレモンティーを口にして席を立った。しばらくして会は閉会し、士達はまた別の世界へ旅だった。

友樹は屋上で一人であった。何をしにここに来たのか、自分でもわからないのだ。

ガチャッ

後方から、ドアの開く音がしたが、友樹は振り向かず沈む太陽を見ていた。

気配はしたが、足音は聞こえなかった。となると…。

マスター「いよっ!」

友樹「マスター…!」

マスターハンドだった。白い右手はいつ見ても不気味である。

友樹「よく僕がここにいるって分かりましたね」

マスター「神に不可能は無い」

マスターと話している中、友樹はマスターのある一部を見ていた。人で言う手の甲の辺りが妙にこんもりとしていた。しかし、友樹は敢えて言わない事にした。変な事を言っただけで面倒な事が起きると予感したので。

マスター「実は、私から君にプレゼントがある。私の……つまり人にあたる手の甲が、少し盛り上がっているだろうか？」

友樹「え…ええありますね」

マスター「ちつと、待ちなさい」

と言うと、マスターと友樹の間に青白い光の球が現れた。どうしてだろうか、何故か涼しかった気がした。

やがて光が止むと青い端子みたいな物に、三つの画面があった。その中には三体の怪獣が映っていた。

友樹「マスター……これ…」

するとマスターは何も言わず、その端子みたいな物を友樹に渡した。

マスター「何も言っな。……バトルナイザー……その中には、古代怪獣ゴモラ、合成怪獣タイラント、そして怪獣王ゴジラの三体が入っている。グラントシヨッカーは……巨大な生命兵器を使うと言う情報が入った」

友樹「ということは…」

マスター「ま、そういうことだ。でも、使う時は周囲に気を付ける」

友樹「……………はい」

その夜。彩香は眠れないでいた。先程、死んだ兄が皆を……………メンバーを襲い、更には友樹が変身したクウガアルティメットフォームのアークルに攻撃が当たり、友樹が死んだ夢だった。ふと、隣のベッドでは、友樹が心地好い寝顔だった。

彩香「……………お兄ちゃん……………いえ、そんなはずは…」

気付けば、夜中の3時であった。

彩香「（私、どうしたんだろ？悪夢……………それとも疲れたのかな？）」

そんな時だった。部屋のドアが開くとピンクの球が入って来た。

カービィ「彩姉え、一緒に寝てえ……………」

そのピンクの球はカービィであった。

彩香「あらあら、怖い夢を見たのね。コッチにいらっしやい」

カービィは何も言わず、彩香の所に来て、彩香はそれ以上何も聞かずにカービィを受け入れた。

これで、兄を忘れるならば……………。

く づ っ

十八話 誕生パーティーの出し物は大切 8月15日(後書き)

次回、古代獣の登場

十九話 巨大生命体VS古代獣 8月21日(前書き)

今回バトルナイザーが使われます。

十九話 巨大生命体VS古代獣 8月21日

朝食を終えたメンバーは、ゲンから手渡された個人用メニューを済まし、自由時間を各々で過ごす事に。

やる事に関しては、野球をしたり、ポーカーをしたり、修業をしたり、更にはもう昼寝(?)をする人がいる。

今日はいつもより涼しいので、友樹と彩香とリンクとゼルダとピーチとサムの6人は、屋上でティータイムをしていた。

友樹「あれから六日経った。今日までアナザーどころか、巨大生命兵器は今のところ無しだ……」そういえば……」

リンク「ん?どした?」

友樹「うん、ネス達が花火やりたいって言うんだ」

サム「花火ねえ……」

ピーチ「どーゆーのがいって?」

友樹「家庭用のと本格的の花火だっって言ってます」

彩香「家庭用は何かなるけど……本格的な方はお金がかかるわ。それに免許が必要よ……」

リンク「俺達にんなコト出来ねえし……」

ゼルダ「というか、何故花火をやりたいたって言ったのですか?」

その時、カキーンと音が鳴り、それに乗った物体が……。

ドゴッ！

彩香「きゃっ！」

彩香の後頭部に当たった。わずかだが、こぶが出来ていた。その近くに野球ボールが落ちていた。

友樹「……………」

すると友樹は、黙って屋上から飛び降りた。それには彩香以外の4人は目を丸くしていた。

次の瞬間、下の方からネス、ピット、カービィ、デイディーの4人の断末魔の様な叫びが屋上にいた5人に聞こえて来た。

リンクが下を見ると、叫びを上げた4人は無傷ではあるが、友樹の手合わせ練金で作った十字架に縛られていた。

リンク「……………？」

ゼルダ「どうしたのですか？」

リンク「犯人が分かった。ネスとピットとカービィ、そしてデイディーみたいだ……」

サムス「友樹君は？」

リンク「どこだろ……見えません」

すると、屋上のドアが開き、中から保冷剤とスポーツタオルを持つ

た友樹が来た。

リンク「ゆ……」

友樹「ごめん、あとにして……」

友樹はまっ先に、彩香へと向かい簡単な応急処置を施した。

友樹「大丈夫？痛くない？」

彩香「大丈夫よ、ありがとう」

そんな時、空が割れて中から半分機械で出来た生命体らしい兵器が現れた。

下にいたネス達は自分の力で十字架から逃げ、屋敷内に逃げた。

リンク「で……でけえ……」

その生態兵器はゆうに50mもあつた。ここから、300m。生態兵器をアーウィン、ウルフェン、ランドマスターそしてデムライナーが各々の武装で応戦していたが、効いては無かった。銀の三つ首に銀の体。その上に金の装甲具がビーム系の攻撃を無にした。

リンク「何だよ、あれは！」

そこにマスターが登場！

マスター「あれは、量産型メカキングギドラ」

サムス「何よそれ！」

マスター「グランドシヨツカーの新兵器だ。友樹、今こそ呼び出せ！古代獣の力を！！」

友樹「はい！」

友樹は先日渡されたバトルナイザーを天高く上げ、叫ぶ。

友樹「行けえ、ゴモラあ！！」

バトルナイザー モンスロード

その電子音が鳴ると、バトルナイザーからカード形の光が放たれ、量産型メカキングギドラの目の前(間200m)に現れた。
三日月の角、鋭い目、強靱な尾っぱ。古代獣ゴモラの登場だ。

ゴモラ「キシヤアアアアアアアアア！！！！！！」

< じ

十九話 巨大生命体VS古代獣 8月21日(後書き)

今回出たオリジナルのバトルナイザーの説明をします。

バトルナイザー

特定の所有者のみに発動するアイテム。

中には「ゴモラ」「タイラント」「ゴジラ」の三体が入っている。友樹の場合体内にアマダムが埋め込まれているので、それに反応しバトルナイザーがはじめて、起動するのだ。

そのため、友樹のバトルナイザーは特別な作りをしている。

だが、アルティメットフォームやライジングアルティメットフォーム時に使用すると、本人の感情が移る。

以上です。

ありがとうございました!!

二十話 古代獣の力／究極の闇のコントロール 8月21日（前書き）

今回色々あります。

では始まります

二十話 古代獣の力／究極の闇のコントロール 8月21日

友樹「ゴモラ！尻尾で攻撃だ！！」

ゴモラ「キシヤアアアア！！」

ゴモラは了解と言った様に咆哮し、量産型メカキングギドラに攻撃した。量産型メカキングギドラは音も立てず、鳴き声も上げずに倒れた。

すかさず友樹はゴモラに上空に量産型メカキングギドラを投げ飛ばす様に指示を出した。ゴモラは指示通りに、量産型を上空に投げ飛ばした。

友樹「ゴモラ！超震動破ああああ！！」

ゴモラの鼻先の角から紅い光弾が次々と出て上空に飛ばされた量産型メカキングギドラに当たった。

マスター「（ふっ、初めてでこうまでやるとは…）」

マスターが思った瞬間、量産型メカキングギドラは打ち上げ花火の如く爆発した。それを見た子供団は喜んでいた。おそらく、見たかった花火が見れたのだろう。

その後、昼食の時間。

ファルコ「はアツ？！もっぺん言ってみろ！！」

今日の戦闘で初めて三日月の角を持ったバケモノの召喚をしたのが友樹だと知ったファルコはマスターに再度尋ねた。

マスター「何度でも言ってる。あの怪獣……三日月の角を持った怪獣の名はゴモラ！その友樹の持っているバトルナイザーに今も入っている。他に二体の怪獣だっている」

彩香「ほんとなの？」

友樹「うん、ほらここに………ってわぁ！！」

取り出したバトルナイザーから、三つの光る小さな玉が出現し、テーブルの上に移動し、玉から姿を変えて出て来たのは…。

ちびごも「こんにちはー！」

ちびたい「六日前からー」

ちびごじ「お世話になってます」

テーブルの上に現れたちっちゃいゴモラ、タイラント、ゴジラが口を開いていた。大きさは50cm。

当の友樹は、未だに口を開いたまんまであった。

すると、ちびごも・ちびたい・ちびごじの三匹は、友樹の昼食を喰っていた。

やがて、時計の針は3時を示した時には、ちび達と子供団は仲良く遊んでいた。

リンク「あんなちっちゃいのが……考え過ぎか……皆、おやつ出来たよ！」

リンクは先程考えた概念を捨てた。考え過ぎたのだ。

その時だった。

ビーツビーツ

アナザーセンサーが反応し、ボブが告げる。

ボブ「本屋敷前方二、がれおむトでゅおんガ十機ズツ来マス!!」

G & W「何で私の作ったヤツが…?」

その彼の発言は、虚しく響いた。

出撃したのは、メタナイトとマルスとアイクとゼルダとフォックスと友樹であった。

現場の湿地に到着すると、ウジャウジャとガレオムとデュオンがいた。

友樹は腰にアークルを出し、変身の構えを取り、アークルのスイッチを押し、両手を下に広げた。

この様に無言で変身すると、友樹の体は次々に黒い装甲具が着き、両腕と両足に鋭いヒレを出し、両肩も鋭くなり、角も四本になり、目はマグマの様に赤かった。

これがアルティメットフォーム。

クウガ・U「皆はデュオンを、僕はガレオムを」

フォックス「了解した。フォックス・マクラウド攻撃を開始する!!」

ゼルダ「私も行かせて頂きます!!」

チャラチャラ チャララン

シーク「この僕として！」

ゼルダはシークに変身した。

クウガ・U「はあああ！！！」

クウガ・Uが右手を前に突き出すと、ガレオムの群れが次々と燃えだした。

これぞ、自然発火能力。

その頃、デュオンを相手にしているシーク達は、一番厄介と思われ
るガンサイドを全て破壊した。

アイク「天・空ウツ！」

アイクの必殺技・天空がソードサイドの剣をマルスとメタナイトに
シークの四人で斬り落として行った。

フォックス「皆どいてろ！とどめを刺す！」

フォックスは懐からスマツシュボールを取り出し、空中に投げ、ブ
ラスターでそれを割った。

パリン

すると、フォックスの体が七色に光る。

フォックス「ランドマスターっ！！！」

フォックスの最後の切り札・ランドマスターが降臨した。フォック
スが乗り込むと同時に起動し、ドガドガと撃ってデュオンの群れを

破壊した。

夕飯の時間。ちび怪獣と呼ばれるようになった、ちびごも・ちびたい・ちびごじの三匹の分の食事も出されてあった。

今夜のメニューは、アサリの冷製パスタ、キノコの和風ステーキ、ピーマンと茄子のスープ、そして友樹の煎れたコーヒーマンであった。しかし…。

ピット「茄子……………嫌い!!」

トウイン「ピーマン嫌い!!」

ピットとトウインが茄子とピーマンを避けて食べながら喋っていた。作った本人である友樹は、落ち込みながら右腕をアルティメットに変えようとしたが、彩香に止められた。

夕食後、乱闘でリンク&友樹VSゼルダ&彩香のタッグ乱闘を行ったそう。結果は言うまでも無い。乱闘で一番汗をかいたリンクと友樹は夕日を見ながら露天風呂に入っていた。何故かちび怪獣達も入っている。

リンク「そういえばさあ」

友樹「どうしたの？」

リンク「ネス達、喜んでいたなあ。友樹とゴモラが倒した怪獣が爆発した時に、「花火見れて良かったあ!」って言った」

友樹「良かったあ。ねえ、ゴモラ」

ちびごも「うん!えっへんっ!!」

くづつ

二十話 古代獣の力／究極の闇のコントロール 8月21日（後書き）

次回

モモタロスがえらいこっちゃ！

二十一話 モモタロスと友樹 9月7日(前書き)

今回モモタロスがヤバい事になります。

1番不幸になるのは誰でしょう。

二十一話 モモタロスと友樹 9月7日

屋敷は今、とてつもない厄介な事が起きた。
秋真つ盛りで、今日も平和になるだろう！

友樹？「くそう！抜けねえ！！」

今日も平和に…。

彩香「うう…グスツ…クスンクスン…」

サムス「大丈夫だから、私の胸の中で泣きなさい」

今日も平…。

慎吾「野上、どーすりゃいいんだよ！！」

佑一「いや、どーしろっても…ウラタロス、どーする?!!」

ウラタロス「さあ?」

友樹？「おい、てめーら！見てねえで助けやがれ!!」

何故友樹が口を悪くして、じだんだを踏んでいるのか。
それは、つい10分前の事だった。

友樹「うう〜ん……っああ！いい昼下がりだねえ」

彩香「そうねえ……秋になって涼しいよね」

二人が並んで歩いていると…。

モモタロス「追っかけんじゃねえ！黄デヴー！キレンジャー！！」

ワリオ「そおらそらそら！ワリオ…ヴァーイク…！」

そして、出会い頭に……。

モモタロス「いでっ！」

友樹「うわあ！」

二人は衝突し、倒れた。

バタッ

彩香「友樹！！」

ワリオ「（えッ？！……逃げよ）」

ガシッ

彩香「待つてよ……？」

ドガッバキィッ

ワリオ「すんましえーん！」

友樹？「あててててて…」

彩香「友樹…！？」

倒れていて、身を起こした友樹の下に彩香が向かった。しかし、いつもと雰囲気違っていた友樹。茶色かった髪の一部に赤いメッシュが入り、ショートシャギーだった髪型も逆立っている。とどめに…。

友樹？「あ？あんだ彩香かよ、ったく」

彩香「いやあああああああ！！！！！！」

そして今に至るのだ。
場所は廊下から居間に。

ヒビキ「なーっはっはっは！なっさけないな、モモタロス！」

M・友樹「やかましいわあ！俺と同じ声なのに腹が立つ！！」

そんな友樹に、その場にいたメンバー達は慣れてはいなかった。普段は落ち着いて、穏やかな性格であったのだ。そんな友樹に彩香は泣いていた。

しかし、モモタロスは友樹から何故か抜け出せないのだ。理由も不明で、マスターに頼もうとしたが、外出中であった。

薫「佑理、キーワードを言っよ」

佑理「うん。検索項目は「友樹」で始めるわ」

薫は佑理に「地球の本棚」にリンク（ファイターではない）した。キーワードは「憑依」「戻り方」「モモタロス」で一冊の本に絞れた。

佑理「検索を終了しました。この一冊に答えがあるの。それを今から読むわ」

佑理が本を開く。しかしそこで何故か閉じてしまう佑理に、大いにコケるメンバー達。

佑理「ところで、モモタロス」

M・友樹「どーした？」

佑理「アークルは出せる？」

M・友樹「やって見るぜ！」

と言って、腰に手を当てるとアークルは出たが、中央のアマダムには「スカ」と書かれてあった。

M・友樹「ナンじゃこりゃあー!!」

佑理「次、デンオウベルト」

M・友樹は、デノウベルトを巻いたが……。

M・友樹「パスがねえ!!!」

もう、踏んだり蹴つたりのM・友樹であった。
それを尻目に佑理は改めて本を開いた。

佑理「ん」と何々、『汝、取り付かれし者助けたくば、愛する者の唇を、取り付かれし者に捧げよ』……」

メンバー『……』

彩香「……」

M・友樹「わりい、俺、頭悪いから、誰か教えてくれ」

未だに内容を理解していないM・友樹に佑理は答えた。

佑理「つまり、君は今から友樹を戻す為に、彩香とキスをするんだよ」

M・友樹「ジョーダンじゃねえ!おい、カメ・クマ・ハナタレ……
つていねえし!」

数時間後、友樹とモモタロスは元に戻ったが、それから3日、モモタロスは干物になり、彩香は……。

友樹「おい、出て来てよー!3日前何が起こったの?!」

友樹は、モモタロスに憑依された事の記憶していなかった。

彩香「……………」

彩香は部屋の中に閉じこもってしまい、友樹は部屋に入れて貰えないのだ。

く づ っ

二十一話 モモタロスと友樹 9月7日(後書き)

正解は友樹です。

二十二話 M狩り/Aを楽しもう? 9月21日

ガノンドロフ・デデデ大王・ワリオ・G&W・ボブ・クッパ・フォックス・ファルコ・ウルフ以外のメンバー達は今、屋敷の裏山とは別に、スマスマ山にて紅葉狩りを楽しんでいる。

彩香「あつ、リス!」

彩香の指差した木の枝には、リスが団栗をカリカリと噛んでいた。

彩香「かわいい…!」

そんな彩香に友樹はムツとした顔になったとか。

このスマスマ山は、屋敷から徒歩で40分で到着できる距離にある。標高は333mである。現在3合目の99m地点。

ナギ「何故来た?」

ヒナギク「なんでだろう?高いと分かっても…」

ハヤテ「高所恐怖症だから、ムリしない方がいいと思う」

ハヤテの言い分にシユンとするヒナギクであった。するとハヤテはヒナギクを否応なしに負ぶさった。

それに嫉妬した女が3人いたとか。

7合目に差し掛かると、丁度お昼の時間。弁当は早起きして作った者もいれば、麓の店で購入した者もいる。

先程のリスの件で、少々ムツとした友樹は、今はもう大丈夫と言う様な顔で自作の弁当を喰っていた。

その隣には彩香が友樹お手製の弁当を喰っていた。

マリオ「ああ、空気がうまい……」

ピーチ「本当ねえ……。アタイ、何かワリオ達なんてどーでもよくな
ったわ」

ルイージ「同感ですね。……ふう」

ナギ「どしたミドレンジャー」

ルイージ「違うよ、ルイージだよ。で、何？」

ナギ「何溜め息をついておるのだ？」

ルイージ「ちょっとね……（デイジーちゃん、元気かなあ……）」

昼食の後は、紅くなった森の中を各々歩き回る事になった。が、ス
ネークだけは一足先に下山して、麓で段ボールに入って待っていると
言う。

友樹と彩香は、設置してあったベンチに座り、景色を見て和んでい
た。

友樹「すっかり秋だなあ……」

彩香「すっかり秋だわあ……」

友樹「さっきのリス、可愛かったね」

彩香「ホント可愛いかったよね！ねえ、また探そ！」

友樹「いいね。うん、行こう！」

二人は森の中へ歩いて行った。が、二人が入った入口らしき所にさびれた看板があった。そこには…。

この先、生きて帰って来た者はいない。立入を禁ず。

と書かれてあつて、二人はそれを見ずに奥へと歩いて行った。その光景をピットが見ている、メンバー達に知らせたが、二人はもう見えなくなってしまった。

中をずんずんと歩いていた二人は、周囲をキョロキョロと見ながら歩いていた。

友樹「探すといけないモノだね……リス」

リスを探していた二人は、いつの間にか、やや不気味な木々の生える所まで来ていた。

彩香「何か、ちょっと不気味ねえ……」

友樹「大丈夫だよ、僕がいる。僕が君を護るから」

彩香「ありがとう……友樹」

友樹「どういたしまして……彩香」

とその時、二人の目の前にアギトのようでアギトではない生物が現れた。

彩香「そんな……ま、まさか……」

友樹「彩香……？ねえ、どうしたの……？！ねえッ！」

彩香が何故か怯えていたか。何故あの生物を見てこうなったのか、友樹にはわからなかった。

その頃、二人が入った入口の所に、メンバー達は集合していた。皆を呼んだピットが、事のいきさつを語った。ピットの顔には、大量の汗が流れていた。

二人が入った森は「悪夢の森」と呼ばれ、最近見た悪夢で、1番怖い悪夢が実現すると言う。

ヒビキがディスクアニマルの「瑠璃狼」「茜鷹」「緑大猿」を十体ずつ放った。友樹と彩香を捜しに。

彩香「いや……来ないで……来ちゃだめえ！！」

友樹「彩香！？ねえ、どうしたの！？」

怖がり、足がすくみ、頭を抱え、その場に座り込んでしまった。

友樹は、生物に叫ぶ。

友樹「あなたは、一体誰なんですか？！」

するとその生物が両腕を組み、言った。

アナザーアギト「小生の名は、アナザーアギト。人間体の名は、津上……翔太郎。津上彩香の兄だ。妹が世話になっているな」

友樹「なっ！」

なんと、アナザーアギトは彩香の兄であった。流石の友樹でも目を白黒としていた。

彩香が立ち上がり様に叫ぶ。

彩香「ウソよ！お兄ちゃんは死んだのよ！」

友樹「えッ！？」

友樹は視線を彩香からアナザーアギトに視線を変えた。彩香の言う通りなら、目の前にいるのは死人なのだ。

アナザーアギト「彩香、お前は4才の時、足をくじいて小3の小生がおぶって家に連れて帰ったよな」

友樹「！？……彩香……それ……って」

彩香「間違いないわ。私のお兄ちゃんよ……」

するとアナザーアギトは両腕を組み、友樹に向けて言い放つ。

アナザーアギト「少年よ！この小生と勝負だ！」

友樹「ふざけるなあアッ！！！！！」

友樹は大声で言い放った。向こうの山まで響き、こだまする。続けて、また友樹が言う。

友樹「あなたはもう死んだ身だ！！あなたはこの世には、残っては
いけない。今、何故現れて彩香の前に立つんですか？自分の妹の笑
顔を消すんですか！？僕は皆の笑顔の為に闘っている。だから、そ
の笑顔が消す人を、僕は許さない！！」

彩香「友樹……」

今の彩香には、友樹が自分を護る騎士ナイトに見えた。
アナザーアギトは友樹に向けて反論をする。

アナザーアギト「小生は確かに死んだ。しかしだなあ少年、担ぐ物
が多いと、結局何一つも護れない！！」

アナザーアギトの言ったことも一理ある。しかし、友樹も負けじと
言う。

友樹「一人じゃないっ！！僕は……僕達は、仲間達と一緒にそれを
背負って行くんだ！罪も、悲しみも、願いも！！」

彩香「友樹、それは私も同じ。一人じゃないの、仲間がいるの、掛
け替えのない仲間が！だからお兄ちゃん、心配しないで！私はちゃ
んとやって行けるの、私は跳べるの！」

すると、アナザーアギトは冷たく大きく笑い、言う。

アナザーアギト「少年よ！よくも我が妹をたぶらかしたなあ？！許
さんわあッ！！」

すると、アナザーアギトは、悍ましい姿・エクシードアギトに姿を
変えた。

悪魔の両腕、鋭い角、色は黒基調の緑。その姿はまるで、グレムリンの様な姿だった。

E・アギト「ケエーッケエッケエッケエ。エガオツブス…」

パリーン

エクシードアギトの放った言葉により、友樹の中で何かが弾け、急に心と体がクリアになった。

友樹「もうこの怪物の為に！流す涙なんか見たくない！だから彩香、見てて！僕の……変身ッ！！」

友樹は両腕をクロスして下に広げ、アークルを出した。アークルには金の装飾具があり、アマダムは黒かった。

彩香「まさか…ライジングアルティメット！？」

その彩香の予想は、9割当たろうとしていた。

友樹は左手を引き、右手を左側に伸ばし、右側へ流した。

友樹「変身！」

叫ぶと同時に右腕と左腕を入れ替え、両腕を下に下ろした。

その姿はライジングアルティメットで、目は太陽の様に赤かった。

RU・クウガ「……彩香、今から君の兄さんの亡霊から……君を護る」

彩香「頑張っつてね、友樹！」

クウガは彩香に向けサムズアップし、彩香もお返しにサムズアップした。

クウガがエクシードアギトに走り出し、エクシードアギトも走り出した。距離が縮まると、エクシードアギトの先制パンチがクウガの原を打ち、クウガの膝蹴りもエクシードアギトの腹に当てた。二人は一度距離を広げ、クウガはエクシードに指を差す。

RU・クウガ「僕には、護りたい人と世界があるんだあ！！」

く づ っ

二十二話 M狩り/Aを楽しもつ? 9月21日(後書き)

今回、ディスクアニマルの名前を漢字にしました。

瑠璃狼と茜鷹はいいとして、緑大猿は微妙ですね。漢字で表すと。

では!

二十三話 エクシードアギト対クウガ・ライジングアルティメット 9月21日

今回

かーなーり

やばいっすー！

エクシードアギト「ゲャゲャゲャ!!!」

RU・クウガ「狂ってる!?!」

クウガはエクシードアギトの攻撃の嵐を腕でガードしていた。

次にクウガは一度距離を取った。その場で手合わせ練金で地面を錬成し、RUドラゴンロットとRUタイタンソードに変型し、アギトのトリニティフォームの様に応戦していた。

それに対し、エクシードアギトは背にある翼を匠に使い、風を起した。

彩香「(友樹……お兄ちゃんを止めて……)」

そんな彩香の下に、ヒビキのディスクアニマルの瑠璃狼が来た。

彩香「瑠璃狼!お願い、皆をここに連れて来て!」

瑠璃狼はその願いを聞いて、来た道を帰って行った。

入口で待っていたメンバー達の下に一匹の瑠璃狼がやって来た。その瑠璃狼は先程彩香の下へ行った瑠璃狼であった。

ヒビキ「よくやった!よし、皆行くぞ!」

メンバー「オー!」

先陣をきっているヒビキの手には短刀があった。

エクシードアギト「ゲアアガ!!!」

RU・クウガ「うああああ!!!」

クウガのアークルに、エクシードアギトのパンチが当たり、僅かだがヒビが入ってしまった。

彩香はクウガに駆け寄ったが、クウガがそれを制止した。「来るな!」と言って。

その時…。

ヒビキ「ハアツ!!!」

ヒビキが現れ、鬼角を鳴らし額に寄せ走りながら響鬼に変身し、エクシードアギトに、跳び蹴りを食らわした。

響鬼「おい友樹。何だか知らないが、オレ様達を忘れるなよ!」

RU・クウガ「ヒビキ…」

そして、その後方からメンバー達が駆け付けて来た。

サムス「友樹君、彩香ちゃん!ここは悪夢の森って言って、今まで見た中で最も怖い悪夢を実体化するの!!!」

彩香「ということは…」

RU・クウガ「あれはただの偽物!?!」

響鬼「そーゆーこつた」

響鬼は短刀の下のスイッチを押し、マイクラしき穴に叫んだ。

響鬼「響鬼・装甲」

すると、響鬼は紫色から紅色の響鬼・紅になった。その上にディスプレイクアニマル達が響鬼の鎧となり、最後の茜鷹が響鬼の胸部に合体した。

今響鬼は、紅い体に紅い鎧を携えて、角は四本に額には装甲の字が入った響鬼最強の姿・装甲響鬼になった。

A 響鬼「へへへッへへ。鬼人覚声！！」

装甲響鬼の持っていた短刀のマイクにそう叫ぶと、短刀の刃の部分が燃え上がり、走り寄ったエクシードアギトに十字に切り付けた。

A 響鬼「今だ友樹！トドメをツ！！！！」

RU・クウガ「うん。はああああああ……」

クウガが大きく呼吸し、構えを取ると足元に大きなクウガのライダーマークが表れた。

C ファルコン「あれは……！！」

慎吾「アギトのライダーマークか？」

ハヤテ「……もしかして……」

ハヤテの予想は当たった。クウガのマークがエクシードアギトの下に移り、エクシードアギトの動きを封じた。

ハヤテ「やはり…。あれは…あの技は…」

リンク「ハヤテ、君もか!？」

その二人は心当たりがあつた様だ。

ヒナギク「それって……」

ゼルダ「どういう事ですか？」

ハヤテとリンクは、ヒナギクとゼルダに話した。

今クウガが使う技は、アルティメットキックの40倍の威力を持つが、本人も危ないのだ。

クウガがジャンプすると、アギトからデイケイドのマークが、クウガとクウガマークの間に表れた。まるで、デイケイドのディメンションキックの様に。

今、新究極必殺技・ディメンションマイティキックがエクシードアギトに当たる。

RU・クウガ「でいやああああああああ!?!」

エクシードアギト「ごあああああああ!?!」

ドガアアアアアアンツ!?!

彩香「きゃあつ!?!」

メンバー達「のうあー!!」

RU・クウガ「うわああああー!!」

エクシードアギトの爆発により、メンバー達は飛ばされ、その中でクウガの変身が解かれた。むろん響鬼も。

それから30分後。いつの間にかいたイマジンスの4体が先に目が覚めた。

モモタロス「大丈夫かつ！マリオ!!」

マリオ「きゅ〜…」

ウラタロス「マリアちゃん、アテネちゃん、歩ちゃん!!」

マリア「う…う…う…」

アテネ「う…ん…」

歩「ここ…は？」

キンタロス「ファルコン！サムス！」

Cファルコン「大丈夫だ、まだ死んでない!!」

サムス「以下同文」

リュウタロス「ナギちゃん!!」

ナギ「……はっ！」

どうやら全員無事……ではなかった。

大きなクレーターのある場所には、エクシードアギトの破片があったが、友樹と彩香の姿は見えなかった。

実は、友樹と彩香は隣同士に倒れていたのだ。その二人を灰色のカーテンが包んだのだった。

それは、イマジンスが目覚める10分前であった。

果たして、二人は一体何処に……。

く　づ　っ

二十三話 エクシードアギト対クウガ・ライジングアルティメット 9月21日

ではウイングさん、頼みます！

では！

二十四話 帰って来た友樹と彩香 9月21日～9月22日(前書き)

ウィングさんの「別世界のヒーロー達」とのコラボ作品です。

ぶじゅん

二十四話 帰って来た友樹と彩香 9月21日～9月22日

あれから友樹と彩香を捜したメンバー達は諦めて屋敷に帰って行った。

ハヤテ「結局……見つかりませんでしたね」

ナギ「うむ」

ヒナギク「彩香が心配だわ……」

やがて、屋敷に近づくと、聞き慣れた声が近くの樹の下から聞こえて来た。

????「やっと帰れたね」

????「そうね」

そして、更には……。

士「お、久しぶりだな」

友樹「皆……」

彩香「ただいま……」

何と消えた友樹と彩香が以前来た士と一緒にいたのだ。

士「じゃ、俺は帰るぜ」

友樹「ありがとうございます！」

その後、夕食の時間にあのあとどうなったかを話した。

エクシードアギトが爆発して、二人を灰色のカーテンが包み、別世界に行ってしまったのだ。

その世界は、もう一つのハヤテ達の世界だった。彩香はもう一人のヒナギクの家で目が覚め、別世界のヒナギクにあってヒナギクの弟がキバに変身したと言う。名は浩将と言っていた。

ヒナギク「私に弟が……」

佑井「って言うか、私以外にもキバが……」

友樹は、レンタルビデオ店で目が覚めた。そこにいたワタルと言う少年がアギトに変身し、その少年の友達の宏樹と言う少年もファイズに変身したのだ。

ナギ「ワタルがアギト？……ふっ、笑えん」

そして、二人は三千院家に連れられて、別世界のハヤテとナギとマリアがいた。

三千院家では、土達が住んでいた様だった。

友樹「そこで海東さんにも会ったんですが、まだ名前を覚えて貰えませんでした」

大樹「あいつらしいや」

彩香「それで、土さんにここまで送ってくれたんです」

リンク「よかったなあ」

慎吾「まあ、ユウスケと友樹がクウガでいるように、平行世界があつてもおかしくない」

その後、風呂場（ここにある風呂は、屋外で混浴）にて。

友樹は彩香と二人っきりで入浴している。

友樹「なんか、とても疲れたねえ……」

彩香「ホントねえ……」

二人は肩を寄せ合っていた。ここから見える星空は、二人を優しく包んでいた。

友樹「僕は……今思うと……君と出会えて幸せだ」

彩香「私も……貴方と出会えて本当に良かった」

二人は星空をバックにして……。

友樹「彩香……」

彩香「友樹……」

その二つの影は……静かに重なった。時間としては10分にも満たなかったが、二人には永く感じていただろう。次の日の朝、二人は街へと、出かけて行った。帰って来た時には夕刻であった。

く づ っ

二十五話 超ビックリ？BABYPANIC！ 9月26日（前書き）

ここ最近育児放棄により、幼い二つの命が消えました。

そついつことを踏まえて始まります。

二十五話 超ビックリ？BABYPANIC！ 9月26日

そろそろ、9月も終りに近付いた朝。友樹は目が覚めた。自分では無く、玄関から何かの気配を感じたのだ。現在午前5時丁度。

友樹「……………何だろう？気になるなあ……………」

そう友樹が呟くと、隣のベッドで寝ていた彩香が、目を覚ました。

彩香「……………どうしたの……………」

寝ぼけ眼の彩香が友樹に問う。友樹は玄関から何かの気配を感じたと言った。

友樹と彩香が玄関に着くと……………。

友樹「……………赤ちゃん？」

彩香「赤ちゃん……………よね？」

そう、玄関から感じた気配は、まだ生後5ヶ月の赤ん坊が、揺り籠の中に毛布で体を包まれていた。

友樹と彩香がしゃがんで顔を近付けると、赤ん坊は目を覚まし、泣き声をあげた。

赤ん坊「オギャア！オギャア！」

友樹「あわわわ！どうしよどうしよ……………」

友樹があたふたとしてしていると、彩香が赤ん坊を抱いた。

彩香「よしよし。泣かないでねえ」

すると、さっきまで泣いていた赤ん坊は、泣き止んだのだ。

友樹「結構……馴れてるんだね」

彩香「うん、本で読んで覚えたの」

友樹「ふうん。……ん？」

友樹は揺り籠の中にあつた手紙の様な紙を取り、文字が書かれているので、それを読んだ。

友樹「んーと……『育児に疲れたので、しばらく預かって下さい。その子の名前はアスカと言います。男の子です』……って事は……」

友樹・彩香『育児放棄！？』

それから、2時間後。

友樹と彩香は、起床してきたメンバー達に赤ん坊の話をした。その赤ん坊は彩香に抱かれていた。

マリオ「ったく、ひでえ話だ」

歩「そういえば、ハヤテ君はもっとひどいかな」

ハヤテ「あんな両親から産まれなきゃ良かったです」

ハヤテの両親は、大量の借金を息子であるハヤテに押し付けたのだ。

ナギ「でも産まれて無かったら、ヒナギクに出会え無かったであろう」

ハヤテ「ま、そうですね」

それからまた2時間後。

アスカ「だあだあ」

友樹「全然離れないね」

彩香「本当ねえ。ママはどこ行ったかなあ？」

アスカ「だあだあだあ！」

友樹「もしかして……」

彩香「もしかして？」

友樹「意外と彩香そっくりだったりして」

彩香「まさかあ」

現在二人は自室で、赤ん坊のアスカをあやしていた。その様子を、ドアの隙間からマリオとアテネが見ていた。

マリオ「なんか、あの二人が本当の親に見えるよな」

アテネ「まあ、髪の色は彩香と同じピンク色で髪形が友樹と同じ……」

そんな二人のところに、マリアも加わった。彼女も捨てられた赤ん坊だったのだ。

マリア「ひどいものです。あんな幼い赤ちゃんを…」

いつの間にか、自分と重ねていたマリアだった。

そんなことに気付いていない友樹と彩香はまだ赤ん坊と触れ合っていた。

アスカ「……うえっ……うえっ……」

友樹「あれ、泣きそうだよ。お腹減ったのかなあ？」

彩香「そうね。ミルクを飲ませなきゃ…」

そう立ち上がろうとしたら、アスカが…。

アスカ「…だあ！」

彩香「はう！」

友樹「んなあ！」

アスカは彩香の胸を小さな手でおもつきし触ってしまった。その為、彩香は膝を付き、友樹は鼻血が出てしまい、覗いていたマリオとアテナとマリアもあぐりとした表情であった。しばらくして、アスカに冷蔵庫にあった牛乳に砂糖を少し加えたミルクを友樹が与えていた。

友樹「……………よく飲むなあ。何でこの子を捨てるかな？」

彩香「育児に疲れたって書かれてあったから……………そのうち引き取りに来るんじゃない？」

因みに友樹は先程の出来事を覚えて無いと言う。

友樹「だとしても……………ちゃんと育てていけるかが分からせないと、また同じ過ちを繰り返す事になるよ」

彩香「そうねえ……………」

また因みに、マリオ達は既に退散している。

ふと友樹は、何を思ったか、笑っていた。

友樹「いずれ、僕達もこういう様に子育てをして、歳をとって子供が成長して、小学校に中学校、高校に大学に入学して、就職して」

彩香「結婚して子供を産んで、おじいちゃんおばあちゃんになって、孫とも触れ合うのよね」

何故かしみじみとする友樹と彩香であった。

やがて、アスカがミルクを飲み終わると、彩香がアスカを抱いて優しく背中を叩いた。

アスカ「……………げふっ」

アスカがゲップを出すと、眠たそうな目をしていた。

彩香「はいはい、おねんねしましょうねえ」

彩香が子守唄を歌うと、アス力は静かに眠った。

友樹「……………眠ったねえ」

彩香「余り馴れて無いけど……………」

友樹「でも上手いよ。本当のお母さんみたいだし」

彩香「実は、中学校の時体験学習で、幼稚園をやったの。友樹は？」

友樹「僕？僕は自動車整備場で、車やバイクの整備を学習したんだ」

彩香「そう……………だからバイクが全部調子いいんだ」

友樹「まあね。ふわあ……………あ、なんか眠いや」

彩香「私も……………ふあ……………あ、眠いね」

二人は大きな欠伸をして、アス力を中心にして、眠った。
まるで、本当の家族の様に夢の世界へ三人一緒に出発した。

くづつ

二十五話 超ビックリ？BABYPANIC！ 9月26日（後書き）

結局、アスカ君のパパとママは来ませんでした。
今、何処にいるのでしょうか？

二十六話 アスカの親、登場/合成怪獣 9月27日(前書き)

今回、アスカ君の親登場します。

バトルナイザーが久々に出ます。

二十六話 アスカの親、登場／合成怪獣 9月27日

昨日アスカが拾われて、丸一日たった今日、まだ7時位にインターホンが鳴った。

マリオ「はいはい、誰ですかあ？」

言ったマリオはドアを開くと……。

「アスカは……アスカは何処にいるの!？」

マリオ「はあ？」

マリオがドアを開けると、見た目十代後半の女性が慌てふためいていた。

そこに、アスカを抱いた彩香が現れた。

彩香「マリオさん、どうしました？」

アスカ「だあ？」

女性がアスカを見たら、彩香から優しくではあるが、アスカを取った。

「アスカ！」

アスカ「だあだあ！」

どうやら、母親だった様だ。

その母親の名前は、橘桜といった。歳は二十歳。昨日アスカをここに置いた理由は、育児に疲れたのでは無く、相手（アスカの父）が勝手に置いてったのだ。その後、別れて（離婚見たいな）アスカを捜しに来て、今日に至ると言う。

桜「本当に、申し訳ございませんでした！」

その桜に友樹が近寄り、目を合わせる。

友樹「アスカ君を……しっかりと育てて下さい。貴女は、この子の母親でしょう？」

桜「はい……」

桜は目に涙を浮かべ、屋敷を後にした。

友樹は部屋に戻った。中には彩香がお気に入りクッションを抱いて泣いていた。

友樹「僕が言えた義理じゃ無いけど……」

彩香「……」

友樹「……アスカは本当のお母さんに会えて……その……」

彩香「……幸せだったんだよね」

友樹「えっ」

彩香は目からまた大粒の涙を流していた。小刻みに体も揺れていた。

そしてついには、小さな嗚咽を吐いていた。

友樹「よしよし……」

友樹は泣き崩れた彩香の頭を優しく撫でた。

そんな時だった。屋敷の裏側から、とても大きな足音が聞こえた。

友樹は屋上に到着すると、宇宙怪獣エレキングが迫って来た。

友樹「行けえ、タイラントお！」

バトルナイザー モンスロード

バトルナイザーから、合成怪獣タイラントが召喚された。

タイラント「ゴガアアアオン！」

エレキング「キチュウウイ！」

二体の怪獣は、取っ組み合いを始めた。タイラントの左腕の鉄球でエレキングの腹部を打ち、エレキングの尻尾がタイラントの首を絞めた。

友樹「くう……」

とその時、アーウィンとウルフェンとデンライナーの四機が、タイラントの援護をした。

リンク「友樹！」

友樹「リンク！どうしてここに君が！？」

屋上にリンクが登場した。何か慌てていた。

リンク「あの白い怪獣のせいで、屋敷にいるゼルダ達の女達が……」

友樹「どうしたの…？」

リンク「皆パイ投げとか、水鉄砲とか、とにかく大変なんだよ！特にサムスさんは皆に酒を飲ませて……！！」

友樹「分かったから！」

なんて事している内に、タイラントはエレキングから解放された。

友樹「ようし……タイラント火炎業火ブレス！」

タイラント「ゴガアアア！！」

タイラントの放った業火が、エレキングを包み、エレキングは爆発した。

友樹「戻れタイラント」

そして、友樹が広間に着くと……。

友樹「……リンク」

リンク「……何？」

友樹「……ハヤテは？」

リンク「避難してる……皆酒にやられているから」

二人の眼に映ったのは、壁中パイだらけで、床にはシャンパンやらビールやらの染みが多く、一番目を引いたのは……未成年も混じった女性メンバー達が、ハイサワーやら焼酎やらビールやらワインやらを浴びる様に飲んで……いや呑んでいた。

友樹「……ポレポレに行こう」

リンク「……ついでにハヤテとルイーダさんも」

そして、女達が酒から目覚めたのは、それから3時間後であった。

く づ っ

二十六話 アスカの親、登場／合成怪獣 9月27日（後書き）

次回、誘拐されます。

怖いですねえ。

二十七話 誘拐されちった 10月1日(前書き)

今回誘拐が起こります。

怖いですねえ。

でも始まります。

二十七話 誘拐されちった 10月1日

彩香「えーと……うん！買い物おーわり！」

彩香は街に買い出しを終え、帰路に着いていた。徒歩で行き来しているから、少しだけ時間はかかる。

彩香「さあて……帰り……ツムグ！」

突然、彩香の口に布の様なものが当てられ、徐々に彩香の意識は遠のいた。

彩香「（ゆ……う……き）」

そして、彩香はついに眠ってしまった。持っていた買い物カゴを落とし、何者かによって、さらわれたのだ。その場に一枚の紙が置かれていた。

友樹はハヤテと共にアナザー討伐を終えて帰っていた。

友樹「デンライナーで旅行行けたらなあ……」

ハヤテ「そうですね」

友樹「そうだハヤテ」

ハヤテ「はい、何でしょう？」

友樹「これからは、タメ口でいいよ。何か堅苦しいし」

ハヤテ「OK！分かったよ」

友樹「はは…（凄い順応性だなあ）…ん？何か落ちてる。何だろう？」

友樹は落ちていた物を見つけた。近くに寄ると買い物カゴに、中に入っていた荷物がばらまかれていた。その中には、一枚の紙が置かれていた。

友樹「んーと……」「桂ヒナギクは預かった。返してほしかったら、耳を揃えて四億七千六百五十八万円を用意しろ！さもなくば、十八禁のDVDを撮影して送ってから、殺してやる。綾崎ハヤテへ……だ……って」友樹とハヤテは落ちていたカゴを拾い荷物を入れて……。

友樹「急いで屋敷に戻ろう！」

ハヤテ「うん！皆に相談だ！！」

30分後。屋敷に友樹とハヤテが到着した。

ハヤテ「ヒナギク！！」

帰って早々、ハヤテは大声でヒナギクを呼んだ。

すると奥からヒナギクが風呂上がりだるう服装で来た。どうやら無事であった。

すると、友樹にピーチが近付いた。

ピーチ「ねえ、彩香見なかった？買い出しから、帰ってないのよ」

友樹「え……………」

脅迫状にはヒナギクの名前、しかしヒナギクは先程まで入浴中で今上がったばかり、そして彩香は買い出しに行ったが帰ってない、更にはカゴをよく見るとイニシャルでA・Tと書かれてあった。結論からして、されわれたのは…………。

友樹「さらわれたのは……………彩香!!」

その時、屋敷の電話が鳴った。何気なくハヤテが受話器を取った。

ハヤテ「もしもし、スマブライダースですが、御用件は？」

犯人^{ホシ}＜綾崎ハヤテだな？＞

ハヤテ「!?……………誰なんですか？目的は？」

犯人＜脅迫文通り、桂ヒナギクは預かった＞

ハヤテ「待つて下さいその人は……………！」

犯人＜身代金は忘れんなよ？期限は明朝9時半だ。お前が持って来い＞

ハヤテ「ですから……………」

犯人くまた連絡する>

そういつて、一方的に通話を切った。その内容は他のメンバーにも聞こえて来た。

友樹「ボブ、通話記録は？」

ボブ「ハ、ハイ。記録シテイマス」

ボブが言い終わると友樹は部屋からノートパソコンを持って来て起動した。

ボブからデータを受け取り、パソコンのキーボードを高速で叩いた。

友樹「……………」

叩いていた本人は、終始無言で行っていた。画面上に次々に出て来るデータを友樹は逃さなかった。

ヒナギク「速い……………」

ハヤテ「ホントだ……………」

ナギ「負けた……………あいつなら巨大兵器のオペレーションシステムの書き換えが早く終わらせる技能がある」

なんて事を言ってる内に、最終的に一つの場所に絞り出した。

友樹「場所は……………スマ町北区4-165……………そこに……………彩香がいる」

友樹はデータを保存して、ボブにそのデータを送り、パソコンを閉じた。

友樹「ボブ……最短ルートの検索を頼んだよ」

ボブ「了解シマシタ」

友樹「ナギちゃん、身代金の用意できる？」

ナギ「ああ、五億ぽっちなら出来る」

マリオ「（億単位をぽっちで済ましやがった）」

ナギの金銭感覚に心底毒づくマリオであった。

友樹「ハヤテは、僕と一緒にいこう」

ハヤテ「うん」

それから1時間後。

じりりりりん　じりりりりと電話が鳴った。またハヤテが受話器を取り、相手を確認する。

ハヤテ「もしもし」

犯人<俺だ。桂ヒナギクは預かっている>

ハヤテ「身代金の期限はいつですか？」

犯人<次に日が昇る時だ。ちゃんと用意出来ているだろうか？>

ハヤテ「はい、五億円はあります」

犯人<ほう、よしいだろう。受け渡し場所はスマツシュ公園噴水前だ。持ってくるのは、メイド服を着た女にしろ>

ハヤテは、マリアにアイコンタクトを取り、マリアから了承を得た。

犯人<最後に一つ>

ハヤテ「何ですか？」

犯人<同伴に、お前と後一人も来い>

ハヤテ「わかりました」

犯人<合言葉が必要だったな。こちらの使いが「AAは」と言ったら、「コンタツペ」だぞ？では、いますぐに来い>

言い終わると、向こうから一方的に通話を切った。

マリアの手には五億入ったアタツシユケースがあった。

友樹「ハヤテ、マリアさん行きましょう」

ハヤテ「うん」

マリア「はい」

10分後、スマツシュ公園にある噴水前に三人はいた。マリアはメ

イド服で、ハヤテはサングラスにジーパンにフライトジャケット、そして友樹は黒いスーツを着服してカツラ（青色でロングヘア）を被っていた。

マリアのまえにちやらちやらしている風貌の人間がやって来た。

ちやら男「AAは」

マリア「!?!?.....コンタツペ」

ちやら男「身代金^{フツ}は？」

マリア「ここに.....」

ちやら男がマリアの持っていたアタツシユケースを取ると同時に、

友樹とハヤテが押さえ込んだ。

ちやら男「何しやがる!」

友樹「ハヤテとマリアさんはこの人を警察に!僕は根城^{アシト}に向かいます!」

ハヤテ「オツケー!」

マリア「はい!」

友樹は、大きくジャンプして、建物の屋根を次々に飛び移って行った。

彩香は目隠しをされていた。だが、辛うじて耳は無事であった。

彩香「（私をヒナギクと勘違いしてるの？仕方ないよね、髪の色とか髪型とか金の髪飾りとか）」

ヒナギクと同じ特徴（二カ所違う）に内心毒づく彩香であった。

目には見えないが、二人のグループだった。一人はいかにもボスっぽい声で、屋敷に脅迫電話をした男。もう一人は、さっき出掛けたちやらいオーラを出していた男。

後者の男が出てって、かなり時間がかかった。そろそろ帰って着てもおかしく無い頃だろう。

ガチャッ

犯人「遅かつ……って、てめえ何者だ!？」

「人質を返して下さい」

どこかで聞き覚えのある声が聞こえてきた。

犯人「それは困るな。他の要求は？」

「僕は人質を解放して欲しいと言っているんです。お金や女の人でも動きません。お願いします、人質を返して下さい」

その声は、いつも一緒にいた人の声であった。

犯人「馬鹿が!」

バキユウウン！

「うっ！」

彩香「（撃たれた！？）」

「くっ！」

犯人「右腕の次は…」

バキユウウン！

「ぐあああ！」

左腕をやられた様だ。

「彼女を誘拐して、何になるんです？」

犯人「金だ」

「……か…ね？」

犯人「そうだ、金だ。馬鹿な連中が大金を持っているのが気に入らねえんだよ。腹が立つんだよ！それに、別に誰だっでもいいんだよ」

「誘拐対象を間違えてもですか？」

犯人「はあ？何が言いたいんだ？」

「そこで、目隠しにされ、体を縄でグルグル巻きにされ、更には喋

れ無いように口をタオルでふさがれているその人質は……桂ヒナギクでは無い」

犯人「では誰だと言うんだ？」

「…津上彩香！僕は彼女を助けに来た」

犯人「貴様あ！何者だあ！！」

「僕は……」

次の瞬間、ドカツと鈍い音を立て犯人の男が倒れた様だ。

犯人とは違う足音が、自分に向かって歩いて来て、足と体に巻かれていた縄を解き、口を覆っていたタオルも取った。

「僕は……」

最後に目を覆っていたタオルも取って、犯人と話していた人物の顔が見えた。

友樹「僕はただの……一人の人間だもん」

友樹であった。両腕には、銃弾の跡が残って血が流れ落ち、額にも血が流れていた。

その後警察が到着して、犯人こと望月サラマンドーとちやら男こと井上ロドリゲスはまんまと御用となった。

そして、友樹はと言うと…。

友樹「何で僕が救急車に乗らなきゃいけないの？」

彩香「当然よ！」

友樹は両腕に銃弾のかすり傷が残って応急処置が施され、額にもガ
ーゼで止血されていた。

彩香「……………ありがとう」

くづつ

二十八話 異世界の弟達 10月10日(前書き)

ウィングさんとのコラボ作品です。

二作品目です

始まり!

では!

二十八話 異世界の弟達 10月10日

友樹とリンクはマルスとアイクの四人はポレポレの帰る途中、灰色のカーテンが表れた。しかし、中からは怪人ではなく、三人の人間が現れた。

「?????」ここは何処だ？」

「?????」分からないなあ」

「?????」異世界か……… 実に興味深い……… 特にあそこにいる剣士とか」

フィリップが言うと、宙斗と浩将がフィリップと同じ方向を見た。

友樹「あの……… どちら様でしょうか？」

友樹は現れた三人に名前を尋ねた。
その三人も自分の名前を言った。

浩将「桂浩将です」

宙斗「綾崎宙斗です」

フィリップ「桂フィリップだ………ここは何処だい？」

取り合えず、友樹達四人は浩将達三人を屋敷に連れていった。
屋敷に着くと………。

彩香「お帰り！」

友樹「ただいまあ！」

すると、浩将が声を出した。

浩将「彩香さん！」

彩香「ああ！異世界のキバの！！」

浩将達を広間に案内すると、浩将と宙斗はハヤテ・ヒナギクそしてナギの三人を見て驚いた。が、フィリップに抑えられた。

フィリップ「二人とも、ここは異世界だから、あそこにいる姉さんを含んだ三人は異世界の人間だよ？」

リンクはこの世界の事情を説明した。ここはショッカーから侵略を受けている。そのために、スマブライダーズとしてこの世界を守っているのだ。

浩将達も自分達の世界を話した。アギトの変身者のワタルとその兄の宏樹ファイズの変身者、カブトの変身者にハヤテとガタックの変身者のヒナギク等が、自らの世界を守っている。

友樹「（宏樹君は、ワタル君のお兄さん……だったんだ……？）」

一方の浩将はと言うと。

浩将「（ガンのムオンラインだな）」

浩将はライダーの変身者達を見て内心驚いた。

浩将「（友樹さんはヤト）」

友樹「？」

浩将「（シンジさんはアズブルで、マキさんはアハ）シンジさん、好きな色は何ですか？」

シンジ「赤」

マキ「だからって、年中赤い服は無いと思う」

更に浩将は心の中で続ける。

浩将「（舞湖さんはホクで、ヒビキって人はバルで、舞さんはクス）」

舞湖「異世界の人間かあ……」

ヒビキ「ぶつちゃけオレ様達もそーじゃん」

舞「おじいちゃんが言っていた。例え、異世界の人間だろうと友達にもなれるって」

浩将「（佑一さんはアロで、佑井さんはサハンで、慎吾さんはアデで、大樹さんがデラデ）」

佑一「（友樹から渡されたこの赤いケータイは、何に使っただよ）」

佑井「キバット、異世界の自分は？」

キバット「気分わりいから、ジャ　プ読んでくる」

慎吾「そつちに士達がねえ」

大樹「海東は絶対に許せん」

浩将「（で、薫さんはハ　で、佑理さんはアル　ター）」

薫「こんな時に限って、何か出そうだわ」

佑理「それは無いわ」

気が付くと、日は沈み夕食の時間。サムスとゼルダが秋の味覚たっぷりの栗ご飯や茸ソテーを作っていた。デザートに友樹の作ったモンブランケーキと苦い味が特徴のコーヒケーキの二つである。

浩将「うっわあ、美味しいモンブラン！」

夕食後、アナザーセンサーがなった。

ボブ「本屋敷前方二、ぐるんぎ十八接近！！友樹サン、彩香サン、大樹サン、マルスサン、アイクサン、ルイージサン、デデデサン出撃デス」

友樹「浩将君、宙斗君来るかい？」

浩将「はい、行きます」

宙斗「フィリップは残って」

フィリップ「はいはい」

現場に到着すると、メ・ギガノ・デの集団が迫って来た。

友樹「変身！」

友樹はクウガ・アルティメットフォームに変身して、手合わせ錬金で地面を錬成して、剣を二本出し、タイタンソードに変えた。

浩将「ええっ！錬金術！？まあ、いいや！変身！」

浩キバット「ガブツ！」

タツロット「変身」

浩将はキバ・エンペラーフォームに変身した。

宙斗は、Wドライバーを腰に巻くと同時に、サイクロンメモリが装填された。

宙斗「変身！」

更に宙斗はジョーカーメモ리를装填して、ベルトを開く。

サイクロンジョーカー

宙斗はWサイクロンジョーカーに変身した。

WCJ「さあ、お前達の罪を数えろ！」

続けて彩香も腰にドラゴネイル付きのオルタリングを出し、構えを取り叫んだ。

彩香「变身！！」

彩香はアギト・バーニングフォームに变身した。それと同時にオルタリングからシャイニングカリバーを取って手に取った。

カメンライド…

大樹「变身」

デイエンド

おまけに大樹も变身した。

デイエンド「（何か腹が立つなあ、おまけって）W君、背中を貸して」

ファイナルフォームライド…

WCJ「ん？」「

ダ・ダ・ダ W

ドシュッ

すると、Wはサイクロンサイクロンとジョーカージョーカーに半分に分けた。

クウガ・U「たああああー!!」

クウガは必殺技・ツインタイタンディヴァイドで、3体を消し炭にした。

キバ・E「とどめだ!」

キバット「ウェイクアップ」

タツロット「ウェイクアップフィ〜バ〜」

キバの必殺技・エンペラームーンブレイクが決まり、3体を消し飛ばした。

ルイージ「準備完了……………デデデ、やってちょうだい!」

デデデ「よっしゃあー! ジェット……………」

ルイージ「ルイージイイイ……………」

デデデ・ルイージ『ハンマーロケット!』

この技により、僅かだが3体を破壊した。

アギト・B「でええええい!!」

アギトの新必殺技・バーニングブレイクが炸裂して、4体を麻痺させて、マルスとアイクが斬りきった。

WCC「宙斗行くよ」

W J J「うん！」

二人は大きくジャンプして、キックの体勢を取って一気に迫った。

C C・J J『スーパーエクストリーム!!』

この技により、3体を粉々にした。

そして、デイエンドはデイエンドライバーにカードを一枚装填して、重心をスライドした。

ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ デイエンド!

デイエンド「デリヤアア!!」

そして、残った2体のメ・ギガノ・デを破壊した。

ライダー達は変身を解き、屋敷に帰った。

そして灰色のカーテンが、浩将と宙斗とフィリップを待つ様に、待機して表れた。

浩将「皆さん、さようなら！」

ヒナギク「あっちの私によろしく伝えてね」

浩将「うん!!」

宙斗「行くよ浩将、フィリップ」

フィリップ「分かったよ。じゃーねえ! 佑理ちゃん「地球の本棚」で会えるといいね」

佑理「出来ればね」

そして、灰色のカーテンが宙斗と浩将とフィリップの三人を包んだ。カーテンが消えると、三人も消えていた。

ハヤテ「……………（さらば、異世界の弟）」

く づ っ

二十八話 異世界の弟達 10月10日(後書き)

ウィングさん、お返ししまーっす！

特別編 女医サムスさん（前書き）

特別編です。

特別編 女医サムスさん

サムス・アラン。医者の世界で名を知らない者はいない。彼女の腕にかかれば、癌から捻挫までお手の物。しかし、相手の懐事情で代金を請求する。時々、相談事が多い一方。今日も一人の患者が、彼女の所へやって来た。

サムス「次の方どうぞ」

ガラッ

ルイージ「影が薄いと言われるのですが……」

サムス「まずお兄さんを怨みなさい。次の方」

ガラッ

ハヤテ「よく女の子と間違えられるんで、男性ホルモンを注入して下さい」

サムス「折角の女顔を粗末にしないの。次の方」

ガラッ

友樹「熱が下がらないんです。診断をお願いします」

サムス「では、上着を脱いで下さい」

友樹「はい……」

サムス「では触診します」

友樹「はい……………つて触診!？」

サムス「ええ、聴診器が無いので。ナースマン、抑えてちょうだい」

Nマン・シンジ「我慢してくれ」

友樹「ええっ!え……………ええ……………ちよちよっ!」

サムス「はい、では……………」

友樹「失礼しまああああす!!!」

びゅっつうつうううう!!!!

サムス「(逃げられちゃった)次の方」

ガラッ

ゼルダ「最近リンクが、私の事を構ってくれないのです」

サムス「ふんふん」

ゼルダ「多分、私のなにかが足りないと思うのです」

サムス「成る程ねえ。で、私に何をして貰いたいの?」

ゼルダ「贅沢は言いません。女性ホルモンを注入して下さい!」

サムス「ごめんなさい。切らしているの。次の方」

ガラッ

ヒナギク「実は……………」

サムス「そのうち大きくなるわ」

ヒナギク「まだ何も……………」

サムス「おだまりペツタンコ。次の方」

ガラッ

ピカチュウ「ピイカ、ピカチュウ！ピカチュウ」

サムス「ここ最近出番が無いつて言っの？まあ、作者のせいね」

すんません。

ピカチュウ「ピイピイ」

サムス「それだけ言いに来たって言っの？」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

サムス「（もう行っちゃった）次の方」

ガラッ

マスター「よ」

サムス「御用件は？」

マスター「実は…人間体になるから、その姿を見て貰いたいのだ」

サムス「いいわ。見せて頂戴」

マスター「うむ！……ディアツ！」

キュピーン！

マスター「こんな感じだ」

サムス「……………一つ言っただい？」

マスター「何だ？」

サムス「……………松の馬鹿」

マスター「別にいいだろ？デスクート好きなんだから。特に松」

サムス「ではお帰り下さい。そろそろ、定時なので帰るわ」

特別編
終わり

特別編 女医サムスさん（後書き）

このモトネタは、大和田秀樹さんの「機動戦士ガンダムさん」に出
ていた「女医セイラさん」から、拝借させていただきました。

もし、御本人が見ているならば、お許し下さい！

では！

二十九話 Faithingピカチュウ 10月15日(前書き)

今回ピッカチュウメインです。

お待たせしました！

始まります！

二十九話 Faithingピカチュウ 10月15日

ある朝、ピカチュウは早起きをした。しかも、まだ友樹ですら起床してない午前5時の三分前。

ピカチュウ「ピクカア………？」

実は夕べは早く寝たので、その反動であろう。

ルームメイトの連中はまだ寝ている。自分も二度寝しようとするが、目が完全に機能しているので、もう眠れないだろう。

ピカチュウ「ピイカ、ピピカチュ」

こんなに早く起きたのだから、外に出て自主トレでもしようと考えた。

外に出ると、東の大地から表れた太陽は、大地に光を与えている。

早速ピカチュウは軽いランニングを行い、新技の特訓にはげんでいた。

しばらくすると、屋敷から魚の匂いが漂って来た。ピカチュウは匂いに優れているのだ。

今朝の朝食は焼き鮭に納豆に卵に違いないと思うピカチュウであった。

友樹「ん？あつ、ピカチュウおはよう！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

友樹「早起きして偉いね。そうだ、悪いけど新聞取って来て貰えるかな？」

ピカチュウ「ピッカー！」

ピカチュウは朝刊も持って来て広間のソファに置いた。

やがて、ハヤテとマリアが起床して来た。マリアは配膳を行い、ハヤテは友樹の手伝いをした。ピカチュウは、持って来た新聞を読んでいる。一応ポケモンなのに字が読める。

次に歩とアテネが起床すると同時にヒナギクも起床した。

朝食がすむと同時にアナザーセンサーがなった。

場所は廃工場にターゲットルイマジンが登場。モモタロスが憑依した佑一とピカチュウが急行した。

現場に到着すると、ターゲットルイマジンの右腕がバズーカに変型され、M・佑一とピカチュウに向けて撃った。

ズドーン！

M・佑一「のわぁ！」

ピカチュウ「チャー！」

爆発の衝撃で、壁にM・佑一がぶつかると、その腹部にピカチュウが当たった。

M・佑一「おぶう！いつてえ……？」

M・佑一（何やってるんだよ変身するぞ！）

M・佑一「わーったよ佑一！」

そういつて、ベルトを巻いて赤いボタンを押し、パスをタッチした。

M・佑一「変身！」

ソードフォーム

電王・S「俺、参上！」

ピカチュウ「ピッピカチュウ！」

電王・Sと同じポーズをしたピカチュウも戦闘準備ばんだ。

電王・Sはデンガツシャーソードモードをターゲットイマジンに切り掛かるが、甲羅に籠ったので跳ね返ってしまう。

電王・S「かつてえ……」

ピカチュウ「ピーカー……チュウうつう……!!」

ピカチュウの十万ボルトが決まるとターゲットイマジンは麻痺状態になった。

電王・S「やるじゃねえかピカチュウ！」

ピカチュウ「ピカチュウ」

電王・S（モモタロス、あの赤いケータイを使うぞ！使い方は友樹から聞いた！）

電王・S「行くぜ、行くぜ、行くぜ！」

電王・Sは赤いケータイもとい、ケータロスの一番下のボタンを右

から四つ続けて押した。

モモ ウラ キン リュウ クライマックスフォーム

その電子音が鳴ると、ケータロスの下から黄色いレールが表れた。

電王・S「あんだこりゃ！」

驚きつつも、ケータロスをベルトのバックルに付けた。すると、電王・Sの体は赤いアーマーが着き、右肩にロッドフォームの電仮面、左肩にアックスフォームの電仮面、そして胸にはガンフォームの電仮面が装着された。

電王・C「こら！カメ・クマ・ハナタレえ！何で合体するんじゃあ！」

更に、電王のソードフォームの電仮面の皮が剥け、黄色い目の電王・クライマックスフォームになった。

電王・C「まあ、いいか。いいかカメイマジン！」

タートルイマジン「グルルルル！？」

電王・C「今日の俺は、超カッコイイぜ！」

電王・C（ピカチュウ！もう一回十万ボルト……いや、百万ボルトをかましてやれ！）

ピカチュウ「ピッカー！！！」

フルチャージ

ベルトにパスをタッチすると、ソードフォームの電仮面以外の電仮面が右足に集中した。

電王・C（いいか？ピカチュウが放ってすぐだ！）

電王・C「わーったよ！」

ピカチュウ「プイーーカアアアアア………ジュウウウウウ！」

ピカチュウの新技・百万ボルトがタートルイマジンに命中した。

電王・Cは今だと思い、大きくジャンプして、右足を繰り出した。

電王・C「必殺、俺の必殺技……クライマックスバージョン！！！」

ドガッ！！

タートルイマジン「ぎいやあああ！！！」

バボオオオオオオオオン！！

必殺技・ボイスターズキックが決まり、タートルイマジンは爆発した。

変身を解いたM・佑一はピカチュウの頭を撫でた。

M・佑一「頑張ったなあ！お疲れさん！」

ピカチュウ「ピッカチュウ！」

そしてその夜、昨夜と同じ様に早く寝たのだった。

くづつ

二十九話 Faithingピカチュウ 10月15日(後書き)

次回から、妄想オープニングと妄想エンディングが変わります。

では！

三十話 未来から息子と娘が来て悪いかコルア！byキバット 10月20日

妄想OP

残酷な天使のテーゼ by桂ヒナギク

灰色のカーテンが屋敷の近くの桜の樹に表れ、中から二人の人間が現れた。

????1「ここは？」

????2「わからないわ。とにかくこの屋敷の人達に聞いてみましょう」

????1「ああ、そうだな。ここが何処だか分かるだろうし」

二人の人間は屋敷の入口へ向かって行った。

屋敷では、もう朝食が済み、友樹と彩香とリンクとゼルダ以外のメンバー達は、遠征中なのだ。場所は海だったり遠くの山だったり外国だったりその他色々。

その残った四人は何をしているかと言うと、友樹はソファで昼寝をしており、リンクは何かの小説を読んでた途中で昼寝をしており、彩香とゼルダはファッション雑誌やら何やらかんやらを読んでいた。その時だった。

????1「ごめんくださいーい！」

????2「誰かいませんかー？」

玄関から少年と少女の声がした。昼寝していた友樹が目を覚まし、玄関へ向かった。

玄関まで行くと、声の正体らしい自分より二つ三つ小さい中学生の男女であった。

友樹「君達は？」

????1「とーちゃん！」

友樹「は？（なんでだろう、まだ夢でも見てるのかな？）」

????2「バーカ！似てるけど若いでしょ。多分ここは過去よ」

友樹「あの……入るの？入らないの？というか、君達は??」

????1「あつ、オレは五代進」

????2「アタシはエメラ・ヤマトです」

友樹「進君……」

進「うん」

友樹「で……エメラちゃん」

エメラ「はい！」

友樹には、なにがなんだか分からなくなったので進とエメラをさっきまで自分がいた部屋に二人を案内した。

エメラ「お父様お母様！」

リンク「へ？」

ゼルダ「……………ほえ？」

進「かーちゃん」

彩香「へ」

やはり、ここでも言うのであった。

五代進とエメラ・ヤマトは未来から来たという。未来でもスマブライダーズは健在しており、現在は二世達がここを護っているという。特にガノンが危ないくらい老けているのだ。

リンク「えーと……………今はスマ歴2010年だから……………そっちは？」

エメラ「こちらはスマ歴2031年です。アタシは13歳」

進「オレも13歳」

友樹「そうなんだ。あつ……………ねえ、進」

進「何、とーちゃん？」

友樹「智って知ってる？」

進「知ってるよ。智伯父さんはマリカ伯母さんと結婚して、オレより一つ年下の従兄弟の三十郎もスマブライダーズだよ」

彩香「マリオさん達は？」

進「三つ子のルビー君とサファイア君とラルド君がいるよ。まあ、マリオさんはピーチさんの尻に敷かれているけどね」

友樹「未来でもかよ……………でもルビー君達も？」

エメラ「はい、スマブラライダーズの一員です」

進「とーちゃんはクウガでしょ？」

友樹「うん……………そうだけど」

進「んでかーちゃんはアギトでしょ」

彩香「それがどうかしたの？」

進「オレは仮面ライダーアクセルとして活躍してるんだ！まあエメラと互角だけどね」

エメラ「まあ、アタシは魔法と剣術をたしなんているから」

ゼルダ「（髪の毛は、黒いんですね）」

エメラ「お母様、言い忘れたけど、アタシ他人の思考が読めるんです。なんか遺伝子の影響だとかで」

リンク「ふうん」

その時だった！アナザーセンサーが反応した。

ボブ「本屋敷裏の平野にて、イメージン四です！リンクさんと友樹さ

ん出撃して下さい!」

リンク「あれ、片言じゃなくなってる」

友樹「昨日僕が改造しといた。マスターには了承を得ているよ」

二人で行こうとしたその時。

進「とーちゃん!オレも行かせてくれ!」

友樹「いいよ!」

その後、現場の平野に到着するとアリゲーターイメージマシンを先頭に、モールイマジンとサラマンダーイメージマシンがのっしのっしと歩いていった。足元は減り込んでいて、その上アリゲーターイメージマシンの両手が赤い血に染まっていた。

アリゲーターイメージマシン「子分共、あの三人をクロスか?」

モールイマジン「兄貴イ、さっきの自衛軍の奴らでんでよええでしたなあ!」

自衛軍とは、スマブラライダーズと共にアナザーからスマッシュシユシテイを護っているのだ。

その部隊の一つが……。

サラマンダーイメージマシン「もうゴミの用でしたなあ。きつと、あそこ人間三人も」

パリン

その時、友樹と進の中の何かが弾け、瞳のハイライトが消失し、二人の感覚が全てクリアになった。

それは、友樹がエクシードアギトと闘った時の現象と同じだった。

友樹「リンク……進……行くよ」

リンク「ああ、これには友樹と進だけでなく、俺も無性に腹がたつた」

進「とーちゃん……オレもだ」

友樹は腰にアークルを出し、進はアクセルドライバーをセットした。友樹は構えを取り、進はアクセルメモリを取り出した。

友樹「変身！」

アクセル

進「変、身！」

アクセル

友樹はクウガライジングマイティフォームに変身し、進はアクセルに変身した。

クウガRM「進……リンク……」

アクセル「昔も今も、変わらないんだな、とーちゃんは」

リンク「ああ、人は変わる必要なんて、無いんだよ。さあ、行くぞ！」

三人は、三体のイメージンに向かった。

クウガRMはアリゲーターイメージンの攻撃をもるともせず、自らの攻撃を浴びさせた。目の前にいる、鰐の名を冠した……悪魔を。リンクはサラマンダーイメージンを、切って、切って、斬りまくり、最後には大回転斬を繰り出し、サラマンダーイメージンを粉々にした。アクセルは専用武器エンジンブレードでモールイメージンを切っていた。

アクセル「あんたらは、とーちゃんとその仲間達が守りたかった人達を殺した……壊したー！」

モールイメージン「ああ……ああ……」

アクセル「オレは……あんたを肅清する」

アクセルはエンジンブレードにエンジンメモリを差し込んだ。

エンジン

エンジンマキシマムドライブ

必殺技・アクセルソードスラッシュが決まり、モールイメージンも粉々にした。

そして、クウガRMは新必殺技・雷神武零苦が決まった。

クウガRM「僕は………また、護れなかった」

その後、三人は屋敷に帰って行った。

帰ってすぐに、灰色のカーテンが、屋敷の玄関近くにあった。

進「とーちゃん、かーちゃん」

エメラ「お父様、お母様」

友樹「僕は……未来で君達に何を教えたのかは聞かない。でも、今は言える。仮面ライダーは、命有る限り護るものの為に闘うんだ。例え孤独になっても」

彩香「未来の私達によろしくね」

リンク「じゃ、達者でな」

ゼルダ「ちゃんといい子にするんですよ？」

四人は、未来の息子と娘に言いたいことを言った。

進は、顔立ちは友樹で髪型は彩香だが、色は友樹と同じ茶色である。エメラは顔はゼルダでリンクに似ていて、髪は黒い色だった。

二人は、進とエメラは住むべき世界に戻る為に、灰色のカーテンを潜った。

友樹「帰ってたね」

彩香「うん」

リンク「さて、みんなが帰って来るまで、何する？」

ゼルダ「何もせず、ただのんびりと過ごしましょうか？」

くづつ

三十話 未来から息子と娘が来て悪いかコルアーbyキバット 10月20日

妄想ED

Sakura byピースエターナル

三十一話 スーパークウガビギニング 10月26日(前書き)

今回友樹は、オリジナルクウガの世界へ!!

雄介いるかな？

三十一話 スーパークウガビギニング 10月26日

友樹は気分転換にバイクで走っていた。

先程、屋敷で子供団が悪戯祭が始まって、ファルコとマリオとルイージが尊い犠牲（まだ生きてるがな）になってしまい、最終的にはゼルダの説教で終わったのだ。

居づらくなったので、ビートチエイサーで走っているのだ。

友樹「（走る時は……何も考えないのが良いんだよなあ）」

その時だった。灰色のカーテンが表れた。

友樹「え！」

咄嗟の事に反応が鈍り、有無を言わせぬまま、友樹は灰色のカーテンに包まれてしまった。

?????1「五代……………お前は今何処にいるんだ？」

そう呟いたトレンチコートを来た一人の男は、警視庁から出て行った。

?????1「（未確認生命体……………通称グロンギ。奴らがまた活動を始めてしまった）」

その男はグロンギが出た現場に到着すると、一人の巡査が男に言い寄る。

巡查「失礼ですが、この先は立入禁止です」

?????1「こつという者だが？」

巡查「警視庁……対未確認生命体対策本部………一条薫警部！」

?????1 一条「というわけで………」

巡查「し、失礼しました！」

一条「スマン」

一条は、被害者の亡きがらを見ていた。何故か血液は流れておらず、まして体にはアザも無かった。

一条「やはり、グロンギか………」

その時だった。グロンギが三体も現れた。

一条「くう……神経炸裂弾が無い時に………」

一体のグロンギが駐車してあった車を一条達に投げ飛ばした。

一条「（こんな所で………」

パチン！

バリバリバリバリ

一瞬の出来事だった。突然、落ちるハズの車が地面から沸いたコンクリートの柱により、人気の無い所に吹っ飛んだ。

一条「?!」

その柱の近くに、自分の知ってる男のバイク・ビートチェイサーが停めてあった。

一条「……………五代!？」

煙りが晴れ、その中にいた人影が見えた。

友樹「皆さん、ここは退いて下さい!」

一条「!?!……………五代じゃない」

友樹「え?なんで僕の苗字を知ってるんです?」

一条「君も?」

しかし、三体のグロンギが走って来た。戦闘開始なのだ。

友樹「く、警部さん皆の避難をお願いします!」

一条「だが君は……………」

友樹「心配いりません。早く避難を!でなきゃ、皆の笑顔が無くなってしまう!」

一条「……………わかった!君の名は?」

友樹「五代友樹です！」

一条「俺は、一条薫」

友樹「一条さん早く！」

一条「ああ！」

一条は、警官達に住民の避難を急がせた。
その頃友樹は腰にアークルを出した。

一条「あれは………！」

友樹は構えを取り、叫んだ。

友樹「変身！」

友樹はクウガマイティフォームに変身した。まず一体目のグロンギに回し蹴りをベルトのバツクルに当たり一体目が爆発した。更に二体目も、裏拳で粉碎された。

しかし三体目は以上に強くて、流石の友樹が変身したクウガMでも敵わないのだ。

そこで、ビートアクセラーを抜き取り、構えた。

クウガM「超変身」

タイタンフォームにフォームチェンジしてみても、無駄であった。
ライジングタイタンフォームになっても、変わらない。

その時だった。また別のビートチェイサーが現れ、クウガRTが相

手していたグロンギに衝突した。

雄介「ええ！クウガ！！」

クウガRT「貴方は？」

雄介「俺は五代雄介！君はっ！」

クウガRT「僕は五代友樹です！」

一条「五代！」

雄介「一条さん！」

一条「……………変身出来るか？」

雄介「ええ。やりますよ」

雄介は腰にアークルを出し、構えを取り叫んだ。

雄介「変身！」

雄介の姿はたちまちクウガマイティフォームになった。

それを見てか、クウガRTはライジングマイティフォームに戻り、ビートアクセラも元に戻し、ビートチェイサーに付けた。

クウガRM「雄介さん！あいつは強敵ですよ」

クウガM「そのようだな。皆の笑顔を守る為に！」

クウガRM「僕もそれは同じです。僕も皆の笑顔を守る為に！」

二人は、助走し始め、同時にジャンプして片足を突き出した。

クウガM「オリヤアアアア！！！」

クウガRM「ハアアアアア！！！」

二人の技が決まり、最後のグロンギも粉碎した。

それから、二人は変身を解いた。それと同時に灰色のカーテンが、友樹を待つように表れていた。

雄介「さよならだなあ」

友樹「ええ。僕は、僕の護りたい人のいる世界に戻ります」

一条「……達者でな」

友樹「ハイ！」

そして、友樹はビートチェイサーに乗って灰色のカーテンを潜った。二人の男は、一人の少年を見送った。

雄介「ポレポレ行きましょうか？」

一条「ああ、おやつさんに顔を出してみろ」

友樹は灰色のカーテンを抜けると、自分のいるべき世界に到着した。

友樹「……………ただいま」

くづつ

三十二話 現れたD／のんびり屋のN 10月27日

この世界に、また別の世界の住人が灰色のカーテンから現れた。小学生くらいの少年少女が四人に青いロボットがあつた。

????1 「ここは……」

????2 「ここどこ!」

????3 「何処なのかしら」

????4 「マゝマアゝ!」

????5 「うるせえ!泣くんじゃねえ!」

????2 「ドラえもん、どうするの?」

????1 ドラえもん「どうするもこうするも……のび太くんこれはほくでも難しいよ」

????2 のび太「なんで僕達はこうなったの?確か……しずかちゃんの家の前までを皆で歩いていたら……」

????3 しずか「灰色のカーテンみたいのが私たちを包んだ所まで覚えているわ。スネ夫さんいつまで泣いているの?」

????4 スネ夫「だって、見たことも無い世界に来たんだよ!周りを見てよ!!!広い草原が広く広く続いているんだよ!!!助かる訳無いじゃん!ジャイアンも言っちゃってよ」

????5 ジャイアン「俺だって助かる見込みは無いと思うんだけどよ、もし人がいたら……」

スネ夫「いるわけ無いじゃん!!」

その五人の隣に、NEWモールイマジンが現れた。

NEWモールイマジン「チュチュー!!」

のび太「うわああ!お化けえ!!」

ドラえもん「のび太くん!!」

NEWモールイマジンののび太に襲い掛かったその瞬間。

クウガM「でりゃああ!!」

突然現れたクウガMの必殺技・マイティキックが決まり、NEWモールイマジンは爆発した。

クウガMは変身を解き、ドラえもん達にその姿を見せた。

友樹「ここは危険だ。いつまた来るかわからないから」

のび太「は……はい」

友樹はドラえもん達を連れて屋敷に戻った。

屋敷に入るなり、ドラえもん達は屋敷内の広さに驚愕した。

スネ夫「ぼくんちの別荘よりすごいや」

友樹「そうかな？……灰色のカーテンが出るまで、しばらく泊まってみる？」

のび太「いいんですか？」

マスター「許可する」

のび太「うぎゃああああ！手袋のお化けえ！！」

何故か怖がるのび太を尻目にスネ夫が友樹に尋ねる。

スネ夫「そういえば、お兄さん名前は？」

友樹「僕は五代友樹。仮面ライダークウガ」

ジャイアン「クウガ？何ですか、それ？」

友樹「クウガは、古代のエネルギーを秘めている霊石・アマダムを使い変身する仮面の戦士なんだ。そろそろお昼ご飯の時間だけど、食べる？」

しずか「いいんですか？」

友樹「いいよ」

昼食の時間になって、メンバーも集合した。

メニューは松茸ご飯にシメジの味噌汁に焼き鮭である。メニューなど関係無しにヨッシーとカービィはもうドカツと食べていた。それを見たドラえもん達はア然としていた。

その後、佑井のブラッディローズの演奏にピースエターナルの歌声が乗った持ち歌・「青空になる」が皆の心を和ませた。

ジャイアン「感動した。ここで俺が歌うのは、もったいない！」

スネ夫「（はあ、よかったあ）」

それから時間が経つに連れ、ドラえもん達は別々に行動した。

ドラえもんはマリオとハヤテにこの世界の事情を聞き出し、のび太は友樹からライダーの事を聞いて、スネ夫は屋敷内をナギとアテネの二人に案内して貰い、ジャイアンはヒナギク対サムスの乱闘を見ていた。そして、しずかはゼルダと彩香の三人で入浴中である。

友樹「のび太君は、ヒーローに憧れた事はあるかな？」

のび太「はい。僕もいつかって思った事もありました」

友樹「そう……でもね、いくらヒーローでも、護れなかったものがあるんだよ」

のび太「護れなかった……もの？」

友樹「そうならない様に、僕は皆の笑顔の為に闘うんだ。笑顔って大切だからさ」

のび太「そうですね」

3時のおやつの間になっても、灰色のカーテンは表れなかった。

ポポ「のび太君は、何が得意なお？」

のび太「えーと……昼寝、あや取り……射的の三つだよ」

ポポとのび太はおやつに友樹お手製のバナナケーキを食べていた。それは、他の子供団とドラえもんとしずかにスネ夫とジャイアンも食べていた。

シンジ「そういえば友樹、ヒビキしらねえか？」

友樹「それなら、せんせい師匠の弟のおおとり三郎さんが、地獄のレッスンをさせてるよ。ちなみに、三郎さんは仮面ライダー二号だよ」

シンジ「ふうん」

そこに、モモタロスと佑一が友樹の下に来た。

友樹「どうしたの？」

佑一「このケータロスはどうやって造った。ラウズアブソーバーもだ！」

モモタロス「俺でも超知りてえんだよ！」

友樹「あ、いやあ……「こうゆうのがあったらなあ……って思って造ったんだ」

佑一「……………」

モモタロス「……………」

二人は呆れてまた別な所へ行つた。

友樹はその後、外へ出て行つた。何かと思ひドラえもん達も後をついて行つた。

しばらく歩いて行くと、二本の大きな大木まで到着した友樹は上着を脱ぎ、大木に吊された大きなタイヤにパンチやキックなどをぶつけていた。

友樹「はっ！ やっ！ てやっ！ デイア！ てえい！」

それから2時間経ち、違う特訓メニューを開始した。吊している丸太が大量にぶら下がり、友樹は大量の丸太を揺らし、その中に入つた。

のび太「（ああっ！ 危ない！）」

声を殺したのび太は絶叫したが、友樹はその迫つて来る丸太を腕や脚で受け流したり弾いたりした。

それからまたしばらくして、友樹は上着を着て屋敷に戻つた。ドラえもん達も屋敷に戻つた。

夕食は友樹が育てた野菜を使ったスープカレーであつた。当の本人は、汗を流しに入浴中なのである。

のび太も温泉へ向かつた。それはスネ夫とジャイアンも同じ意見で向かつた。その本人は、星空を眺めて湯舟に浸かつていた。

友樹「……………ん？ ああ、のび太君にスネ夫君に……………えと……………」

ジャイアン「武です」

友樹「武君だね」

のび太「あの、友樹さん」

友樹「何？」

のび太「いつもあんなに激しい特訓をするんですか？」

友樹「そうでもしなきゃ、護りたいものが護れなくなっちゃうから」

スネ夫「そういえば、ここって温泉ってここだけですか？」

友樹「そうだけど」

ジャイアン「つまり……」

友樹「まあ、たまに混浴って事になっちゃうけどね」

その友樹の発言で、三人の少年は鼻の下を伸ばしていた。そのよる、ドラえもん達はこの屋敷で泊まる事になった。

く づ っ

三十三話 帰るじ 10月28日(前書き)

今回、ドラえもん達は帰ります。

では！

三十三話 帰るぞ 10月28日

しずかはいつもより早く起きた。やはり、場所が馴れないからかも知れない。しかし、今までいろんな冒険をしている中、野宿も当たり前であった。

サムスとの相部屋から抜け出すと、友樹とリンクに MARIA とハヤテの四人が朝の準備をしていた。

MARIA「あら、おはようございます」

しずか「お、おはようございます。皆さん早いですね」

ハヤテ「いつもこの時間帯なので」

友樹「朝食作るなら、5時起きは当たり前だからね」

しずか「そ、そうなんですか……」

やがて、時刻は午前7時過ぎになると、メンバーのほとんどが起床した。もちろん、ドラえもんとスネ夫とジャイアンもであった。しかし、のび太は8時過ぎに起床して来た。サムスより後であった。

のび太「なんで僕が一番後なんだよう〜！」

クツパ「んなもん知らん」

舞「おじいちゃんが言った。早起きして一番先にする事は、美味しく朝ご飯を食べる事だって」

のび太「勉強になりました！」

その後、友樹対サムス対ウルフ対メタナイトの対戦だ。ステージは終点でアイテムは全て出、ストックは1。ドラえもん達もメンバー達と一緒に観客席で見ている。

リンクはドラえもん達に、この乱闘は生中継され、毎回視聴率は毎回30・0%越えだと言う。

スネ夫「凄いや……」

ゼルダ「因みに、一番強いのは、友樹とリンクの二人なんですよ」

ジャイアン「これまた凄いや……」

彩香「まあ、互角過ぎて、一回目やると友樹が勝って、二回目はリンクが勝っちゃっただけだね」

のび太「お見せしました」

始まりのゴングがなると、ウルフのクローブラスターが放たれ、クウガ・Mに当たろうとしたが、避けられ、メタナイトに当たる。

メタナイト「ぐはぁ！私も侮られたものだ。しかし！」

マツハトルネイドがウルフとサムスに直撃した。

アイテムのアシストフィギュアが出て、ウルフがそれを取り、高く掲げシャドウ・ザ・ヘッジホッグが現れた。

シャドウ「カオス・コントロール!!」

すると、ウルフ以外のスピードが遅くなってしまった。しかし、アイテムのタイマーが降って来た。クウガ・Mはそれを取ると、元のスピードに戻り、ドラゴンフォームに超変身して、攻撃を開始した。

一方観客

リンク「（こいつは、うかうかできねえな。俺も頑張らないとな）
友樹、いつもいつも強い」

ゼルダ「そうですね。あの状況からの奪回は賜物です」

のび太「そんなに凄いんだ……」

戻って

クウガ・D「超変身！」

ペガサスフォームに超変身して、ウルフとサムスを撃ちまくった。ある程度撃つと、落ちてたモンスターボールを投げつけて、中からキレイハナが出てメタナイトとサムスを強制的に眠らされた。

クウガ・P「超変身！」

タイタンフォームに超変身して、メタナイトとサムスにカラミティタイタンが決まり、サムスは脱落したが、メタナイトは脱落はしなかったが、大ダメージを受けてしまった。

そこにスマッシュボールが現れ、メタナイトはそれを砕いた。そして、ウルフまで行き……。

メタナイト「見るがいい」

……ザシユツ！

最後の切り札・ギャラクシアダークネスでウルフまでもが脱落になつてしまった。
ということとは。

メタナイト「君の事は……ハア……ハア……最後の最後に……ハア……やっておきたい」

クウガ・T「その様ですね……ハア……ハア……これで決めます！超変身！！」

アメイジングマイティフォームに超変身すると同時に、スマッシュボールが現れた。メタナイトが取ろうとしたが、クウガ・AMに阻まれた上に、踏み台にされた。

メタナイト「私を踏み台にした！？」

そして、クウガ・AMはスマッシュボールを砕き、最後の切り札・レベルアップでアメイジングマイティからアルティメットフォームになり、アルティメットキックがメタナイトに当たり、勝負は決まった。

乱闘が終わると、友樹は外へと出て行った。ドラえもん達も誘われてやって来たのは、友樹の菜園だった。

友樹「じゃあ、のび太君としずかちゃんとドラえもとスネ夫君と武君は芋を掘るの手伝ってね。今日のお昼はジャガ芋とサツマイモを使うから」

のび太「はい！」

かくして、六人でジャガ芋とサツマイモを収穫していった。ある程度掘った後は、小松菜も収穫していった。

その後、友樹達は収穫した野菜をゼルダとマリアとサムスと彩香の四人に昼飯の材料として渡し、手を洗った。

昼食が終わると同時に灰色のカーテンが現れた。

ドラえもん「じゃあ、これで失礼します」

マリオ「いって事よ」

ルイーダ「また来てね」

のび太「ハイ！さようなら」

しずか「さようなら！」

スネ夫「さようなら！」

ジャイアン「さようなら」

そして、五人を包むと、灰色のカーテンは消滅した。それと同時に、慎吾の持っていたカードに絵柄が付いた。アタックライドカードのシヨックガンだった。

慎吾「あばよ……異世界の勇者達……」

くづつ

三十三話 帰るじ 10月28日(後書き)

次回はどうしようかなあ？

三十四話 天使？ 10月29日（前書き）

この話の元ネタが分かる人はいますか？

答えは、後書きにて。

三十四話 天使？ 10月29日

TV<今巷では、天使のコスプレが流行っています。さらには天使の置物も流行しています……>

友樹「天使………か」

そう言つて友樹はかけていたTVのスイッチを落とした。

巷と言つても、ここ屋敷ではそんなに染まらないのだ。友樹は天使としての印象は、人を天に召すか人々に幸福を与えるの二つしかない。

カービィ「天使だったら、ボクもコピー能力で変身出来るよお！」

友樹「あれは、コスプレ。だったらピットは年がら年中天使だよ」

ピット「あの、その言い方ありますか？」

友樹「本当の事だと思つ」

ピットは何かを諦めた様な様子で、自室へ向かった。その途中でトウーン擦れ違い、そのトウーンは友樹の所まで来た。

トウーン「ねえねえ友兄い」

友樹「何？」

トウーン「アニキ知らない？」

確かに、リンクの姿は見えなかった。なぜなら、先程ゼルダと共にアナザー討伐に向かったのだ。しかしそれは、トゥーンがドンキーと乱闘している時にだったからである。

その事をトゥーンに放すと、「じゃ、玄関で待ってよ」と言って玄関に行つた。

その次には、ヒナギクが友樹の下に来た。

ヒナギク「友樹、ハヤテ見なかった？どこ捜してもいないのよ」

何故かあたふたとしていた。その質問に友樹は返答する。

友樹「それだったら、アテネさんが連れてつたよ。何でも、アテネがハヤテに欲しい物を買わせるとか」

ヒナギク「……………へ？アテネと……………？」

目が点になっていた。なぜなら、ハヤテを連れてつた人物は、ハヤテの元カノのアテネだったからである。

ヒナギク「どこ行つたか聞いて無い？」

何故か、木刀正宗の刃先を友樹に向けていた。別に友樹は恨みを買うつ行いはしていないのは確かだ。

友樹「ごめん。そこまではわかんない」

ヒナギク「……………そう」

そう言つて、どこかへ、行つた。

やがて時間が過ぎリンクとゼルダ、そしてハヤテとアテネが天使の

コスプレをしていた。ゼルダとアテネは似合っているが、リンクが着ると不似合いであった。

見てて気分が悪くなった友樹は外に出た。

友樹「何故天使のコスプレ何かを？……………！！……………そこにいるのは誰だ！」

近くの茂みから、これまた天使の格好をした女性だった。

「あら意外。貴方、常人じゃないわね」

友樹「貴女は……………貴女は一体！？」

「天使のコスプレって、最近話題じゃない。私はその火付け役」

友樹「何故こんな事を……………」

「平和ボケさせて、その間に我がグランド・シヨッカーが総攻撃を開始する。その内には、スマブラライダーズも天使のコスプレを！」

友樹「アホな作戦ですね。貴女の名前は？」

京子「京子・デストロイヤー。グランド・シヨッカーの幹部。しかしてその正体は！」

京子は背にあった天使の翼に身を包み、しばらくしてその翼を広げると、体は悪魔に天使の翼の怪人だった。

ラファイエ「我が名はラファイエである」

友樹「結局こうなるのか?!」

友樹は腰にアークルをだそうとしたが……。

ガシャン!

モモタロス「おわ!」

ウラタロス「うわっ!」

キンタロス「どわっ!」

リュウタロス「ぎゃっ!」

モモタロスとウラタロスとキンタロスとリュウタロスの四体が、何故か屋敷のガラス窓を割り、纏まって友樹に憑依してしまい、強制的にクライマックスフォームになってしまった。

ラファイエ「貴様、ふざけるのもいい加減に……!」

電王・C?「いいえ。僕はいつでも大まじめです」

その電王・クライマックスフォームは、クライマックスフォームであって、クライマックスフォームではなかった。

ソードフォームの電化面がさらに皮が向けて黒い目をして、右肩にあったロッドフォームの電化面が左肩に、左肩にあったアックスフォームの電化面が右肩にあった。

そして、両腰には、デンガツシャーがソード、ロッド、アックス、そしてガンモードと、付けてあった。

赤い装甲がもつと赤く、血の様に赤くなり、そこには古代グロンギ

文字でいっぱいだった。

名を付けるなら、電王・ライジングクライマックスフォーム。

電王・RC「さあ、貴女は天国行きですか？それとも地獄に堕ちますか？」

不吉な決め台詞を吐いて、デンガツシャーのソードとアックスを持って、ラファイエに攻撃をしかけた。

電王・RC「ハアッ！」

ザシュツッ！

ラファイエ「ぐふう！」

電王・RC「エヤー！」

ギリツッ！

ラファイエ「なはあっ！」

徐々にラファイエにダメージを与えてる電王・RCは四つのデンガツシャーを一つに纏めた。形は大きな剣のデンガツシャー・エクデイスモードになっていた。

フルチャージ

バックルにパスをタッチすると、刃先に電流がほとばしり、その上巨大なエネルギーの塊と化した。

電王・RC「でええりやあああああああ……！！！！！！！！！！！！」

グシャアッ……！！

ラファイエ「ガアアアアアアアアアアッ……ン・ダクマ・ザバ大首領様……バンザ……イ……！！」

ドッゴオオオオオオン……！！

ラファイエは断末魔の叫びを揚げて、爆発した。

友樹「ダクマが……グランド・ショツカーの大首領……」

その友樹の後ろでは、モモタロス達四体がピクピクとしていた。

それから、天使のコスプレをした人々は、催眠術から覚める様に戻ったとか……。

くづつ

三十四話 天使？ 10月29日（後書き）

正解は、ウルトラマンティガのネタでした。

やっぱり、ウルトラマンはティガに限りますね。

では！

特別編 昭和ライダー変身者(前書き)

特別編です。

特別編 昭和ライダー変身者

変身者〓おおとりゲン

ライダー〓一号

お馴染み、友樹の武術の師匠^{せんせい}。現在独身の51歳。30年前にシヨッカーの手により、改造手術を受け、仮面ライダー一号に変身出来るようになった。

変身者〓おおとり二郎

ライダー〓二号

おおとりゲンの双子の弟。既婚の51歳。兄と同じ道を歩んでしまい、やむを得ず二号ライダーとして戦った。しかし、まだ本編未登場。

変身者〓風見直樹

ライダー〓V3

一号と二号の仲間。シヨッカーの改造手術を受けた被害者三号。技の一号と力の二号と共に、力と技のV3として、これまたシヨッカーやゲルシヨッカーと戦う男。本編未登場の48歳。

変身者〓夕霧丈

ライダー〓ライダーマン

孤高のライダーマンと謡われた男48歳。かつて所属していた組織

に裏切られ、右腕に硫酸をかけられてしまい、義手。そこを改造手術してマシンアームとなっている。組織に復讐しようとしてライダーマンとして戦い、V3と衝突しながらも、仮面ライダー四号として迎え入れてもらった。本編未登場。

変身者〓 沖田孤悟朗

ライダー〓 Xライダー

FBI元捜査官。脱退した理由は、秘密警察GOD機関に拉致され、Xライダーに改造手術されてしまったからであった。仮面ライダー五号として迎えられて戦った。47歳本編未登場。

変身者〓 郷田盛男

ライダー〓 アマゾン

ギギの腕輪を左腕に装着しているアマゾン帰りの野生男46歳。ゲドンとの闘いの中で、アマゾンとして仮面ライダー六号として戦った。本編未登場。

変身者〓 城島茂雄

ライダー〓 ストロング

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ。悪を倒せと俺を呼ぶ」と決め台詞を放つ男。両腕にあるコイルアームを擦り、仮面ライダーストロングに変身出来る仮面ライダー七号。45歳。本編未登場。

変身者〓 鷹次郎

ライダー〓 スカイライダー

44歳。本編未登場。空飛ぶライダーとしては初めてのライダー。一度強化されて、今もそのまんまの仮面ライダー八号。

変身者〓 河州豪気

ライダー〓 スーパー1

仮面ライダー九号。赤心少林拳の免許皆伝者。43歳本編未登場。

変身者〓 野網武雷戸

ライダー〓 ゼクロス

秘密結社バタムに脳以外99%を改造されてしまった男。仮面ライダー十号。42歳。本編未登場。

変身者〓 五代エツオ

ライダー〓 BLACK ブラックRX

五代友樹の父。最初は仮面ライダーBLACK……十一号として戦った。しかし、最初の組織ゴルゴムが崩壊すると同時に、新組織が現れる。その新組織によりボロボロになってしまったが、太陽の力を取り込み、仮面ライダーブラックRX……十二号になった。41歳。

変身者〓乾悟郎

ライダー〓シン

怒りのライダー十三号。ベルトは使わず、ただただ怒りに任せた変身をしていたが、自我を保つ修行（ゲンが師匠の）をして、自由に变身出来るようになった。40歳。本編未登場。

変身者〓真田之貞

ライダー〓Z0

仮面ライダー十四号。39歳。乾の義弟。格闘技世界大会においてその名を知らない者はいない。本編未登場。

変身者〓五代典之

ライダー〓J

仮面ライダー十五号。指をJサインにすると、パワーが上がったり、巨大化するらしい。友樹の叔父でエツオの弟。38歳。

特別編 昭和ライダー変身者（後書き）

友樹「叔父さん最近見ないと思ったら……」

典之「というか、まだ本編未登場だしなあ。兄さんとゲン先輩が羨ましいぜ、全く」

友樹「とゆーわけで、今度出すよう、お願いします」

はいはい。

まあ、11月位に出すから待っててね。

では！

超特別編 鬼ヶ島伝説1（前書き）

今回も特別編ですが、初の長編です。

出来るかなあ

では始まります。

超特別編 鬼ヶ島伝説1

屋敷では今、とてつもなく大変な事が……事件が起きていた。それは、数時間前に遡る。

ある昼下がりがだった。いつもと同じ午後、いきなりモモタロスとウラタロスとキンタロスとリュウタロスが佑一や皆の目の前から消えてしまったのだ。そして、今に至る。

佑一「友樹、何とか見つからないか」

友樹「無駄だよ。さっきなんとかやってみただけど、この世界から消えているんだ」

慎吾「別世界だったら………」

ナギ「灰色のカーテンが出るはずだ」

すると、屋敷の入口に青いラインの入ったデンライナーが現れ、中から一人の青年が降りて来た。

????「じいちゃん！」

佑一「幸一か！」

???? 幸一「大変だ、鬼一族の活動が……!!」

アテネ「その前にあんた誰？」

アテネに言われ、幸一は落ち着いて自分が誰かを言った。

幸一「ボクは野上幸一。佑一じいちゃんの孫で未来から来た。一応、三代目スマブライダーズの一員です」

そこまで言った幸一は、鬼一族の事を話した。

未来では鬼一族のゲルニユートが活発化しており、過去に戻った直後に、モモタロス達が消えたという。

そこにマスターハンドの登場。

マスター「モモタロスだけは分からなかったが、ウラタロスにキントロスにリュウタロスの居場所なら分かっている」

と、マスターは昭和十年の新聞を皆に見せた。記事には、<お手柄！米泥棒から米俵を取り戻す>と、少々昔の漢字が入っていたが、日本の昭和十年の新聞であった。更に記事を読み続けるメンバー達は、捕まえた三人の人間のインタビューのコメントを読んだ。<僕に釣られてみる？><泣けるで><答えは聞いて無い>のコメントがあるからして、ウラタロスとキントロスとリュウタロスに違いがない。

幸一「ボクは先にやることがあるから、じいちゃん達は先に行つて」

佑一「分かった。デンライナーで行くぞ！」

デンライナーに乗るのは、ガノンドロフにデデデ大王にワリオにポプにオリマーそしてG&Wはお留守番なのだ。

それ以外のメンバー達がデンライナーに乗り込もうとしたが、デンライナーの中に、白くてきざなイマジジンがソファァでくつろいでいた。

????2「これはこれは佑一氏。お久しゅう事に、ついては……」

大樹「ちょっと待てや。佑一、あのイマジンは誰だ？」

大樹がイマジンの話しを強制的に止め、佑一に質問した。大樹としては、自分と同じ声がイマジンと被るのが気に入らないのだ。

佑一「このイマジンは、ジークと言って、モモタロス達と同じく、変身出来るんだ」

とまで言うと、いつの間にかジークはリンクの前に立っていた。

ジーク「ふむ……君の体を借りるぞ」

リンク「え！」

リンクの返事も無しに、ジークはリンクに憑依した。

W・リンク「光臨、満を持して」

舞「おじいちゃんが言った。返事も無しに物事をやると、後々酷いって」

舞湖「なことより、ぶっ倒れたゼルダは？」

ジークがリンクに憑依したと同時に気を失ったゼルダを心配する舞湖は皆に問う。

佑一「ここには、ベッドルームとかは無い。今は、このソファ一

に寝かせよう。それとジーク、変身してくれ。出発するぞ」

佑一は持っていたマスターパスをW・リンクに渡した。

そのW・リンクは、鳥の様な装飾品が着いたデンオウベルトを巻いた。

W・リンク「変身」

そして、パスをタッチする。

ウイングフォーム

すると、W・リンクの体が、金基調のプラットフォームになると、ソードフォームの様なアーマーが装着されて、白鳥の鳴き声が響いて白鳥の様な物が顔の部分まで行くと、変型して、羽根型の電仮面になった。

これぞ、電王・ウイングフォームとなった。

電王・W「では、発進するぞ」

電王・Wが一番前の運転席ならぬ、ライナーバイクが一台置かれてあるスペースまで行った。

電王・Wはバイクに1935年6月10日と記入されたチケットをパスに入れ、そのパスをライナーバイクにセットすると同時にデンライナーは動き出した。

それは、後方にいたメンバー達にも見えていた。

友樹「出発した……………」

デンライナーは天空に伸びたレールを走り、時空の穴に入ると、場

所は荒野になっていた。

マリオ「うっわっすげえ!!」

ルイーダ「兄さんはしゃぎ過ぎだよ」

ピーチ「ここ紅茶ある?」

佑一「ここはコーヒーしか無いよ」

サムス「鬼一族ねえ……」

Cファルコン「鬼ねえ……」

ヨッシー「お腹減りましたねえ……」

カービィ「ほんとだよ……」

ドンキー「カートには乗った事はあるけど、電車は初めてだよ」

デイディー「本当だね」

ファルコ「アーウィンとウルフェンは?」

フォックス「デンライナーの屋根にある。ってかマスターが勝手に乗っけてた」

ウルフ「めんどくせえ」

マルス「電車というのか……」

アイク「……………肉料理かと思った」

ナナ「すう……………すう……………」

ポポ「かあ……………こお……………」

ゼルダ「……………」

歩「何かなあれは？」

ナギ「さあ？」

マリア「まあ、奥にも部屋はありますしねえ」

ハヤテ「そこまで運びましょう。ヒナはゼルダさんを運んで」

ヒナギク「オツケー！」

アテネ「ヒナギク、私も手伝うわ」

ヒナギク「ありがとう」

ヒビキ「今のうちにディスクアニマルでも磨くかあ……………」

大樹「腹立つなあ……………」

慎吾「落ち着け」

シンジ「ドーカン同感」

佑井「キバット……」

キバット「大丈夫大丈夫！鬼だろつが鰐だろつが関係無いぜ！」

薫「佑理、鬼について検索は？」

佑理「駄目、引っ掛からない……」

ネス「また検索すれば良いと思うよ。ね、リュカ」

リュカ「うん！」

レッド「オラもそう思います」

マキ「ファイズブラスターとファイズアクセラーは忘れずにっ」と

スネーク「バズーカ…リモコンミサイル…マグナム…コルトパイソン…っ後は……」

メタナイト「多過ぎではないか？」

ルカリオ「某も思った」

ソニック「Heyこいつは常にDangerousだぜ」

彩香「……」

友樹「彩香、どうしたの？」

彩香「……えッ？」

友樹「さっきからぼーっとしてるから……どうしたのかな……って」

すると、彩香は近くにいたピカチュウとプリンをクッションの様に抱いた。

彩香「……また、やな感じがするの……地の石が……また出そうで……」

彩香は、ライジングアルティメットになったあの時を思い出して震えていた。友樹が地の石に操られた時である。そんな彩香の肩を友樹は抱いた。

友樹「心配無いよ。僕はもう弱く無いんだ。皆と君に支えられているから、僕は頑張れるんだ」

そんな時だった。昭和十年に繋がるゴールとなる扉が見えてきた。

トウーン「みんなぁ!!」

ピット「昭和十年に到着したよー!」

到着したと同時に、操縦スペースから、リンクとジーク、そして奥の方からナナとポポとゼルダが来て、全員集合した。

佑一「よし!皆、一つ言っつて置く」

その佑一の一言に皆は耳を傾けた。

佑一「あのドアを開くと、昭和十年の日本で、ウラタロスとキンタロスとリュウタロスがいる。出るとしたら、人間であれば良いんだ。でもピットは例外だから、フォックス達と留守番で、行くのはオレと後二人だ」

友樹「じゃ、僕行くよ。ハヤテも行くこう」

ハヤテ「オツケー！」

佑一「よし、これで決まり。言っとくけど、あのドアを開くと、その時代に合わせた服装になるぞ」

友樹「うん、分かった。じゃ彩香、行ってきまーす」

彩香「いつてらっしやい」

ハヤテ「なるべく早く戻りますんで」

マリオ「おし、行ってこい！」

佑一「行くぞ」

友樹「うん」

ハヤテ「ハイ」

三人がドアを開くと、そこは昭和十年の町並みだった。気が付けば、友樹はタンクトップに黒いズボンに腰のベルトには手ぬぐいがあった。ハヤテは友樹と同じ様な服装で、佑一も同じだっ

た。

佑一「とりあえず、ウラ達を捜そう」

ハヤテ「ハイ」

友樹「いや、すぐ見付かったよ。ほら」

友樹の示した方向を二人が見ると、そこには……。

ウラタロス「美しい。いいねえ君」

主婦「あらいやだ（照）」

キンタロス「泣けるでえ！」

子供たち「泣けるでえ！」

リュウタロス「イエーイ！」

泥棒「い……イエーイ？」

その後、ウラタロス達は佑一達に気付き、デンライナーへ帰り、モタロスを捜しに行こうとしたその時、近くの民家が破壊され、ゲルニユートの群れがわんさか現れる。しかも数は尋常では無い。

ハヤテ「こんな時に……！」

ウラタロス「それじゃ体借りるね」

ハヤテ「へ？ちよっ！」

ロッドフォーム

ハヤテの返事も聞かず、ウラタロスはハヤテに憑依し電王・Rに変身する。

佑一はリュウタロスを呼び、電王・Gに変身し、友樹はクウガ・Mに変身する。

ガンフォーム

電王・G「お前等倒すけど、いいよね？答えは聞いてない！」

軽やかなステップを刻む電王・Gはデンガツシャーを組み上げガンモードにする。

電王・R「お前等、僕に釣られてみる？」

電王・Rもデンガツシャーをロッドモードに組み上げ、言った。

クウガ・M「ハアアア！！」

クウガ・Mのマイティパンチが放たれると、電王・Gはゲルニユート軍団に銃弾を撃ち込む。

その際、住人達は彩香達が避難誘導していた。その際キンタロスはルイーダに憑依し電王・Aに変身し、決め台詞を言ってゲルニユートを切り付ける。

電王・A「俺の強さにお前が泣いた！」

電王・A（緑なのに……orz）

この際どうでもいい事を言ったルイージだが、体のコントロールをキントロスが握っているので、抵抗出来なくなっている。

クウガ・M「超変身！」

地面を錬成し、剣を生成しタイタンフォームに超変身し、ゲルニユートを三体切り付けた。

クウガ・T「切っても切っても、どうしてこんな」

クウガ・Tの頭の中では、一気に片付ける秘策は無いか必死に考えた。

今戦っているのは、自分であるクウガ・Tの他に電王・R、電王・G、電王・Aだ。

そして、一つの考えが浮かび、実行に移した。

クウガ・T「ウラ、キン、リュウ！僕が合図出したらそれぞれ必殺技出して！やらなかったら、どうなるか分かる？」

言われた三人は恐怖に駆られ、言われた通にした。

すぐさまクウガ・Tは錬金術で地面を隆起させゲルニユートを一カ所に集める。

クウガ・T「今だ！」

フルチャージ

ソリッドキック、ダイナミックチョップ、ワイルドショットを集ま

ったゲルニユートに炸裂し、ゲルニユート軍団は消滅した。
そして、隆起した地面は戦闘後友樹が元に錬成した。

く づ っ

超特別編 鬼ヶ島伝説1（後書き）

次回はデンライナーの車窓から（嘘）

超特別編 鬼ヶ島伝説2

昭和十年の日本でウラタロスにキンタロスにリュウタロスを見付けたメンバー達は、デンライナーの中で、ジークが持って来たと言う絵巻物を覗いていた。

ジーク「その書物によると、鬼ヶ島には金と銀の仮面を被った鬼が現れた時、十二の仮面の戦士とその仲間達が、鬼を退治するであろう、というふうには……」

ポポ「書かれているんだね！」

ジーク「クツ、まあそんな所だ」

台詞を先に取りられ、それが幼児だったので、無性に腹が立ってしまった。しかし、ジークはキンタロス以上の大人な心を持っているので、直ぐに落ち着いていた。

友樹「仮面の戦士……って事は……僕達の事？」

慎吾「その様だな。仮面って事は、仮面ライダーってわけだろ？だから、敵も仮面ライダー……？」

リンク「だろうな」

ハヤテ「前には、偽ライダーばかりでしたが……」

ヒナギク「今度は、完全本物ってわけね。アテネは勝算があると考えられる？」

アテネ「五分五分かもね」

歩「かもじゃないかな。それに五分五分でもないかな」

ナギ「要は、私はそれ程弱くないって事であるう」

マリア「まあ、私達の強さは、普通じゃあ無いでしょう」

ナナ「でも勝てるかなあ？」

マリオ「勝てるぜ」

ルイージ「そうだよ。ぼく達は亜空事件にライダー大戦にいろいろと経験を積んで強くなったんだよ！」

ゼルダ「ルイージさんの言う通りです。皆さん気を引き締めて頑張りましょう！」

メンバー「おー！」

ナギ「だが、何故鬼ヶ島じゃ無く、おにけしまなんだ？おにけしまじゃ無くて」

ジーク「細かい事は気にするな」

ナギの質問は、小麦粉の様にサラサラに砕けた。
絵巻物の時代である江戸の時代に、デンライナーが現れた。場所は、海岸の岩影であった。

佑一「取り敢えず、手分けしてモモタロスを捜そう。今度は全員で捜すよ」

取り敢えず出たメンバー達は、二、三人位に分かれてモモタロスを捜し始めた。

彩香「私達二人は、ここの海岸を当たりましょ」

友樹「うん」

このあと二人は海岸沿いを歩いていた。すると、友樹は何かを感じ取った表情になり始めた。

彩香「どうしたの……？」

友樹「ごめん、ちょっとここで待ってて」

彩香を置いて、先まで走って行った。友樹は人影が見えたから、そこまで到着すると、この時代には不釣り合いな服装をしていた。

ダクマ「おっひさー！」

友樹「ダクマ………何で君がこの時代に………」

ダクマ「ラファイエちゃんの言った事もう忘れた？僕はグラランド・シヨツカーの大首領だからね。グロンギの帝王より出世したでしょ？」

友樹「そういつて、皆の笑顔を消すんですよ。でもそれはさせない！例え地の石を使おうが、僕は負けない！………」

しばらく二人は睨み合った。二人が立つ場所は断崖絶壁であり、時折下から水飛沫が感じられた。空模様も快晴から、黒雲が立ち込めて来た。

彩香「友樹い、どこお？」

間が悪く、二人所に彩香が友樹を捜しにやって来た。

友樹「彩香！来ちゃ駄目だ！！」

しかし、叫んだ友樹より速くダクマは動き、彩香の鳩尾を殴った。

彩香「げほ！」

鳩尾を殴られて、彩香は力なく倒れて、ダクマは彼女を担いだ。

友樹「ダクマあああああつ！！」

友樹は即座に右腕をアルティメットフォームにして、ダクマに殴り掛かるうとした。

友樹「ウォリヤアアア！！！！」

今まさに当たる。その時、ダクマの前に、ガミオに似た怪人が現れた。言うなれば、リターンガミオ。

ダクマ「じゃ、この娘は頂くね。君の相手は、やられた時よりちょっと強いよ。じゃあね！！」

そういうと、ダクマは隠していた小形ヘリコプターに乗り、海の向こうの鬼ヶ島へと消えて行った。

友樹「また、戦わ無いと駄目なのか……」

Rガミオ「……………」

友樹は何故か変身せずに、自らの拳を振り上げた。その拳は、ガミオの右腕を貫き通した。

友樹「どうだ！」

うにようにようによ

友樹「何い！」

傷ついた所は一気に再生していった。この後も友樹は、己の拳と蹴りを繰り返すが、ガミオには効かず、逆に回復する方が早かった。

Rガミオ「……………ダバグ。ゴラゲパダクマガラバドビン、バデン（……………馬鹿が。お前はダクマ様などには、勝てん）」

ガミオはそうグロンギ語を言い放ち、友樹に言った。

友樹「ダバジャバギ。ドブン……………クウガザ！！（馬鹿じゃ無い。僕は……………クウガだ！！）」

何故か友樹もグロンギ語を言い放った。するとそこに……。

モモタロス「グググギうるせえぞ。俺はちょーたいく……っておい
！友樹か、久しぶりだな」

友樹「モモタロス、今はあの敵をやっつけるしか無いよ」

モモタロス「ああ、そうだな。よし、体借りるけど、いいよな？」

友樹「いいよ。体でも何でもいいよ！」

モモタロスは「行くぜ、行くぜ、行くぜ！！」と言って友樹に憑依した。憑依された友樹の髪は逆立ち、赤いメッシュと赤いマフラーが出た。

すかさず、デンオウベルトを巻き、赤いボタンを押した。

M・友樹「変身！」

ソードフォーム

パスをタッチして、その電子音が鳴り響き、M・友樹はプラットフォームになり、その上からソードフォームのアーマーと電化面が現れた。しかし、何かが違っているのだった。それは、ソードフォームのアーマーの銀色の部分が金色になっていた。これぞライジングソードフォーム。

電王・RS「なんかすっげえけど、俺、参上！」

決めポーズも決まって、デンガツシャー・ライジングソードモードを片手に、ガミオに迫った。

電王・RS「ぜあぁ！」

ザシュッ！

Rガミオ「ぐうああー!!」

電王・RS「はあ！」

ドガッ！

Rガミオ「がはあ！」

電王・RS「うりゃー！」

げしっ！

Rガミオ「きはあー！」

もうポロポロのガミオに、トドメの攻撃を出そうと、電王・RSはパスをベルトにタッチした。

フルチャージ

電王・RS「必殺……俺の必殺技ッ！」

デンガツシャーの刃先にエネルギーが溜まり、勢いよくガミオに切り掛かった。

電王・RS「ライジングバージョンー！」

ズシャアアー!!

Rガミオ「ヌアアアアア!!!」

ダガアアアアアンツ!!!

ガミオは爆発して、電王・RSは変身を解いた。

その後、モモタロスを連れて、デンライナーに帰った。

デンライナーの中には、もう殆どのメンバー達で一杯だった。しかし、誰も友樹の今の表情を見てはいなかった。リンクとハヤテを除いて。

友樹は居づらくなり、デンライナーから出た。数歩歩いて、砂浜の上に座った。気が付けば、既に月は昇っていた。現代と違い、星が沢山あった。友樹は砂浜に座り込み、鬼ヶ島を見ていた。

リンク「何がどうしたんだ？」

友樹「リンクには、関係無いよ」

ハヤテ「(プチツ)だからって!」

珍しくハヤテが拳を振り上げて、友樹に迫った。

しかし、友樹はハヤテの拳を右手で掴み、背中に回り込み、両腕をガツシリと押さえた。

友樹「やめてよね。本気で喧嘩したら、ハヤテなんかが僕に敵う訳無いでしょ」

ハヤテ「くっ」

友樹「あ、ごめんハヤテ、僕は……調子が」

リンク「彩香はどうしたんだ？」

友樹「!？」

リンクの発言により、友樹は膝をついた。それと同時に、ハヤテも友樹から離れた。

リンク「詳しく教えてくれるか？」

友樹「……………彩香がさらわれた。この気持ちが君に分かる訳無いだろう!!！」

リンク「俺だって、ガノンドロフにゼルダをさらわれた事はあった。だがな、俺は諦めず助けに行ったよ!!！」

友樹「僕と君は違うんだよ!!！」

ドガ!

友樹の拳が、リンクの左頬に当たった。

リンク「いてえよ!!！」

ドガ!

そのリンクの拳も友樹の右頬を打った。

友樹「うわあああ!!！」

リンク「はあああ！」

ドガガッ！！

ついには、二人の拳が二人の頬に当たった。

この後も、ずっと殴り合いが続き、終わった時は、もう日時が変わった時だった。

友樹「何故止めるんですか！！」

マリオ「バカヤロー！落ち着けてんだ！！」

ルイーダ「そうだそうだ！！」

リンク「邪魔すんじゃない！！」

ポポ「びえええん！！」

ナナ「うわええん！！」

慎吾「少しは落ち着け！」

シンジ「どつちもどつちだ！！」

もうこんな時間まで喧嘩をしていたので、流石のポポとナナも起きてしまい、今に至る。

ピーチ「ちよつとは落ち着きなさい！！」

友樹「貴女は僕の姉でも母でも無いじゃないですか！！邪魔しない

「で下さい！」

サムス「リンク！」

リンク「俺は悪いとは思ってもないぜ！」

そんな時だった。ゲルニユートらしき怪人が現れたが、薫以外気付いてなかった。

薫「しょうがないわね」

と言いつつも、Wドライバーを腰にセットして、ジョーカーメモリーを手を取った。

ジョーカー

その近くで、佑理がサイクロンメモリーを出した。

サイクロン

薫& amp ;佑理「変身！」

そして、そのメモリーを差し込み、彼女本体はタイミング良く一早く気付いたハヤテに倒れた。

薫のWドライバーにサイクロンメモリーが現れ、セットしてジョーカーメモリーをセットした。

サイクロンジョーカー

薫本体は仮面ライダー^{ダブル}Wサイクロンジョーカーに返信した。

WCJ「メモリチェンジよ」

W^かCJ「オツケー」

ヒート

メタル

サイクロンメモリとジョーカーメモリを引き抜き、ヒートメモリとメタルメモリをセットした。

ヒートメタル

すると、ダブルはヒートメタルにチェンジした。背中にあった武器・メタルシャフトを手にとると、先端が少し伸びた。

W^かH M「トドメー!!」

そういうと、メタルメモリを引き抜き、メタルシャフトに差し込んだ。

メタルマキシマムドライブ

するとどうだろう。メタルシャフトの両端が燃えていた。すかさず、それを構えた。

W H M「メタルブランディング!!」

その必殺技が決まると、ゲルニユートは消滅。そして変身を解いた。しかし、その間でも、まだ喧嘩していた。

友樹「何故邪魔をするんですかスネークさん」

リンク「これは俺達の問題です」

スネーク「お前ら、いい加減にしないと、鼻の穴四つにするぞ？」

友樹「分かりました。取り敢えずは、落ち着いておけばいいんですよ？」

リンク「こつちも分かりました。一時休戦します？」

スネーク「お前ら、いい加減にしろって言うてんだろ??」

果して、彩香を救えるのか、この事件を解決する事が出来るのだろうか？それは、神のみぞ知る。

その後、ゼルダとピーチとサムスの鬼の様な形相で完全に終わったという。

くづつ

超特別編 鬼ヶ島伝説3 (前書き)

今回でラストです！

超特別編 鬼ヶ島伝説3

日が登り、決意を新たにしたメンバー達は、鬼ヶ島を見ていた。イマジンズも子供団も、そして幸一も入り、全員がその島を見ていた。

友樹「(彩香……………待っててね)」

幸一「皆、行くよ」

その幸一の台詞にメンバー達は頷き、デンライナーに乗り込み、発進すると同時に、轟音を挙げて鬼ヶ島に向かった。

いざ到着となると、警備は意外と無いものであった。デンライナーから降りたメンバー達は、それでも油断はしなかった。

慎吾「(やけに静かだ……………)」

マリオ「(一体どーなってやがる……………)」

するとその時、大きく地面が唸り、すぐそばの海中から、先日友樹とタイラントが倒したエレキングの色違いが現れた。胸の辺りにはグランド・ショットのマークがあるからして、その手のものである。

友樹は懐からバトルナイザーを取り出して、破壊の名を冠する怪獣の名を叫んだ。

友樹「いっけえ！ゴジラ！！」

バトルナイザー モンスロード

ゴジラ「ゴギヤアアアオン!!」

ゴジラが出たと同時に、鬼ヶ島ではゲルニユートの進化態がぞろぞろと現れた。それに気付いた薫はWドライバーをセットして、サイクロンメモリを持った佑理と並び、ジョーカーメモリを持った。

サイクロン

ジョーカー

佑理&薫「変身!」

サイクロンジョーカー

WCJ「数が多いときは?」

WCJ「このメモリよね!」

ルナ

トリガー

サイクロンメモリをルナメモリに取り替え、ジョーカーメモリをトリガーメモリに取り替えた。

ルナトリガー

するとダブルはルナトリガーにチェンジして、専用武器のトリガーマグナムを撃った。すると、放たれた光弾はホーミングしてゲルニユートの進化態に次々と当たった。

ダブルはトドメにトリガーマグナムにトリガーマモリを差し込んだ。
トリガーマキシマムドライブ

WLT「トリガーフルバースト！！」

ドガガガ！と放たれた数個の光弾は次々とゲルニユートを破壊した。
ダブルは変身を解いた時には、色違いエレキングとの決着が着きそ
うであった。

ゴジラは御自慢の牙で攻撃していた。

友樹「よおし、ゴジラ！トドメのメガバーストフレア！！」

ゴジラ「ゴオオオ！！」

ゴジラの必殺技が色違いのエレキングを焼き倒すと、友樹はゴジラ
をバトルナイザーに呼び戻した。

するとまたまた、ゲルニユートの軍団が現れてしまい、その上大将
らしき二人の男が出て来た。

クチヒコ「我が名はクチヒコ！」

ミミヒコ「俺は弟のミミヒコだっぜえ！！」

すると、その二人は持っていた杖とこん棒を上にはげると、その先
の一部が、空間が割れて中からエネルギーが二人を包み、クチヒコ
は仮面ライダーゴルドラに変身して、ミミヒコは仮面ライダーシル
バラに変身した。

ゴルドラ「貴様らの墓場はここである」

シルバラ「俺達は、お前達を倒してから、現代に行って世界を滅ぼしてやる!!」

そんな二つの仮面ライダーに、友樹達仮面ライダーとリンク達フアイター達は、怒りに燃えていた。その中で、慎吾が口を開いた。

慎吾「馬鹿野郎!そんなちっぽけな事で、俺達は死んでられるか!!」

その慎吾の掛け声を口火に、ライダー達は、それぞれの变身アイテムを準備した。

友樹「变身!」

シンジ「变身!」

スタンディングバイ

マキ「变身!」

コンプリート

舞湖「变身!」

ターンアップ

響鬼「はあっ!」

舞「变身!」

ヘンシン

キャストオフ

チェンジビートル

佑「&幸」「変身！」

ソードフォーム

ストライクフォーム

ナギ「こっちだって！変身！」

ガンフォーム

歩「行くよキンちゃん！変身！」

アックスフォーム

マリア「お願いしますね？変身！」

ロッドフォーム

アテネ「こっちだって！変身！」

ウィングフォーム

佑井「キバット！」

キバット「キバって、行くぜえ！ガブっ！」

佑井「変身」

慎吾「変身！」

カメンライド デイケーイド

カメンライド…

大樹「変身」

デイエーンド

フアング

ジョーカー

佑理&薫「変身！！」

フアングジョーカー

これで仮面ライダーに変身できる者は出来た。違う所は、佑理が倒れるのだが、代わりに薫が倒れていた。その理由は、フアングとなると、佑理では無くて薫が倒れるのだ。それが、フアングジョーカーなのだ。

ゴルドラ「クウガとやら！貴様の相手はこの我だ！！」

クウガ・M「言われ無くとも!!」

ゴルドラとクウガは鬼ヶ島の奥に進んで行った。
その間、ここからはゲルニユートと戦っているメンバー達はと言うと…。

龍騎「やべえ!こいつの出番か!」

龍騎の引いたカードは、轟く業火をバツクに鳥の左翼がある「烈火のサヴァイブ」のカードだった。

それと同時に、左手にあったドラグバイザーが銃剣のドラグバイザーツヴァイに変型し、開いた口に先程のカードをセットして、口を閉じた。

サヴァイブ

そのエコーのかかった電子音の後、龍騎は焰に包まれて、龍騎は自身の最強フォームの龍騎・サヴァイブになった。

龍騎・S「っしやあ!!」

その隣では、ファイズがブラスターフォームになり、そのまた隣のブレイドは、左腕にあるラズアブソーバーにスペードのクイーンのカードをセットした。

アブソーブクイーン

そして、ジャックのカードをスラッシュした。

ヒュージョンジャック

するとブレイドは、ジャックフォームになった。

ブレイド・J「これで飛べる」

そして電王達はというと、マリアと歩とアテネとナギから、ウラタロスとキンタロスとジークとリュウタロスが、強制的に憑依が解けてしまった。理由は、シルバラの攻撃が、いっぺんに当たったからである。

電王・S（皆、憑依しろ！）

電王・S「何でだよ！……たくしゃーねーな。行くぜ、行くぜ、行くぜ！」

ウラタロス「全く……」

キンタロス「しゃあないで！」

リュウタロス「テンコ盛り」

ジーク「ふっ」

四体のイマジンが一斉に電王・Sに集団憑依すると、クライマックスフォームになったが、背中にジークの物と思われる電化面があったのだ。これぞ、スーパークライマックスフォーム、略して超電王。

超電王「ん？おわっ！何だこのビラビラはー！」

超電王（下臣共、行くぞ）

超電王（ワイ！トリサンもくつついたあ！）

超電王（ちょっと、キンちゃん狭いつて！）

超電王（せやかて、狭いもんは狭いねんて！）

超電王（下臣共、くるしゅう無い）

超電王「充分苦しいっつの！！」

龍騎・S、ファイズブラスターフォーム、ブレイドジャックフォーム、響鬼、カブト・ライダーフォーム、超電王、電王ストライクフォーム、キバ、デイケイド、デイエンドそしてダブルファンゲジョーカーと大集合して、それにつられて、ファイター達も意気揚々と叫びを挙げた。

リンク「こんのおおお！！！」

トゥーン「ウリヤアアア！！！」

マリオ「はあ！でい！」

ルイーダ「よ！ほ！はあ！！！」

その頃、クウガとゴルドラは、鬼ヶ島の中枢部分にいた。

ゴルドラ「貴様をここに呼んだ理由は分かるか？」

クウガ・M「？…？…どういう意味ですか？」

ゴルドラ「それは……………こついう意味だ!!」

ゴルドラは壁にあったレバーを下に思いっきり引いた。すると壁が割れて中から、液体の入った大型のカプセルが現れた。その中には……………。

クウガ・M「!?……………彩香!!」

そう、昨日ダクマにさらわれてしまった彩香がカプセルの中に入っていた。しかも裸体（大事な部分は髪の毛で隠れている）。

クウガ・M「貴方は、何故こんな事を!？」

ゴルドラ「言うな少年。ダクマ様から戴いた物だ」

クウガ・M「物……………だつて…?」

ゴルドラ「ああ、物じゃ無かつたな。さてと、何故彼女があの中に入っているか、知っているか？」

ゴルドラの言ったことに、クウガは首を横に振った。そんな事は知つたこつちや無いからである。

ゴルドラ「では、説明しよう…。この娘の体の中にある賢者の石を引き離し、その石を使い、この島を現代に送り、破壊活動をするのだ」

クウガ・M「そしたら、彼女は!!」

ゴルドラ「間違いなく、死ぬだろうな」

そのゴルドラの台詞に、クウガの変身が解けた。しかし、友樹の鬼のような気迫に、ゴルドラはビビり始めた。

友樹は地面を錬成して、バットの様な物にして、それを持ちゴルドラの元へ行つた。

ゴルドラ「やめろ……やめてく……ぐへえ！」

友樹は、そんなゴルドラにそのバットで殴つた。しかし、それが、延々と続いた。

友樹「ウアア！ああ！はあ！うああつ！はあ！ダア！はあ！」

ゴルドラは既に虫の息だったが、それでも友樹はバットで殴るのをやめなかった。

そんなとき、マリオとリンクとハヤテが同じフロアに来た。その三人が見た光景は、友樹が狂気に駆られて、ゴルドラにバットを振り落としていた。

友樹「殺す！殺してやる！！死ねえ！！死んでしまえええ！！！！！！！！！！」

マリオ「気のせいかな？」

リンク「俺も……まさか、友樹から殺すなんて……」

ハヤテ「っていつか、あれって【ひぐらしのく頃に】の圭 そっくりです……ってか早く止めないと……」

その友樹の顔は、帰り血を浴びていた。
どれ程友樹は殴っていただろう。友樹はまだまだ止めなかった。

マリオ「おい！もうやめろ！」

リンク「止めろっての！」

ハヤテ「やめろ！友樹！」

三人に抑えられて、友樹は自我を取り戻した。ゴルドラは粉の様に消えて、外では、シルバラも粉の様に消滅した。

友樹は、持っていたバットで、彩香の入ったカプセルを割った。と同時に裸体の彩香がカプセルから出て来た。そこらにあつた着物生地があつたため、それで彩香を包み、それを背負い、その場から出た。

鬼を一掃して、メンバー達はデンライナーに乗り込み、幸一とも別れて、現在時の荒野を走行中。

ハヤテ「でも怖かったですよね、あの友樹は」

リンク「ああ」

マリオ「行つたのが俺ら立つたからよかつたものの、他の連中だったら……」

この三人は、先程の狂気に満ちた顔を思い出し、その場にいたメンバー達に話した。尚、彩香は患者用の寝巻を身につけて医務室（デンライナーの中）にいて、友樹もいた。しかし、友樹は先程の狂気に満ちた事を忘れていた。

ピーチ「おっかないわねえ」

ゼルダ「狂気に満ちた……って、彼がですか？」

ナギ「よく言うだろ？おとなしい奴ほど怒ると恐いって」

メンバー達「オツソロシイ！」

アイク「あんな人でも、怒ると恐いんだな」

マルス「そうだね。にしても、一見落着だね」

マルスが滅多に言わないいい言葉が出て、メンバー達は次第に笑いがこぼれて、結果的に笑顔になったのであった。

く づ っ

超特別編 鬼ヶ島伝説3 (後書き)

大……程はいきませんでした。が、頑張ったと思います。

後友樹恐い！

三十五話 消えた三人ノ灰色のカーテン再び 10月30日(前書き)

今回、とある三人が別の作者さんの世界に行ってしまいます。

三十五話 消えた三人／灰色のカーテン再び 10月30日

明日はハロウィン。そのためか、先程友樹はお菓子を一杯買って、部屋に置いといて、部屋を出た。

ビーツビーツビーツ

久々にアナザーセンサーが鳴り、ボブが告げた。

ボブ「アナザー反応あり！場所は廃工場にて、グロンギ二体にアン
ノウンが一体です！友樹さん彩香さん慎吾さん！行ってください！
！」

慎吾「ホントに久々だな」

友樹「そんな事言ってる暇があるかい？」

彩香「さ、いきましょー！」

マシンディケイダーに乗った慎吾が先を走り、ビートチェイサーに乗った友樹とトルネイダーに乗った彩香が続いた。

現場に到着すると、ビートルロードにズ・ザイン・ダにゴ・バベル・ダが現れた。珍しく、どいつも鉄パイプを持っていた。

友樹「ヤンキー……？」

そう言いつつも、地面を錬成して、鉄パイプにした。が、慎吾が「人の事言えないだろうが！」と言ったのは、言うまでも無い。

友樹「変身！」

友樹はクウガ・ライジングドラゴンフォームに変身した。

彩香「変身！」

彩香はアギト・グランドフォームに変身した。

慎吾「変身！」

カメンライド デイケイイド

そして慎吾はデイケイイドに変身した。ついでに、またカードを装填した。

アタックライド ショックガン

するとデイケイイドの手には小型の拳銃が現れた。試しにゴ・バベル・ダに撃った。

バキューウン！

ゴ・バベル・ダ「？」

デイケイイド「効いて無い！！！」

デイケイイドのこのカードの使えなさに浸っているのも構い無しに、三体の敵は攻撃を開始した。

ビートルロードを相手にしているアギト・Gは攻撃に使用している鉄パイプなど物ともせず、パンチとキックを繰り返していた。

ズ・ザイン・ダの突進攻撃をスルリと避けながら、クウガ・RDはライジングドラゴンロッドで攻撃していた。
ゴ・バベル・ダの肉弾攻撃を電王・アックスフォームにフォームライドして応戦していた。

D・電王・A「おら？どうしたどうした？」

そしてまた、アタックライドカードを装填した。

アタックライド つっぱり！

するとD・電王・Aは相撲のつっぱりの嵐を叩き混んでいた。

アギト・G「これでとどめよ！」

アギトの足元に自身のライダーマークが浮かび上がり、クロスホーンを開いた。そしてライダーマークを足に吸収して、高くジャンプして、必殺技・ライダーキックを繰り出した。

その隣では、ライジングスプラッシュドラゴンを繰り出し、勝利したクウガ・RDにファイズにカメンライドして、ファイナルアタックライドのクリムゾンスマッシュを繰り出して勝利したDファイズがいた。

三人が変身を解いて、バイクに跨がったその瞬間、灰色のカーテンが三人を包んだ。

友樹「何で!？」

先にビートチェイサーに乗った友樹が飲み込まれて。

彩香「友樹!」

次にトルネイダーに乗った彩香も飲み込まれて。

慎吾「何処の世界に連れてく気だ!!」

最後に、マシンディケイダーに乗った慎吾も灰色のカーテンに包まれてしまった。

く づ っ

三十五話 消えた三人ノ灰色のカーテン再び 10月30日(後書き)

日比野未来さん！後は頼みました！！

特別編 アルコール注意報（前書き）

今回は、特別編であって本編とは何の関係もありません

特別編 アルコール注意報

スマブラ屋敷で今、危険な事が起こった。
それは数時間前に遡る。

友樹「ハヤテ、あっちの皿をこっちに並べてくれる？」

僕は今、夕食の配膳を行っていた。当番は僕一人だったが、ハヤテが助太刀に来てくれた。

ハヤテ「分かった」

今夜は、豪華にバイキングにすることにした。理由は特に無いけど、子供団からのリクエストなのだ。だから今夜は、大人達の酒に合う和食中心にした。その子供団は、今彩香とヒナギクと一緒に風呂に入ってる。でも、何故かちよつと子供団を呪ってしまう僕。

ハヤテ「そういえば、何で和食なのさ。バイキングなのに」

友樹「まあ、今日は元々和食にしようかなって考えてたら、子供団がリクエスト出したから」

ハヤテ「ふうん」

因みに、他の皆は買い出しとか、アナザー討伐であんまり人はいない。そろそろ僕は、料理を盛った皿を運ぶとする。

ハヤテ「それにしても、友樹って料理上手いんだね」

友樹「まあ、よく家の手伝いとかやってたから、自然に上手くなっちゃったんだ」

僕は真実を述べた後、出来た料理全てテーブルに置いた。筑前煮、茶わん蒸し、刺身、お浸し、しじみの佃煮、豚肉の生姜焼き、しゃぶしゃぶ、そして天ぷらだ。ま、殆ど僕の好物だけだね。数時間経って、メンバー全員が集合して、夕食の開始だ。

トウーン「あ、この天ぷらサツマイモだね！」

マルス「っていうか、アイク」

アイク「……………何だ？」

マルス「肉あるのに、がつつかなくてもいいの？」

確かにマルスの言う通り、アイクは豚肉の生姜焼きを味わって食べていた。よかった、気になってくれる。

アイク「……………味わって食べないと、肉の神様が怒るんでな」

なんじゃそりゃ。

友樹「あり？ポン酒が無いなあ」

僕はポン酒を探しに、首をキョロキョロとした。すると、彩香が僕にポン酒の便を渡してくれた。

彩香「はい、ポン酒」

友樹「ありがとう」

それを取ると、僕の指と彼女の指が触れた。それはお互いも分かっている。二人揃って頬が赤かった。

マリオ「うつま！つかーっ！茸の天ぶらいけるぞー！！」

マリオさんは茸焼酎を呑みつつ、僕の作った茸の天ぶらを食べていた。その隣のピーチさんもマリオさんと同じ茸焼酎で呑んでいた。

ルイージ「兄さあん、しゃぶしゃぶも美味しいよ。出汁が利いているから、ほら、お肉もいい感じ」

友樹「よかった、気になってくれましたか？」

ルイージ「うん」

ちらつと右を見ると、何処に口があるのか、モモ、ウラ、キン、リユウの四体が豚肉の生姜焼きを取り合って、佑一と佑井が止めていた。というか、ここ最近あの二人って出来てるのかな？

左を見ると、リンクとゼルダ、ハヤテとヒナギクはもはやおしどり夫婦の様だった。

ワリオ「ニンニク無いか？刺身あるのにニンニク無いとは酷いもんだぞ」

マキ「冷蔵庫から持って来ますか？」

ワリオ「ああ、頼む」

次第に、大人達は酒を呑みつづけ、マリオさんとワリオさんとピーチさんとルイーダさんの四人がぐっすりしていた。しかし、クッパさんとかは案外酒に強いんだなあ。

ネス「友兄い、お水いる？」

友樹「じゃ、頂くよ」

ネス「はい、どうぞ！」

これがいけなかった。呑み終わった時、僕は僕で無い別の感覚が現れた。

瞬間、僕の意識は無くなったと、皆は後日僕に言った。

友樹は、ネスクンから渡された水を飲んだ。すると、頬の辺りが一瞬の内に紅くなったの。

彩香「友樹？」

私が呼ぶと、彼はいきなり大声で泣いてしまった。しきりに「守れなかった……」「守るって約束したのに！」と連呼していた。

彩香「ネスクン！友樹に何飲ませたの?!」

するとネスクンは、黒い笑いを秘めて、言った。

ネス「友兄いに飲ませたのは、マリオさんの呑んでた苺焼酎さ」

そのネスクンの言葉に、リュカくん以外の子供団も笑っていた。そう、私は今、彼の弱い所を知ってしまったの。

ガノンドロフ「泣き上戸……と言うことが」

リンク「の、様だな。後でお仕置きが必要だな」

ハヤテ「そうしましょうか?」

その事を発した四人も、同じく苺焼酎で、やられていたの。

その時、友樹が私を押し倒して、耳元で囁いた。

友樹「君を……守るって……決めただ!……何があっても」

その言葉は、私が出ちに待った台詞だった。この体勢が何時までも続く事を望みました。

でも、今の体勢は、私の上に覆いかぶさる様な感じだった。ただ、彼の右手は私の胸にありました。

気が付いたら僕は、自分のベットの上で、朝を迎えていた。何故か右手に軟らかい感触が残っていた。それが何なのか、分からなかった。

部屋を出ようと、身を起こすけど、突然の頭痛が僕を襲った。確かにネスから渡された水（？）を飲んだ所までは記憶がある。が、そこからの記憶が無い。

痛みをこらえ、身を起こし、時計を見ると、午後3時過ぎだった。

友樹「珍しいな、僕がこんなに遅く起きるなんて」

ふと、隣のベットを覗くと、彩香はいなかった。当たり前だ、この時間位には、庭の花に水を与えているんだろうと思った。

ドアから数回のノックがあった。

マリア「友樹君、入っても宜しいでしょうか？」

友樹「ええ、いいですよ。おはいり下さい」

ドアからマリアさんが、トレイに乗ったサンドイッチを持って入って来た。丁度良かった、マリアさんから夕べの事を聞こうと、その時思った。そして実行した。

友樹「すみませんマリアさん、夕べ僕は一体……」

マリア「あら？聞いて無いんですか？貴方夕べ、ネスに苺焼酎飲まされたんですよ」

友樹「あっそうだ！そのあとの事も記憶が無いんです」

マリア「あららあ？貴方彩香さんに……」

友樹「へ！？ぼつ、僕が、な…な…な…何を！？」

マリア「覚えて無いんですか？ならいいんですよ」

そこまで言うと、マリアさんは部屋を出てってしまった。僕は、屋敷を出ると、この時間帯、彩香はいつも自分で世話をしている花壇に向かった。が、いなかった。

私は今、ヤケ酒と言うことをするために、屋上にいます。マスターに頼んで体を丈夫にしてくれる様頼んで、今呑んでいます。

彩香「……………ばか」あのあと、友樹は私に覆いかぶさった後、すぐに眠ってしまった。顔を見ると、あどけなさが残る寝顔でした。

バタンっ！ とドアが勢い強い音がして、中から友樹が現れた。

友樹「彩香っ！」

彩香「……………友……………樹？」

友樹「って何コレ！？っえ、何？全部呑んじゃったの？！！」

友樹の言う通り、私は大量のお酒を呑んでました。

友樹「ったく、駄目じゃないか！」

彩香「…………でもお…………えつく…………」

友樹「僕の時より酷いじゃ無いか！」

彩香「…………へ？」

友樹「ほら、部屋に連れてくから、乗って！」

彩香「乗ってって……………何処に？」

友樹「背中だよ。おぶったげる」

その時、私は一つの願いが叶いました。それは、大好きな人の背中におぶさる事。それが今、この瞬間に叶いました。

彩香「……………」

友樹「……………寝ちゃったのかなあ？」

僕は、背中に乗せた彩香の体重に驚いた。軽かった。

普通なら……いや、平均より軽い。ここんところ、苦勞したのかなあ？
途中、西沢と会った。

歩「どつ、どうしたのかな?!」

友樹「西沢か…説明は後!っっていうかちょっとどいて!」

部屋に着いた僕は、彩香をベッドに寝かせた。まだ頬の所が赤い。
最後に、外の夕日を見て僕は思う。

私は目が覚めて、外の景色を見て黄昏れる友樹を見て、そして思い
ました。

お酒は 八タチになってから

特別編 終わり

特別編 アルコール注意報（後書き）

今回も駄文になってしまいました。

では！

特別編 スネークと友樹のお部屋訪問

ある昼下がりに、スネークの下に映像電話が繋がった。相手は、オタコンであった。

オタコン<やあ、元気かいスネーク>

スネーク「ああ、問題無い。至って健康だ」

オタコン<そりゃ良かった。あ、そうそう。そこに誰か人はいるかい？>

スネーク「ちよつと待ってくれ」

しばらくして、スネークは近くにいた友樹を連れて来た。尚、この屋敷にいるのはこの二人とマスターしかない。

友樹は、モニター腰の自分よりも年上の男を見た。彼がオタコンらしい。

スネーク「スマン、こいつしかいなかった。で、何をすればいい？」

オタコン<実は、彼と一緒にメンバー達の自室を調べて欲しいんだ>

友樹「何故ですか？」

オタコン<実は、メイ・リンがスマブラライダーズの大ファンになっちゃって、調べて欲しいって言うんだ>

マスター「許可する」

いつの間にかのマスターの登場に、オタクンは驚いた。が、友樹とスネークの二人は平気だった。

オタクン<とにかく、お願いね。詳しく書いといてね。じゃあ！>
ぷっん

スネーク「さてと、何処からやる？」

友樹「四人部屋からあたりましょつか？」

スネーク「よし、じゃ始めるか」

四人部屋 広さ十五畳

友樹「まずは、モモとウラとキンとリュウの部屋からですね」

二人はイメージズの部屋に入った。

中身は、モモタロスのベッドの脇には『俺、参上！』のペナントがあり、ウラタロスのベッドの脇には『モテる為のバイブル』と言う本が。キントロスのベッドの脇には『泣ける物語集』と言う本。そしてリュウタロスのベッドの脇にはもう子供っぽい物が多かった。

友樹「ま、最初はこんな感じですよね」

スネーク「次行くぞ」

次に入った部屋は、ワリオと大樹とマキと舞の部屋だった。インテリアは充実していたが、ワリオのベッドには恐らく、大蒜の臭い避けのカーテンが張られてあって、他のベッドは普通だった。

友樹「次、行きましようか？何か大蒜臭いですし」

スネーク「そうするか」

次に訪れたのは、オリマーとCファルコンとヨッシーとクッパの部屋だった。

意外と整理されており、これと言って、難点は無かった。

その次は、フォックスとファルコとソニックとゲームウオッチの部屋だった。

友樹「結構整理されてますね。ベットも棚も」

スネーク「だが、フォックスとファルコは、ベッドが乱れているな」

お次は、慎吾とシンジと佑一とガノンドロフの部屋である。

友樹「写真が一杯ですね。門谷君とシンジのが」

スネーク「殆ど景色ばかりだな」

三人部屋 広さ十四畳

ヒビキとピットとトウーンの部屋に入った二人は、ヒビキのベッドにウンザリと来ていた。友樹「……………」『オレ様最強伝』」

スネーク「……………」ピットとトウーンの方がマシだな」

次はマリオとルイーダとピーチの部屋である。

友樹「つてうわ！何で、マリオさんとルイーダさんのベッドの脇にキノコが?!」

スネーク「さあな？つていうか、ピーチのベッドは豪華過ぎるだろ……………」」

二人は、何故かちょっとうつ病になりかかってしまった。が、部屋を出ると直ぐに快調になった。

次はアイクとマルスとレッドの部屋だった。

友樹「マルスのベッドが無駄に範囲使ってますんか？」

スネーク「アイクは、肉と書かれたベッドを使用。レッドは、日本の布団を使用。次行くぞ」

ルカリオとスネークとウルフの部屋に入ると、質素な部屋にポツンとベッドが三つあるだけであった。

その次のデデデとカービィとメタナイトの部屋は、家具よりもメタナイトの仮面が多過ぎていた。

最後にサムスとピカチュウとプリンとプリンが入った。中はサムスのパワードスーツが保管している以外は、普通の創りの部屋だ。

友樹「ピカチュウのベッドは黄色に茶色のストライプで、プリン
のベッドはピンクに薄いピンクの水玉模様ですね」

スネーク「次は二人部屋だ」

二人部屋 広さ十三畳

アテネと歩の部屋を訪れた。中は、アテネ側のベッドは豪華過ぎる
位のが普通のタイプであった。

友樹「まーた豪華なのが……………」

スネーク「私物は、これと言って特別な物は無いな。全く、変わっ
た事を頼むなオタコンは」

友樹「次行きましょう。急がないと、皆帰って来ちゃいそうですし」

スネーク「そだな」

次は、ナギとマリアの部屋だった。ベッドはこれまた豪華過ぎる位
であったが、一つしかない。

友樹「そういえば、マリアさんが言っていましたよ」ナギが一人じゃ
眠れないんです』って」

スネーク「しかもナギは十三歳だろ？二十越えてるマリア……………」

友樹「スネークさん、マリアさんはまだ十七歳ですよ」

スネーク「そ、そうか。よし次行くぞ」

次はハヤテ&ヒナギクの部屋。中身はお互いのツーショット写真で一杯だ。でも、ベッドはちゃんと二つある。

その次は佐井と舞湖の部屋に訪れた二人は、もっとも女の子らしい部屋のインテリアに感心した。

友樹「やっぱり舞湖も女の子なんだなあ……………っていつか、ジャブ多いなあ。キバットのかなあ？」

スネーク「次行くぞ」

ナナとポポの部屋に訪れたはいいが、中身を見て愕然とした。何故か青いコートとピンクのコートしか無く、ベッドはおるか家具さえも無かった。

次は、薫と佑理の部屋だった。

友樹「本棚に本が一杯ですね。アレ？」

スネーク「どうした？」

友樹「あ、いや、佑理のベッドの近くに、ちっちゃく僕が写った写真が……………落ちてたんですよ…」

スネーク「次行くぞ」

友樹「(さっきからそればかりですね、スネークさん)」

次のドンキー&ディディー部屋は、予想通りバナナで一杯一杯だった。全く以って予想通り。

次は友樹と彩香の部屋である。

友樹「何もありませんよ」

スネーク「ベッドは二つで隣同士。近くの棚にはガ プラが数多く飾れている。他は、彩香のクッションやぬいぐるみ位か」

友樹「スネークさん、次、行きましょうよ」

次はネスとリュカの部屋。中は、ネスの帽子とバットがあり、リュカの棒つきれがある以外は、男の子らしい部屋作りである事にかわらない。

最後にリンクとゼルダの部屋に二人は訪れた。中身は案外普通の創りで、必要最低限の家具しか無い。しかし…。

友樹「ゼルダは一国のお姫様って聞いたことはあるけれど…」

スネーク「ベッドが一つって……そりゃあ無いだろう」

二人は後ろめたい気分ですべての部屋の見終えた。

オタクコン「やあスネーク。データは取れたかい？>

スネーク「ああ、取れたぞ。でも一つ忠告がある」

オタコン<何だい？>

スネーク「間違っても販売するんじゃないぞ？」

オタコン<分かったよ。大佐にもメイ・リンにも言っておくから、安心してよ>

スネーク「ならいい」

スネークはデータ（メンバー達の自室の中身）をオタコンに送って直ぐに映像電話をかけ、消した。

しかし、終わっても尚、スネークにはまだ、後ろめたい気分が残っていた。

特別編 終わり

お知らせ&mp・アンケート

毎度、【スマブラ&mp・仮面ライダーズ+】を御愛読して頂き、誠にありがとうございます。作者の郡司侑輝です。

まずは、お知らせがあります。

一つは、暫く更新をお休み致します。これには、深い理由と訳があります。

二つは、アンケートを開始します。

人気キャラ投票とCP投票です。

投票の仕方は、感想欄からの投票とメッセージ送信投票の二つから受け付けます。

期限は、12月1日までです。

因みに、CP対象は

友樹&mp・彩香

リンク&mp・ゼルダ

マリオ&mp・ピーチ

ハヤテ&mp・ヒナギク

佑一 & a m p · 佑井

の、五組とさせていただきます。

ご応募お待ちしております。

その頃…

友樹「ってか、佑一と佑井いつの間？」

佑一「聞くな！」

佑井「ファンガイアのハーフだからって、拒否する人がいるの？私だって、普通に女の子だよ！」

友樹「ご、ごめん…」

佑井「ライフエナジー吸い付くしたいけど、我慢しなきゃ」

彩香「っていうか、物騒な事は止しましょう？」

リンク「友樹って、なーんか不死身な雰囲気だよな」

ゼルダ「そうですね」

マリオ「それよりこの作者、何でアンケートなんかはじめんだ？」

ピーチ「細かい事は気にしないの！」

ハヤテ「ＣＰでは、こちらが上ですよ？」

ヒナギク「そうよ！絶対負けないんだから」

友樹「という訳で……」

彩香「沢山の投票……」

友樹& amp; 彩香& amp; 佑一& amp; 佑井& amp; リン
ク& amp; ;ゼルダ& amp; ;マリオ& amp; ;ピーチ& amp; ;
ハヤテ& amp; ;ヒナギク「……………」お待ちしてまー
ーす!!!!!!!!!!!!!!

お知らせ&amp;アンケート(後書き)

沢山の投票、心よりお待ちしております。

どちらも、一人一票、一組一票です。

では！

結果発表

マリオ「人気キャラ&人気カップルの結果発表」

リンク「イエイー!!」

友樹「元気過ぎだね」

ハヤテ「何で?あれで普通だと思うよ」

友樹「いや、実は投票して下さった人は四人なんだよ?」

マリオ&リンク&ハヤテ「「あちゃー」「」

友樹「でもまずは、人気キャラランキングから!」

第一位

五代友樹

桂ヒナギク

ガノンドロフ

ゼルダ

第三位

残り全員

マリオ「マジか?!ミスターニンテンドーの俺が何で入って無いんだ!」

友樹「さあてお次は、カップルランキング!」

ハヤテ「もう友樹投げやり気味だ」

第一位 2標

友樹& a m p・彩香

第二位 1票

佑一& a m p・佑井

ハヤテ& a m p・ヒナギク

第四位 0標

マリオ& a m p・ピーチ

リンク& a m p・ゼルダ

リンク「俺達とマリオさん達はゼロか」

友樹「ドンマイ」

マリオ「……………orz」

ハヤテ「そろそろお開きだそうですね」

友樹「そっか。それでは、投票して下さいました皆さん」

ハヤテ「御応募ありがとうございました」

リンク「これからも、応援よろしくお願いします……!」

マリオ「では!」

三十六話 ストレスとデートと戦闘と 11月3日(前書き)

久々の更新です。

でもまだ友樹と彩香と慎吾はまだ帰ってきません

三十六話 ストレスとデートと戦闘と 11月3日

ターンアップ

ブレイド「てええい！」

友樹、彩香、そして慎吾が灰色のカーテンに包まれた事をマスターから聞いたメンバー達は、それでもいつものように過ごしていた。そんな中、アナザー反応があり、舞湖とヒビキとマルスの三人があたっている。敵はピーコックアンデットとメ・ギャリド・ギそしてタイガーロードであった。

ブレイド「何で、中々当たらないの!？」

ブレイドの攻撃は、響鬼の様に激しくもなく、マルスの様に美しくもなかった。ただ己の感情のままに攻撃していた。

響鬼「音撃打・猛火怒涛の型あ！」

マルス「真ドルフィンスラッシュユ!！」

響鬼とマルスが、グロンギとアンノウンを討伐完了しても、ブレイドは未だピーコックアンデットを倒す事は出来なかった。

ブレイド「くっ」

アブソープクイーン

ヒュージョンジャック

ブレイドはジャックフォームに強化変身して、強化ブレイラウザーでピーコックアンデットを切り付ける。そして、二枚のカードをラウズした。

キック サンダー ライトニングブラスト

必殺技であるジャック・ライトニングブラストがピーコックアンデットを貫き、すかさず封印して舞湖は元の姿に戻り、ヒビキは顔だけを戻した。

ヒビキ「おいどうした。いつもとちげーぞ」

舞湖「何が？」

ヒビキ「闘い方が微妙だが弱まってる。いつもだったら……」

舞湖「めんど煩い。オレは…私は……」

そこまで言うと、舞湖は力無く倒れた。

マルス「まっ、舞湖さん!？」

マルスが彼女の顔を覗くと、真っ赤に熱を帯びていた。マルスは彼女を背負うと、マシンブレイダーに跨がり屋敷に戻った。ヒビキも遅れてヒビキ号に乗り、帰投した。

屋敷に着けば、弟分でもある子供団が舞湖を部屋に運び込み看病を始めた。

ヒビキ「あーあーあーあー!…ったく、五代と津上と門谷の野郎、

何処に飛ばされたんだよ……!!」

リンク「落ち着けヒビキ。お前がそう狂っても喚わめいても、何も変わりもしない」

確かにリンクの言う通りである。三人がいなくなっても、自分達は自分のやることを精一杯頑張る事だと。ハヤテもそれに同意する。

ハヤテ「僕もそう思います。ですから、あの三人が戻って来るまで僕達が何とかしないと」

ハヤテの言葉に、その場にいた全員が頷く。

アテネ「ところで、佑一と佑井は？」

場所はとある公園。そこは紅葉が綺麗に色付いている公園。その中に、見覚えのある二人がいた。

佑一「たまの休みには、こうやって散歩するのもいいもんだな」

佑井「ふふ。そうね、私も一度ここに来てみたかったのよ」

佑一「ま、モモタロス達は今頃部屋でゴロゴロと……」

佑井「こあら！今は私達二人だけなんだから、モモ達はほっとくの」

佑一「そだったな」

佑井は自らの手を差し出し、佑一はその手を取った。手を繋いだ二人は、周りから見れば見るほど初々しいカップルである。時刻は既に12時を過ぎていた。こ洒落たカフェテラスで二人は昼食を摂ろうとした。

佑一「じゃあ、ミートグラタン単品で」

佑井「ペペロンチーノ下さい」

注文を終え、料理が来るまで外の景色を眺める事にした。目の前に広がるのは、平和、平和、平和しかなかった。

ただ、佑一は何かを感じ取った。今まで感じた事が無い殺気みたいな物である。イメージでもファンガイアでも無かった。料理が運び込まれたので、その殺気が何なのか考えるのを止めた。

佑井「あ、コレおいしい!」

佑一「ああ、美味うまいいな」

食事を終え、会計を済ませてまた二人は歩きだした。

銀杏いちょうに楓かえで、様々な紅葉が宙に舞っていた。そんな秋の空は、澄んだ蒼い色をしていた。

それが、一つの悲鳴で台なしになった。

声のするほうを見ると、人が倒れていた。普通に倒れたのではなく、体が半透明はんとうめいになっていて絶命ぜつめいしていた。その隣では、以前倒したライオン・イメージがいた。しかし、この殺し方はファンガイアならではの殺し方であって、イメージはそういう芸当が出来ない。ということは……。

佑一「おいおい、イメージとファンガイアの合成態かよ」

佑井「でも、なんでこんな事に……」

戦闘に遭うなど思ってもいなかったのも、キバットとモモタロス達は屋敷でお留守番になっている。これだったら、友樹と彩香が一番有利である。

ただその時、どす黒い威圧感をその場にいた佑一と佑井は感じ取った。振り向くと、のっしのっしと威厳のある歩き方をしている一つの影が現れる。

ガノンドロフ「フン、雑魚がノコノコと現れおって。後悔するかい」

ガノンドロフは、右手に闇の塊を溜めていた。それは、魔人拳ではなかった。

ガノンドロフ「……一分だ」

ガノンドロフの発言に、怪人・ネオイマジンは首を傾げた。刹那、ガノンドロフの姿が消えた。いや、見えなくなった。

ズシャアア！！

ガノンドロフの右腕がネオイマジンの胸を貫いていた。程なく、ネオイマジンは爆発四散した。

ガノンドロフ「必殺、ディアフロス魔神掌！！」

佑一と佑井はポカンとした顔で、ガノンドロフを見ていた。すると、

何も言わず見ずその場を去った。

佑井「ガノンドロフさん強かったよね？」

佑一「まあな。なあんか嫉妬しちまうな、あの強さ」

明るい笑い声が、夕陽に照らされていた。

平和は平和であると…。

く づ っ

三十六話 ストレスとデートと戦闘と 11月3日(後書き)

次回は、フォックスとウルフとマキが活躍します。

三十七話 W 11月10日(前書き)

今回はマキシマムドライブ祭です！

三十七話 W 11月10日

薫はルームメイトであり、相棒の佑理の枕元にあつた写真に気付いていた。それは、一見普通の風景画であるが、小さく小さく友樹が写っていた。

それも一枚二枚だけではなかった。ベッドのマットレスの下にも同じ様な写真が数枚あつた。

ビーツビーツビーツ

突然のアナザーセンサーで薫は写真の事を忘れスタンバイする。

ボブ「本屋敷前方にて、アナザー反応あり！ドーパンドと認識！薫さん出撃です！」

薫「久々の出番ね。佑理、スタンバイ頼むわ」

佑理「オツケー」

薫は愛機Wギャリィに跨がり、現場に直行した。その現場は、地面が減り込んでいた。原因は目の前にいる、筋肉隆々の怪人・ヴァイオレンスドーパンドであつた。

薫「行くわよ、佑理」

ジョーカー

Wドライバーを腰にあてると、ベルトになった。

薫「变身」

ドライバーの右スロットにサイクロンメモリが装填されて、薫はジョーカーメモリを左スロットし、展開する。

サイクロンジョーカー

WC^かJ「パワータイプのドーパンドって事ね」

薫はヴァイオレンスの猛攻を風のように避け佑理に愚痴った。すると、佑理は閃いたかのように言った。

WCJ「こつちのメモリを変えて見るわ」

ドライバーを閉じたダブルはサイクロンメモリを取り出し、一つのメモリを取り出して、スロットインした。

ヒート

ヒートジョーカー

緑・黒のWC^{ダブルタイプジョーカー}Jから赤・黒のWH^{ダブルジョーカー}Jにチェンジした。

WHJ「はあああ！」

ドカドカドカドカ

右手に赤い炎を纏わせたWHJは何度も何度もヴァイオレンスを殴った。

そして、ジョーカーメモリを右腰のスロットにセットした。

ジョーカーマキシマムドライブ

すると、ダブルは高くジャンプしたかと思っただけなら突如半分に分かれた。

WHJ「ジョーカーグレネード」

紫の炎を纏ったジョーカーサイドのパンチがヴァイオレンスに当たり、時間差でヒートサイドの赤い炎のパンチが当たりダブルは元に戻った。

WHJ「どうよ？」

WHJ「……っは！そんな……！」

しかし、メモリブレイクされたにも関わらず、多少ボロボロではあるが完全に倒されてなかった。

ルナ

ルナジョーカー

WHJ「これなら！」

ダブルはヴァイオレンスに向けて右ストレートを放った。しかも、その右ストレートはどこぞのゴム人間の様に伸びた。ただし、これはルナサイド限定なので、ジョーカーサイドは伸びない。

ある程度ダメージを与え、またジョーカーメモリを右腰のスロットに入れた。

ジョーカーマキシマムドライブ

またダブルは半分に割れた。

W L J「ジョーカーストレレンジ！」

ルナサイドが伸びる腕でヴァイオレンスを攻撃し、そこにトドメのジョーカーサイドの手刀が決まった。

しかし、またメモリブレイクされてなかった。

W L J「もー、これどういう事？」

すると、いつの間にか検索を終えた佑理が言った。

W L J「あれに使われているメモリはグラウンド・シヨツカー製の物で、そう簡単にメモリブレイクさせてもくれないし、排出させてもくれない。だから、ここはメタルよ」

W L J「オツケー」

ジョーカーメモリを抜き取り、メタルメモリを取り出す。

メタル

ルナメタル

W L M「こーになったら、マキシマムドライブ祭よー！」

メタルマキシマムドライブ

W L M 「「メタルイリュージョン!!!」」

振り回したメタルシャフトから、いくつもの光の輪が形成されて、
ヴァイオレンスにぶつかって行く。しかし、やっぱりそれでもメモ
リブレイクどころか、排出しなかった。

サイクロンメタル

メタルマキシマムドライブ

W C M 「「メタルツイスター!!!」」

風を纏ったメタルシャフトで連続攻撃を食らわしても、まだ排出し
てこない。

ここでトリガーメモリを使う。

トリガー

サイクロントリガー

メタルからトリガーに変えたダブルは、疾風の弾丸でヴァイオレン
スを怯まし、マキシマムドライブに移る。

トリガーマキシマムドライブ

W C T 「「トリガーエアロバスター!!!」」

竜巻型の銃弾がこれまたヴァイオレンスに当たったが全く排出され
なかった。

ヒート

ヒートトリガー

WHT「もう、これで限界よ」

WHT「だったらやるしかないわ！」

トリガーマキシマムドライブ

WHT「トリガーエクスポージョン！！！！！！」

放たれた業火球がヴァイオレンスを包むと、ごうごうと燃え盛り火が止むと、やっぱりまだ排出されなかった。

WHT「ちよっ、どんだけー！」

もう我慢の限界なのか、トリガーマモリをトリガーマグナムに差し込む。

トリガーマキシマムドライブ

そして、薫がヒートメモリを抜き取り、右腰のスロットに差し込もうとしたその時、佑理が必至になって止める。

WHT「駄目よ！ツインマキシマムは危険よ！！」

WHT「ゴメン！もうこれしかないの！！」

佑理の制止を払い、ヒートメモリを薫は右腰のスロットに入れた。

ヒートマキシマムドライブ

WHT「やめてええええ!!!」

WH「ハアアアアア!!!」

トリガーマグナムから放たれた、異常な程の熱を持った炎の光線がヴァイオレンスを包み、火が消えるとメモリが青年から排出された。ダブルは変身が解け、薫は地面に倒れ込んだ。

く づ っ

三十七話 W 11月10日(後書き)

感想お待ちしております！

では！

三十八話 狐とファイズと狼 11月29日(前書き)

今回はフォックスとウルフとマキノファイズしか出ません

三十八話 狐とファイズと狼 11月29日

フォックス「大丈夫か、マキ！」

ファイズ「大丈夫よ！」

ウルフ「ちい！何でプリム100体出るんだよ！」

今日のアナザー反応はまさかのプリム100で、しかもメタルプリムからジャイアントプリムするなど、プリム全種100体であった。

ファイズ「もう……………こーなったら」

ファイズは、ファイズブラスターを取り出しコードを入力する。

スタンディングバイ

そして、ファイズフォンをセットする。

アウェイキング

ファイズはブラスターフォームに強化変身した。すかさず、コード103を入力した。

ブラスターモード

ファイズ・B「でえりゃあああああ！！！！」

100体近くのプリムの大群にファイズブラスターから放たれる紅

マキが驚くのも無理は無い。ウルフが自らが他人の力（変身アイテム）を渡せと、貸せと言ったのだ。

しばらくマキは躊躇ったが、ベルトとフォンを渡した。早速ウルフはベルトを巻いた。

ウルフ「コードは555だったな」スタンディングバイ

ウルフ「変身！」

コンプリート

フォトンストリームの光が、ラインがウルフを包んだ。変身は成功した。ファイズに変身が。

ファイズ「着心地抜群だな」

ファイズは己の拳をクラタウにぶつけた。一発二発三発とパンチを浴びせ、蹴りを何度も何度も浴びせる。

ファイズ「留めだ」

ファイズはミッションメモリをファイズポインターにセットした。

レディ

ファイズポインターを右足に固定し、ファイズフォンのエンターキーを押した。

エクシードチャージ

ファイズ「はっ！」

ピシュン

クラタウ「!?」

右足から出たドリル状のエネルギーがクラタウを拘束した。ファイズは飛び上がると右足を前に突き出し、ドリルの中に入った。クリムゾンスマッシュが決まると、クラタウは消滅した。負傷し気絶していたフォックスは、オートバジン・ロボモードに抱えられている。

ウルフ「これ、今のうちに返す」

マキ「ありがとう」

ウルフ「……………いつも、ああやって戦っていたのか？」

マキ「……………まあね」

ウルフ「そうか……………」

くづつ

三十八話 狐とファイズと狼 11月29日(後書き)

御感想、お待ちしております

三十九話 オーズとメダルとグリッド 12月3日(前書き)

新妄想OP

Anything Goes!

by五代友樹

妄想戦闘曲

Tears

byピースエターナル

三十九話 オーズとメダルとグリッド 12月3日

マスター「皆いるか、緊急会議だ!!」

ある昼下がり、メンバー達は突然マスターハンドに呼び出された。いつの間にか用意された会議室に友樹と彩香と慎吾以外その場にはいなかった。

マスター「会議を始める前に、グランド・シヨッカーから私達宛てのビデオメール……つまり、メッセージが昨夜私の部屋に置いてあった」

そのマスターの発言でメンバーは驚愕するしかなかった。取り合えず、今すべき事はグランド・シヨッカーからのビデオメールを観るだけであった。

モニターには豪華な椅子に座る白い服を着た青年とその脇に虫の怪人、魚の怪人、猫のような怪人、そしてゴツイ体の怪人が映っていた。

ダクマ<や、久しぶりだねスマブライダーズの諸君。僕はン・ダクマ・ザバ、グロンギの帝王にしてグランド・シヨッカーの大首領さ>

そう、中央にいたのは友樹が地の石によってさらわれる際にいたあのクウガに似た怪人で、そこにいるのは人間体である。

ダクマ<まずは、新しい幹部の御紹介だ。まずは昆虫系怪人幹部のウヴァ君>

ウヴァと呼ばれた怪人は腕組みをして壁に寄り掛かっている。

ダクマ<次に、水棲系怪人幹部のメズールちゃんと俊敏動物怪人幹部のカザリ君>

メズール<ふふふ>

カザリ<……………>

ダクマ<そして重量系幹部のガメル君>

ガメル<スマブラライダーズ…………たおす……………>

四体の紹介が終わった所でダクマがまた口を開く。

ダクマ<グリードと言う怪人は、僕達グロンギより後輩だけどね、今まで君達が相手した怪人達よりも強いよ?>

マリオ<なんつーこった……………>

ルイージ<うっそ……………>

ダクマ<まあ、君達リント達には敵わないだろうね。しかし、これはある意味ゲゲルであることに間違いは無いよ>

カービィ<リント……………?>

ポポ<ゲゲル……………?>

さらにモニターに映っているダクマは続ける。

ダクマ<クウガの彼には別の世界に飛ばせて頂いたよ。尤も一緒にいた彼女さんとお友達も一緒だけだね。でも、君達は彼がいなくても大丈夫だし、こっちも用心しとかなきゃね>

スネーク「頭に来る奴だな」

ダクマ<色々いいたい事はあるけど、ここまでにしとくよ。じゃ、そーゆーこと>

映像はそこまで終わった。

メンバー達は新たな怪人の登場による不安とダクマからの挑発による怒りが見て取れる。

ビーツビーツビーツ

ばつが悪い時にアナザーセンサーがなった。全員外に出ると、ミイラのような怪人が二百体近くこちらに近付いてきた。それもグロンギ・アンノウン・ミラーモンスター・オルフェノク・アンドレッド・魔化魍・ワーム・イマジジン・ファンガイアそしてドーパンドとは違う。

マスター「まさか……ヤミー……?」

ガノンドロフ「ヤミーだと……」

マスター「ヤミーは人間の欲望から生まれた怪人で、グリードがセルメダルを肥やすために作った怪人だ」

ネス「ざっくり言っちゃうと自分のエネルギー原を作る怪人だって事だね」

マスター「ま、そのとおりではある。マリオ、お前に渡したい物がある」

マリオ「何が？」

すると、マスターとマリオの間に変身アイテムのオーズドライバーとオーズキャナーと三枚のコアメダルが表れた。

マリオ「こいつは……………？」

マスター「仮面ライダーに変身するためのアイテムだ。今こそ変身するんだ、仮面ライダー^{オーズ}OOOに……！」

マリオはマスターからセッター一式を授かると、ベルトを腰にセットして両端にタカコアとバッタコアをセットし中央にトラコアをセットしてドライバー傾けてオーズキャナーでコアメダルをスキャンした。

マリオ「変っ身！」

タカ　トラ　バッタ！　タ　ト　バ！タトバ　タ　ト　バ！

歌のような電子音が鳴ると、マリオは仮面ライダーOOO・タトバコンボに変身した。

オーズ・タトバ「やつぷー！やつてやんぜー！！」

メンバー「オーー！！！！」

オーズに連れられ、ライダーズも変身の構えを取る。

シンジ「変身！」

スタンディングバイ

マキ「変身！」

コンプリート

舞湖「変身」

ターンアップ

響鬼「ハッ！」

舞「変身」

ヘンシン

カブト・M「キャストオフ」

キャストオフ

チェンジビートル

M・佑一「変身！」

ソードフォーム

佑井「キバット！」

キバット「おっしゃあ！キバって行くぜえ！ガブツ！」

佑井「変身」

カメンライド…

大樹「変身！」

ディエーンド

フアング

ジョーカー

佑理& amp・薫「変身！」

フアングジョーカー

龍騎ダブルアジターカーからWFJまで戦闘体勢を取った。

オーズを戦闘に、ライダーズやファイター達も攻撃を仕掛けた。

電王・S「俺参上！！！」

Cファルコン「ファルコンキイイイイック！！！」

ハヤテ「疾風蹴り！疾風掌！疾風の舞！！！」

ヒナギク「政宗えええええ！！！！！」

オーズ・タトバ「セイヤアアアアアア！！！」

それぞれが己の技をヤミーにぶつけると同時に、大量のセルメダルが溢れ出て来た。

電王・S「よっしゃあ！！又ゴツ！」

電王・Sに突然現れたジークとそれぞれ応戦していたウラ・キン・リュウが一気に集まって超電王に強制変身した。

超電王（ワッ！またトリサンがくつついた〜）

超電王（行くぞ下臣ども）

超電王「かぁー！っ！！馬鹿が！くつついてんじゃねえ！！」

超電王（んな事やってないで、攻撃開始だ！）

超電王「ヨツシャアア！行くぜ行くぜ行くぜ！！」

超電王の後方では、ヤミーを蹴り飛ばしているキバがいた。

キバ「キバツト「キリがねえなあ……………」」

確かに、最初は100体近くいたのに、一向に減っては無かった。

キバ「バツシャーで行くわよ」

キバツト「よっしゃ！バツシャーマグナム！」

キバットにバツシャーフェッスルを口に噛ませたキバの右手に緑の石像が拳銃に変わり手中におさまった。右手と胸、そして目が緑色に変わり、キバ・バツシャーフォームにフォームチェンジした。

キバ・B「でえりやりやりや！！！！！」

チャリンチャリン

バツシャーマグナムの銃弾が次々に当たり、セルメダルが辺りに散らばる。

ここでドツガフォームにフォームチェンジして、ドツガハンマーでヤミーをめった打ちにしていく。

キバット「ダアーツ！全然減る兆しがねえ！」

その時、キバ・Dの背中を脱皮して成長したカラスヤミーに攻撃されてしまい、元の基本フォームに戻ってしまった。

超電王（佑井！！）

超電王「佑一落ち着け！まだ死んじやいねえ！！」

カラスヤミーを筆頭に、次々にヤミー達が脱皮して各々の姿に変えていった。

キバット「佑井！ドガバキで行くぜ！！」

キバ「もうそれしかないよね？」

キバは立ち上がると、ガルル・バツシャー・ドツガフェッスルを次

々にキバットに吹かせた。

キバット「ガルルセイバー！バツシャーマグナム！！ドツガハンマ
ー！！！！」

三体のアームズモンスターが纏まってキバの周りに集まった。
ガルルの石像が左腕に、バツシャーの石像が右腕に、そしてドツガ
の石像が胸に吸収された。

キバ・DGBK「ハアアアアアア！！！！」

ドガバキフォームが、今ここに現れ、その咆哮をあげた。右手に握
ったバツシャーマグナムと左手に持ったガルルセイバーで、キバ・
DGBKは攻撃を再開した。

オーズ・タトバ「おわっ！何かすっげえ体！でもま、こっちの扱い
も分かったからやってみつか！」

オーズはトラコアをカマキリコアに変え、オースキャナーでスキャ
ンする。

タカ カマキリ バッター！

オーズは亜種コンボである、タカキリバにコンボを変えた。

オーズ・タカキリバ「カマキリ斬！」

しかし、未だにヤミーは減ってはくれなかった。

ファングマキシマムドライブ

WFJ「ファングストライザー!!」

ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ デイエンド

ディエンド「ハッ!」

フォックス「ランドマスター!!」

ファルコ「こんなもんより、俺は空がいいぜ!!」

ボブ「拡散ビームモード!!」

ウルフ「こいつで遊んでやる!!」

ルカリオ「波動の力を見よ!」

レッド「行くぞ!三位さんみ一体いったい!!」

ワリオ「ニンニク食べて」

ぼわんっ!

ワリオマン「ワリオマン!!」

リュカ& amp・ネス「PKサイキックスターストーム!!」

G & amp・W「オークトパス!!」

リンク「行くぞトウーン!!」

トウーン「うんアニキ！」

リンク&トウーン「トライフォースラッシュュ！！！！」

アイク「だあいつ！てんつ！！くうつ！！！！」

メタナイト「見るがいい！！」

ファイター達も最後の切り札を使うが、未だに減ってはいない。

すると、デイエンドがディケイドの強化ツールであるケータッチのデイエンド版を取り出した。

デイエンド「ここで決めてやる」

デイエンドはクリアカードを装填してライダーマークをタッチする。

G 4 リュウガ オーガ グレイブ 歌舞鬼 コーカサス ネガ電
王 アーク スカル

そしてデイエンドは自信のライダーマークをタッチした。ファイナルカメンライド デイエーンド

そしてケータッチをベルト部分のバックルにセットした。胸の所にG 4からスカルのライダーカードが表れ、最後にデイエンドのカードがデイエンドの頭部に表れた。これぞデイエンド・コンプリートフォーム。

デイエンド・CF「出血大サービスだ。デイエンド・コンプリートフォーム、目標を狙い撃つ！！」

ディエンドはディエンドライダーに特別なカードを装填した。

アタックライド 劇場版

空中に向けたディエンドライダーからG4、リュウガ、オーガ、グレイブ、歌舞鬼、コーカサス、ネガ電王、アークそしてスカルが姿を現した。

そして、それぞれのライダー達が必殺技の体制に入った。

ファイナルベルト

エクシードチャージ

ライダーキック

フルチャージ

ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ デイエンド

スカルマキシマムドライブ

リュウガ、オーガ、コーカサス、ディエンドCF、スカルの電子音が鳴ると同時に、キックする者は高く跳び、また別の技を放つ者は必殺技の構えを取った。

そして、ヤミー達に技がぶつかる。ヤミー達のいた場所は、大きくえぐられていた。

オーズ・タカキリバ「おっしゃあ！緑のコンボでいっくぜえ！！」

オーズ・タカキリバはタカコアをクワガタコアに変え、オースキヤナーで読み取った。

クワガタ カマキリ バッタ！ ガータ！ガタガタキリバ！ガタカリバ！！

オーズ・ガタカリバ「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

オーズが叫ぶと同時に、オーズの分身が増えた。それも十体所では無く、百体近くであった。それから、三時間かかり……。

カービィ「みんなあ！コックを使うよお！！」

それを聞いたメンバー達は一目散にそこを避難した。

カービィは口の中に隠し持っていたスマッシュボールをファイナルカッターで叩き壊した。

カービィ「さあてヤミーさあん。食材になれええええええええええええ！！！！」

カンカンカン

カービィの最後の切り札・コックの大鍋に、吸い寄せられる様に次々にヤミー達が飲み込まれていった。

カービィはその鍋に楽しく料理をするかの如く、塩コショウを振り掛け、鍋を掻き交ぜていた。

カービィ「ハイっ！おーっわりっ！！！！」

そして、大鍋から食べ物と化したヤミーが出て来た。人の欲望から出来る怪人が、料理に変わるなど、古今東西例はない。残った鍋の中にはセルメダルが一杯に溜まっていた。

カービィ& amp ;ヨッシー「いったただつきまーっす！」

元は怪人だった料理は、一瞬の内に二つの大食いの胃の中に消えた。というか消化されたのだ。

そして、ここで新たな仮面ライダーが誕生した。仮面ライダーOOOが、大地に立ったこの日が、マリオを変えたのだった。

く づ っ

三十九話 オーズとメダルとグリッド 12月3日(後書き)

新妄想ED

Treasure Sniper

by 黒坂大樹

雑談 クウガ編(前書き)

雑談です。

雑談 クウガ編

五代雄介「どうも！2000の技を持つ男、五代雄介です！」

小野寺ユウスケ「その五代さんみたくライジングやアメィジングに
すらなれないけれども、一生懸命頑張ってる小野寺ユウスケです」

五代友樹「作者のオリキャラの五代友樹です。決して《ともき》で
はなく、《ゆうき》ですのであしからず」

それでは、雑談&質問のコーナーを開始します。
まず最初の質問です。

雄介「何でも来い！」

問い1：得意料理は何ですか？

雄介「それ聞いちゃう？」

友樹「僕は、基本的に和食ですね」

ユウスケ「オレはカレー……かな？」

雄介「俺もカレー。昔お雑煮カレー作った事があるんだ」

友樹「何ですかそれ」

雄介「よくぞ聞いてくれました！お雑煮カレーとは、カレーライスの中にお餅を入れるだけなのだ！！」

ユウスケ「へ、へえ〜？」

問い2：クウガで変身出来て、何か利点って出来ました？

雄介& amp ;ユウスケ& amp ;友樹「「皆の笑顔！」」

問い3：特に関係等はありませんが、学生時代の思い出をお聞かせ下さい。

雄介「あゝ、旅？」

ユウスケ「オレは友達と遊びほうけてた方かな。友樹は？」

友樹「中二の時にクウガになったんで、これといって大した思い出ありませんよ」

ユウスケ「……………聞いたオレが馬鹿だった。ゴメン」

雄介「あ、そういえば聞いて聞いて」

ユウスケ「はい」

友樹「何ですか？」

雄介「俺って昔……ってか8才の時爺ちゃんと一緒に外国行って、で現地の山で迷っちゃって。そんな時、案内人の村の子供が平気な顔をしてたんだ」

友樹「ある意味それが凄い思い出ですね」

問4：今まで倒した怪人の中で、最も厄介かつ憎い怪人は？

雄介「未確認生命体第三号こと、ズ・ゴウマ・グ」

ユウスケ「十面鬼ユム・キケル」

友樹「リターンガミオ」

ユウスケ「えっ？ガミオのリターン？」

友樹「ええ。とにかく攻撃しても回復してきて……………」

ユウスケ「こつちにはそんな未確認いなかったしな。でもゴウマは最初神父さんかと思ったら、後で何かを取り込んだ時に妙に若返った雰囲気が出てたんだ。友樹君はゴウマに会ったことは？」

友樹「あまり無いですね」

ユウスケ「こつちは、烏天狗みたいなグロンギ出てもう大変だった」

問い5：同性でパートナーといえる人物はいますか？

雄介「一条さん！」

ユウスケ「土かな。何だかんだ言っていていいやつだし」

友樹「リンクとハヤテかな？後門谷君」

問い5：異性で親しいといえる人は？

雄介「友人関係だけど、沢渡桜子さん」

ユウスケ「夏海ちゃん？でも八代の姐さんはそれ以上?!」

友樹「彩香一筋です！」

問い6：最後ですが、自分は今誰かの笑顔を守っていると思えますか？

雄介& a m p : ユウスケ& a m p : 友樹「」「」思ってます!」「」「」

くづつ

雑談 クウガ編（後書き）

次回はキバの三人です。

四十話 WARP 1月10日

佑一と佑井は、ゲンから手渡された個別トレーニング用紙を広げ、内容を確認していた。

しかし、これはもともと友樹が行っていた修行メニューだと知ると、今更だが恐怖さえも感じていた。

佑一「腕立て伏せ300回にスクワット200回は当たり前……」

佑井「どおりで友樹がリンクと同じ位強い訳だわ」

先程軽い運動した二人は、その用紙を見ていたのだ。ヒビキに関しては、ゲンの弟たる人物が個別に訓練をしていたのだった。

ヒビキ「おい！魔化魍とイマジンとファンガイアだ！」

ヒビキに呼ばれて初めて気付いた二人は、ライナーバイクとキバードに乗り、ヒビキ号に跨がっているヒビキの後を追った。

到着すると、魔化魍の河童を筆頭にモールイマジンとドッグファンガイアが既に街に侵入しており、手当たり次第物を壊し、非力な人を殺していた。

佑井「酷い……………」

佑一「友樹が見たらどれだけ悲しむか……」

ヒビキ「それは関係ねえっての」

ヒビキは真っ先に変身し、河童に攻撃を仕掛けていた。

佑一はデンオウベルトを巻き、ケータロスを取り出す。ジークが加わったせいか、ボタンが一つ増えていた。

モモ ウラ キン リュウ ジーク スーパークライマックスフォーム

デンオウベルトのバックルにセットして、パスをタッチした。

黒いオーラスキンの上に強度が増した赤いオーラアーマーが着いた。右肩のロッド、左肩のアックス、胸のガンそして背中中のウイングの電仮面が装着されると、ソードフォームの電仮面が顔にセットアツプされ、二度リ・バースされて超電王に変身した。

超電王「俺達、クライマックスに参上！」

佑井「キバット！」

キバット「おっしゃあ！キバって行くぜ！がぶっ！」

佑井「変身」

キバット「ガルルセイバー！バツシャーマグナム！！ドツガハンマ
ー！！！！」

キバ・DGBKに超電王は、ドッグファンガイアとモールイマジ
ンに攻撃を開始した。

響鬼は装甲響鬼に強化変身して、河童に装甲演舞を繰り出して、早
々に決着が付き被害に遭ってる人々に助けを出した。

超電王「必殺、俺の必殺技ア！」

チャージアンドアツプ

胸のガンの電仮面が開き、幾つものミサイルがモールイマジンに激突した。

キバ・DGBKはドッグファンガイアにガールル・ハウリングスラッシュを叩き込んだ。

超電王「何なんだよ！このイマジン、モグラヤローにしちゃあ強すぎってのー！！」

超電王（落ち着け、下臣其の一。ここは頭を使え）

超電王「アンダと手羽先！」

超電王（いい加減にしろ！！こうなったら最大技で行くぞ！）

超電王「よっしゃあ！行くぜ行くぜ行くぜ！」

フルチャージ

チャージアンドアップ

超ボイスターズキックが直撃し、モールイマジンを破壊した。

キバット「ウエイクアップ！」

キバ・DGBK「ハアアアアアア……………はあっ！テリヤアアアアアアアア！！」

ダークムーンブレイクの改良型・ドガバキムーンブレイクがドッグファンガイアに炸裂し、ドッグファンガイアはステンドグラスの破

片と化した。

三人と五体のイメージズは被害者を助けていた。

ヒビキ「これで全員か？」

佑一「ああ」

佑井「さてと、そろそろ」

三人がバイクに近付くと、灰色のカーテンが表れ、イメージズとヒビキ号に乗ったヒビキ、ライナーバイクに乗った佑一、そしてキバットとキバードに乗った佑井を包んだ。

く づ っ

四十一話 昭和ライダー軍団集結 1月29日(前書き)

今回でヒビキ達が帰ってきます

それと今まで出なかった昭和ライダー軍団が出ます。

四十一話 昭和ライダー軍団集結 1月29日

スマブライダーズの内、六人のライダーが灰色のカーテンによって何処かの世界へ送られてしまった。

そこを狙ってグラランド・シヨッカーは多勢で攻めて来ると判断したマスターハンドは、ある決断を下した。かの伝説のライダー軍団を呼ぶことにある。

ライダー軍団とは、おおとりゲン・一号と五代エツオ・ブラックRXを含めたライダー達のことである。

マスター「状況が状況なだけに……………やるしか無いか……………」

それは、まだ日が明けて間もない頃だった。

リンクは、ゲンとエツオと共に数名の男達が屋敷に現れた時、たまたまフロアの掃除をしていた。
数分経って、今いる全員を集めこの男達が紹介を始めた。

三郎「兄さんが友樹君から聞いているかな？弟のおおとり三郎。またの名を、仮面ライダー二号」

直樹「かみみ風見直樹。なみき仮面ライダーV3だ」

丈「タチ夕霧丈だ。ライダーマンを担当している」

ピット「ライダー……………マン？」

丈「ああ。俺は先輩や後輩みたくベルトじゃなくて、ヘルメット被つて、右腕こゝれのアタッチメントを変えて戦う。因みに右腕は義手だ。経緯は聞かないでくれ」

弧悟郎「沖田弧悟郎おきた こうぶろうです。Xライダーに変身します。これでも、元FBIです」

スネーク「というと、アメリカで御活躍に？」

弧悟郎「ええ。まあ、Xライダーになってから、辞退しましたけどね」

盛男「オレ……仮面ライダーアマゾン……名前……郷田盛男ごうた もつと。…みんなトモダチ」

茂雄「俺は城島茂雄しじま しげお。仮面ライダーストロンガー！」

次郎「鷹次郎たか じろう。スカイライダー」

豪気「河州豪気かしゅう こうき。仮面ライダースーパー1」

武雷戸「野網武雷戸のあ ぶらいこ。仮面ライダーZX」

悟郎「乾悟郎せきごろうです。仮面ライダーシン」

之貞「真田之貞まいた のぶ。仮面ライダーZO。乾悟郎義兄さんとは義兄弟」

典之「五代典之。仮面ライダー」。友樹の伯父で、エツオ兄さんの弟」

そろそろと紹介が終わった12人は、しばらくはスマブラライダーズと交流を深めることとなった。長年闘ってきた人の体験も、聞いた方が経験がいくらか積めると、マスターは最初から計画していたのだ。

典之「君が友樹の友人か」

リンク「初めまして、リンク・ヤマトです」

ハヤテ「綾崎ハヤテです」

握手を求めたハヤテはこのあと、何度か女と間違われたか言うまでも無い。

典之「いやあ、済まなかった。所で、友樹は今何処にいるんだい？」

リンク「友樹は、何処か別の世界に飛ばされました」

ハヤテ「最初は友樹を含めた三人でしたが、また三人ほど……」

しかし、その時だった。

アナザーセンサーが反応し、ボブが告げる。

ボブ「イマジン接近イマジン接近。数は300」

ゲン達は、意気揚々と体を馴らし外に出てゆっくりと近づぐイマジン達を見る。

先に、ゲンとエツオが変身した。

典之「変身！」

ゼラロス
ZX、シン、ZO、そしてJも参戦する。

ライダーズも変身しようとするが、マスターから「今回は、先輩方の戦いを見る」というのだ。

すると、空が割れて、中から以前友樹とゴモラが倒した量産型のメカキングギドラが現れる。

J「俺の順番だ」

リンク「何故です？やつは50メートルもあるんですよ！？」

J「まあ見てなって」

Jは右手をJの形にして、Jパワーを貯めた。

瞬間、彼の体はみるみる内に巨大化して、量産型メカキングギドラに立ち向かう。

マスター「ライダーJのJはジャンボのJだからな」

Jは、己の拳を何度も何度も量産型メカキングギドラに叩き込んだ。ついには風穴が開き、爆発することなく絶命した。

Jは元の大きさに戻ると、先輩方の方に援護しに行った。

一号「行くぞ三郎！」

二号「ハイ兄さん！」

二人は、変身のポーズを取り、高くジャンプした。

一号& amp; 二号「ライダー・W・キイイイック!!!」

V3「逆ダブルタイフーン!!!」

ライダーマン「やあ！」

X「Xライダーキック！」

アマゾン「大切断!!!」

ストロンガー「電キック!!!」

スカイライダー「スカイライダーキック!!!」

スーパー「スーパーライダーキック!!!」

ZX「ゼクロスキイイイック!!!」

ブラック・RX「ライダーキイイイック!!!」

シン「ウラアアアア!!!」

ZO「トオオリヤアア!!!」

J「Jライダーキイイイック!!!」

それから数分も経たない内にイマジンは消え去った。同時に、灰色のカーテンが現れて、ヒビキ、佑一、佑井そして土が現れた。

士「久々だな。所で友樹いるか？あいつの作ったケーキが食いた
ってやつがいるんでな」

ピーチ「彼はまだ別の世界に飛ばされていないけど、丁度作ってお
いた私のケーキを持ってって」

士「礼をいう。じゃ、またな」

ピーチからケーキの入ったバスケットを片手に、灰色のカーテンに
入って行った。

その後、いなくなっていたヒビキ達と昭和ライダー軍団の自己紹介
があったそうだ。

く づ っ

四十一話 昭和ライダー軍団集結 1月29日(後書き)

次回の前書きにて、妄想オープニングの映像(?)みたいなことを
します。

四十二話 アイクBLADE 2月9日

アイク「オレは……」

アイクは悩んでいた。最近アナザー討伐する度に、やり切れない思い等が募る。グロンギからグリードまでの怪人や、死んでいった亜空軍の精鋭等が今は脅威でしかない。

どれ程アイクが強くなるかと、どれ程アイクが人を助けようとも何が変わる？何も変わらないのが関の山だ。

舞湖「肉助、何やってるの？」

アイク「アイクだ」

舞湖が原っぱに佇んでいたアイクの隣に立つと、その場でねっころがった。

アイク「……………何してんだ？」

舞湖「前に友樹から教わった。わかんない時はねっころがって、何も考えない方がいいって」

アイク「……………そうか？」

納得いかない。そう感じたアイクだった。腰を降ろしたアイクは舞湖に話し掛ける。

アイク「どうしてライダーになろうとしたんだ？」

舞湖「……んー最初は高校中退して、それで丁度BOARDってとこから、求人があったの。年齢問わず。中卒オツケー……って感じで」

アイク「……そうか」

舞湖「なんとかランク上げて、ブレイドのカードとバツクルを貰ったの」

アイク「そして、慎吾と会った訳か」

舞湖「そんな時はいろいろとゴタゴタとしててさあ」

アイク「それ以上は聞かないでおこう」

二人は、しばらく青空を眺めていた。一羽の鳶とんびが空で円を描いて飛んでいた。

アイク「……鳥は自由だ。何も考えないで空を飛んでいる」

舞湖「空…飛びたいの？」

アイク「……ああ。一度でもいい」

舞湖「ブレイドのジャックフォームなら飛べるよ」

アイク「案外サラリと言うんだな」

その時だった。スタルフォスが三体も現れ、攻撃を仕掛ける。すぐさまラグネルを構えるアイクと、ジャックフォームに変身する

舞湖。

アイク「さあて。どっちが多く倒すか勝負だ。負けたら、明日一日勝った方の言うことを聞く。それでいいか？」

ブレイド「乗った！」

アイクは、両手剣・ラグネルを片手で振り落とすが盾で防御された。しかし、アイクも馬鹿では無い。スタルフォスの胴はがら空きで、そこを目掛け左足で蹴り付ける。

体勢を崩したスタルフォスにアイクは必殺技を叩き込む。

アイク「天・空！」

先程の何かに迷っていたアイクとは別人。迷いの無いキレがいい天空が決まった。

一方、ブレイド「J」は、強化型ブレイラウザーで盾を持っている腕ごと切り落とした後、二枚のカードをラウズした。

サンダー スラッシュ ライトニングスラッシュ

必殺技・ジャックライトニングスラッシュがスタルフォスの胴を薙ぎ払う。

アイク「後一匹」

ブレイド「J」貰った！」

切り掛かったブレイド「J」だが、弾き返されてしまい、隙を付かれてしまい、変身が解かれた。

舞湖「そんな！」

ブレイバツクルは今、アイクの足元にあった。
スタルフォスは無慈悲にのっしのっしと舞湖に向けて歩を進む。握
っている剣も鋭く、彼女の頭部も簡単に真つ二つだ。

アイクは、ブレイバツクルを拾い、チェンジのカードをセットし腰
に付けた。帯が出るのを確認して、左手を引き右手を左斜め上に伸
ばし、叫ぶ。

アイク「変身！」

ターンアップ

ブレイド「ぬうん!!」

ブレイラウザーとラグネルを器用に両手で使い、スタルフォスに切
り掛かる。

マグネット

ラウズしたマグネットのカードでスタルフォスの武器一式を奪う。
ラグネルを地面に突き刺し、ラウズアブソーバーにクイーンのカ
ードをセットする。アブソーブクイーン

そして、禁断のキングのカードをスラッシュする。

エヴォリユーションキング

十三体のアンデットの融合による仮面ライダーブレイド・キングフ

オーム爆誕!!

ブレイド・K「……オレは強くなる!」

専用武器キンググラウザーを右手に持ち、スタルフォスに挑む。

スピード10

スピードJ

スピードQ

スピードK

スピードA

ロイヤルストレートフラッシュ

ブレイド・K「デエリアアア!!」

五枚のオーラカードを潜り斬激型のロイヤルストレートフラッシュをスタルフォスにたたつ斬る。

アイク「あたたた……」

ブレイドから変身を解いたアイクは、体に走る激痛に負け、地面に大の字に倒れる。

アイク「つてー!」

舞湖「大丈夫?」

アイク「ああ。それより、約束だ」

舞湖「何が？」

アイク「どっちが多く倒した方が勝ち。負けたら勝った方の言うことを聞く」

舞湖「そうだった……」

アイクは、舞湖のブレイバツクル一式を取って懐にしまい、言う。

アイク「明日一日中、子供団と一緒にいる。それで、オレが明日一日中代役ブレイドだ！」

舞湖「……」

唐突過ぎて、アイクが何を言ったのか理解出来ない舞湖。話を纏めると、アイクは舞湖に明日一日中休んで貰いたいそうさだ。

アイク「マスターには、オレが進言しておく」

舞湖「で、でも今日みたいにまた体中痛くなるよ？」

アイク「気にしない。これでも鍛えている」

舞湖「……はあ……ホントに馬鹿ね」

二人が帰った時に、子供団が舞湖に飛び付き、じゃれあっていた。アイクはマスターを見付けると、舞湖を明日一日中休みにしてくれと進言したそうさだ。

くづつ

雑談 キバ編（前書き）

今回はキバ繋がりの雑談です。

といっても一ページぐらいですけど

雑談 キバ編

渡「僕は紅渡！」

ワタル「僕はワタル！」

佑井「そして私は作者のオリキャラ紅佑井」

渡「でー、五代さん達見たく、質問等はありませんが、もー僕らだけでやつちまおうと」

ワタル「その前にキバット達は？」

佑井「入浴中よ。【仮面ライダーキバ】本編で渡さんのキバットがお風呂入ってるシーンがあったから、そっちに移したって訳」

ワタル「蝙蝠風情が…」

渡「ワタルくん。どうしてそんなドSになっちゃうのかなあ？」

ワタル「僕だつてまだ中学生ですよ？ファンガイアの王族だから、学校生活なんてデイケイド本編で語られて無いし、もうホントにどうでもいい感じですよ」

佑井「ブラックな考えはやめてね？」（ワタルに笑顔）

ワタル「…！？…そんなに…見ないで下さい…」

渡「わー、一撃」

佑井「でももう私は相手がいるんです」

ワタル「:orz」

渡「ガツカリしたの!」

佑井「えーっと、ここで作者が「別のライダーに変身出来るアイテ
ム置いておくから、自由にやっちゃって」って」

渡「一度変身して見たかったんだあ」

スタンディングバイ

渡「変身!」

コンプリート

渡「ファイズ「おー!」

ワタル「一度なってみたかったんですよ、ユウスケ見たく。変身」

ワタクウガ「ユウスケの感覚が分かります。いつもこうだったん
ですね、ユウスケって」

佑井「えーっと……これ。変身!」

ターンアップ

ワタクウガ「ブレイド……イクサの敵いいいい!!!!」

佑井ブレイド「え？えええ？」

ワタクウガ「死iiiiiiiiねえええ！！！」

渡ファイズ「やめなさあああああ！！！」

少々お待ち下さい

渡「いい加減にしなさい！変身してるのは、カズマじゃなくて佑井ちゃんですよ」

ワタル「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！！」

佑井「いいのよ、大した怪我も無かつたし。それに、私達は同じキバでしょ？」

ワタル「ごめんなさい。もう中学生なのに……」

渡「でも佑井ちゃん。ライダー大戦の時はごめんね？」

佑井「全然気にしてませんよお。それで今のライダーズが出来て、ファイター達と会えたんですから」

渡「だといいんだけど……」

ワタル「でもそっちのライダー対戦で、僕が体験したのと幾分平和ですね。こっちは消滅エンドでしたよ」

渡「まあ、ディケイド冬映画の時に皆復活したからいいじゃない」

佑井「そんなこんなでもう時間だそうですね」

渡& a m p ;ワタル「早っ!」

佑井「お疲れ様でした!」

く づ つ

雑談 キバ編（後書き）

出来れば感想とかお願いします

四十二話 春一番と雛菊とひな祭り祭 3月3日(前書き)

今回は、カブトの春一番が見れます。

四十三話 春一番と雛菊とひな祭り祭 3月3日

春爛漫な季節。今日は町ではひな祭り。しかし、屋敷ではヒナギクの誕生日パーティーで大忙しなのだ。

飾り付けは、歩とアテネが取り仕切っている。しかも、ひな祭りでもあるから、余計女性陣が張り切っていた。そのわきに……。

ガノンドロフ「……いづらい……」

デデデ「せやな。ほんまややわ」

クッパ「我輩、今日一日何処か消えるとするか」

Cファルコン「ポレポレに避難するか？」

ひな祭り縁が無いオッサン共は、一路ポレポレに避難するのだ。た。

一方ハヤテとヒナギクはと言うと、駅を乗り継いでとあるショッピングモールに来ていた。

ヒナギク「どうして今日はハヤテしか構ってくれないの……」

ハヤテ「(サプライズでパーティーするためだなんて、口が裂けても言えないや)でもいいじゃない。今日はショッピングと洒落込もつよ」

ヒナギク「…ハヤテが洒落込むって言葉使っなんて、なんか珍しいわね」

ハヤテ「まず映画見ようか？」

ヒナギク「そうしましょ」

そして二人は、ショッピングモール内のシネコンに行くことになった。

現在上映されているのは、【バディ・相棒】 【劇場版ガダム00】 【モンスターハンター ～アルバトリオンの勇者～】 そして【ウルトラマン対メフィラス軍団】である。

ヒナギク「あ、この映画の俳優大好き！」

ヒナギクが差したのは、【モンスターハンター ～アルバトリオンの勇者～】で主役を演じる「西条 大和」である。彼の演技は実年齢22歳とも思えない程の素晴らしさだという。

ハヤテ「ふうん」

ヒナギク「素っ気ない反応ねえ……」

ハヤテ「そうかな？取り合えず、チケット買うからさ、ドリンク買ってきてくれる？」

ヒナギク「オツケー。何飲む？」

ハヤテ「ウーロン茶」

ヒナギク「分かった」

そして、上映時間となり席に着いた。パンフレットをよく見ると、2時間半の上映となっていた。

物語は主人公の新米ハンターがアルバトリオンを狩るまでのストーリーで、恋あり、笑いあり、涙ありだそうだ。

やっと上映終了となり、シネコンを後にした二人はもう昼メシの時間と気が付いた。

ハヤテ「何処か、美味しいお店ってあるかなあ？」

ヒナギク「ケータイで探しとく？」

ハヤテ「いや、そこに地図があるから、それで探そうよ」

二人が向かったのは、ショッピングモール内で唯一のおでん屋だった。中に入ると客はおらず、えらくこじんまりとしていた。

ハヤテ「こういう店って、中々美味しいって友樹から聞いたんだ」

ヒナギク「おでんかあ〜」

カウンター席に座ると同時に、奥から店の人間が現れた。

舞「…いらっしやい」

ヒナギク「舞！？」

ハヤテ「どうしてここに？」

舞「……バイト。何になさいましょう？」

ヒナギク「えっと……タマゴとコンニャクとちくわぶ下さい」

ハヤテ「僕は、がんもとタマゴと大根と昆布」

舞「わかりました」

馴れた手つきで皿に次々におでんを乗せる舞を見てハヤテが口を開いた。

ハヤテ「そういえば、舞さんが配膳をするのを初めて見た気が……」

ヒナギク「……そういえば私も……」

舞「おじいちゃんが言った。細かい事は気にするな、全体を見渡せばいいって」

そのあとも黙々と食べるハヤテとヒナギク。しかし、店の外で爆発音が聞こえて来た。

会計を終えたハヤテとヒナギクに、前掛けを外した舞が外に出た。

シュバリアン「我が名は、怪魔・ロボットシュバリアン！グランド・シヨッカー特殊攻撃隊長なり！」

舞「シヨッカー……」

読者の方々は、覚えてらっしゃるだろうか。かの怪人・シュバリアンは以前友樹と互角の戦いを繰り広げた猛者である。白い体に右手の鎌が彼の特徴である。ライダーの中で一番強い友樹と互角なため、

舞では太刀打ちできない。

舞「変身！」

ヘンシン

カブト・M「ラアアア！！！」

マスクドフォームのカブトは、スピードを失う代わりに、攻撃力と防御力が上がっているのだ。

カブト・M「はあっ！」

シュバリアン「とうっ！」

カブト・Mのタックルとシュバリアンの鎌攻撃が相殺されて、カブト・Mはカブトクナイガンをアックスモードにして切り掛かる。

カブト・M「はっ！」

シュバリアン「ぬっ！」

ガキイン

双方の刃が擦れ、火花が散る。

一方のヒナギクとハヤテは、一般人の避難に勤しんでいた。中には状況が分からない人や、そもそもグランド・シヨッカーすらも知らない人などがいて困っていた。ただ、自衛軍が駆け付けてくれたので早めに避難が終わった。

シュバリアン「弱い。弱いぞ、仮面ライダーカブト!!」

シュバリアンは言うと、鎌で一閃しダメージをカブト・Mにぶつける。

カブト・M「あぐっ!……キャスト……オフ……!」

キャストオフ

チェンジビートル

カブト・R「クロックアップ!」

クロックアップ

タキオン粒子による超高速移動のクロックアップを発動したカブト・Rはカブトクナイガンのクナイモードで切り付ける。

が、そう戦い方を変えても、状況は覆せなかった。シュバリアンのローキックが当たり、更にクロックオーバーまでも起きてしまった。倒れたカブト・Rをシュバリアンが踏み付ける。

カブト・R「がはっ!」

シュバリアン「………五代友樹………彼の強さは、君より上だ。それは君とて重々承知の事だろう?」

カブト・R「くっ………」

シュバリアン「そして君は、何の為に戦う。カブトとして?守人として?」

カブト・R「……………」

言い返せなかった。カブトは……………舞は、どうして戦うのか。何を求めるのか。それは分からない。

刹那、乗っかっていたシュバリアンの脚が退かされた。それは、ハヤテやヒナギクでは無い。むしろ、カブトゼクターより一回り小さい自立型のゼクターにた機械だった。

カブト・R「何、このゼクター……………」

見ると、紐で括り付けたメモがあった。そこには『これからの怪人はより厄介に強くなる。これは、私が友樹と事前に開発したカブトの強化ツールのハイパーゼクターだ。健闘を祈る　マスターハンド』

カブト・R「ハイパー……………ゼクター……………」

カブト・Rはシュバリアンから距離をとると、左腰にハイパーゼクターをアジャストする。

カブト・R「ハイパーキャストオフ」

そしてホーンを倒した。

ハイパーキャストオフ

チェンジハイパービートル

カブト・H「……………」

現れたのは、カブトの最終形態であるカブト・ハイパーフォーム。白金の鎧と勇ましい角が目立つ。

カブト・Hは右手の人差し指以外を軽く曲げ、天に向けてそれを伸ばす。

カブト・H「天道の道を行き、舞う女。それが私の名前、天道舞！またの名を、仮面ライダーカブト！」

シュバリアン「ふふ……ふははははははははははは！！それでこそ仮面ライダー！」

カブト・H「ハイパークロックアップ」

ハイパークロックアップ

シュバリアン「はあっ！」

シュバリアンの鎌は、空を切った。つまり、カブトはそこにいなかった。それに、普通のクロックアップでも無いことが分かる。

シュバリアン「何処だ……どこにいる！」

マキシマムライダーパワー

1
2
3

カブト・H「ハイパー……キック」

ライダーキック

ハイパークロックアップの中、カブトは背中羽根を、翼を広げ高く飛翔しシュバリアンにその必殺キックを当てる。シュバリアンからしてみれば、突然の衝撃で訳が分からなくなっているだろう。何も考えられないまま、爆発四散した。

ハイパークロックオーバー

その電子音の後、カブト・Hは名乗った時と同じポーズを取っていた。^{ハイパー}

メンバー『ヒナギク(さん)(ちゃん)お誕生日おめでとう!!』

バイトを終えた舞と一緒にいたハヤテを連れて、もうデートどころじゃ無くなってるヒナギクは盛大な祝いの言葉と、クラッカーの身によって迎えられた。

ヒナギク「あ、……えっ……と……」

歩「ヒナさんヒナさん。早く座って座って」

ヒナギク「ありがとう歩……」

席に座ると同時に、アテネとナギが歩の横に現れると、三人揃って口を開いた。

ア・ナ・歩「……誕生日プレゼントはハヤテだ!」「」

と言った。

ヒナギク「言われなくとも、ハヤテは私の男よ」

誕生日パーティーは、日付が変わるまで続いたという。

く づ っ

四十三話 春一番と雛菊とひな祭り祭 3月3日(後書き)

次回は、未定です…

四十四話 クウガの妹 3月9日(前書き)

今回で友樹と彩香と慎吾が出ます。

四十四話 クウガの妹 3月9日

友樹、彩香、そして慎吾が昨夜遅く灰色のカーテンから現れるのを残っていたメンバーが発見した。

異世界に行ったことは確かなのだが、色々ありすぎて何も言えなかった。

そして今日。

友樹「あのー……………僕何か悪いことした？」

今の現状の友樹。利き腕の右腕に彩香が抱き着き、反対の左腕に佑理が抱き着いている。

友樹「(……………何で?)あ、そういえば……………」

ハヤテ「どうしたの？」

たまたま通り掛かったハヤテが友樹に問う。

友樹「実は今日、妹が来ることになったんだ」

彩香「妹いたの？」

友樹「僕より四つ下で、智より二つ下。後は、二人は中学生で今春休みだから、宿題するのにしばらく泊まるって」

その時だ。玄関の方でチャイムが鳴る。友樹は彩香と佑理から離れて玄関へ向かった。

友樹「はい。どちらさ……」

友樹の視線の先に、二人の女の子が立っていた。

友樹の後ろからサムスがその二人を見る。

サムス「あら、可愛いお客さんね」

???1「は、はじめまして……」

???2「つてか馬鹿兄貴とつとと退けや」

友樹「そんな口を利く人は知らない。全然知らない」

そんなこんなで友樹とサムスに連れられた二人は友樹の妹だという事が分かった。そこに、メンバー全員が集まってきたので、友樹が紹介する。

友樹「紹介します。魅奈美と亜香里です」

魅奈美^{みなみ}「み、皆さんはじめまして……五代魅奈美です……」

亜香里^{あかり}「五代亜香里です。いつも馬鹿兄貴が世話になってます」

魅奈美と亜香里は二卵性の双子。亜香里が先で魅奈美が後だという。落ち着きのある魅奈美に対し亜香里はよほど友樹を毛嫌いしているようだ。

亜香里「つーか馬鹿兄貴」

友樹「どうしたの？」

亜香里「勉強教える！」

友樹「はいはい。まずは昼飯が先」

と言つて、厨房へ向かったのだ。

友樹の姿が見えなくなると、おもむろに魅奈美は亜香里に言う。

魅奈美「あ、亜香里ちゃん！どうしてお兄ちゃんにあんな口を利くの？」

亜香里「別にいいだろ？家の事をほっぽり出して、こんな別世界に留まる兄貴なんて、私の兄貴じゃない！！」

友樹をけなし続ける亜香里に、彩香が叫ぶ。

彩香「ちよつと待って！どうしてそんな事を言うの！」

亜香里「あんたは？」

彩香「津上彩香よ。友樹の……」

魅奈美「あれ？でも何処かで見たような気が……」

亜香里「魅奈美もか？私もだ……」

そこに、ライトノベルを片手に伊達眼鏡を掛けた慎吾が現れる。

慎吾「……十寺院紗耶香……という奴か？」

その答えに、彩香と他のメンバーは俯き、魅奈美と亜香里が思い出した様な顔をした。

魅奈美は言う。友樹は昔から争い事を嫌い、大人しく影で読書をするほうだったと言う。打ち解けていたのは、今は亡き幼なじみの友人達だけだった。勿論紗耶香もそこに入る。続けて亜香里が言う。

亜香里「兄貴はいつも智兄にも魅奈美にも可愛がってた。なのに、なのになのになのになの！私だけ避けられてた！！」

重い沈黙。亜香里の目に涙が溢れ出た。それは止まること知らない。そこに、今日の昼飯である豚肉の冷製サラダを運んだ友樹が現れた。友樹は先程のやり取りを聞いていたのか、亜香里に近づく。

友樹「何ばか言ってるんだ。僕は亜香里を避けようなんて思っちゃいない」

亜香里「で、でも！」

友樹「怒ってるかと、思っちゃったんだ」

亜香里「…へ？」

友樹「ほら、僕がクウガになりたての頃、一緒に買い物しようって約束したじゃない？それすっぱかして、グロンギ退治に行っちゃったから……………」

友樹は後悔したかの様に、後頭部を掻いた。

友樹「その日から…………その…亜香里が僕を避けてるんじゃないかな

「……って思ってた。それで僕も避けてたんだ。ごめんね？」

亜香里「う……お……兄ちゃ……あん！」

友樹が言うつと、亜香里は大泣きした。声は小さいものの、流れる涙は大粒だった。

智「兄さーん、いるー？」

魅奈美「智兄！」

智「あれ？亜香里？魅奈美？何でいんの？」

亜香里「ちょっと……ね」

リンク「そろそろ飯にしようぜ！」

友樹「そだね」

その後、智、亜香里、魅奈美を加えた昼食は至福に包まれていた（ごだいよんきょうだい主に五代四兄弟妹）。

おまけ

今日は亜香里と魅奈美が泊まりがけで、春休みの宿題を終わらすために、ヒナギクと友樹の指導の下徹底的に行っていた。

友樹「そうそう、ここでさっきの方程式を使うんだ」

亜香里「こっつ?」

友樹「ウン。正解!」

亜香里「やた!」

友樹「4月から新二年生でしょ?」

亜香里「まーね」

友樹「成績の方は聞かないけど、部活は何を?」

亜香里「サッカー部のマネージャーだよ」

友樹「というと、好きな男の子が?」

亜香里「なっ／＼／」

友樹「別に気にしないよ。それが亜香里の決めた人なら、安心だしね」

亜香里「この馬鹿兄貴iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

亜香里の放ったはいキックが友樹の脳天に直撃する。

くづつ

四十四話 クウガの妹 3月9日(後書き)

今回の亜香里と魅奈美の容姿と服装

亜香里

髪の色〓茶

髪型〓サイドテール

身長〓143cm

体重〓42kg

体型〓起伏が少ない

性格〓分かりやすいツンツン

顔立ち〓きつい雰囲気醸し出している。イメージでいえば、「それらのおとしもの」のニンフ

魅奈美

髪の色〓青

髪型〓セミロング

身長〓148cm

体重〓39kg

性格〓おっとり

顔立ち〓物腰が柔らかい感じをだしている。垢抜けてない小犬の様な顔

四十五話 ダブル解散 3月14日～3月15日

屋敷に一人の男が薫と佑理を尋ねにやって来た。男は大虎だいく 勇いさむとい
う男だ。

薫「依頼……ですか？」

勇「ああ。実を言うと、俺はつい最近ムシヨを出たばっかなんだよ」

薫「何か悪いことでも？」

勇「冤罪だ。濡れ衣だよ」

薫「で、要件は？」

勇「三ヶ月前の銀行輸送車襲撃事件って、聞いたことねえか？」

薫「三ヶ月前……ええあります。私も少しは捜査をしていましたが、
収穫はゼロでした」

薫は肩をガツクリと落とす。

佑理がここで声を出す。

佑理「確か現状では、怪物らしき影が出ていたとか？」

勇「ああ。とにかく胸糞悪いから調べてくれるか？」

薫「承りました。では、明日捜査をしますので、今日はお引き取り
下さい」

勇「じゃあ、何か分かったらこの番号に電話をくれ。俺のケータイの番号だ」

そう言つて、勇は屋敷を去つた。直ぐに佑理は事件についての検索を始めた。

そこに友樹が何やら色んなアイテムを持って来た。

友樹「頼んでたあれ、出来たよ」

薫「ありがとう友樹」

友樹「フロッグポッド、バットシヨット、デンデンセンサー、スパイダーシヨック。これだけでいいの？」

薫「ええ。後は私と佑理のスタッグフォンがあるから」

友樹「一応言つとくけど、バットとスパイダーはトリガーマグナムにメタルシャフトにアジャスト出来るよ」

薫「ほんとありがとう！今度何か奢るね？」

友樹「いや、いいよ。好きで機械いじくってるだけだしね」

友樹が言い終えると同時に、佑理の検索結果が出た。

佑理「閲覧出来たわ。三ヶ月前の銀行輸送車襲撃事件は、ドーパンド絡みよ」

友樹「そうか。その時は僕と彩香と門谷君はいなかったからなあ」

佑理「しかも輸送車は今もダム湖の底。引き揚げは、難しいかもね」
そこにアナザーセンサーがなった。出るのは、ウルフとアイクと薫であった。
現場に着くと、いかにも獣の意匠を放つドーパンド、ビーストドーパンドであった。

薫「行くわよ」

ウルフ「応！」

アイク「ああ」

薫はWドライバーを腰に当てると同時に、ウルフはファイズドライバー、アイクはブレイバツクルを腰にセットした。因みに、マキと舞湖は花粉症でダウン。

ジョーカー

薫「変身！」

サイクロンジョーカー

スタンディングバイ

ウルフ「変身！」

コンプリート

アイク「変身！」

ターンアップ

WCJ「行くわよ佑理！」

WCJ「オツケー」

因みに【「」】は薰で【『』】は佑理である。

ブレイドとファイズは突如現れたジャイアントプリム標的にし、WCJは格闘技でビーストドーパンドに迫る。しかし、WCJの体に電流が走る。

WCJ『なにこれ、Wを維持できない？ジョーカー側が弱まってるの？』

WCJ「だったらこっちのメモリを変えるわ！」

メタル

サイクロンメタル

しかし、ジョーカーメモリをメタルメモリに変えてもWCJの電流は止まらない。

WCJ『違う。サイクロン側が強すぎるわ』

WCJ「そんな……」

ビースト「何を言っているううううう！……！」

エクシードチャージ

サンダー キック ライトニングブラスト

ファイズ「だああ！」

ブレイド「ウエエエエイ!!」

鋭い爪でWCJを襲うビーストドーパンドは、必殺キックを繰り出したファイズとブレイドに阻害された。大きい土煙が舞ってビーストは逃げ去った。

薫「解散って……何を言うの!？」

夕食後に佑理は薫に向かい、言った。いや言い放った。冷たく厳しい口調だった。

佑理「もう貴女とWになれないの。分かるでしょ？」

薫「そんな、今までちゃんとやって来たじゃない」

佑理「でも今日限りよ。現にウルフとアイクが助けなかったら……」

薫は思い出した。先程のビーストドーパンド戦を。もしウルフとアイクが助けなかったら、今頃重傷じゃ済まなかった。佑理は薫から離れると友樹の下へ歩み寄り、言った。

佑理「ねえ、私とWにならない？」

彩香「ちよつ、何を言うの!？」

佑理「薫とはもうWにはなれないの。だから、ライダーで一番強い友樹とWになりたいのよ」

すると、友樹は自分のカップの中のコーヒーを飲み干し、佑理に言った。

友樹「……右さん」

佑理「……何？」

友樹「……僕はもうクウガで充分なんだ。それに、僕にはもう彩香がいるんだ」

佑理「……残念。でもね、残念なのはWになれなかったことで、絶対に友樹を諦めた訳じゃないわ」

そう言つて佑理は自室に戻つたのだつた。

薫は、絶望した顔で近くのソファアに座つた。隣にたまたま居合わせたガノンドロフが薫に言葉を紡いだ。

ガノンドロフ「明日は早い。そろそろに寝なさい」

薫「あ、はい」

次の日。薫は一人つきりで……いや自立で動いているバットショット、デンデンセンサー、スパイダーシヨック、フロッグポッド、そして

薫のスタックフォンが襲撃現場で捜査をしていた。何かの手掛かりが見付ければ、それでいいと彼女は思っていた。

薫「何かの……手掛かりが……」

すると、スタックフォンが何かのメモリを挟んで来た。表面にはZが描かれていた。

薫「ガイアメモリ……」

「見付けたようだな」

薫が振り向くと、そこには依頼人の勇が一人の女性を連れてきた。しかし、表情は良からぬ事を企んでいる顔だった。

薫「これですか？貴方のお探し物は、事件の証拠は！」

勇「ぴいんぽおん！当たりだ嬢ちゃん」

「ねえサム。あの娘の持つてるガイアメモリ取り返してえん」

勇「ああ」

すると、勇は懐から一つのガイアメモリを取り出し、起動スイッチを押す。

ビースト

そのメモリを右頬に差し込んだ。すると彼の姿は昨日のビーストドールパンドに姿を変えた。

ビースト「メモリを返せええええええええええ！」

ビーストドーパンドは俊敏な動きで薫に接近し、メモリを奪い、彼女を川に突き落とす。

薫「きゃあああああぁぁぁぁ！」

く づ っ

四十五話 ダブル解散 3月14日～3月15日(後書き)

今回は原作の部分をいじりました

四十六話 EXTREME 3月15日(前書き)

今回でダブルはエクストリームになります。

四十六話 EXTREME 3月15日

薫「う、ん……………」

デイディー「お姉ちゃん、大丈夫！」

薫が目を覚ますと、目の前にはデイディーコングがいた。辺りを見ると、何処かの川岸だという事が分かる。

何故こうなったのか、薫はデイディーに事態を聞いた。

ビーストドーパンドに谷に落とされたが、たまたま釣りに来ていたデイディーがタルジェットで彼女を救助。そしてタルジェットの使用時間ギリギリにデイディーが元にいた川岸に到着したのだという。

デイディー「危なかったけど……………なんで変身しなかったの？」

薫の顔はますます暗くなる。デイディーはしまったと言わんばかりに後悔した表情をしていた。

と、そこに見覚えのあるリザードンが二人（デイディーは一匹）に近付いてきた。背中には、トレーナーのレッドと佑理が乗っていた。何故ここが分かったかは置いていて、リザードンが降り立つと同時に佑理が薫の前に立ち、いきなり土下座した。

佑理「薫、私どうかしてた！ごめんなさい！！」

薫「佑理……………」

佑理「私……………勝手過ぎてた。ごめん、私とダブルになれるのは貴女だけなのに……………」

彼女がこうなったのは、一時間程遡る。

佑理はどうしてダブルになれないのか、検索していた。しかし、めぼしい情報が無く、一つもヒットしないのだ。

佑理「私と誰がダブルに……」

サムス「そんなに薰ちゃんとダブルになりたくないの？」

佑理「彼女じゃ駄目なんです。ダブルはもっと強くないと……」

そんな彼女にサムスは平手打ちを右頬に浴びせた。

受けた佑理は、打たれた右頬を押さえ、サムスを見る。

サムス「何言ってるの！仮面ライダーは兵器じゃあ無いんでしょ！？」

佑理「……………」

言い返せなかった。サムスは正しい事を言っているのだ。

仮面ライダーは兵器じゃあ無い。それは、人を守るために存在する。確かに兵器に転用する輩も居る。それは悪に染まったライダーだけだ。王蛇やネガ電王の様に。

ビーツビーツビーツ

アナザーセンサーがなる。それは、その時ビーストドーパンドが薰

と接触した時だ。

ボブ「アナザーセンサーに反応！ドーパンドと推測！レッドさん佑理さん出撃してください！」

サムス「ほら、行きなさい。Nobody's Perfectって言葉があるじゃない？」

佑理「……………分かりました。レッド君リザードンに乗せて！」

レッド「分かりました！」

そして今に至るのだ。

薫「佑理……………」

佑理「ダブルになれない苛立ちを貴女に当てていた私を、どうか赦して……………」

佑理の目から大粒の涙が流れ、小さい嗚咽を漏らした。

薫はそんな彼女の手を取ると、固く握り締めて笑顔で言った。

薫「私、待ってたよ。私は貴女とじゃなきゃダブルになれない。それは分かりきっていること」

佑理「……………うん」

薫「だから、もう一度私とダブルに変身しよう？」

佑理「うん！」

どうやら仲が直った様だ。

再びリザードンを出したレッドはディディーと薫を新たに加え、ダム湖へ向かった。

勇「さあてと、始めるか。なあハニー？」

「うん、サム！」

ビースト

ゾーン

勇はビーストドーパンドに姿を変え、一緒にいた女性もゾーンドーパンドに姿を変えた。

そこに、リザードンに乗っていた薫と佑理が降りてきて、続いてレッドとディディーも地に立った。

佑理「レッド君。お願いね？」

レッド「アイアイサー！」

薫と佑理は横に並び、ビーストドーパンドを見据えた。薫はWドライバーを巻き、ジョーカーメモリを手取る。佑理の腰にもWドライバーが巻かれて、彼女もサイクロンメモリを取り出す。

ピースト「ガツハツハハハ！馬鹿め、まだやると言つのかあああああー！！」

言われた薫と佑理は黙ってメモリの起動スイッチを押す。

サイクロン

ジョーカー

佑理「行くよ、薫」

薫「おっけー」

薫& a m p ; 佑理「「変身！」」

佑理がサイクロンメモリをドライバーの右側に差し込むと同時に、佑理の意識と共にサイクロンメモリが薫のドライバーの右側に転送され、薫はジョーカーメモリをドライバーの左側に差し込みドライバーを開いた。

サイクロンジョーカー

薫の身体は静電気が走ってはいるが、いつものダブルサイクロンジョーカーWCJに変わる。

ピーストに近付き、キックを繰り出すが、逆に掴まれて投げ飛ばされてしまった。

WCJ「薫、大丈夫！？」

WCJ「大丈夫よ。私がそっちに合わせるから！」

ゾーン「サムうやつちやええ！」

デイディー「お前の相手はオイラだ！」

ゾーン「なっ！」

空中にいるゾーンにスマッシュボールを使ったデイディーがタルジエツトパニックでゾーンドーパンドと応戦していた。

ビースト「しゃらくさいいいいい！」

WCJ「きゃあっ！」

WCJはビーストに投げ技を喰らい、壁にたたき付けられた。コンクリートで出来た壁はWCJの後が残るが如く、大きく穿っていた。しかしWCJはまだ立ち上がる。

WCJ「まだまだ………」

WCJ「私達は………」

WCJ「負けてられない！」

その時だった。WCJの元が変わった鳥形のガジェットが飛んできた。その鳥形のガジェットは佐理の体を粒子化し、吸収してWCJの下へ飛んで行った。

WCJはドライバーを閉じると、サイクロンとジョーカーのメモリから光が立ち、鳥形のガジェット……もといエクストリームメモリはそれに添い、Wドライバーに差し込まれ、開いた。

エクストリーム

その電子音が鳴ると、WCJは神々しい光に包まれた。

ダブルの精神世界

薫「何これ？」

佑理「地球と……一体化してる？」

薫「それだけじゃないわ」

佑理「私達の心と……」

薫「体が……」

薫& amp ;佑理「一つになる！」

やがて光が弱まると、ダブルの境目が横に広がっていった。

レッド「なっ、ななな、中身が見えたああああ！！！！？」

やがて光が収まると、ダブルの最強形態・WCJXダブルイグニッションがその姿を曝した。

WCJX『この形状のダブル、及び敵のデータの全てを閲覧した』

WCJX『プリズムビッカー』

WCJXの中央から専用武器・プリズムビッカーが出現し、左手に収まる。次にWCJXはプリズムメモリを取り出した。

プリズム

そのメモリを差し込むと、ビッカーソードを引き抜き、ビーストド
ーパンドに切り掛かる。

ビースト「ぐあああああ！！」

ビーストの腕に深い切り傷が出来た。

WCJXはビーストとゾーンを見据えサイクロンからヒートのメモ
リをプリズムビッカーに差し込む。

サイクロンマキシマムドライブ

ヒートマキシマムドライブ

ルナマキシマムドライブ

ジョーカーマキシマムドライブ

ビッカーソードをビッカーシールドに納め、シールド中央のレバー
を動かした。

WCJX「『ビッカーファイナルリニュージョン！！』」

数多の光がゾーンとビーストに次々と当たり、メモリブレイクが成
功した。

その後、大虎勇と付き添いの女の野々宮ののみや 春子はるこは銀行輸送車襲撃事件の容疑者として正式に逮捕されたのだ。
佑理と薫は近くの自販機の前でドリンクを飲んでいた。

佑理「これからも、よろしくね」

薫「こちらこそ」

く づ っ

四十六話 EXTREME 3月15日(後書き)

今回のエクストリームメモリについては、原作を少しいじくりました。

そこら辺をご了承ください

四十七話 D再び/Kライダーの力 3月20日(前書き)

今回、ドラえもん達が再び出ます

四十七話 D再びノKライダーの力 3月20日

クウガ・U「でやあああああー!!」

アギト・B「ダァーッ!!」

休日を買った二人は、デート中にゲゲルを行っているグロンギと遭遇。堪忍袋の緒が切れた友樹が変身し、彩香も続けて変身し、再生され復活したゴ・ジャージ・ダとゴ・ガドル・バをカラミティアルティメットとバーニングボンバーで粉砕した。
場所がまだ市街地に入っていなかったため、負傷者は出なかった。その後友樹と彩香は、ポレポレのカウンター席でコーヒープレイクしていた。

友樹「……………どうして……………また……………」

彩香「再生怪人……………早速出たね。今まで、出てこなかったのに……………」
重い雰囲気を出している二人に、玉四郎は敢えて口を開かず黙ってカップを磨いていた。
カランカランとポレポレのドアが開く。開いた足音から五人だという事が分かる。

「またこの世界に来ちゃったね」

「……………渡さんは……………どうして僕達を……………」

「仮面ライダーって……………ああいう力なの？私……………」

「もう僕には無理だよ！ママア！！」

「うつせえ！黙れ！」

異世界からきた仮面ライダーなのか、会話からどうやらライダーになって間もない一年生ライダーだろう。ふと気になった友樹が、声のする方を見遣った。

友樹「…………え？」

ドラえもん「あ…………」

のび太「友樹……………さん！」

しずか「彩香さん！」

彩香「…………ほえ？」

スネ夫「ぐすつ」

ジャイアン「あ！」

先程会話をしていたのは、以前この世界に訪れたドラえもん一行だった。

玉四郎「なんだいなんだい。顔見知りかい？友樹の友達だったらうまいカレー御馳走してやるよ」

ドラえもん「ええ！」

のび・スネ・ジャイ「ゴチになります!!」

しずか「でもすいません。見ず知らずの私達に、御馳走だなんて…」

友樹「いいよ遠慮なんて。ね彩香？」

彩香「そうそう」

そしてドラえもん達は玉四郎の奢りでカレーを御馳走になった。
ポレポレを後にした七人は、近くの丘で話し合っていた。

友樹「どうして……のび太達が、ライダーの力を？」

のび太「紅渡つて人が、僕達の力を借りたって、ドレイクゼクターを僕に…」

ジャイアン「俺は、サソードゼクター」

スネ夫「僕は、ザビーゼクターを買ったんです」

ドラえもん「僕としずかちゃんは、何も…」

友樹「渡さんが……」

友樹と彩香は勿論、マリオを除いた仮面ライダー達は紅渡をライダー大戦の際に一度会っていた。まさか守護ライダーであり、監視者の彼が、ライダーと掛け離れた世界の、まだ少年という歳の子供三人を巻き込むなどは……。

友樹「怖く……無いの？」

のび太「正直怖いですよ。けど……」

友樹「けど？」

のび太「……友樹さんの様に、皆の笑顔を守れば、それでいいんです」

その時、その七人の目の前に、ワームとプリムが合成した怪人・アラクネアプリムが五体現れた。

何処かプリムの意匠を放つてはいるが、所詮合成怪人。友樹達は負ける気がしない。各ゼクターがのび太、スネ夫そしてジャイアンの手中に収まる。それに連れ、友樹と彩香もベルトを呼び出す。

友樹& amp ; 彩香 & amp ; のび太 & amp ; スネ夫 & amp ; ジャイアン「……変身！」「……」

ヘンシンx3

クウガ・M、アギト・G、ドレイク・M、ザビー・Mそしてサソード・Mがアラクネアプリムに攻撃を開始する。

クウガ・Mがアラクネアプリムを投げ飛ばすと、サソード・Mが一閃する。

クウガ・M「いいよ、武君！」

サソード・M「ハイ！おい、のび太、スネ夫！そろそろ行くぞ！」

ドレイク・M「うん！」

ザビー・M「オツケー」

サソード、ドレイク、ザビーは横一列に並び、各ゼクターを変形させて叫ぶ。

サソード・M「キャストオフ！」

キャストオフ

チェンジスコープオン

ドレイク・M「キャストオフ！」

キャストオフ

チェンジドラゴンフライ

ザビー・M「キャストオフ！」

キャストオフ

チェンジワスプ

サソードからザビーまでキャストオフし、マスクドフォームからライダーフォームに変わった。そして、アラクネアプリムに必殺技の構えに入った。

クウガ・M「うおりゃあああああ！！！！」

アギト・G「たあああつ！！！！！」

クウガ・Mのマイティキックとアギト・Gのライダーキックがアラクネアプリムを貫く。

サソードは一体のアラクネアプリムにサソードヤイバーの刃を突き刺し、技名を叫ぶ。

サソード「ライダースラッシュ！」

ライダースラッシュ

サソード「どりゃああ！」

毒を帯びている刃が、アラクネアプリムを真つ二つに切り分けた。続けてドレイクも銃口をアラクネアプリムに向ける。

ドレイク「ライダーシュート！」

ライダーシュート

ドレイクゼクターを羽を折り畳み、引き金を引いた。銃口からタキオン粒子で生成されたエネルギー弾が放たれ、アラクネアプリムを貫く。

接近戦をアラクネアプリムに掛けていたザビーも必殺技を繰り出す。

ザビー「ライダースティング！」

ライダースティング

ザビーゼクターの針が、アラクネアプリムの頭部を貫き、アラクネアプリムは爆発した。

五人の仮面ライダーが集まると同時に、何処から拍手の音が聞こえてきた。

「あっはっはー。流石だね。合成怪人を退けるなんて」

声のするほうを見ると、白い上下の服に身を包んだ好青年が拍手しながらこちらに歩いてきた。

クウガ・M「ダクマ！」

ダクマ「おっひさー。久しぶりだね」

サソード、ザビーそしてドレイクは変身を解き、ドラえもんとしずかが三人によってくる。五人ともダクマが何者か分からずにいた。

ダクマ「おやつ？見掛けないリントの子供達だね。それと……青いタヌキかな？」

ドラえもん「タヌキじゃないやい！ネコ型ロボットのドラえもんだ
い！」

ダクマ「冗談冗談！ごめんね、
た仮面ライダーの諸君」

守護ライダー達に呼ばれ

そのダクマの発言に、何故自分達が紅渡と絡んでいる事を知っているのか、五人は冷や汗をかく。

ドラえもん「どうして……知っているんですか？」

友樹「それは、彼がグランド・ショッカーの大首領だからさ」

ドラえもん達は唾然としていた。目の前に一組織の首領が居ることもそうだが、何故友樹がその人物を知っている事も驚愕していた。すると、そこに灰色のカーテンが現れ、中から紅渡が姿を現す。

渡「友樹君、彩香ちゃん！」

友樹「渡さん！」

のび太「知ってるんですか？」

彩香「ちよつとね？」

渡を見て、ダクマは笑いながら言った。

ダクマ「ははは……。守護ライダーの君が、まだ小学生の子供に仮面ライダーの力をあげるなんて、ヤキが回ったのかな？」

ダクマは笑いながら、怪人態のン・ダクマ・ザバに姿を変えた。それにはのび太達も恐怖に染め上げた。

渡「今日は争い事をしにきた訳じゃ無い。ダクマ、君に忠告しにきた」

ン・ダクマ・ザバ「忠告？」

渡「合成怪人は悪魔の技術。手を付けすぎると、己まで巻き込まれる」

それだけだった。

しかし、ン・ダクマ・ザバは笑い出し、人間態に戻り、彼を嘲る様に笑う。

ダクマ「はっはははは！流石だね守護ライダー、でもね……………僕は、合成怪人とは何の関係も無いんだ。ごめんね」

のび太「ふざけるなああああ！！！」

ヘンシン

キャストオフ

チェンジドラゴンフライ

ドレイクに変身したのび太がダクマにタキオン粒子の銃弾を放つ。
が…………。

ダクマ「はっ！」

ドレイク「なあっ！」

それを素手で弾いたダクマはドレイクに殴り掛かる。しかし、一発殴っただけだった。なのに強制的に変身が解かれた。

友樹「のび太君！」

しずか「のび太さん！」

ドラえもん「のび太君、大丈夫？」

のび太「へ……平気だよ」

渡「一発殴った様に見えますが、百発位殴られてますね」

ダクマ「御明察。雑魚は雑魚らしく消えてくれるかなあ？第一、僕の興味はクウガの彼とその他諸々位だしね」

ドラえもん達は後ずさりする。かつてない恐怖が感じられたからだ。

「雑魚じゃねーよ」

ダクマの背後で誰かが喋っていた。慎吾だった。

慎吾「のび太やドラえもん達は、数知れない冒険をくぐり抜けて来た。時に出会い、別れ、分かち合い、闘ってきた。それは何より大切で、何より自分を強くしてくれる。それを手にしてきた勇者達を冒瀆する権利は無い！」

慎吾が言い放つと同時に、ダクマの周囲からメ・ギノガ・デ変異態とサイ怪人とパンテラス・ルケウスが現れた。

ダクマ「ふっふふ。僕はこれにて帰らせて頂くよ。じゃあね」

ダクマが去ると同時に、友樹はビートアクセラーを握りアークルを出し、彩香はドラゴネイルの着いたオルタリングを出し、慎吾はデイクイドライバーを腰にセットしライドブツカーからデイクイドのカードを取出し変身の構えをする。

友樹& a m p・彩香& a m p・慎吾「」「変身」

カメンライド デイケイド

クウガ・RTはギノガ変異態を、アギト・Bはパンテラス・ルケウスを、そしてデイケイドはサイ怪人を相手にしていた。

のび太達も加戦しようとするが、「今は先輩ライダーの戦い方を学ぶべきです」と帰りがけの渡に言われ、黙ってクウガ達の戦いを見ていた。

クウガ・RT「どうおりゃああああ！！！！」

ギノガ変異態「ゴボセ……クウガああ！（おのれ……クウガああ！）

」

ライジングタイタンソードをギノガ変異態の腹部に突き刺し、必殺技・ライジングカラミティタイタンを繰り出し、ギノガ変異態を爆発させた。

アギト・B「はっ！たっ！てええい！！」

アギト・Bはシャイニングカリバーのシングルモードでパンテラス・ルケウスを切り付け、大幅のダメージを与えていく。

そして、必殺技・バーニングスラッシュを繰り出し、パンテラス・ルケウスを爆発させた。

デイケイド「俺は通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

カメンライド 響鬼

アタックライド 音撃棒・烈火

D・響鬼「はっ！」

音撃棒・烈火を振るい、サイ怪人に火球を飛ばし、隙を付いてカードを装填する。

ファイナルアタックライド ヒ・ヒ・ヒ 響鬼

D・響鬼「音撃打・爆裂強打の型ああああ！！！！！」

清めの音・音撃の力でサイ怪人も爆発させた。

三人が変身を解くと、ドラえもん達の背後でまた灰色のカーテンが現れる。

のび太「カレーライス、美味しかったですっておじさんに言ってくれますか？」

他の四人が潜りおえた瞬間、のび太は友樹に言った。

友樹「分かったよ。おやつさんに伝えておくよ」

のび太「ありがとうございます」

そしてのび太が潜ると同時に、灰色のカーテンは消え、隠れていた夕陽が見えた。

慎吾「今以上に、強くないとな」

友樹「うん」

くづつ

四十八話 嘘はよく無いよね 4月1日(前書き)

今回はエイプリルフル特別編です

仕掛けるのは、あの二人です。

四十八話 嘘はよく無いよね 4月1日

今日はエイプリルフール。子供団は軽〜い嘘をついていた。その影で…。

彩香「…はい？マリアさん、もう一度言っして下さい」

マリア「ですからあ。私達って声同じじゃないですか？」

彩香「まあ…」

マリア「作戦ですけどね」

ハヤテは今日も掃除をしていた。それはいつもいつも屋敷内をバイクで走行するワリオのせいだ。

何故自分が彼の尻拭いをするのか、些か疑問だった彼は自分のケータイの着信を聞き、考えるのを辞めた。

ハヤテ「はいもしもし」

マリア？<あ、ハヤテ君？マリアですが、ちょっといいですか？>

ハヤテ「はい…」

マリア？<ナギが構って欲しいって駄々をこねるんです>

ハヤテ「あー、はいわかりました」

掃除を早めに切り上げたハヤテは、いち早くナギの所へ向かうのだった。

シンジは風景写真を撮っていた。カメラの手入れとその他諸々は忘れた事は無い。

その時、彼のケータイから着信が来る。表示を見ると彩香だった。

シンジ「はい、シンジ」

彩香「<あ、シンジ？私彩香。あのね、お風呂掃除、頼めない？>

シンジ「別にいいが…」

彩香「<よかったあ。じゃあお願いね？>

プツツと一方的に切られ、シンジは通話停止ボタンを押した。

シンジ「にしても珍しいな。五代の奴とデートか？まあいいか」

彩香「マリアさん、これ嵌まります」

マリア「でしょでしょ？」

二人がしたエイプリルフールの嘘（という名の悪戯）は、互いが互いのフリをするというものだ。

ケータイを持つてる者は友樹を残して全て騙して全て成功した。

彩香「あ、でも友樹カンが鋭い時が…」

マリア「やって見せますよ。彩香ちゃんまた携帯借りますね？」

彩香「…はい」

マリアは慣れた手つきで操作し、友樹に通話をかけた。

友樹<はい友樹です>

友樹が出たのを確認したマリアは直ぐさま声色を代え彩香に似た声で通話する。

マリア「あ、友樹？じつわね」

友樹<マリアさん。下手な芝居ですね>

マリア「（あるえー？どうしてでしょうかー？）」

友樹<彩香だったら、もう0・2オクターブ高いですよ？それと、こちらからそこがまる見えですから>

マリアは周囲を見回した。ここは屋敷の屋上。したから見える訳でも無い。

友樹<上ですよ。上>

マリアは上を見遣るそこには、レッドのリザードンに乗った友樹がいた。

友樹は屋上に着くと、リザードンをレッドの下へ帰した。

友樹「さてと。これじゃあ嘘じゃなくて人によっては酷い悪戯ですよ？彩香も彩香で、どうして断らなかつたの？」

彩香「……ごめんなさい」

彩香はシュンと頭を垂れた。

友樹「とにかく。このことは、大目に見ておきます。それに」

マリアは思った。友樹を侮ってはいけなないと。

く づ っ

四十八話 嘘はよく無いよね 4月1日(後書き)

これじゃあ嘘じゃなくて悪戯ですよね。

四十九話 桜と花見と最新形態 4月10日(前書き)

今回はライダー勢(マリオ抜き)の強化対のオンパレードです

四十九話 桜と花見と最新形態 4月10日

桜が咲き誇る季節が今年もやって来た。ここら辺の桜はこの時期に咲き誇る。

花見に来た子供団に、リンクとゼルダの他にライダーズ全員。その中の友樹は大量の荷物を背負って、屋敷近くの桜の樹に向かった。

友樹「ちよつと！何で僕がこんなに荷物を！！」

因みに、友樹が背負っているのは、ドリンクの入ったクーラーボックスに重箱、シートの他にカービィのお菓子、ポポとナナのハンマー、その他諸々。端から見れば、友樹の背に山が乗っかっているように見えた。

リンク「ゴメン！俺がやるって言ったんだけど、いろいろと煩いのが……」

ヒビキ「おら行くぞ。何モタモタしてんだ！」

その煩いのが友樹を急がせた。

友樹は自分の荷物は勿論、他のメンバーの荷物も背負っている。

彩香「ごめんね？こんなことにさせちゃって」

友樹「大丈夫大丈夫。心配無いつて」

そんなこんなで大きな桜の樹にやって来た。

シートを広げると、一斉に子供団が靴を脱ぎ座り始める。友樹は持

ついていたクーラーボックスに御重箱を降ろし、その他色々の荷物も降ろす。

時刻はもう正午。御重箱を開けると、中には友樹と彩香とリンクが早起きして作った和洋中と揃った弁当だった。

ポポ「がっがっぼりぼり！」

ナナ「もしかもしかばくばく!!！」

りゆか「もきゅっもきゅっ」

ネス「ガツガツガツガツ！」

ピット「あ、こらあ！カービィ！僕の竜田揚げ取るなあ！」

カービィ「気にしない気にしないべば」

一心不乱に食べる子供団の中には、プリンとピカチュウもいる。その二匹は、友樹の肩に乗って友樹お手製のポフィンとポロックを食べていた。

ピカチュウ「ピ、ピカチュウ」

プリン「ぷりゅ」

友樹「よかった。美味しいんだね？」

ピカチュウ「ピカチュウ」

プリン「プリ」

しばらくすると、御重箱に入っていた食べ物も綺麗サツパリと無くなっていった。

友樹は立ち上がると、とある一点を見ていた。その方向には、量産されたであろうシユバリアンが十一機攻めてきた。どれも装備はまちまちだったが、中にはドリルに斧、マシンガンに電気鞭。更には、下半身が獣のような形だったり、キャタピラだったりしていた。

友樹「やな予感がすると思ったら…」

そういつつ、佑一と佑井に四つの電仮面の着いた大剣と一つのフェッスルを渡した。

佑一「これは？」

友樹「これはデンカメンソード。モモタロス達イマジンの憑依無しに変身出来るよ」

佑一「サンキュー」

友樹「そしてこのフェッスルは、佑井のお母さんから届いてた」

佑井「お母さん…から…？」

佑井の母親は、佑井の世界でソーンファンガイアと成り、掟を破りデイケイド（慎吾）とキバ（佑井）に負け、命を落とした。佑井はソーンファンガイアが実の母親とは今でも気付かなかった。

佑一はデンオウベルトを巻き、パスを構えた。

佑一「変身」

佑一は最弱のプラットフォームに変身し、バックルにケータロスを装着させてデンカメンソードにパスをセットする。

ライナーフォーム

白いプラットフォームの上に、色鮮やかな装甲がセットされソードフォームに似た電仮面がり・バースされ、アンテナが着いた。仮面ライダー電王・ライナーフォームの爆誕！

続けて、佑井もキバに変身すると、例のフェッスルをキバットに吹かせた。鳴り響いた音につられやって来たのは、小さい金色のドラゴンだった。勿論それは、以前異世界から来たキバの少年の所持していた物と同じ物だった。

タツロット「ビュンビュンビュン」

キバ「え？」

キバット「あんた、誰？」

キバットの質問にも答えず、タツロットはキバのショルダーアーマーとカテナの拘束を解き、キバの左腕に止まる。

タツロット「変身」

両肩から現れた金色のコウモリ達が、一斉にキバに集結する。

そして、現れたのは金色のキバであり、本当のキバ、仮面ライダーキバ・エンペラーフォームだ。

電王・L「今度から、俺自身の力で戦える！」

キバ・E「リンクゼルダ、子供団をお願い！」

キバ・Eに言われた二人は、それを了承し子供団を寝かせたまま安全な場所へと送る。

友樹「変身！」

友樹はアークルの力を開放し、新たなアメイジングのアメイジングドラゴンフォームに変身する。ライジングドラゴンフォームの青の部分を黒く染め上げた第二の黒の金のクウガだ。

彩香「変身！」

彩香はいつもと違う構えを取り、一気にシャイニングフォームへと変身する。

シンジ「変身！」

サヴァイブ

一気にシンジは龍騎・Sに変身した。

スタンディングバイ

マキ「変身！」

アウェイキング

マキはファイズフォンとファイズブラスターの変身コードを入力し

ブラスタフォームに変身する。

舞湖「変身！」

ターンアップ

ラウズカードが進化したギルドカードのチェンジのカードを装填し、舞湖はブレイド・キングフォームに変身する。

ヒビキ「響鬼、装甲！」

ヒビキは鬼角を鳴らしながら、装甲声刃を起動し装甲響鬼に変身する。

舞「変身！」

ヘンシン

キャストオフ

チェンジハイパービートル

超進化を経て登場するカブト・ハイパーフォーム。

慎吾「変身！」

カメンライド デイケイイド

カメンライド…

大樹「変身！」

ディエーンド

ディケイド「行くぜ、大樹」

ディエーンド「ああ！」

ディケイドとディエーンドは強化ツールのケータッチを取り出す。

クウガ アギト 龍騎 ファイズ ブレイド 響鬼 カブト 電王
キバ

G4 リュウガ オーガ グレイブ 歌舞鬼 コーカサス ネガ電
王 アーク スカル

それぞれのライダークレストをタッチするディケイドとディエーンド。
そして二人は自分のライダークレストをタッチする。

ファイナルカメンライド ディケイード

ファイナルカメンライド ディエーンド

サイクロン

ジョーカー

佑理&mp・薫「変身！」

サイクロンジョーカー

エクストリーム

佑理の体をデータ化したエクストリームメモリをWドライバーに装填し、仮面ライダーダブルセイジWCJXが登場する。

クウガ・AD「皆、行くよ！」

クウガ・ADに連れ、アギト・SH、龍騎・S、ファイズ・B、ブレイド・K、装甲響鬼、カブト・H、電王・L、キバ・E、ディケイド・C、ディエンド・CそしてWCJXが走り出し、量産型シュバリアンに攻撃を仕掛ける。

クウガSide

クウガ・AD「だあああああ!!!!」

地面を錬成しライジングドラゴンロッドよりも鋭くなったアメイジングドラゴンロッドを振るい、ドリル装備の量産型にその切っ先を突き刺し続ける。

クウガ・AD「はあああああ!!!!」

必殺技・スプラッシュアメイジングドラゴンをドリルに突き放つが、びくともしない。

クウガ・ADはアメイジングドラゴンロッドを捨て、次は拳銃の形をした物を錬成した。

クウガ・AD「超変身!!」

超変身を経た次のクウガの姿は黒いペガサスフォームの緑の所を黒くしたアメイジングペガサスフォームだ。別名第三の黒の金のクウガ。持っていた拳銃を模した物は銃身が伸びたアメイジングペガサスボウガンに変わる。

クウガ・AP「うおりゃああああ!!!」

ブラストアメイジングペガサスを脚部に放つがやはり効かない。

クウガ・AP「超変身!」

今度は第四の黒の金のクウガ、アメイジングタイタンフォームだ。隠し持っていたビートアクセラーを金の装飾が刃を全て被い、大剣の形をしたアメイジングタイタンソードに変えた。

クウガ・AT「流派おとりゲン!満月斬!」

すると、量産型シュバリアンは崩れる様に崩壊し活動を停止した。

アギトSide

アギト・SH「はっ!」

右腕が斧状の武器を持った量産型シュバリアンは、アギト・SHのシャイニングカリバーのツインモードの刃をその右腕で防ぐが、やはりアギト・SHの敵では無い。

アギト・SH「真必殺ッ!」

アギト・SHはシャイニングカリバーをシングルモードにし、スト

ームフォームの要領で高速回転させて量産型シュバリアンを切り裂く。

アギト・SH「アギト亞嵬肚！」

真必殺・亞嵬肚をまともに喰らった量産型シュバリアンは、檸檬の輪切りの様に斬られ、爆発した。

龍騎Side

シュートベント

龍騎・S「そおりゃあ！」

ドラグバイザーツヴァイの銃口から出たポインターが肩にキャノン砲を装備した量産型シュバリアンに撃つ。そのポインターに向かうように、ドラグランザーの火球が飛ぶ。

続いて龍騎・Sはあるカードをドラグバイザーツヴァイに装填する。ストレンジベント

そのカードは状況に応じて能力を変えるカード。その能力は、トリックベント。つまりは分身の術。

先に分身の二人が量産型のシュバリアンをソードベントで切り掛かる。

ファイナルベント

シンジの変身した本物の龍騎がオリジナル最終攻撃のカードを装填し、現れたドラグランザーに乗り、ドラグランザーはバイクに変わる。その口から出る火球が量産型シュバリアンを焼き尽くした。

ファイズSide

ブレードモード

ファイズ・B「てえい！」

ファイズブラスターの光刃が、的確に量産型シュバリアンの胸を貫いていた。

トドメをかける前にファイズブラスターにセットしたファイズフォンのミッションメモリを取り、ファイズポインターにセットする。

レディ

そしてファイズアクセラからミッションメモリを取る。

インフォメーション

そして、ファイズフォンにセットする。

コンプリート

ファイズ・Bの装甲が肩に流れると最強のファイズ、ブラスター・アクセルフォームに姿を変え、ファイズアクセララーの起動スイッチを押す。

スタートアップ

そして超々超高速で動くファイズは、ファイズブラスターに必殺コードを入力する。

ファイズポインターエクシードチャージ

量産型シュバリアンが複数のポインターマーカーに拘束された。

そこを潜るかの様にファイズ・B・Aはブラスタアークセルクリム
ゾンスマッシュを繰り出し、量産型シュバリアンの活動を停止させ
た。

ブレイドSide

ブレイド・K「あんにんにギルドカードを使うの、とっても勿体ない
わ。ラウズカードで充分よ」

ブレイド・Kはスペードのサンダーの他に、ダイヤのファイヤ、ク
ラブのブリザードそしてハートのトルネードをキングラウザーに装
填する。

サンダー ファイヤ ブリザード トルネード エクストリームス
ラッシュ

ブレイド・K「はあああああ!!」

雷、炎、氷、竜巻。四つの属性のソードビームが、電気鞭装備の量
産型を真っ二つに切り裂いた。

響鬼Side

A・響鬼「今日のオレ様は、一味も二味も違うぜ。モモタロス風に
言わせてもらおう」

A・響鬼は装甲声刃を逆手に持ち、モモタロスの決め台詞を叫ぶ。

A・響鬼「オレ様、参上！」

叫ぶと同時に、下半身がキヤタピラ状の量産型シュバリアンに音撃鼓・火炎鼓を取り付け、音撃棒・烈火で叩く。

A・響鬼「音撃打、火炎業火の型あ！」

激しい清めの音撃が、キヤタピラ部分を破壊すると、A・響鬼は装甲声刃を展開し、叫ぶ。

A・響鬼「刃ああああ……！！！」

それに比例し、装甲声刃の刃を紅蓮の炎が包みそれをA・響鬼はキヤタピラ装備の量産型シュバリアンを断ち切った。

電王& amp・キバSide

電王・L「行くぜ、佑井！」

キバ・E「ええ！」

モモソード ウラロッド キンアックス リュウガン

電王・Lはデンカメンソードのスロットレバーを三回引き四つの電子音になると、何処からか光のレールが現れ、電王・Lはそれに乗る。たちまち電王・Lの体をデンライナーのオーラに包まれる。

光のレールはケンタウルス型の量産型シュバリアンと蛸足型の量産型シュバリアンを拘束。それを通りすぎる様に電王・Lのデンカメ

ンソードの刃が切り付けられる。

フルスロットルブレイク（のちにヒナギクは電車切りと名付ける）が決まると同時に、キバ・Eはタツロットの首を引き、スロットを回す。

タツロット「ウェイクア~~~~~ツプ、ファイ~~~~バ~~~~!!!!」

高く舞い上がったキバ・Eは二機の量産型シュバリアンにエンペラームーンブレイクをぶつける。

二つの巨大な技が決まり量産型二機は爆発する。

ディケイド& amp; ディエンド& amp; WSide

ディケイド・C「一発かますぞ！」

ディエンド・C「ならこのカードを使い」

ディケイド・Cはディエンド・Cからディエンドのカメンライドカードを手渡される。反対にディケイド・Cもディエンド・Cにディケイドのカメンライドカードを手渡す。

それをディケイド・Cは右腰のディケイドライバーに装填する。ディエンド・Cもディエンドライバーに同じく装填する。

ファイナルアタックライド ディ・ディ・ディ ディエンド

ファイナルアタックライド ディ・ディ・ディ ディケイド

ディケイド・Cのクウガからキバのカードがディエンドに変わり、ディエンド・CのG4からスカルカードもディケイドに変わる。ディケイド・Cのライドブッカー・ガンモードの銃口とディエンド

ライバーの銃口からマゼンタとシアンのカードホログラムが並び、残った三機の量産型シュバリアンを捕捉する。

ディケイド・C「大樹、これが俺とお前の力だ」

ディエンド・C「ああ」

ディケイド・C「仮面ライダーディケイド・コンプリートフォーム」
「！」

ディエンド・C「仮面ライダーディエンド・コンプリートフォーム」
「！」

DCDC&DEDC「目標を狙い、破壊する！！」

ツインファイナルアタックライドシュートが炸裂。間髪を入れずに、WCJXがツインマキシマムを発動する。

プリズムマキシマムドライブ

エクストリームマキシマムドライブ

WCJX「ダブルプリズムエクストリーム！！！」

ツインマキシマムを受けた三機も機能を停止する。

リンク「これが……仮面ライダー……」

子供団を無事避難させたリンクは、クウガからダブルの力を目の当

たりにしていた。勿論マリオも例外じゃあ無い。彼のオーズも性能は未知数。クウガからダブルは、変身を解いてリンク達と合流し、花見の続きを行った。

く づ っ

四十九話 桜と花見と最新形態 4月10日(後書き)

今回出た新しいクウガのアメイジング体についての説明です

アメイジングドラゴンフォーム。

別名第二の黒の金のクウガ。一度ジャンプすれば、七十メートルの高さまで跳ぶ。姿はライジングドラゴンフォームの青い部分を黒くしたフォームで目は青のままです。

専用武器はアメイジングドラゴンロッド。

アメイジングペガサスフォーム。

別名第三の黒の金のクウガ。制限時間を無くしたチート級のフォーム。姿はライジングペガサスフォームの緑の部分を黒くしたフォーム。目は緑のまま。

専用武器はアメイジングペガサスボウガン

アメイジングタイタンフォーム。

別名第四の黒の金のクウガ。固い装甲はさらに硬さを増し、その腕力も向上されている。姿はライジングタイタンフォームの紫の部分を黒くしたフォーム。目は紫のまま。

専用武器はアメイジングタイタンソード

今回は敵サイドも書きます。

特別編 ？？？（前書き）

今回は敵サイドを書いてみました。

特別編 ????

亜空間。そこは以前スマブラファイター達がタブーと決戦した空間。そこにグラウンド・シヨツカー大首領のン・ダクマ・ザバが、椅子に座り他の人物二人と共にテーブルを囲んでいた。

テーブルの中央で、立体モニターが出た。それと同時にダクマは他の二人に話し掛ける。

ダクマ「状況報告……ということかい、今日の集会は」

アポロガイスト「落ち着くのだダクマ」

アポロガイスト「彼は以前門矢士によって倒されたハズの怪人。」

ジャーク將軍「状況報告以外にも、集まる訳があるのだ」

ジャーク將軍「クライシス帝国の一員でブラックRXと戦ったボス各の怪人。」

ダクマ「スカイ・シヨツカー大首領のアポロガイスト、シー・シヨツカー大首領のジャーク將軍。まさか、超首領様が？」

アポロガイスト「勿論今日はそのために集まったのだ」

ジャーク將軍「ふっふっふ……。超首領様の復活はまだまだがな。いずれ超首領様は復活される。タブーの核^{コア}を取り込むのも時間の問題だ」

ダクマ「成る程ね」

スカイ・シヨツカーとシー・シヨツカーそれは主にスマブラの世界では無く、また別の世界に存在し拠点も不明だ。

ダクマは立体モニターに映る復活前の超首領の姿を見ていた。

アポロガイスト「超首領様が復活すれば、ネオシヨツカーの復活なのだ！」

ジャーク將軍「その時は、大ネオシヨツカーとして総ての世界を支配する」

喜ぶ二人を余所に、ダクマは忠告する。

ダクマ「気をつけた方がいいよ。守護ライダーがハバを利かせて来てる。まだ安心は出来ないよ」

と、小声で呟くのだった。

続く

特別編 ？？？（後書き）

次回は、あの六人の登場です

友樹「あの六人って？」

ヒントとしては、白式です

五十話 蒼空を駆けるISノデイケイド 4月21日(前書き)

新妄想OP Revolution

五十話 蒼空を駆けるIS/ディケイドD 4月21日

クウガ・Mとディケイドは今、合成怪人メタルカメバズーカに苦戦していた。

クウガ・M「門谷君！そろそろトドメを刺さないと…」

クウガ・Mの視線はアークルに向けられた。そのアークルにカメバズーカの鉄鋼弾が二発当たり、ヒビが入ったのだ。

ディケイド「しょうがない」

そう言ったディケイドはライドブッカーから真新しいカードを取り出し、ディケイドライバーに装填する。

ファイナルフォームライド…

ディケイド「ちよつとくすぐつたいぞ」

クウガ・M「既に嫌な予感がするんだけど!!」

ク・ク・ク クウガ

電子音の後、ディケイドはクウガ・Mの頭を押さえるとクウガ・Mは一つの大きな球となる。ディケイドはそれを二度ドリブルして、メタルカメバズーカに投げ付ける。

メタルカメバズーカ「がめえ!!」

メタルカメバズーカに当たったクウガボールは上に跳ね上がる。それを待ったかのようにディケイドはジャンプし、空中でクウガボールを再度カメバズーカに投げ付ける。

ディケイド「オリヤアアア!!!」

ドゴオオオン!!!

ディケイドが着地すると同時にクウガ・Mがヘッドスライディングするかの様にディケイドの足元に滑って来た。

ディケイド「まあ、こんなもんか」

クウガ・M「かゝどゝやゝくうん……………」

変身を解いたふたりの目の前に、突如灰色のカーテンが表れる。中から友樹より年下位の何処かの学校の制服を着た男女六人が、友樹と慎吾に背を向け現れた。

「あれ？確か千冬姉の厳しい補習の帰りだったのに…」

「というか、ここは何処だ？見たところIS学園の敷地内ではない」

「どづいづいことですか？」

「っていつかホントどこ何処！」

「落ち着こつよ、ねえ！」

「冷静にならなければ、戦場では死を意味する」

男一人に女五人が何やら喚いている様だ。しかも友樹と慎吾の存在にも気付いていない。仕方なしに慎吾が声をかける。

慎吾「おいおまえら。おまえらは何処の世界の住人だ？」

慎吾の声に気が付いたのか、その六人は一斉に振り返り、友樹と慎吾の存在に気が付く。

ここで友樹が、その六人に問う。

友樹「君達は、一体？僕は五代友樹。彼は門谷慎吾。で、君達は？」

その六人の家の一人の男が答える。

一夏「俺は織斑一夏だ」
おりむらいちか

続いて、黒髪のポニーテールと金髪の少女ふたりが名乗ってきた。

第「私は篠ノ之箒だ」
しののけ

セシリア「セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ」

最後にツインテールと金髪と銀髪眼帯の少女三人が答えた。

鈴音「中国の代表候補生の鳳鈴音よ！」
ファン・リンイン

シャルロット「えと、シャルロット・デュノアです。フランスの代表候補生です」

ラウラ「ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生だ」

慎吾の頭に代表候補生という単語が引つ掛かった。しかし、友樹はと言うと、それが何かも聞かずに話を進める。

友樹「ここは危険だ。君達がどんな世界から来たか知らないけど、取り敢えず屋敷に来なよ」

一夏「ちよつと待った。どんな世界？何言ってるんだ？」

慎吾「まあ、知らないなら、わからないなら俺達について来る事だな」

そして、一夏達六人はビートチエイサーとデイケイダーを押し歩いて友樹と慎吾の後に続いた。

屋敷に着くと、一夏達六人は自分の世界について話した。

一夏「俺達の世界は、男尊女卑のパワーバランスから女尊男卑に変わった世界。何故そうなったのかは、インフィニットストラトス…
…通称ISが発表されたからだ」

一夏に続いて箒が語る。

箒「ISは女しか扱えない代物。元は宇宙作業用に作られたものなのだが、色々あつて地上での使用に変わった」

一夏「俺は唯一例外のISが扱える男なんだ」

シャルロット「ISの機動力、火力等が既存の戦闘兵器よりうま
つているから、戦車なんか鉄屑みたいな感じなんだ。わかって
れたかな？」

セシリア「私達はその操縦者を育成する機関、私立IS学園の生
徒なんですわ」

鈴音「私達の学年は一年だけどね」

一夏、箒、シャルロット、セシリア、鈴音の説明である程度彼等の
世界が理解出来た慎吾に対し、友樹はポカンとしていた。そんな友
樹に呆れたのか、慎吾が補足する。

慎吾「要するに、ISなる戦闘兵器より強いパワードスーツの登場
で女が偉くなった世界から来たんだとよ」

友樹「成る程…」

因みに、屋敷には彼等を除いて、スネークと彩香、リンクとゼルダ
だけで、残りは遠征に行っている。

ゼルダ「お茶をどうぞ」

ゼルダは一夏達に煎れたての緑茶をだす。

緑茶で一息着いた六人は、どうすれば、自分達の世界に戻れるのか、
友樹に聞いただす。

友樹「それは、また灰色のカーテンが表れない限り、君達は元の世
界に帰る事は出来ない。しばらくはここで仮住まいになるけどどう
かな？一応部屋割に厳しい規則は無いよ」

その言葉に、箒達五人の女達が一斉に反応する。ただし、一夏に至っては、「別に誰とでもいいぞ」みたいな事を言い出し、その五人からきつい視線をくらった。

マスター「部屋は二人部屋から四人部屋まであるから、夕食までにゆっくりと考えるがいいさ」

友樹「その前に、いつからそこにいるんですか？」

マスター「お前が『成る程…』言った時から」

慎吾「一応言っておくが、ここに温泉は一カ所しかない。つまりは……場合によって混浴だったりする」

また箒達五人は反応する。

箒「（こ、混浴！）」

セシリア「（こ、これは一夏さんを手に入れるチャンスですわ！）」

鈴音「（これは自分から道を切り開かねば！）」

シャルロット「（また一夏とお風呂入りたいなあ）」

ラウラ「（一夏は私の嫁なのだから、これは当然！）」

等と思考を巡らせていた。一夏の反応は、言うまでもない。昼食の時間となった。友樹は寝かせていたカレーを一工夫して、カレーうどんに変えた。勿論一夏達も昼飯を御馳走になる。

一口食べた瞬間、一夏は友樹に問い掛ける。

一夏「これ、隠し味にインスタントコーヒー入れてますか？」

友樹「正解！」

一夏「ああやっぱり」

その後、夕食までの時間はたっぷりであったので、友樹は一夏と箒を連れ出し、裏の友樹の菜園に到着する。

友樹「ごめんね、無理言っちゃって」

一夏「大丈夫ですって。な、箒」

箒「あ、ああそうだな。他人の手伝いをするのも、悪くは無いしな」

雑草抜き それは一見地味な作業だが、怠ってしまつと作物はダメになってしまう。友樹は一度たりとも怠つた試しが無い。故に毎年上出来な野菜が採れ、食費が浮く。

作業が終わると、友樹は冷えた缶ジュースを一夏と箒に手渡す。

友樹「お疲れ様」

一夏「ありがとうございます」

箒「ありがとうございます…」

友樹「ホントごめんね」

一夏「大丈夫ですつて。気にしないでくださいよ」

一夏がジュースを飲み終わると同時に彩香が菜園にやって来る。

彩香「友樹、そろそろ乱闘の時間よ」

友樹「分かった。よかったら、一夏達も見る？」

一夏& amp; 篤「乱闘？」

クウガ・M「ウォリヤアアア!!」

スネーク「まだまだあ!!」

リンク「エヤー!!」

アタックライド ブラスト

ディケイド「りゃあ!!」

ステージ・終点。アイテム無しの乱闘は、クウガ・Mが一步リードしていた。始めストック5だったが、今はクウガ・Mとリンクが四つディケイドとスネークが三つという形になっていた。

スネークの戦い方を、ラウラは真剣に見ていた。彼女の軍人としての性なのか、先程から一言も喋っていない。

一夏「あれが…仮面ライダー…」

一夏は待機状態・白式の時計を見る。開始して約九十分も経過して

いた。

すると、いつの間にかスネークが落ち、さらにディケイドもフェードアウト。残ったのは満身創痍のリンクとクウガ・M。どちらもストックは1。後一発で決着が着く。

ラウラ「スネーク……とやらの火器はどれも興味深いものだ」

シャルロット「ラウラは何処に行ってもラウラだね」

ラウラ「軍人たるもの、如何なる火器を把握する事が必要だ。例えそれが他人の物だろうと」

シャルロット「へ、へえ……」

ステージ上のクウガ・Mはアメイジングマイティにフォームチェンジし、リンクのマスターソードと対峙する。激しい剣捌きを一夏は黙って見ていた。一夏のIS・白式は雪片式型というブレードを扱うので、この乱闘をじっくり見ることで、なにかが得られるのではないかと思っていた。

彩香「そういえばゼルダ。昨日の組み手、どっちが勝ったんだっけ？」

ゼルダ「確か、友樹でしたよ。ということは、今回はリンクの勝ちですね」

篤「あの、それはどういう事なのでしょうか？」

彩香「友樹とリンクって、どう戦っても一回目友樹が勝つと二度目はリンクの勝ちで」

ゼルダ「三度目は友樹、四度目はリンクというふうになってしまっ
んです」

鈴音「っていつか、あそこにちらっと見えるのってカメラですか？」

彩香「ええ。この放送は毎回收録されて、放送されるの。たまに生
で放送される時もあるのよ」

その間に、リンクが勝利した。勝因は勇者の弓と爆弾のコンボでク
ウガ・AMが負けてしまった。

その後、リンク勝利のアナウンスが流れて夕食の時間。マスターは
夕食中の一夏達にどの部屋を借りるか、聞いていた。一方的に女五
人揃って「一夏と同じ部屋！」と言った。収集が着かなくなった結
果、三人部屋の二部屋を使い、一夏& amp; 篝& amp; シヤル
ロット組とラウラ& amp; 鈴音& amp; セシリア組となった。
フト、夕食のメニューを見た一夏が友樹に質問する。

一夏「この酢豚、パイナップル入ってないんですか？」

友樹「いつもはいれてるんだけど、安いのがなくてね。でも味は保
障するよ」

鈴音「酢豚にパイナップルなんて、邪道よ！」

鈴音声を荒げると、ここでスネークが口を開く。

スネーク「文句を言うと、友樹に半殺しにされる。見る、今の友樹
の右腕を」

器用に箸で里芋の煮物を食べているスネークに、促された鈴音は驚愕する。

友樹は笑顔だ。しかも黒い。おまけに右腕を究極の闇アルティメットに変えていた。

友樹「料理するものは相手は勿論、自分の腕も大切だ。そこに邪道があることさえ間違いだ。総てを否定すること、それは終焉への近道。従って、それを否定する事は、大好きな人を無くす行為そのままだ！」

鈴音「……は、はい」

その後、入浴まで時間があつた友樹は一夏を連れ、自身のトレーニングスポットに到着する。

友樹「一夏、君のIS・白式って接近戦特化って聞いたけど……」

一夏「はい。ブレード型の雪片式型だけです」

友樹「じゃ、これ持って」

友樹は一夏に木刀を手渡す。一見それは普通の木刀だ。重さが50kgでなければ。更に、一夏の両腕と両足にプレスレットとアンクレットを着ける。それも50kg。計250kgの重みがある。

友樹「最初は素振りでもいいよね」

と言った友樹も一夏と同じ装備にした。やはり流石の友樹でも重い物は重い。

友樹「一夏、剣道の経験は？」

一夏「小学生の時に箒と習ってました。友樹さんは？」

友樹「僕は剣道はクウガになってから……かれこれ3年か4年位かな？」

話しながら型を決める。袈裟斬り、燕返し、薙ぎ払い、突き等を繰り返して行った。

友樹「いやあ、いい汗掻いた」

一夏「ええ。中々のモノでした」

訓練を終えた友樹と一夏は風呂上がりであろう彩香と落ち合う。

彩香「お疲れ様。お風呂、空いてるわよ」

友樹「うん分かった。じゃあ、一夏入ろうか」

一夏「あ、はい」

露天風呂。友樹と一夏の後にはスネークとリンク、慎吾が合流する。話の内容は、自分の世界について、最近感じた印象等を話していた。ついで感覚で友樹は一夏に言った。

友樹「露天風呂って、たまあに混浴になっちゃうんだよね」

それを聞いた一夏はトラウマがあった様な表情をしていた。空気を

呼んだ友樹達はあえてそれを聞きはしなかった。

風呂から上がった一夏は、箒とシャルロットとの相部屋に到着した。一度ノックして彼女達の了承の声を聞き、入室した。

一夏「上がったぞ！」

シャルロット「あ、お帰り一夏」

箒「長風呂だったな。昔から変わらん、一夏は」

一夏「結構気持ち良かったぞ。友樹さんから聞いたんだけど、ここ
の風呂って露天風呂でたまぁに混浴になるって」

その一夏の台詞に、箒とシャルロットそしてドアの向こうの鈴音とセシリアとラウラが僅かだが反応したのは言うまでもない。

場所は変わって慎吾の自室。以前遠征で行ったシンケンジャーの世界とガオレンジャーの世界で手に入り、その世界の戦士達の絆の証のカードを見ていた。

慎吾「アタックライドカード烈火大斬刀と破邪百獣剣……」

そして夜が更けるのだった。

くづつ

五十話 蒼空を駆けるISノデイケイド 4月21日(後書き)

新妄想ED 少年よ

五十一話 放て、零落白夜！ 4月22日

日が昇り、友樹は目を覚ます。ルームメイトの彩香の頬を優しく撫でた後、着替え部屋を出た。

他の早起き組は友樹以外殆ど遠征中である。勿論ハヤテもマリアも朝食の用意を済ませ、友樹は一度外に出てアークルを出す。アークルの治癒力は半端な物ではないが、まだヒビは残っている。

一夏「おわああああああ！！！！」

友樹「!?!」

何事かと思った友樹は、急いで一夏と箒とシャルロットの部屋に向かう。

入ると、ISを部分機動している箒とシャルロットが、一夏を獲物を狙う鷹の如く専用武器を構えていた。その獲物の後ろには、半裸でシーツを纏っているラウラがいた。

友樹「お前ら表出る！！」

友樹の怒号が、一夏と箒、シャルロットとラウラの鼓膜を振動させる。

友樹「部屋を荒らすと、結構大変なんだよ？それを銃火器で荒らす馬鹿がいるか普通！ラウラもラウラで恥を知らなさい！！一夏はもつと堂々と！」

そんなこんなで朝食の時間。メニューは普通過ぎる日本の朝食。白米に青菜の味噌汁、焼き鮭に納豆に生卵そして緑茶である。

一夏と箒とラウラと鈴音は難無く食べれていたが、シャルロットとセシリアは苦戦していた。特に納豆に。朝食後、友樹と彩香は一夏達を連れ街に買い出しに行った。もつとも、買い出しと言っても、友樹の菜園で育てる野菜の種とピカチュウとプリンが食べたがっていたポフィンが書かれているレシピ本だけだ。

街に着くと、何故か一部焦土と化していた。その近くで、緑色の怪人と螻蛄に似た怪人がいた。緑色の怪人は友樹達に気付き、名乗りを挙げた。

ウヴァ「俺の名はグリードのウヴァ。グロンギ風に言えば、ラ・ウヴァ・バ…だ」

どうやら、グリードのウヴァが人の欲望からヤミーを生成してカマキリヤミーを生み出したのだろう。友樹はアークルを出そうとしたが、ヒビが入っている事を思い出し、出すのを止めた。

一夏達は専用機を起動する。白式、紅椿、ブルーティアーズ、ラファール・リバイブ・カスタム、シュバルツェア・レーゲンがカマキリヤミーとウヴァ目掛け突撃する。

ウヴァ「温い！」

ウヴァの頭部から放たれた電撃が白式等のISのシールドエネルギーを削る。

体勢が立てられない一夏達を狙うようにカマキリヤミーが手始めに鈴音にそのカマを振り落とす。

スキヤニングチャージ

ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ デイケイド

刹那、二種類の電子音が鳴ると同時に、オーズのタトバキックとデイケイドのディメンジョンキックがカマキリヤミーを捉える。

オーズ・タトバ「せいやああああ!!」

デイケイド「でやああああ!!」

二つの強大な必殺キックがカマキリヤミーを貫き、カマキリヤミーは爆発し大量のセルメダルを撒き散らかした。
オーズとデイケイドは変身を解くとマリオと慎吾の姿になった。

ウヴァ「ほう。その赤ヒゲがオーズか」

マリオ「赤ヒゲじゃあねーよ、マリオだよ!!」

あながち間違っではない。ウヴァは言葉を紡ぐ。

ウヴァ「何故に雑魚を守る。そんな強化スーツを着てなければ、ただの雑魚だ。そんな物を守るなどと、どうかしている」

……確かに。それを言ってしまったては身も蓋も無い。しかし、一夏は雪片式型を再び握り締め立ち上がる。それに習うように慎吾は一夏の隣に立ち、言った。

慎吾「確かにこいつらは弱い人間だ。だが、守りたいという心と気持ちは、最大級に強い!それをけなす権利は無い!!」

ウヴァ「なら聞こう。貴様は一体何者だ?」

慎吾「通りすがりの仮面ライダーだ!覚えておけ!変身!!」

カメンライド デイケイド

一夏「なら俺は、通りすがりのIS使いだ！覚えておけ！」

デイケイド「それ、俺の台詞だ！……ん」

ライドブツカーから一枚のカードが飛び出た。デイケイドがそれを取ると絵柄が写る。それは一夏の握っている雪片式型だった。デイケイドは迷わずそのカードを装填する。

アタックライド 雪片式型

デイケイドの掲げた右手に現れた雪片式型・マゼンタカラーをデイケイドは握り締める。

一夏「そのカードは？」

デイケイド「お前達がこの世界と結んだ記憶と絆……と言った方がいいな」

すると、ウヴァは現れた灰色のカーテンに包まれ、変わりにラ・ドルド・グを筆頭に戦闘員とプリムが数匹現れる。

友樹と彩香、それと箒達はそれぞれバックアップに移る。箒に至っては絢爛舞踏を発動させ、白式にシールドエネルギーを充填させる。

箒「行つてこい！一夏！！」

一夏「分かったぜ箒！」

デイケイドは白式の背に乗ると、白式はラ・ドルド・グに接近する。そして、二人の雪片式型が展開され、ビームブレイドを放出する。

一夏&#183;デイケイド「零落双白夜!!」

十文字型の斬激がラ・ドルド・グを切り裂き、爆発させる。

後ろでは、生身で応戦する友樹とアギト・トリニティフォームで戦う彩香に残ったシールドエネルギーで応戦する箒達がそれぞれ奮闘していた。

灰色のカーテンが一夏達を迎えに来たかの様に現れた。一夏は友樹と固い握手をした。

友樹「元気でね」

一夏「はい。俺も、俺達も頑張ります」

一夏が振り返ると、箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラが笑顔で返す。

友樹「じゃあ、これだけは覚えること」

友樹は笑顔を浮かばせ、一夏に言う。

友樹「堂々としていれば損は無い。幼なじみは大切に。以上」

一夏「どういうことですか?」

友樹「それだけ」

一夏達は友樹達に一礼すると灰色のカーテンを潜る。そこに残っていたのは、瓦礫だらけの街だった。直ぐに屋敷から待機しているメンバーと共に復旧作業をする友樹であった。

おまけ

千冬「全く、何処に行ってた？2時間以上も姿くらますとは、いい度胸しているな」

一夏「（あれ？あつちじゃあ二日経ってたのに？）」

千冬「何が二日経ってた？おまえら六人全員反省文提出したのち、ISを背負って十周走れ！」

セシリア「そ、そんな…」

千冬「嫌なら三十周にするが？」

鈴音「す、すみませんでした！」

ラウラ「（教官に……共感されなかった…）」

IS学園は今日も平和なのだ。

くづつ

五十二話 三つのG 4月29日(前書き)

今回はMk-?さんからの「ゼータ」「ダブルゼータ」そして「ハイニュー」がゲストで出ます。

五十二話 三つのG 4月29日

友樹とリンクとハヤテは、遠征先の土地で見知らぬ機械兵と戦っていた。

友樹「何で！ザクは……等身大じゃあ！」

リンク「ザクだかなんだかしんねえけど、負けられねーや」

ハヤテ「そうだ……ね！」

彼等が相手しているのは、緑色をしており朱い単眼モソアイを特徴的に醸し出しているザク？である。

その時だ。上空から三つのビームがザクの頭部を狙い撃った。

「何だ？ここにもジオンの残党か？」

「それよりも今はあの三人を！」

「よし、これより援護に入る」

その声の主は、額にビーム砲を付けた者・ダブルゼータ、スラリとしたボディに背中にバインダーの様な物を付けた者・ゼータ、青と白のボディに翼の様な物を背中に広げた者・ハイニューが飛んでいた。

いや、正確に言うならば、浮かんでいた。

ダブルゼータ「ハイメガキャノン、いつけえ！」

ゼータ「ビームコンフージョ！」

ハイニュー「フィンファンネル！」

三つの技が決まると、ザク？が幾分か減り残り三機とまでになった。

友樹「うおりやああああ！！！」

友樹は右足だけをライジングマイティフォームに変え、数倍のライジングマイティキックを繰り出す。ザク？の胴を貫き通し、友樹の背後でザク？が爆発する。

リンク「最後の切り札！」

懐にしまったスマッシュボールを叩き割ったリンクは七色の光に包まれ、ザク？に向けてトライフォースの光を放つ。そして急接近したかと思えばマスターソードでメッタ斬りにする。

リンク「トライフォー斯拉ッシュ！」

その斬激がザク？を破壊する。

ハヤテ「こちらも！」

ハヤテも執事服の懐からスマッシュボールを取り出し、手刀で割った。刹那、ハヤテが虹色になったかと思えば、見えなくなった。そう、クロックアップまでとはいかないが高速で動いている。これぞ、疾風の如く。その高速移動を駆使しザク？に何度も何度も蹴りや拳を繰り出す。

高速移動が終わると同時に最後のザク？が爆破した。

友樹達はハイニユー達の援護に感謝していた。友樹が差し出した右腕をハイニユーが握り返す。固い握手を交わした六人はそれぞれ自己紹介を始める。

友樹「五代友樹です。仮面ライダークウガやってます」

リンク「リンク・ヤマト。スマブラファイターだ」

ハヤテ「綾崎ハヤテです。い・ち・お・う！男ですのであしからず」

ダブルゼータ「俺、ダブルゼータ」

ゼータ「僕はゼータガンダムです」

ハイニユー「俺はハイニユー。よろしく」

六人の自己紹介が終わると同時に、地響きが起こる。それも大きすぎる。

ここは樹海とも言える場所。こんな場所に、しかも自然に出来る物じゃあ無い。それに反応しているのか、友樹の懐がジンジンと震えている。

友樹「ばっ、バトルナイザーが反応してる？」

ハイニユー「どういっ…！」

その近くで地面が割れ、中から巨大な影が盛り上がる。その影は、以前タイラントとゴジラが撃破した怪獣エレキングだった。

友樹「エレキング！」

リンク「けど、四本あったっけ、足?!」

そうそのエレキングは下半身に当たるところがケンタウルス型だった。しかも大きさも一回り大きく、腹部にグランド・シヨッカーのマークがデカデカとプリントされている。

すると、六人の近くの茂みからシヨッカー戦闘員、デストロン戦闘員、ジンファイター、ドグマファイター、プリムが現れる。

ハイニュー「ちい!行くぞ皆!フィンファンネル！」

ゼータ「了解ですハイニューさん！」

ダブルゼータ「ええい!憎しみを育てる血を吐き出せえ！」

フィンファンネルを射出するハイニューに続き、ゼータはグレネードを射出しビームサーベルで薙ぎ払い、ダブルゼータのミサイルも発射された。

リンク「行くぞハヤテ！」

ハヤテ「分かった。友樹、あの怪獣を頼むね！」

友樹「うん。いつけえ!タイラント！」

バトルナイザーモンスロード

バトルナイザーから光の粒子が放たれ、形を成し現れる。

タイラント「グバアアアアア！」

くづっ

五十二話 三つのG 4月29日(後書き)

Mk-?さんこれで宜しかったですでしょうか？

五十三話 エクストラ 4月29日

友樹「いづくぞオオ！」

その友樹の心に応えるが如くタイラントはチェーンを回しながら超改造エレキングに攻撃を加えていく。

一方のリンクとハヤテ達は、ダブルゼータ、ゼータ、ハイニユアの援護もあつてか、さほど疲労していないのが分かる。

タイラント「グガああああ！！！」

超改造エレキングの二つに分けられていた尻尾でタイラントの首と胴体をきつく締める。

タイラント「つつっー！！！」

友樹「負けるな！タイラントオオ！！！」

その時、友樹の腰から金色の装飾具を付けたアークルが浮かび上がる。

そんな友樹の腰を中心に、体が、アークルが強制的に友樹自身をアルティメット《究極の闇》へと変える。

クウガ・U「はああああ！！！！！」

刹那、タイラントはその姿を一回り大きくし頭部に赤い羽根飾り、そして下半身がケンタウロス化したエクストラタイラントに強化した。

超改造エレキングと同じ体型を持ったエクストラタイラントは腹部

の冷凍ガスで超改造エレキングの動きを止める。

ハイニュー「あれは！」

戦闘員達を殲滅し終えたハイニュー達は、バトルナイザーを掲げるクウガ・Uと姿を変えたタイラントを見て、驚愕の表情を浮かべていた。

ダブルゼータ「何で友樹があんな…」

ハヤテ「友樹の変身するクウガには、二つの闇が眠っているんです」

ゼータ「二つの…闇？」

リンク「一つは今の究極の闇。もう一つはその強化態の禁断の闇」

ハイニュー「あれが…闇？」

クウガ・Uの、その意思がまるでエクストラタイラントに乗り移ったかの様に、エクストラタイラントは激しい業火球を繰り出し、超改造エレキングを破壊させた。

クウガ・U「うっ……」

クウガ・Uが気絶すると同時に、エクストラタイラントはバトルナイザーに戻り、クウガ・Uは強制的に変身が解け、元の友樹の姿に戻す。

ハイニュー「……」

ゼータ「どうしたんです?」

ハイニュー「あの友樹が操っていた怪獣……まるで友樹の意思がそのまま乗り移ったようだった」

ダブルゼータ「そんなもんかなあ?」

リンク「それよりも、援護感謝します」

ハイニュー「こちらこそ。いい経験を積んだよ」

ゼータ「生命いのちは、この宇宙そいつを支える力があるんだ。その事を覚えて欲しい」

ハヤテ「了解です」

ダブルゼータ「俺らも次の任務があるからよ、また出来たら会おうな」

そういうと、ハイニュー、ゼータ、ダブルゼータはバーニアを吹かしリンク達の別れの挨拶を交わし、去って行った。

リンクは気を失っている友樹を背負い、帰路に着くのがあった。

くづつ

五十三話 エクストラ 4月29日(後書き)

Mk-?さん

こんな感じでよろしかったでしょうか？

次回は龍騎とブレイドとカブトをPICK UP!

五十四話 龍と剣とカブトムシ 5月1日(前書き)

今回はシンジ龍騎の世界です

五十四話 龍と剣とカブトムシ 5月1日

シンジと舞湖と舞は遠征先のシンジの世界にいた。ライダーバトルは終わったこの世界は日々ミラーモンスターから人々を護る為にナイト等のライダーが龍騎の代わりになって戦っていた。三人はその世界のシンジの自宅にいた。

シンジ「わりいな、散らかってるけど気にするな」

舞湖「全然、綺麗な部類に入るわ。っていつか最近掃除したかのよ
うね」

舞「おじいちゃんが言った。こういうのは幼なじみがしているっ
て」

舞のおじいちゃん語録を冗談と捉えた舞湖は原を抱え大笑いしたが、この家の持ち主・シンジは冷や汗を掻いていた。がちやと誰かがシンジ宅のドアを開け、足音を立てシンジ達がいるリビングに近付いて来る。

若葉「あ、シンちゃん帰ってたんだ………っていつか…二股は良く
ないわ」

やって来たのはファムの変身者の葵若葉。肩まで伸びた黒髪に柔らかな目に青の瞳。きゅっとしている唇に雪の様に白い肌をしている。

シンジ「彼女違う。友人友人」

若葉「なーんだ。あ、私葵若葉。シンちゃんがいつもお世話になっ

ております」

舞湖「私、剣崎舞湖よ。よろしくね」

舞「……天道舞よ。……というか、シンちゃんねえ……」

舞は某青い猫型ロボットの様な暖かい目でシンジを見る。それに習う様に舞湖も同じくシンジを見遣る。

シンジ「ただの幼なじみだよ。でも若葉ごめんな、オレがいない時に部屋の掃除なんてさせて」

若葉「全然。むしろ楽しいし、たまにおばさまとか帰って来るし」

シンジ「だろうな」

若葉と親しく話すシンジを見た舞湖と舞は敢えて無視していた。その時、外で悲鳴がいくつもあがった。四人は外に出ると、龍騎シンジの世界のはずなのに、フロッグアンデット、カツシスワームが人々を襲い続けていた。更に鏡やガラスからレイドラグリーンも現れる。

シンジ「何で！」

若葉「シンちゃん、何あれ？」

舞湖「アンデットとワーム？何で……！」

舞「取り敢えず、変身しなきゃね」

四人はそれぞれの変身ツールを取り出し、シンジと若葉は鏡に向か

いVバックルを出現させ舞湖はカードをセットしたブレイバックルを腰に当て、舞はカプトゼクターを右手に握りそれぞれ構えを取り、叫ぶ。

シンジ&若葉「「変身!」「」

龍騎とファムはレイドラグーンに立ち向かう。

舞湖「へシン!」

ターンアップ

オンドウルっぽく発音し舞湖はブレイドに変身。ブレイラウザーをフロツゲアンデットに立ち向かう。

舞「変身」

へんシン

カプト・Mはそのままキャストオフせず、カッシスワームに向けカプトクナイガン・ガンモードで立ち向かう。

ソードベント

龍騎「っしゃあ!」

ファム「行つくよシンちゃん!」

龍騎とファムのソードが地上に降り立ったばかりのレイドラグーンに炸裂する。反撃に出るレイドラグーンだが、ファムがガードベン

トカードを使用しそれを防ぐ。

ガードベント

レイドラグーン「ぎぎっ!?!」

ファム「シンちゃん!」

龍騎「っしゃあ!」

ファイナルベント

ファイナルベントカードを使用した龍騎は、無双龍ドラグレッダーに誘われ、空中でキックの体制に。ドラグレッダーの放った火球が龍騎を包みドラゴンライダーキックがレイドラグーンに当たり、爆発する。

龍騎「どんなもんだ!」

その後、レイドラグーンから出た生命エネルギーはドラグレッダーが咀嚼し、飲み込んだ。

一方のブレイドは、フロッグアンデットにブレイラウザーの斬激を繰り返す。ダメージを受け続けている

ブレイド「覚悟はどう?」

フロッグアンデット。フロッグという名を冠している辺り、カエルということだ。ブレイドは得意技のライトニングブラストを繰り返すまでも無く、サンダーとビートの二枚をラウズする。

サンダー ビート ライトニングパンチ

そのブレイドの拳が、フロッグアンデットに決まる。当たった箇所を中心に、アザがバツクルまで走り、バツクルが開き、ブレイドはブランク態のラウズカードにフロッグアンデットを封印する。

カブト・M「おじいちゃんが言ってた。私が正義だって」

クロックアップを始めたカッシスワームを追う様に、カブト・Mはゼクターホーンを動かし、叫ぶ。

カブト・M「キャストオフ！」

キャストオフ

チェンジビートル

クロックアップ

すぐさまカッシスワームと同等のスピードを繰り出しているカブト・Rはカッシスワームに拳と蹴りを見舞いする。

1
2
3

スロットルスイッチを三度押したカブトはゼクターホーンを元に戻す。それを狙ってか、カッシスワームがカブト・Rの背後を襲い掛かるようにする。

カブト・R「ライダー……キック」

ライダーキック

カウンターキックでもあるカブト・Rのライダーキックが直撃し、カッシスワームは爆発、カブト・Rは勝利を収めるように天を指すように人差し指以外を軽く曲た。

四人のライダーが集結すると、それを見計らってか、鏡からミラーモンスターのデイスパイダーをベースにグロンギであるズ・グムン・バの上半身が合体していた。
合体怪人のグムン強化態の吐く糸が、真っ直ぐファムを狙う。

龍騎「危ない、若葉！」

龍騎は咄嗟にファムを抱き、糸から回避する。

ファム「し、シンちゃん／＼／」

龍騎「立てるか？」

ファム「ふあ…ふえ…うん」

龍騎「っしゃあ！上等！」

ブレイド「さてと。行くぞシンジ！」

龍騎はデッキからサヴァイブのカードを取り出し、龍騎・サヴァイブに姿を変えた。それに伴い、ブレイドはキングフォームに強化変身した。

龍騎・S「若葉を襲った罪はでかいぜ！」

ブレイド・K「オレが足止めすつからよ！頼むぜ！」

血がたぎったのか、男口調の入ったブレイド・Kは、ギルドカードをキングラウザーに装填する。

スピード10

スピードJ

スピードQ

スピードK

スピードA

ロイヤルストレートフラッシュ

ブレイド・K「でえええいつ！！！」

破壊光線型のロイヤルストレートフラッシュがゴムン強化態に亀裂を起こす。

龍騎・S「つしゃあ！」

ファイナルベント

ドラグランザー「ゴギヤアアアオン！！！」

龍騎・S「ヨット」

龍騎・Sがドラグランザーの背に乗ると同時に、ドラグランザーがバイク態に変形する。

ドラゴンファイヤーストーム《龍炎嵐》がゴムン強化態に炸裂すると、先程ブレイド・Kの入れた亀裂を中心にゴムン強化態は爆発四

散する。
グムン強化態の生命エネルギーが本体から出ると、ドラグランザーがそれを飲み込んだ。

変身を解き舞と舞湖はシンジに急用が出来たと偽り、先に灰色のオーロラでスマブラの世界に戻った。

若葉はシンジを連れ、近くの公園に到着する。敷地面積としては、至って普通の公園だ。しかし、この二人にとっては、特別な意味があった。

シンジ「懐かしいな、ここ」

若葉「うん。シンちゃんと私が初めて会った場所だもんね」

シンジ「かれこれ、十二年……か？オレもそろそろ18だよ」

若葉「そういえば、今月はシンちゃんの誕生日だね。早めに言うけど、お誕生日おめでとうシンちゃん」

シンジ「あ、ああ。ありがとな、若葉ノノ」

公園内のベンチに座る二人。辺りは遊具で遊ぶ子供達に、それを見守る親御さん。日は未だに沈んでおらず、時刻としてはまだ午後3時だ。

シンジは一度、龍騎のカードデッキを取り出し、物思いに更ける。

シンジ「そういえば、何で若葉ってライダーバトルに参加したんだ

「？」

若葉「何でって……それは……その……」

シンジ「それと、おばさん元気か？」

すると、若葉を表情を曇らせ、言った。

若葉「実は……ね……お母さん……もう長くないの……持病……なの」

若葉は更に続けた。

若葉の母は、去年の今頃突然倒れた。持病を抱えたまま普通の暮らしをしてきたから、体にガタがきたのだ。若葉は何かしようと懸命に考えた。そしてたどり着いた先が、ライダーバトル。優勝すれば、如何なる願いも野望も叶えられるという所に気を引かれた。優勝すれば、母の持病は治ると考えた。

そして、ライダーバトルに参加した彼女は、ファムのデッキを授かり、ブランウイングと契約したのだ。

その時、世界の破壊者と言われたディケイドが現れ、願いは儚く消え去った。

シンジ「……ゴメン。オレ、何も知らずに……」

若葉「いいよ！シンちゃんが謝らなくても、それに参加した私がいけないんだから！そんなことをしたって……お母さんが喜ぶはず、無いし」

しばしの沈黙。やがて日も暮れると、先程の子供達も親御さん達も帰宅していた。

小さな公園のベンチには、男女が二人佇んでいた。
シンジは立ち上がると、若葉に向かい、言った。

シンジ「たまに……その……何だ？……たまに帰って来るからよ、……あー……／＼／」

若葉「どうしたの？シンちゃん……ふあっ／＼／」

突然の抱擁に若葉は小さく声を上げた。シンジは、そんな彼女の耳元で、優しく囁く。

シンジ「時々帰るからよ、そんな寂しい顔すんなよ。……な？」

若葉「……シンジい……」

いつしか、若葉はシンジをあだ名ではなく、下の名前を言って、シンジの胸に顔を寄せ、やがて影が重なった。

くづっ

デンライナーの車窓から

今回はマリオの世界の車窓です。

ピーチ城を出発したデンライナーの車窓には、のどかな田園風景や優しい顔のキノピオ達も目立ちます。

おや？乗客の中でイチヤイチャしている三組のカップルがいますね。いいですね、青春してますね。

っと、ここで終点ですね。

デンライナーの車窓から
次回はリンクの世界です

特別編 デイクイド& amp;スマブラ& amp;ガンダム 第一章

荒野を走るデンライナー。乗客は、イマジンを除いた友樹と彩香、リンクとアイク、シンジとピット、マキとレッド、舞湖とヒナギク、ヒビキとスネーク、舞とゼルダ、オリマーとピクミン、佑井とマルス、そしてマリオと慎吾だ。

彼らの目的は、デンライナーによる電車旅行ではない。異世界にまたもグランド・ショッカーの侵攻が目立った為の出撃なのだ。降り立った場所に、プリムは勿論、ンガゴグ、タウタウ更に、人間のザクもいた。ザクに至ってはバリエーションも豊かだ。

友樹「变身！」

友樹はアメイジングドラゴンフォームに変身する。手に握ったアメイジングドラゴンロッドでプリムやザクを薙ぎ払える。

彩香「变身！」

一気にフレイムフォームに変身し、フレイムセイバーを二刀使用し、プリムを切り裂く。

シンジ「变身！」

スタンディングバイ

マキ「变身！」

コンプリート

舞湖「变身！」

ターンアップ

龍騎、ファイズ、ブレイドもザクを肉弾で攻める。

響鬼「たああああ！！！」

響鬼に変身し、紅に形態変化する。

舞「变身」

ヘンシン

カブト・Mに変身し、カブトクナイガン・アックスモードでンガゴグにたちむかう。

佑一「一気に行くぞ！变身！」

ライナーフォーム

モモタロス「行くぜ、カメ、クマ、ハナタレ！」

ウラタロス「はいはい」

キンタロス「いっくでえ！」

リュウタロス「テンコ盛り」

イマジンズ「「「变身！」「」「」

クライマックスフォーム

電王・L「行くぞ!」

電王・C「俺達、参上!」

二人の電王も飛び出す。

佑井「キバット、タツロツト!」

キバット「おっしゃあ!キバって…行くぜ!」

タツロツト「ビュンビュンビュン!変身!」

キバ・E「はっ!」

キバ・Eは素早い蹴りのラッシュでタウタウやザクに風穴を空ける。

慎吾「変身!」

カメンライド デイケーイド

デイケーイド「ん?」

変身が完了すると、ライドブッカーから数枚のblankカードが飛び出る。色が付くと、それはオーズのカメンライドカード、フォームライドカード、ファイナルアタックライドカード、ファイナルフォームライドカードだった。

マリオ「変、身！」

タカ トラ バッタ！ タ ト バ！タトバ タ ト バ！

オーズ・タトバ「ゆっふい！」

デイケイド「さてと、使ってみるか」

カメンライド オーズ

タカ トラ バッタ！ タ ト バ！タトバ タ ト バ！

オーズ・タトバ「なんじゃそりゃ！」

Dタトバ「気にするな。タジャドルで行くぞ！」

オーズ・タトバ「あいよ！」

Dタトバはフォームライドタジャドルを装填し、オーズ・タトバはトラコアをクジャクコアにバッタコアをコンドルコアに変え、それぞれの電子音が鳴り響き、タジャドルに姿を変える。

Dタジャドル「じゃ、行くか！」

オーズ・タジャドル「おう！」

一方のリンク達も、各の武器で戦闘する。

リンク「アイクはレッドを援護。ピットはデンライナーの上で弓を！マルスは俺に続け！それと、ゼルダはバックアップを頼む！オリ

マーさんとヒナギクは友樹達のバックアップ！」

アイク「任務、了解」

レッド「イエッサー！」

ピット「はいはい！」

マルス「行きますか！」

ゼルダ「承知しました！」

オリマー「紫ピクミン隊、ゴー！」

ヒナギク「政宗えー！」

リンクの指示の下、それぞれはプリムやザクに攻撃を開始した。

時間として、3時間は経つただろうか。亜空軍残党部隊は、クウガ・AM達によつて粉碎された。しかし、上空に降下ポッドが降りてきた。ポッドが開くと、中からグフが大量に降りて来る。

クウガ・AMはアメイジングペガサスに超変身し、アメイジングペガサスボウガンで狙い撃つ。しかし、一向に数は減らなかつた。

Dタジャドルとオーズ・タジャドルのクジャクオーラショットにタジャスピナーの射撃、パルテナの神弓、ファイズをファイナルフォームライドさせレッドに持たせてのレッドフォトン、キバをファイナルフォームライドさせゼルダに持たせたゼルダファンク、ブレイドをファイナルフォームライドさせリンクに持たせたリンクエッジ等が決まるが、やはり減らない。

クウガ・AP「こんな所で、負ける訳には行かないんだああああ！」

刹那、ぶつといビームと放熱板らしきものと戦闘機が次々にグフを撃破する。それは…。

ダブルゼータ「ハイメガキャノン！いつけえ！」

ハイニュー「フィンファンネル！」

ゼータ「歯あ食いしばれ！」

それは、以前リンクと友樹が見た戦士だった。

ハイニュー達もリンク達の姿を捉え、地上に降りて言った。

ハイニュー「俺達は、これより君達を援護する」

クウガ・AP「ありがとうございます。ハイニューさん」

く づ つ

特別編 ディケイド&mp・スマブラ&mp・ガンダム 第一章（後書き）

Mk-?さん

これで、よかったですでしょうか？

デンライナーの車窓から

今回はリンクの世界から

トアル村を出発したデンライナー。車窓には何かの落書きがあつて、外の景色がよく見えません。

おや？紫色の人が、ピンク色の髪の女の子に叱られていますね。

紫色の人の手には、クレヨンが握られていますね。

どうやら紫色の人がそのクレヨンで落書きして、女の子に見付かつて、叱られて今に至るようです。

どうやら、目的地のハイラル城に到着した様です。

デンライナー車窓から。次回はマサラタウンから

特別編 デイクイド&スンプラ&ガンダム 第二章

戦闘が終了すると、一同はデンライナーに乗り込む。友樹とリンクはハイニュー達と面識があつてか、何かと親しい。

自己紹介があらかた終わると、デンライナーに衝撃が走り、大きく揺れる。何事かと思つたゼータが車窓を覗く。

ゼータ「大変です！ザクキャノンに発見されました！」

友樹「しまった！ザクキャノンは砲撃仕様…他に何がいました？」

ゼータ「後はゲルググキャノンです」

佑一「どちらも砲撃タイプ…よし、全武装展開！」

佑一が叫ぶと同時にデンライナーの武装が展開。次々とザクキャノンとゲルググキャノンを撃つ。

カメンライド デイクーイド

慎吾がデイクイドに変身すると、ライジングアルティメット・クウガ、アギト・シャイニング、龍騎・サヴァイブ、装甲響鬼、カブト・ハイパーと変身するのをデイクイドは確認すると、五枚のカードを装填する。

ファイナルフォームライド ク・ク・ク クウガ ア・ア・ア ア
ギト リュ・リュ・リュ 龍騎 ヒ・ヒ・ヒ 響鬼 カ・カ・カ
カブト

アギト・S H「ちよっとくすぐりたいよ」

龍騎・S「ちよっとくすぐりたいぞ」

A・響鬼「ちよっとくすぐりたいぜ」

カブト・H「ちよっとくすぐりたいよ」

ライジングアルティメットゴウラムの上にリンクが、シャイニングトルネイダー、サヴァイブドラグランザーの上にディケイドが、ソウコウアカネタカ、ゼクターハイパーが、デンライナーから出てザクキヤノンとゲルググキヤノンに立ち向かう。

ディケイド「リンク、コイツを使え！」

アタックライド 雪片式型

ディケイドは雪片式型をリンクに放り投げた。

リンク「よっと！」

リンクが雪片式型を手取るのを確認したディケイドは二枚のカードを装填する。

ファイナルアタックライド ク・ク・ク クウガ ア・ア・ア
ア
ギト

リンク「行くぜ！リンクアサルト！」

ディケイド「ディケイドトルネード！！！」

二つの技が決まると、数十体のザクキャノンとゲルググキャノンを消し飛ばす。

あらかた掃除が終わると、ライダーは変身を解き、他のメンバーはデンライナーから降り立つ。

これで、終わった。しかし、早過ぎる安堵がいけなかった。

生き残ったザクキャノンが立ち上がり、無機質な声で喋りだす。

ザクキャノン「コレデ……終ワツタト、思ウナ……」

すると、ザクキャノンは右手に何かのスイッチを握り、押した。

ザクキャノン「あくしずハ……間モナク、落……下、ス……ル……」

言い終え、ザクキャノンはモノアイの光を失い力尽きる。

ヒナギク「……ッ！……みんな、空を見て！」

ヒナギクに促された一同は、彼女の指差す方向を見た。そこには上に一つの山、下には二つの山を思わせる巨大な岩がゆっくりと、こちらに降りて来る。

慎吾「まだ俺達の任務は、終わってなかったのか！！」

くづつ

特別編 ディケイド&mp・スマブラ&mp・ガンダム 第二章（後書き）

Mk-?さん

今回も、これで宜しかったでしょうっか？

デンライナーの車窓から

最終章の今日はマサラタウンを出発し、ニビシティに向かいます。

オーキド研究所を出発したデンライナーは、1番道路を走りトキワシティを通ります。

おや？乗客の中に、黄色いマスコットの様な可愛い動物を撫でている赤毛の女の子がいます。

撫でられている動物もとても嬉しそうです。

ようやくニビシティに到着しました。

デンライナーの車窓から

また会う日まで

ゆっくりと落ちてこようとするアクシズ。デンライナーの武装が一気に解かれアクシズに集中放火を浴びせる。しかし、半分に分れるだけで、前面は衝突を回避。残った後面だけが落ちて来る。

ハイニュー「このまま、黙って見てるしか出来ないのか!？」

慎吾「諦めるな!」

スタンディングバイ

アウェイキング

アブソーブクイーン

エヴォリューションキング

ハイパーキャストオフ

チェンジハイパービートル

ライナーフォーム

クライマックスフォーム

ファイナルカメンライド デイクaid

プテラ トリケラ ティラノ! プットティラアアノザウルス!

R Uクウガ「例えこの身が滅びようとも！」

リンク「俺は、俺達は！」

アギト・S H「私達は、愛する人を護るのです」

アイク「命をかけてもな」

龍騎・S「だから、ここで諦めない！」

ピット「パルテナ親衛隊隊長としても、そんな言葉は口にしませんよ」

ファイズ・B「例え、駄目だと分かっているても」

レッド「がむしゃらに頑張るしか無いんです」

ブレイド・K「それに、やって見ないと分からないものよ」

ヒナギク「私もそう思うわ」

A・響鬼「オレ様、死んだ師匠の分も生きて生きて生きまくるって決めたんだよ」

スネーク「軍人たるもの、こんなことで引き下がる訳にもいかん」

カプト・H「おじいちゃんが言った。無理でも足掻く必要がある、無かったら無かったでその時だって」

ゼルダ「一国の姫としての意地をみせなくてはいけないのです」

電王・L「正直言つて、怖いよ」

オリマー「けど、勇気を振り絞らなければいけないんです」

電王・C「俺は最初から最後までクライマックスだぜ！」

キバ・E「それが、私達の闘いなんです」

マルス「王子として、一人の男として」

デイケイド・C「まあ、そんなもんだ」

オーズ・プトティラ「手が届くのに、伸ばさなかったら後悔しかないだろ？」

スマブラライダーズの心の強さを見せ付けられ、ハイニュー達は決意を新たにし、アクシズを見据えた。

ハイニュー「皆は先に、逃げてくれ。俺が止める！」

何と、ゼータ達を逃がす様に言ったハイニューは一人アクシズに向かい押し返す。

すると、そのハイニューの心が引き金となったのかライドブッカーから一枚のカードが飛び出て色がつく。

デイケイド・Cは迷わずそれを装填する。

アタックライド 人の心の光

途端、ゼータがピンク色に発光し、続けてダブルゼータも青く発光

すると、スマブライダーズもそれぞれのパーソナルカラーに発光する。

ハイニュー「俺は伊達じゃない！」

ハイニューが緑色に発光すると、ゼータが、ダブルゼータが、皆が飛びアクシズを押し返す。

ハイニューは不意打ちに頭を殴られた感じがしたが、皆に言う。

ハイニュー「皆：何で！」

ダブルゼータ「ハイニューさんだけ、いいかつこさせないよ！」

ゼータ「この星の危機が迫ってるんです。やってみる価値はあるでしょう！」

リンク「それに、99%は100%じゃあないですよ！」

デイケイド・C「皆行くぞ！」

ハイニュー「皆無理だよ！俺の命だけでいい！！」

RUクウガ「なんでそんな事を言うんです?!あなたは護りたい笑顔はあるんですか?!」

ハイニュー「笑顔……」

RUクウガ「何も出来ないのに、何もしないのはきつと後悔する。
だから……………」

すると、一瞬。ほんの一瞬だった。アクシズが僅かに後退した（．．．）。

オーズ・プトティラ「おっしゃ！皆行くぞ！」

ディケイド・C「当たり前だ！」

ハイニユー「どうして、君達はこうも頑張れるんだ！それに生身の
…しかも女の子まで！何者なんだ、君達は！」

すると、ディケイド・C達ライダーは名乗りをあげる。

RUクウガ「皆の笑顔の為に戦うリントの戦士・クウガ！」

アギト・SH「皆の居場所を護る力・アギト！」

龍騎・S「赤き龍と共に戦う戦士・龍騎！」

ファイズ・B「闇を切り閃き、光をもたらすファイズ！」

ブレイド・K「戦えない人の為に戦うブレイド！」

A・響鬼「清めの音撃を司る鬼・響鬼！」

カブト・H「天の道を行くカブト！」

電王・L「過去と未来の絆の証！」

電王・C「そんなこんなで俺達、参上！」

「電王！」

キバ・E「運命の鎖を解き放つ闇・キバ！」

オーズ・プトティラ「命のメダルで戦う戦士・オーズ！」

ディケイド・C「そして俺は、通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

ファイター『そしてスマブラファイターだ！！』

そして、アクシズ全体が緑色のオーロラに包まれると、アクシズは消滅。ハイニュー達はゆっくりと地上に降り立つ。

ハイニュー「教えられたよ」

友樹「え？」

この世界の全ての戦いが終わり、ライダー達は変身を解き、友樹はハイニューに呼び出され今に至る。

ハイニュー「俺も、前は誰かの笑顔を護りたかったのかもしれない。だけど、教えられたよ、友樹。君にね」

友樹「僕はそんな…」

ハイニュー「いや、いいんだ。それじゃあな」

ハイニューが一礼するとバーニアをふかし、ゼータ、ダブルゼータと共にその場を去った。

それを見送った友樹は、デンライナーに乗り込み元の世界へと戻るのだった。

本 編 に つ づ く

オーナー「いやあ、疲れますねえ」

良太郎「大丈夫ですか、オーナー？」

オーナー「マスターハンドの頼みですから」

モモタロス「良太郎！イマジンだ！」

良太郎「わかった！行くよ、モモタロス！！」

オーナー「モモタロス君良太郎君行ってらっしゃい。さてさて、いかがでしたか、Mk-?さん。これからもスラブラ&仮面ライダーズ+を応援宜しくお願いします」

コハナ「っていうかオーナー誰に頭下げてるの？」

五十五話 切り裂く閃光！悪魔の空 5月10日（前書き）

本当の禁断の闇、降臨

五十五話 切り裂く閃光！悪魔の空 5月10日

友樹「これでよしつと。マキ、何か買い残しつて無いかな？」

マキ「うん。もう無いよ」

友樹はマキと買い出しに出ていた。いつもなら彩香と出る友樹だが、彼女は今何処かの世界へ遠征中。同伴者は舞湖だから心配は無い。町を出ると、何故か合体怪人プリムオルフェノクが破壊工作を行っていた。幸い被害に遭つてる人もいなければ、奴らはこちらに気付いていない。

友樹「（数は……四体か）」

ぱきっ

プリムオルフェノク「!？」

友樹「（しまった!）」

友樹は小枝を踏んでしまい、プリムオルフェノクが四体揃ってこちらに気付く。咄嗟にアークルを出す友樹だが、プリムオルフェノクの所持していたレイガンの銃弾がアークルに当たる。

友樹「あぐっ!」

よって、アークルにはヒビが入る。いくら治癒力が高くともすぐにヒビを直すことは出来ない。

すると友樹は、何を思ったのか、ファイズフォンとベルトをマキか

ら引つたくる。

友樹「マキ、ちょっとだけ貸して！」

マキ「え、い、いいけど。っていうか、制限大丈夫なの!？」

友樹「何とかなるでしょ！僕は電王にも変身出来た。多分ファイズも」

スタンディングバイ

コードを入力し、エンターキーを押し構えを取った。

友樹「変身！」

エラーが起こる事を恐れていた。いくら電王に変身出来ても、ファイズには変身出来るか定かでは無い。しかし、それも杞憂に終わる。

コンプリート

フォトンストリームが友樹を包み発光し、その姿を鮫をモチーフとした仮面ライダーファイズに変える。

ファイズは早速、ミッションメモリをファイズポインターに取り付ける。

レディ

それを足に付け、今度はファイズアクセラーからミッションメモリを引き抜き、ファイズフォンにセットする。

インフォメーション

コンプリート

アクセルフォームに強化変身したファイズはプリムオルフェノクに向け、言い放つ。

ファイズ・A「十秒間だけ、相手するよ」

スタートアップ

高速で動くファイズ。それをプリムオルフェノクは捕らえることはもとより捉えることも叶えられない。

そして、フォトンマーカーがプリムオルフェノクに数だけ出現し、アクセルクリムゾンスマッシュが決まる。

3 2 1

タイムアウト

プリムオルフェノクは四体揃って灰となった。

それと同時にファイズは元の基本形態に戻る。二度三度手首のスナップをきかせ、変身を解いた。

マキはそんな友樹に驚いた。マキの世界のファイズライダーのベルトの制限は、原典世界のライダーの制限とは違う。だが、もし原典世界のファイズのベルトを使用すれば今回の様に変身は出来るだろう。そう思い、マキは友樹からベルト一式を受け取った。

友樹「ビックリしたなあ。電王以外でも変身出来るんだね、僕って」

マキ「何の確証も無しに?!有り得ない。だったら響鬼とかカブトも?」

友樹「まだわかんないよ。僕はただの人間だよ。………出生が特別なだけだけど」

マキは友樹の発言の最後の方は聞き取れなかった。出生がどうのは辛うじて聞き取れたが、そこから先が聞こえなかった。

そんな友樹の背後に、黒紫のレーザーが当たる。放ったのは勿論……。

ピグマ「ブヒヒヒヒヒ!まさか、クウガが背を向けるとは随分マヌケになったもんやなあ!」

マキ「っ!?ピグマ、貴様あ!」

オルフェノク化した左腕をピグマに突き立てるが、黒く鋭い腕に阻まれた。

鋭いヒレに血管の様に浮き出た線。そして、その腕の手の甲に戦士を表す紋章があった。それを辿ると、完全なる究極の闇を発動させた凄まじき戦士・クウガアルティメットフォームがそこにいた。

しかし、よくよく見れば、その全体像はライジングアルティメットに見える。手の甲も形をよく見ればライジングアルティメット。角も鋭く尖っていた。

それは、黒いライジングアルティメットだった。

ピグマ「ブヒヒヒヒヒ!完成や、本当の禁断の闇が!」

マキ「一体、友樹に何を!!!まさか………また地の石を!」

すると、ピグマはちゅちゅと指を振り、語る。

ピグマ「地の石の抵抗が着いた奴に地の石つこうたら、意味無いやろ？そこで！ダクマ様が開発した天地の石を使ったんや」

マキ「天地の石……？！」

ピグマ「それ以上は教えられまへんわ。さてと、デビルクウガ、あん嬢ちゃんを追っ払ってくれや！」

黒いライジングアルティメットクウガ…もといデビルクウガはマキに指一本で暗黒掌波動を繰り出し、灰色のカーテンで本部に移動しようとしたピグマの脳天にまた暗黒掌波動を繰り出す。ピグマは絶命し、変わりに灰色のカーテンの中から人間体のダクマが現れる。

ダクマ「ははっ。ピグマ君には今回いい働きをしてくれた。そこは称賛しよう」

マキ「ちょっと待って！デビルクウガって何？！天地の石って何！？」

マキの発言にダクマは悪戯っ子の様な笑みを出してマキにこう告げた。

ダクマ「だって彼 試験管ベビーだから」

信じられない。

友樹は普段は大人しく馴染みやすい。泣くことも、笑うことも、怒ることも、苦しむことも出来る。

マキ「信じない！そんなのっ！」

『それにはこっちも同意見よ』

ジョーカーマキシマムドライブ

WCJ『ジョーカーエクストリーム！』

WCJがダクマに必殺キックを繰り出すが、デビルクウガの腕一本で弾かれた。

ダクマ「不意打ちとは汚いね」

WCJ「あなたに言われたくは無いわ。残念だけど、とっとと友樹を返して貰うわ」

WCJ「友樹に手を出すとは、許されない事をしたわね。もう、許さないんだから！！」

構えるWCJとダクマの間に、デビルクウガが立ち変身を解く。天地の石に侵されたせいかわ、目の輝きを失っていた。

その友樹は今、ダクマを守る（・・・）様に手を広げた。ダクマは本来ならば友樹とは相容れない存在。そんなダクマを今の友樹はダクマを守る形となった。

ダクマ「ははっ。頼もしいね。じゃあ最後に一つ言っておくよ」

ダクマはWCJとマキを見据え、言った。

ダクマ「今度はかりは、破壊者も愛しい彼女でも、どうにもならな
いからね？じゃ、また会う日まで。もっとも、その日まで生きてる
かわからないけど」

灰色のカーテンが二人を包むと、そこに残ったのはマキとWCJだ
けだった。

もう青空は見えなかった

く づ っ

五十五話 切り裂く閃光！悪魔の空 5月10日（後書き）

次回

友樹の出生の秘密が明らかにならな！

五十六話 Yの出生/オールライダー 5月14日(前書き)

新形態新フォーム続々登場!

新妄想OP【ELEMENT】

戦闘曲【罨】

新妄想ED【The Next DECADE】

五十六話 Yの出生/オールライダー 5月14日

友樹がさらわれて、三日経った。屋敷のメンバーは今、その父である五代エツオと共に屋敷の地下である会議室にいた。エツオはまさか自分の息子の出生の秘密を敵に知られていたとは思ってもみなかった様だ。

エツオ「まずは、友樹の出生の秘密を解き明かそう…」

エツオは椅子に座りながら、タバコをくわえ言葉を紡ぐ。

俺達夫婦は友樹が産まれるまで、全然子供が産まれなかった。家は代々伝わるアークルがあつてな、父 友樹の祖父も、俺も適合出来なかった。父は今すぐにかつてグロンギと戦った戦士の復活を望んでいた。

俺は元々ゴルゴムという組織に捕まり改造手術を受けたから、余計父も心配していた。

そこで、先輩方の手で遺伝子調整を受けて妻の胎内で子を宿す事が出来た。友樹が産まれてからもすくすくと育った。

けど、弟の智と双子の妹の魅奈美と亜香里は普通に産まれた。しかし友樹も智達と同じ産まれ方だと信じていたんだ。

けど、友樹はここに移る前に真相を知ってしまった。自分が遺伝子調整を受けた試験管ベビーということが。

エツオ「以上が友樹の出生の秘密。先輩方はやり切れないという気持ちがあつたが、あいつの性格が先輩方を…」

試験管ベビーはある意味珍しくはなかったが、実際自分達の近くにいたとは。

慎吾「試験管ベビーだろうがなんだろうが、友樹は友樹だ。試験管ベビーでも笑う時は笑い、泣くときは泣く」

慎吾の言ってることも間違つてはいない。いくら試験管ベビーでも友樹は友樹。それ以上でもそれ以下でもない。

彩香は友樹が連れさらわれたと知りながらも気丈に振る舞っていた。そんな彼女も試験管ベビーの友樹ではなく、一人の男としての友樹を愛している。

エツオ「あいつも思つてもみなかつただろうな。一発でアークルが適合し体の中に入るとは」

エツオがそういつた瞬間、アナザーセンサーが響き強い振動が起こる。地下でも分かる強い振動ののち、ボブが告げる。

ボブ「アナザーセンサーに敵！照合、エラスモテリウムオルフェノク、フォーティーン、そして…友樹さん…です」

屋敷から出た一同は友樹を筆頭にエラスモテリウムオルフェノクとフォーティーンがこちらに向かって歩いて来るのがよくわかる。

そこに、ライダー軍団が駆け付けエツオを含め、一号からJまで変身を遂げる。

彩香達ライダーズも一気に最強フォームに変身する。その際、電王はジークの力が加わつた超電王・ライナーに変身する。

キバだけは通常フォームに変身してガルル、バツシャー、ドツガとフエッスルを吹く。

キバット「ガルルセイバー！バツシャーマグナム！！ドツガハンマ
ー！！！！」

そしてタツロツトも飛んできてキバ・DGBKの左腕に止まる。

タツロツト「変っ身！」

キバの最強フォーム、仮面ライダーキバ・ドガバキエンペラー降臨。タツロツトの口から出る炎がファンガイアの王の証ザンバットソードを生成しキバ・DGBKはそれを握り締める。

デイケイド・C「皆…行くぞ！」

デイケイド・Cを筆頭に仮面ライダー達は友樹が変身したデビルクウガに挑む。

しかし、ファイターで仮面ライダーに変身出来るのは、オーズに変身するマリオだけ。友樹と一番等しいリンクとハヤテはほぞを噛む。しかしリンクは諦めない。己の左手に宿したトライフォースに願いを叫ぶ。

リンク「トライフォース…友樹を…友を救うために…お前の力を…貸してくれええええ！！」

刹那、ゼルダ、ガノンドロフ、そしてリンクのトライフォースが輝き出しハヤテ達やリンク達を光に変換し、一つの戦士を生み出した。

ファイター「……」

仮面ライダーファイター、爆誕。

その姿はディケイドをベースにクウガの角、それがアギトの用に広がり、左腕にドラグバイザー、右腰にブレイドの様なカードフォルダー、響鬼と同じボデイカラー、両腰にデンガツシャー、キバ・エンペラーの様なマントを羽織って、ベルトのバックルはスマツシユボールを象っている。

ファイター「……」

しかし、ファイターは動かない。すると、ディケイド・Cはディケイドライバーに一枚のカードを装填する。

アタックライド 人の心の光

すると、デビルクウガを除いた仮面ライダー達はパーソナルカラーに光りだす。

ファイター「……友樹、今助けるぞ！」

その声はリンクをベースとしていたファイター達の声だった。

ファイターはカードホルダーからカードを一枚取りドラグバイザーに似たブラザーズバイザーに装填する。

アビリティー 電光石火

アビリティーカード電光石火。その効力はピカチュウの電光石火と同様高速で移動し攻撃を当てる。そしてもう一枚カードを装填する。

アビリティー デインの炎

アビリティー ファイア掌底

ファイターの左腕からディンの炎が放たれ、続けざまにファイア掌底がデビルクウガに当てる。ディケイド・Cは二枚のカードを装填する。

アタックライド 霸邪百獣剣

アタックライド 雪片式型

ディケイド・C「受け取れ！」

ディケイド・Cはファイターに霸邪百獣剣を投げ渡し、ファイターはそれを受け取る。

一号達は主にデビルクウガの身動きを封じようと努力するが…。

一号「ぬおー！」

二号「兄さん！」

さらにはプリムや戦闘員等も現れ、仮面ライダー達を襲う。

ちょうどフォーティーンとエラスモテリウムオルフェノクを倒し終えたブレイド・Kとファイズ・Bがライダー軍団と共に雑魚の排除をしていた。

ファイターの握った霸邪百獣剣の刀身が輝き放つ。同じく、ディケイド・Cの握った雪片式型も展開しビームブレイドが出た。

ファイター「霸邪、百獣剣。邪気！退散！！！」

デイケイド・C「零落白夜!!」

二つの技が、デビルクウガに向かう。しかし、デビルクウガは避けずにその技に当たる。

カプト・H「どうということ?」

スカイライダー「見ろ!デビルクウガのあの目を!!」

スカイライダーに指摘され、ライダー達はデビルクウガの目を見た。元々黒かった両目の内、右目が赤く光り輝いていた。

刹那、アギト・SHが頭痛がおきたかの様に頭を押さえしやがみ込む。そこをWCJXが側に駆け付け声をかける。

WCJX「彩香!」

WCJX「大丈夫、どうしたの!」

すると、アギト・SHはシャイニングカリバーを地面に突き刺し、必殺技の体形を取る。

アギトのライダーマークが浮かぶと同時に、デビルクウガは体を大の字に広げた。まるで、アギト・SHを受け入れるが如く。

アギト・SH「はあああああ………」

ブレイド・K「まさか!」

アギト・SHを止めようとするブレイド・Kだが、ファイターに阻害される。ファイターは知っていた、アギト・SHの突然の頭痛と今のアギト・SHの行為が意味する事を。

アギト・SH「たああああ!!」

必殺技・シャイニングライダーキックがデビルクウガの腹部を直撃し、デビルクウガとアギト・SHを隠す。

アマゾン「見えない…友樹、彩香…見えない」

ストロンガー「アマゾン先輩、後ろ！」

アマゾン「！」

戦闘員「いーっ！」

デビルクウガとアギト・SHに気をとられたアマゾンの背後にショットカー戦闘員がナイフを持って襲い掛かるうとした。ストロンガーが叫ぶが、アマゾンの反応が遅れていた。

アビリティー スーパーミサイル

ファイター「おりゃあ！」

ファイターの左手のバイザーからサムスのスーパーミサイルが発射された。それは一直線にショットカー戦闘員に当たる。

アマゾン「ファイター……トモダチ」

ゼクロス「というか、戦闘員が増えてばかりですよ！衝撃集中爆弾
！！」

ロボライダー「RX、ロボライダー！」

シン「ヴェアアア！！」

超電王・L「フルスロットル・スーパー・ブレイク！」

キバット「ウエイクアップ！」

タツロット「ウエイクアップファイバー」

キバ・DGBKE「てえええい！！」

数々の歴戦の戦士と新たなる世代の戦士が戦っている中、デビルクウガだった者は優しい瞳を持った友樹に戻り、アギト・SHは彩香に戻っていた。

仰向けになっている友樹の腹部の上に、彩香がまたがっていた。その彩香の顔に大粒の涙が流れていた。

彩香「ばか……、馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿あ！！」

友樹「……ごめん……」

彩香「……どうして？……ね、どうして！？約束したじゃない……また地の石が出て、耐えて見せるって！」

友樹「約束……破っちゃったね。ごめん……また彩香に助けられちゃったね」

彩香「ほんつとに馬鹿！」

彩香は友樹の胸に頭を置き、嗚咽を漏らす。そんな彩香の頭を撫で、彩香を抱え立ち上がる。

すると、プリムや戦闘員、エラスモテリウムオルフェノクの灰、フオーティーン肉片が集まり一つの生命体を生み出す。

かつて、この世界に訪れた門矢士の世界の巨大怪人にしてGOD秘密警察機関のボス、キングダークと化す。その腹部に大型のモニターが現れてダクマが映る。

ダクマ<まさか、天地の石が破られるとは……！>

流石のダクマも天地の石が破られた事に驚愕し、一筋の汗をかく。

デイケイド・C「お前は甘く見すぎた。友樹と彩香の愛は、お前の想像を遥かに超えている。愛を軽く見すぎたお前に愛はわかるまい」

ダクマ<くっ！>

デイケイド・C「友樹は彩香の脳内に言った。アギトの賢者の石を開放したシャイニングライダーキックなら変身は解け、洗脳も解けるってな！だろ？」

彩香「ええ」

友樹「いくら僕だって、地の石の抵抗は付いているんだ。体の制御やテレパシーだって、死ぬ気でやればなんとか出来る！」

ダクマ<なら君達は一体何者だ。答える！>

デイケイド・C「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

そう言ったデイケイド・Cの背後で彩香と友樹は、更なる進化を遂げたアギト・コロナフォームと、赤き瞳を取り戻したデビルクウガ・レッドアイに変身する。

更に、Jはジャンボフォーメーションを行う。それと同時に、デイエンド・Cはデイエンドライバーに一枚のカードを装填しデイケイド・Cに向ける。

ファイナルフォームライド…

デイエンド・C「痛みは一瞬だ」

デイ・デイ・デイ デイケイド

デイエンドライバーから放たれたエネルギー弾がデイケイド・Cを撃つと、デイケイド・Cはジャンボケータツチにファイナルフォームライドする。

それがジャンボフォーメーションのJの腰にセットされると、Jの姿が真デイケイドに姿が変わる。その姿は、コンプリートフォームのデイケイドをそのまま巨大化した姿だ。

真デイケイド「覚悟しろよ！」

真デイケイドの右ストレートがキングダークの腹部に直撃する。お返しとばかりにキングダークも左アッパーを繰り出す。

真デイケイド「はあああああ！！！」

キングダーク「があああ！！！」

ぶっっー

真ディケイド「てやあ！」

バギイ！

キングダーク「ごぼお！」

真ディケイドの蹴りが決まり、キングダークは怯む。そこを狙い、真ディケイドはカードを一枚装填する。

ファイナルカメンアタックフォームライド…

その電子音と共に、一号からキバ・DGBKEがジャンプし、自身のカードオーラと化す。

ディ・ディ・ディ ディケイド

真ディケイド「おりやあああ！！」

真ディケイドはそのカードオーラを潜り抜けてキングダークに超必殺技・ジャンボ強化ディメンジョンキックをぶつけ、キングダークは断末魔の叫びをあげぬまま爆発四散した。

戦闘が終わると同時に、ライダー達は変身を解き元の姿に戻る。ライダー軍団はそれぞれ別の場所へ去った。ライダー軍団を見送った後、友樹は体中の力が抜けたかのように倒れた。

彩香「友樹！」

彩香が友樹の胸元に耳を当てる。何も聞こえてこなかった。鳴るはずの鼓動が聞こえてこなかった。

彩香「友樹いいいいいい！！！！」

くづつ

五十六話 Yの出生ノオールライダー 5月14日(後書き)

三日後…

慎吾「あつという間だったな」

シンジ「……ああ」

慎吾「今頃あいつも、天国で俺達を見守ってるだろうな」

そんな会話をする二人の目の前には、笑顔でサムズアップする友樹の写真が額縁があり、遺影として飾られてあった。

慎吾「友樹…」

シンジ「五代…」

慎吾& a m p・シンジ「安らかに眠れ。そして成仏しろ」

友樹「勝手に殺すなや」

慎吾「あ、生きてた」

友樹「生きとるわい！」

実はアークルの能力で友樹は仮死状態にあった。それにより、完治程では無いものの体調は回復していた。ただ今友樹は車椅子に乗って彩香に押されている。

シンジ「…ちっ」

友樹「そこお！何舌打ちしてんのさー！」

彩香「まあいいじゃない、生きてるんだし」

友樹「まあ…そうなんだけどね。うん」

彩香「門谷君、シンジ君晩御飯当番お願いね？」

慎吾 & amp; シンジ「何で？」

彩香「ね？」

慎吾とシンジに優しく笑顔で言うが、その背後には正にバーニングアギトがいた。流石の慎吾もシンジもいたたまれなくなったので、素直に従うしか無かったのだ。
今日も平和であることは間違いない。

ゼルダの伝説組の休日編 5月18日(前書き)

今回から本編と掛け離れ、ファイターやライダー達の休日を書きます。

第一回の今回はリンク & amp; ゼルダ主体のゼルダの伝説組です(ガノンドロフとトゥーンは文にちょこんとだけしか出ない)。

そしてある意味ゲストでポケットモンスターエメラルドからの人物が二人出ます

ゼルダの伝説組の休日編 5月18日

今日はリンクの誕生日。なのでゼルダは今回の休暇を有効に利用し、リンクに今までの疲れをとって貰おうと、レッドの世界であるホウエン地方のフエントウンを訪れていた。

トウーンとガノンドロフはおおとりゲンの特訓に勤しんでいる。

リンク「へえ、一緒に入れるポケモンによって温泉の効力が変わるんだな」

因みに、リンクはレッドの手持ちのゼニガメ・フシギソウ・リザードン以外のポケモンの一つサンダーを連れている。

レッドは意外にもイーブイ系のポケモンを所持していた。亜空事件の際は色々あったそうだ。

フエントウンのポケモンセンターはある意味温泉付きの宿だ。宿泊料はするが、温泉を除けば普通のポケモンセンターだ。少し贅沢過ぎるが、この地形を活かすが故の代物だ。

ゼルダ「観光は明日にして、部屋を取りましようリンク」

リンク「そだな」

二人の服装はいつものドレスや緑の勇者服ではなく、ゼルダは春らしいワンピース姿で、リンクはジーパンに緑のトレーナー姿だ。

ポケモンセンターは宿泊施設でもある。でもそれはポケモントレーナーに対してだ。が、スマブライダーズという肩書さえあれば宿泊出来るのだ。

一足先に温泉に入るリンク。現在はサンダースと共に入浴中。電気タイプ特有の微弱な電気風呂が心地好い。

名物と言えば、フエン煎餅をお湯でふやかして軟らかくした物を饅頭の生地にするという、煎餅饅頭が人気だ。故に、温泉に入りながらここはその煎餅饅頭が食べられるのだ。

リンク「ホウエン地方って、結構暖かい気候なんだな。温泉も気持ちいいし」

???「それがホウエンのいいところなんだ」

そう呟くリンクに銀髪の少年が喋りかけてきた。歳は友樹に近いだろうその少年は屈託の無い笑顔を向けた。

???「俺、ユウキって言うんだ。よろしく」

リンク「俺はリンク。リンク・ヤマト。君もユウキかあ、俺の友達にも友樹って奴なんだ」

???「ユウキ「へえ、そうなんだ」

友樹と同じ名前の少年…ユウキはリンクに握手を求めリンクはそれに応じた。

ユウキ「リンク・ヤマトって言うと、スマブラライダーズだろ？俺いつも乱闘見てるぜ」

リンク「ありがと」

ユウキ「やっぱお前強いな。なんか秘訣とかあるのか？」

リンク「そうだなあ。毎日欠かさず体を動かしたり、三食キッチンと栄養を偏らず摂ったりとかだな」

リンクがユウキと湯舟で喋ってるその頃、ゼルダも一人の少女と話していた。名はハルカと言う。

ハルカ「それで、お父さんのポケモンの研究を手伝ってるんですけど、ある人が凄い位の鈍感で………」

ゼルダ「それは御可哀相に。一度その彼の部屋に盗聴器を仕掛けるのはどうでしょう?」

ハルカ「それって犯罪ですから」

ゼルダ「では、カクレオンに通信機を持たせて侵入させるのは?」

ハルカ「その手がありました!」

なんともズレた感じの会話をしていた。

数分経つと、四人は同時に暖簾を出た。出会い頭にばったり会ったユウキとハルカは用事があると言って、リンク達と別れた。

リンク「結構気持ち良かったぞ、ここの温泉」

ゼルダ「また来たいですか?」

リンク「また来たいな。そうだ、次はゼルダの誕生日に俺が連れてくよ」

ゼルダ「ありがとうございます！」

リンク「約束だぞ？」

ゼルダ「ええ。期待してますよ？」

く づ っ

ゼルダの伝説組の休日編 5月18日(後書き)

次回はクウガの世界から

クウガの休日編 6月10日～6月11日(前書き)

今回は友樹クウガの世界です

若干そらのおとしものネタが入りますが、お気になさらず

クウガの休日編 6月10日～6月11日

木造二階建ての家の二階の窓からパジャマ姿の友樹が、窓をしつかりと開け朝日を浴びる。

友樹「(皆さんこんにちは。いい天気ですね。友樹です)」

彼は今数日の休みを貰い、実家のあるクウガの世界に戻って実家へ帰省していた。

6月に入って昨日までは雨だったが、今日は久しぶりの晴れだ。

友樹「(田舎って、いいですよ。朝は小鳥のさえずりで目が覚めたり、緩やかな流れの川で遊んだり出来ますから)」

そんな友樹の部屋に、魅奈美が入って来た。因みに、現在午前6時を少し回った時だ。

魅奈美「お兄ちゃん、朝ご飯だよー」

友樹「うん、着替えてからにするよ」

魅奈美「わかった」

友樹「亜香里は?…あ、そうかサッカー部の朝練か」

因みに、今日は金曜日だ。友樹がクウガに変身出来ていなければ、今は就職や進学を控えている高校三年生だ。

魅奈美「うん。大会が近いから結構ハードだって。マネージャーも

大変だね」

友樹「時に魅奈美」

魅奈美「何、お兄ちゃん？」

友樹「そろそろ着替えたいんだけど」

友樹「ご馳走様でした」

着替えを済ませた友樹は、朝食を摂り新聞に目を通す。つい最近では株価が気になる様子だ。

友樹「ちょっと行ってきます」

母「いつてらっしやい」

母に見送られた友樹は近所の花屋で花束を買い、これまた近所の寺の墓地に歩いて行った。

着いた友樹は一つの墓石に、先程買った花束を添えた。

友樹「ごめんね、あんまり来れなくて」

友樹は誰かに話すような口調で喋りだした。そこには、誰もいない様にしか見えない。あるのは一つの墓石だけだ。

友樹「前に来た時より、随分時間かかっちゃってさ、本当にごめん出来るなら、月に一回は来たかったんだけど、現実そうはいかないもんなんだ」

初夏の陽射しは全てを容赦なく照り付けるが、友樹は差ほど気にしていない。

友樹「君に合わせたい人がいるんだ。別の世界なんだけどね、彩香って言つて君と同じ顔なんだ。次に来るときに彼女を連れて来るからね。……………紗耶香」

友樹が手を合わせた墓石には、十寺院家之墓と彫られてあった。

友樹「また…来るね」

手を合わせ、友樹は墓地を後にする。

数時間後、日が暮れて空が赤くなった頃、友樹の目の前に土下座している少年がいた。その隣には亜香里がいる。

「お義兄さん！亜香里さんとの交際をお許し願いますでしょうか！」

なんとも古風な挨拶をしたのは、亜香里がマネージャーを勤めるサッカー部のゴールキーパーである円藤^{えんどう}豆田^{まめた}。亜香里のクラスメイトであるという。

友樹「あ……………と……………豆田君頭上げて上げて！」

豆田「そんなお義兄さん！君付けしなくても……………」

友樹「えっと……………よかつたら晩御飯一緒にどうかかな？」

因みに、母は中学の同窓会で家におらず、父・エツオはまだ帰って来ない。おまけに智も。

亜香里「お兄ちゃん、いいの！」

喜ぶ亜香里を見た魅奈美もこれまた笑顔になる。

晩御飯のメニューはグリーンカレーにドネルケバブ。因みに、五代家でケバブにソースをかけるのは、智と亜香里がチリソースで母と魅奈美はヨーグルトソースそしてエツオと友樹がミックスなのだ。

豆田「美味しいです！特にチリソースがいい」

友樹「でしょ？チリの辛さとヨーグルトの甘さが素材の旨さを引き出させ、スライスしたトマトと肉が　　！！！」

魅奈美「あーあ。お兄ちゃんヒートアップしちゃった」

豆田「っと……亜香里、友樹さんて……」

亜香里「ごめん豆田。お兄ちゃん、料理に関してはこだわりとかがあるの。特にコーヒー……」

食後豆田は帰宅し、亜香里と魅奈美は食器を洗っている最中、友樹のケータイに通話が入る。慎吾と会う前につるんでいた元GABの隊員からだった。名は佐古田と言う。

佐古田<副長、お久しぶりです>

友樹「今はもうGABは解散したはずです。で、要件は？貴方は久

しぶりの挨拶で電話をかけるがらじゃ無いはずです」

佐古田<はい。実は、グロンギが全滅したのをきっかけに色々と面倒な事がありました…>

友樹「面倒…?」

佐古田<近所に、数年前から潰れたボーリング場があるじゃ無いですか>

友樹「確かに。僕が中学校に上がる時に潰れてますから」

佐古田<そこで明日、暴走族・フライングキャッツが総会を行うそうです>

友樹「総会?」

佐古田<総会と言うのは名ばかりで、裏切り者の公開処刑だそうです>

友樹「その立入に僕を?」

佐古田<申し訳ありません。でも、元副長のお力を>

友樹「分かりました。明日ですね」

佐古田<はい。現地集合ということで片が済んでいます>

友樹「僕も行きますので、そこら辺お願いしますね」

通話を切った友樹は、自室に戻った。

ノートパソコンを立ち上げ、ライティングキャッツの情報を検索した。

友樹「……主な活動は、夜中の暴走行為、かつあげ、窃盗……そこら辺は普通の暴走族。けどバツクには玄武会か」

玄武会は友樹の世界では裏で有名な暴力団だ。しかも、大物政治家が絡んでいるため警察はヘタに手が出せない。

しかし、元GABならば手が出せる。GABはライダー軍団がバツクアップをしている為に政治家の圧力が効かないのだ。

友樹「決行は明日か」

魅奈美「お兄ちゃん！お風呂沸いたよー！！」

友樹「分かった、すぐ行くよー」

次の日。

ライティングキャッツが集まるといって廃倉庫。その中には裏切ったという男が数人の男に鉄パイプで殴られていた。

トドメの一撃が放たれようとした瞬間、入口を閉じていたシャッターが破壊される。

友樹「さあ！処刑タイムは終了ですよ！」

シャッターを破壊した友樹は手合わせ錬金術で足元のコンクリートから手を錬成し、裏切り者の男を救出する。それと入れ替わる様に佐古田と元GABの面々。そして警察が一斉に現れる。

友樹「大人しく投降してください！お願いします！！」

投降の呼び掛けに対し、フライングキャッツ総統の飯山春信は、無言で部下達に友樹を潰す様に指示する。一人は鉄パイプ、一人は釘バットを所持し友樹に襲い掛かる。が、友樹はその二つの攻撃を避け、懐に潜り込み蹴りを繰り出す。そして足払いからの踵落とし。

友樹「何で、僕にこんな事をさせるんです！！」

すると今度は、総統以外の部下が友樹達に襲い掛かる。だが、友樹の後ろからネットが舞い上がり部下がそれに拘束される。撃つたのは佐古田と友樹でも無い。

お婆「ひよっひよっひよ！！」

友樹「公民館のばあちゃん！？」

勇雄「らっしゃいらっしゃい！！」

友樹「魚やのあんちゃん！！」

芋子「いい加減バイクの暴走行為やめんかい！！」

友樹「八百屋のおばちゃん！？」

そして、地元の人々の逆襲により、フライングキャッツは総統もろとも壊滅した。

地元の人は偉大だと、佐古田と友樹は心底思うのだった。

くづつ

クウガの休日編 6月10日～6月11日(後書き)

今回は、あんまり出番が無かったハヤテのごとく!組

ハヤテのごとく!組の休日編 6月20日(前書き)

今回はハヤテのごとく!組の休日編です。

ハヤテのごとく！組の休日編 6月20日

ハヤテは久々に戻った屋敷の掃除を明け方から開始していた。スマブラ屋敷以上の広さだが、それでも仕事はきつちりとやっておかないと、男が廃る。いや、仮にもハヤテは一億以上の借金があるため、一円でも多く働かないと……。

しかし、今朝方の新聞によると不気味なUMAが出没しているという。

ハヤテ「（僕はマスターからライアのデッキ。ヒナはナイトのデッキでマリアさんはゾルダのデッキを。そしてあーたんには王蛇のデッキを渡されたけど……まさかミラーモンスターが？）」

因みに、ナギにはとある世界のベルトを改造して持たせてあるのだが、今は言えない。

キイーン

突如ハヤテに耳鳴りが襲い、鳴り響く。これは龍騎の世界ならでの
の ミラーモンスターが現れた証拠なのだ。

ハヤテは窓ガラスにデッキをかざし、Vバックルを出現させ左手を引き、右手の中指と一差し以外を握り前に突き出し、叫ぶ。

ハヤテ「変身！」

カシャッ！

キュピイイイン

幾つもの残像がハヤテを包み、その姿をエイをモチーフにしたライダー……ライアに変える。

ライア「はっ！」

王蛇「中々やるわね、このミラーモンスター」

ゾルダ「援護射撃は任せて下さい」

ナイト「お願いします」

アドベント

シュートベント

ソードベント

アテネが変身する王蛇の呼び出したベノスネーカーは突如として増えたレイドラグーンを次々と吐き出す毒で打ち落とす。

マリアが変身したゾルダのギガランチャーの銃弾もそのベノスネーカーの毒に乗り、レイドラグーンを撃ち貫く。

そして、ヒナギクの変身するナイトのランスがこれまたレイドラグーンを貫くように刺す。

ライア「お待たせしました！」

ファイナルベント

エビルダイバーに乗るファイナルベントで、今度はディスプレイパイダーを撃破する。

何故休日なのに、この四人が龍騎ライダーズに変身しているのかは、マスターが念のために渡した物だ。

以前より、ハヤテ達の世界では鏡に関する失踪事件が、後を絶たず犠牲者が増える一方だった。それに関係してか、今回このような事になったのだ。

ファイナルベント

と、そこに女性の声ができる電子音が鳴り響き、スピンしてくるバイクとそれに乗った二人のライダーがゲルニユートの群れに突っ込んだ。そこにいたのは……。

オルタナティブ「ハムスター、お前は何処まで暴走列車ごっこをするつもりなのだ？」

オルタナティブ・ゼロ「ハムスターじゃないかな！かな！」

ナギの変身するオルタナティブと歩の変身するオルタナティブ・ゼロも援護に来た。

普通なら運動不足なナギが変身ポーズの難しいオルタナティブのデッキを使うのは想像しがたい。しかし、マスターが適合出来るとの独断で彼女にオルタナティブのデッキを渡したのだ。

気が付けば、カードが無くなるまでミラーモンスターを殲滅していたのだ。

く つ つ

ハヤテのごとく！組の休日編 6月20日（後書き）

次回から通常通りの展開となります。

次の休日編は未定です

五十七話 赤いカブトと赤いクワガタ 6月30日～7月3日(前書き)

駄文駄文は当たり前

だけでも、こんな長い間を出しておきながらも、読んでくださいます
願います

五十七話 赤いカブトと赤いクワガタ 6月30日〜7月3日

スマ市北区。

毎晩毎晩、帰宅途中のサラリーマンの鞆を漁り機密書類が次々と奪われる事件が起こった。犯人の顔は未だに明らかになつてなかつた。そこで白羽の矢が立ったのが、左薫と右佑理、そして天道舞と五代友樹の四人だった。

友樹「気楽なドリーマー……つて叫びたいけどさ。………どうしてこうなつた!!!?」

そう、今友樹は舞と共に一番最近の現場にいた。

本当なら、昨日の乱闘で誤つてアークルに入ったヒビを治すのに安静したいのだが、仕事となれば仕方がない。それに今日は新発売のガ プラがあつたのだが、現在午前11時頃。近場のホビーショップまで行つても、間に合わない。

舞「被害者はどれも同じやられ方じゃないつて知つてた?」

友樹「確か、一件目から三件目までは半殺し、今回の四件目は殺し。しかも手口が……ワームつて何で?」

舞「おじいちゃんが言つてた。考えるよりもまず行動つて」

友樹「それでいいの?」

舞「おじいちゃんの言うことはたいていは当たるからね」

四件目の被害者は、確かに殺されたのだが、何故かその殺害された

筈の被害者が何度も目撃されている。

そして、その被害者は、今友樹と舞の目の前にいた。

友樹「何処から突っ込んだ方がいい？」

舞「……全部」

友樹「何で今現れる!!!」

その擬態したヤミーは、被害者と同じく腹は膨れており、いかにも中年の男ではげづらだった。

擬態を解くと、元のヌケニンワームに戻る。

モチーフはヌケニン。ということは、合成怪人だろうか。レッド出身のポケモンの世界では、効果抜群の技しか受け付けない特殊なポケモンだ。モチーフがそうならば、きっと特性も同じだろう。

舞「来て、カブトゼクター、ハイパーゼクター」

彼女の手にかぶとゼクターとハイパーゼクターが止まり、専用ベルトにかぶとゼクターをスライドさせる。

舞「変身」

ヘンシン

カブト・マスクドフォームはカブトクナイガンの銃弾がヌケニンワームに飛ぶ。が、特性神秘の守りが発動しカブトクナイガンの銃弾の一步手前で止まり落ちる。銃撃から斬撃にスタイルを変え、アックスモードで斬撃の嵐を繰り出すが、どれも避けられてしまった。

カブト・M「成る程。これは厄介ね」

一方、傍観者とかした友樹は持っていたケータイである相手と連絡していた。

友樹「こっちはワームだった。そっちは？」

薫「こっちはドーパンドわったわ。今佑理がロストドライバーでフアングで戦ってる」

友樹「ドーパンド？もしかして、使用者って……」

薫「お察しの通り、ただの軟弱者の営業スパイね。被害者が半殺しだったのは、殺すのに怖じけづいたってこと」

友樹「つまり死亡者がでたのはワームってことか」

そこで、通話を切ると同時に、キャストオフしたカブト・ライダーフォームがハイパーゼクターをセットしていた。

カブト・R「ハイパーキャストオフ」

ハイパーキャストオフ

チェンジハイパービートル

最強フォームに変身したカブト・ハイパーフォームでも又ケニソウムに歯が立たず、重い一撃を食らい込み、変身が解けた。しかも、又ケニソウムは灰色のカーテンに包まれ姿を消した。

友樹「舞！」

舞「……………けふっ……………けほっ」

手を押さえ咳込む舞。押さえた手にはほんのりと赤く染まった液体が滲んでいた。

幸い、カプトチェイサーにサイドカーが装着している（そもそもここまでそれで来た）ので、舞をサイドカーに乗せシートベルトを締め、友樹はカプトチェイサーを走らせる。

ゼルダ「もう大丈夫ですよ」

ゼルダの回復魔法で、舞はある程度回復した。それでもまだ休む必要がある。

友樹はと言うと、カプト専用の武器の開発に専念していた。資料は守護ライダーでもある紅渡からマスターを通じ受け取っている。

友樹「擬似ザビーゼクター、擬似ドレイクゼクター、擬似サソードゼクターは出来た。後は、本体を創るだけだ」

擬似ゼクターは変身こそ出来ないが、これから創るカプト専用武器に必要なツールなのだ。

それから三日経った早朝。仮眠をとりながらも完成した金色の剣を、友樹は掲げていた。

友樹「完成した……………パーフェクトゼクターが…」

ピーッピーッピーッ!!

ポブ「アナザーセンサーに反応!!種類確認又ケニンワームです!!」

ポブが指名者の名前を呼び出すよりも早く、昨日舞から借りた専用ベルトとパーフェクトゼクターを持ち、外に出る。

ブレイド「ウェイ!!」

ファイズ「っはあ!!」

アイクが変身するブレイドがブレイルアウザーとウルフの変身するファイズのファイズエッジが又ケニンワームを切り裂こうとするが、特性神秘の守りで無力に等しかった。

友樹「アイク、ウルフさん!さがって!!」

走りながら、友樹はカブトに変身する為の専用ベルトを巻く。驚いた手には、カブトゼクターが握られてあった。

友樹「変身!!」

ヘンシン

たちまち、友樹の体をタキオン粒子が流れその姿をカブト・マスクドフォームに変える。すかさず、カブト・Mはゼクターホーンを傾かせ、言った。

カブト・M「キャストオフ！」

キャストオフ

チェンジビートル

そして、ハイパーゼクターを左腰に装着し、叫ぶ。

カブト・R「ハイパーキャストオフ！」

ハイパーキャストオフ

チェンジハイパービートル

カブト・H「いつくぞおおお！！！」

カブト・Hはハイパーハイパークロックアップを行った。

カブト・H「ハイパークロックアップ」

ハイパークロックアップ

ハイパークロックアップ内でクロックアップしか出来ないワームは、今のカブト・Hには止まって見える。そのカブト・Hの右手には、ガンモードのパーフェクトゼクターが握られていた。

構えると、いつの間にか現れた擬似ゼクター達がパーフェクトゼクターに止まり、それぞれの定位位置に定まった。

カブト・Hは順々にパーフェクトゼクターにある四つのスイッチを押していく。

カブトパワー ザビーパワー ドレイクパワー サソードパワー
オールゼクターコンバイン

マキシマムハイパーサイクロン

カブト・H「食らえ！」

パーフェクトゼクターから、風属性の光線が放たれ、ヌケニンワームに直撃する。

ここで一つ問題だ。虫タイプのポケモンは、炎は勿論岩、氷等が弱点。そして、先程放ったマキシマムハイパーサイクロンは風属性の技。少々強引ではあるが、風は飛行タイプ、つまりは虫タイプの弱点なのだ。

結果、ハイパークロックアップが解けると同時に、ヌケニンワームは爆発四散する。

ハイパークロックオーバー

ドガアアアーン！！

そして残ったのは変身を解いたアイクとウルフと友樹しかいなかった。

くづつ

五十七話 赤いカフトと赤いクワガタ 6月30日〜7月3日（後書き）

さて、今回登場したヌケニンワームですが、本当にチートではありません。

一応ぶっちゃけますが、友樹の超適応能力を活かしたかっただけです。ので悪しからず。

因みに、友樹は普通に高校生をやっていたら、工業専門学校に進む道にいそつです
考えすぎか

話は最初っからズレますが、コーヒーをブラックで頂ける方はおりますか？

五十八話 七夕に願いを 7月7日

屋敷内にある、喫茶ルーム。そこに窓際の席に座るネスがいた。

ネス「……………」

今日は七夕。だが、ネスは浮かない顔をしていた。

理由は簡単。されわれ姫に誕生日を優先され、楽しみにしていた屋敷内の七夕イベントが中止になったのだ。それに、今日の天候は最悪な事に雨。しかも雷を伴っていた。

ネス「……………（ポーラ、おれへこたれそうだ）」

そんなネスの背後に、大樹が現れた。

大樹はネスの隣の椅子に座り、ネスはそんな大樹に気が付いた。

ネス「あ、大樹さん」

大樹「どーした？あ、そっか。お前、今日が楽しみだったんだな…
…七夕」

ネス「うん。故郷のオネットじゃ馴染みが無いけど、ここにきて七夕を知って、毎回毎回楽しみにしてたんだ」

大樹「OREも昔は楽しんだぜ、兄さんとな」

ネス「お兄さんがいたの？」

大樹「OREの世界にな。顔も体つきもそっくりだよ、いつも比べ

られていた。中味は違っただけだ」

「ははは、と笑い、窓を叩く雨を見ていた。

大樹「双子なんだけどな、好みも違っただよ。兄さんはチキンカレーが好きで、OREはチキンカレーが好きじゃない。けど、七夕だけはお互い気が合ったんだ。それ以外ほとんど相性最悪なんだけどな」

「そういえば、とネスは思い出す。食事のメニューがチキンカレーだった時、大樹は姿を見せなかった。作った人も困っていたけど。雨はまだ降っていた。この調子じゃあ、夜空なんて拝めないだろう。

ネス「短冊に、いつも何を書いてたの？」

大樹「ORE？そっだねあ、兄さんと違う何かを手に入れたい。としか書かなかったな」

ネス「そうなんだ」

ネスは妹がいた。妹はたまに自分の真似をした記憶がネスにはあった。た。

兄であるネスと、弟である大樹。意外とこの二人は気が合うらしい。

降っていた雨は止み、ネスは外に出た。まだ日は空高く輝いていたため、虹が見える。

ネスは本当にやりたかった。七夕イベントを。

そんなネスの背後に、緑色の影が現れ、呟くように言った。

「その欲望、解放しろ」

振り返ろうとしたが遅く、ネスの後頭部にセルメダル（・・・）が投入された。ネスの腹から、体内から欲望が足りてない白ヤミーが生まれる。

白ヤミーが生まれると同時に、ネスは気を失い倒れた。

ウヴァ「ちっぽけな欲望かと思ったら、こんなにもでかいとはな」

ウヴァは自分の生成した白ヤミーを眺め、呟く。

誕生日を祝って貰ったピーチは、ネスの小さな希望もどこ吹く風、等と思っていた。

去年は出来なかったけれど、心地好いとまで思っていた。

「た〜な〜ば〜た〜…」

白ヤミーを発見するまでは。

ピーチ「うっそー!!」

白ヤミーはピーチを発見すると、ヨロヨロと覚束ない足取りでピーチを握った拳でたたき付ける。

それも、一発ではない。何度も、何度もピーチをたたき付ける。ピーチはファイターとしてはある程度の実力だが、受けとなると弱い方だ。

このままでは、やられる。そう思った矢先、聞き覚えのある電子音が聞こえてきた。

タカ クジャク コンドル！ タアアアジャアアアドルウウウ
ウー！！

オーズ・タジャドル「離れんかい！」

タジャスピナーから炎の弾丸が出る。マリオの変身したオーズ・タジャドルコンボだ。

白ヤミーはオーズ・タジャドルを確認すると脱皮し、ハエヤミーが姿を現す。

ネス「PKファイヤー」

突然現れたネスもハエヤミーにPKファイヤーを繰り出す。

オーズ・タジャドル「ネス！」

ネス「マリオさん、ピーチさん。ごめんなさい！」

突然謝るネスにオーズ・タジャドルとピーチは呆気に取られた。オーズ・タジャドルは謝れるふしは無いし、ピーチも同様。

ハエヤミーが翼を広げ、飛び立つとオーズ・タジャドルも翼を広げ空中戦を開始する。

ネス「おれ、今日は七タイイベントだと思ってた。というか楽しみにしてた。けど、ピーチさんが今日誕生日だから、悔しくて…。それにあのヤミーはおれの不注意で出来ちゃったんだ」

それを聞いたピーチはしばらく罪悪感に浸っていたのは、言うまでもない。

空中戦を繰り広げていたオーズ・タジャドルは優位にたっていた。

⋮

く づ つ

五十八話 七夕に願いを 7月7日（後書き）

今回出たメダジャリバーですが、あれでよかったのかな？綴り

五十九話 ブレイドうえーい 7月9日(前書き)

今回ブレイドの新フォーム出ます

五十九話 ブレイドうえーい 7月9日

友樹とアイクは、悲しい事に炎天下の中で頭をペコペコと下げているた。

原因は、二人の背後でボツコボコにされているワリオとマルスだ。ワリオは辺りでワリオっぺを繰り返して、それを阻止しようとするマルス王子ことマルスが出たが何故か乱闘を起こし、しかも街中で騒ぎを起こしたまたま買い出しに出ていたアイクと空我神（友樹）に見つけられマルスとワリオは友樹の踵落しを見事に喰らい、現在に至る。

友樹「すみませんすみません！！家の厄介者がお騒がせしてしまつて」

住人A「いや、大丈夫だよ兄ちゃん。しかし見事な踵落しだねえ」

友樹「御見苦しい所を見せてしまつて、ほんつとつにすみませんでした！」

アイク「重ね重ね、お詫び申し上げます」

因みに、友樹とアイクの頭を下げる姿は意外にもシユールであり形が異様にしつかりとしていた。

街を出た友樹とアイクは、帰路に着いていた。やはり炎天下なのだろうが、友樹は白いTシャツにベージュのカーゴパンツ、アイクは青いTシャツに青いジーパンと言う出で立ちだった。友樹は年頃の若者なので服装に違和感はないが、逆にアイクは中世の騎士戦士なのである意味異様である。

すると二人は、クルリと後ろを向き身構えた。

友樹「ねえ、アイク。今度携帯用のアナザーセンサーを作るよ」

アイク「助かる。屑ヤミーも反応するようにな」

そう二人の後ろにはセルメダルを生成しない雑魚怪人屑ヤミーが、
覚束ないあしどりでぞろぞろと友樹とアイクに立ち向かう。

友樹「アイク、ブレイバツクル持ってる？」

アイク「ん、どうするつもりだ？」

友樹「また昨日の乱闘でアークルにヒビが入った」

アイク「解った」

アイクからブレイバツクルを受けとった友樹はチェンジのカードを
セットし、腰に宛がう。帯が一周すると、友樹は両手の指を親指と
人差し指以外握り、左腕を引き右腕を斜め上に伸ばし、叫ぶ。

友樹「変身！」

ターンアップ

手首を返し、レバー引き、電子音が鳴り、オリハルコンエレメント
が飛び出ると友樹はそれを潜り、ブレイドに変身する。

ブレイド「舞湖より先に、キング以上の力を発揮してみるよ」

誰に言うまでもなく、ブレイドはAからKまでのカードをブレイラ

ウザーに一斉にラウズする。

チェンジ スラッシュ ビート タックル キック サンダー メタル マグネット マッハ タイム ヒュージョン アブソープ
エヴォリューション デイステイニーブレイド

「デイステイニーブレイド……僕は運命を切り開く。そう、この手で！」

「デイステイニーブレイド、その姿は一見してキングフォームなのだが、背中には展開されてあるオリハルコンウイング、右腕には直接装着されてあるキングラウザーがあることからブレイドの最強形態である事が分かる。」

「デイステイニーブレイドはカードを五枚身体に融合してあるアンデットの力が宿るギルドカードよりも格上のカード、ブレイドカードを取り出し、右腕のキングラウザーに装填する。」

スピード10

スピードJ

スピードQ

スピードK

スピードA

「デイステイニーブレイドは右腕を上げ、振り下ろす。」

ロイヤルストレートフラッシュ

振り下ろされたそのキングラウザーの刃から、幾重にも重なったソードビームが発射され、屑ヤミーを全て切り捨てた。

アイク「あんたは何処までチート何だよ」

友樹「なんでだろ？」

ブレイドの変身アイテムを返却した友樹は何故アイクが舞湖の物を所持していたのか気になり、アイクに尋ねた。

アイク「あいつ、夏風邪ひいたみたいでな、やむを得ず……」

友樹「夏風邪も厄介だからなあ……」

しかし、その背後でまた新たな影があったのだが、二人は気付くことなくその影は消え去った。

その夜。友樹は完成したメダジャリバーをマリオに手渡した。マリオはそれを受領すると二度三度素振りし、感想を述べる。

マリオ「こいつはいい」

友樹「セルメダルを使うんですけど、三枚使う必殺技にパルキアの亜空切断をヒントにしたんですけど……後は使ってお楽しみです」

マリオ「なるほどな、今度使って見る」

くづつ

五十九話 ブレイドうえーい 7月9日(後書き)

次回

ナビ& a m p・友樹「何処かで会った様な……」

ゴーカイジャー

ディケイド「これがゴーカイジャーのカードか」

六十話 海賊と破壊者と仮面ライダー 7月21日(前書き)

今更ながら、デビルクウガのスペック解説！

デビルクウガ

パンチ力やキック力等格闘技等のほとんどのスペックはライジングアルティメットの約3倍。

色はライジングアルティメットのアークル以外を黒く染め上げた最凶にして最強の形態。

そして本作未公開だが、空を飛ぶ能力がある。

六十話 海賊と破壊者と仮面ライダー 7月21日

ゴークイガレオン。それは空飛ぶ赤い海賊船。船内には海賊の汚名を誇りに掲げる六人の戦士がいた。

ナビィ「灰色のカーテンみたいなオーロラがこっちに来るよー!!」

オウムの様な機械ナビィは船内にいる六人の仲間と言った。

マーベラス「灰色のカーテンだ？構わねえ、突っ込め」

赤い服を着たこの男はキャプテン・マーベラス。この船の船長だ。ゴークイガレオン

ジョー「ザンギヤツクの罠か？」

青い服に髪を束ねた男はジョー・ギブケン。最高五刀の剣を使う。

ルカ「何あれ？」

黄色い服を着た女はルカ・ミルフィ。悪く言えば金に目が無い女。

ハカセ「分析不能？そんな馬鹿な！」

緑の服に天然パーマで機器を操作していた男はドン・ドツゴイヤー。軟弱者である。愛称はハカセ。

アイム「こっちに来ます！」

ゆったりとした服装でしゃべる女はアイム・ドファミーユ。

鎧「何でこーなんの!？」

あたふたしている男が伊狩鎧。六人目の仲間にして見習い。そして無情にもゴーカイガレオンは灰色のカーテンに包まれ、姿を消した。

デイケイド「これでとどめだ」

ファイナルアタックライド　デイ・デイ・デイ　デイケイド

デイケイド「うおりやあああああ!!」

デイメンジョンブラストを突如現れ、破壊工作をしている再生カブトロングを撃ち貫いた。

その隣では、クウガ・アルティメットが再生改造蝙蝠男をカラミティアルティメットとスプラッシュリアルティメットの二撃で留めを刺していた。

友樹「……」

慎吾「どうした？」

友樹「あ、いや、……目の前の現実を否定してもいいかな？」

その目の前の現実とは、機械のオウムが飛び回ってゴチャゴチャと何かを叫んでいた。するとそのメカオウム（慎吾命名）が友樹の視線の高さまで降りて喋りだす。

ナビィ「ねえねえ君!ここは何処?!ゴーカイガレオンは何処にあ

るの?!」

友樹「あー、君は？」

あたふたと何かを言いたげなメカオウムに対し、あくまでも冷静に対処する友樹だった。

友樹に名を聞かれたメカオウムはその名を口（というか、くちばし）にした。

ナビィ「僕はナビィっていうんだ」

友樹「僕は五代友樹。隣の彼は門谷慎吾」

自己紹介が終え、友樹とナビィは互いに顔を見合わせ、声を揃え言った。

ナビィ& amp・友樹「何処かで会った様な……」

ナビィ「（おかしいなあ、この人と何処かの田舎で会った記憶が……）」

友樹「（何だろう？このメカオウムにあだ名で呼ばれた様な……）」

ナビィ& amp・友樹「（ま、いつか）」

特別に害も無いことがわかった友樹と慎吾は屋敷に帰ることとなった。

ゴークイガレオン。それは今、何処かの山の中腹に不時着していた。

船内では、ナビイが行方不明になってしまい、てんやわんや。特にハカセと鎧。

ハカセ「ナビイ！ナビイ何処！」

鎧「ドンさん、冷蔵庫にもいませんでした！トイレにもマストにも倉庫にも！いませんでした！！」

マーベラス「落ち着けおまえら。取り敢えずここが何処か、降りるか」

ゴーカイガレオンから降りた六人は、山道を降りる事にした。山道を降りる道中、六人は犬みたいな生物と一頭身の仮面とマスクを付けた生物がこちらへ歩いてきたのに気付く。

メタナイト「ふう。ゲン殿の修行はやはりきつい」

ルカリオ「そうだな。ん、その六人」

犬みたいな生物ことルカリオに呼び止まれたマーベラス達はモバイレーツとゴーカイセルラーを構え、警戒していた。

メタナイト「まつ、待て、私達はそなた達に危害を加えるつもりは無い！」

ジヨー「お前等、ザンギャックの一味か？」

ルカリオ「ザンギャック？グランド・シヨッカーの間違いだろっ？」

マーベラス「うるせー！問答無用だ！」

メタナイト「仕方ない！ルカリオ、行くぞ！」

ルカリオ「承知！」

マー・ジヨ・ルカ・ハカ・アイ・鎧「『『『『『『豪快チエンジ！』』』』』』」

マーベラス達は叫び、モバイレーツにレンジャーキーを差し込み、鎧はゴーカイスルラーにレンジャーキーをセットし、作動させる。

ゴーカイジャー

電子音が鳴ると、六人の姿が、赤、青、黄、緑、桃、銀の戦士へと変えた。

ゴーカイレッド「ゴーカイレッド」

ゴーカイブルー「ゴーカイブルー」

ゴーカイイエロー「ゴーカイイエロー」

ゴーカイグリーン「ゴーカイグリーン」

ゴーカイピンク「ゴーカイピンク」

ゴーカイシルバー「ゴおおーカイシルバあー！」

ゴーカイレッド「海賊戦隊……」

レッド・ブルー・イエロー・グリーン・ピンク・シルバー「……」
「『ゴーカイジャー!!』」「……」

メタナイト「仮面ライダー!? 嫌だ。いざ、参る!」

ルカリオ「波動の力を見よ!」

友樹「ん?」

ナビィ「どした、どした?」

慎吾「山に、船ってあるか普通」

ナビィ「んう? ああっ!」

確かに、山の中腹辺りに赤い帆と船体が見えた。普通船は海に浮かび、海を進む。川に浮かび、川を進む。それが陸の、それも山にあるのは非現実的である。しかし、ナビィだけは無くした物が見付かった様に叫んだ。

ナビィ「ああ! あれ僕が乗ってきた船だよお!!」

友樹「え、ということは……」

慎吾「行ってみるか」

ナビィを肩に乗せた友樹はビートチェイサーを、いつでも変身出来るようにディケイドライバーを腰にセットした慎吾はマシンディケイダーをその山に走らせた。

友樹「あれ？あの山って確か師匠せんせいのいる山じゃ……。とにかく急がなくちゃ」

ルカリオ「神速しんそく！」

ゴーカイブルー「見えない！……うっ！」

ゴーカイイエロー「ジョー！！…うあっ！」

ゴーカイグリーン「ルカ！…へぶうっ！！」

神速を使用したルカリオは目にも留まらぬ速度でゴーカイブルー、イエロー、グリーンを翻弄し掌低を食らわした。

ルカリオは倒れている三人の波動を見極めた。特にこれといった悪しき波動は流れていない事が分かる。

ルカリオ「これ以上の戦闘は無意味だ。某、そなたらの知るザンギヤックとは違う」

ルカリオはその三人に言ったその頃、メタナイトはレッド、ピンク、シルバーと対峙していた。

メタナイトはマントを翻し、宝剣ギアラクシアの切っ先をゴーカイレッドに向けて言った。

メタナイト「私達はザンギヤックとやらは無関係だ！」

ゴーカイレッド「騙されるか！」

ゴーカイシルバー「豪快チェンジ！」

ガオレンジャー

Gガオシルバー「よっしゃ！」

メタナイト「デイケイドと同じ!？」

ゴーカイピンク「はあ！」

ゴーカイレッドが撃ち、ゴーカシルバーがガオシルバーに豪快チエンジし、メタナイトが驚愕し、ゴーカイピンクが切り掛かる。その八人が入り乱れる中、またも灰色のカーテンが現れ、中から合成怪人の軍団が続々と現れ、各々の武器でゴーカイジャーとメタナイトとルカリオに襲い掛かる。

メタナイト「グラウンド・ショッカー!？くっ、こんな時につ！」

ゴーカイレッド「何だ？ザンギヤックじゃねーのか？」

ルカリオ「当たり前だ。そうか、そなたの世界には干渉されてはいないのか」

ルカリオとメタナイト、そしてゴーカイジャーの八人は怪人達に立ち向かう。

しかし、数は減るところか増すばかり。

ゴーカイレッド「全然へらねーぞ！」

ゴーカイブルー「ならどのレンジャーキーを使う!？」

「ゴーカイイエロー」それじゃあ、変化球、行ってみる？」

ゴーカイイエローに促されたゴーカイジャー五人は黒いレンジャーキーを使用する。

ガオレンジャー

アバレンジャー

ゴーカイグリーンはガオブラックに豪快チェンジし、ゴーカイブルーはアバブラックに豪快チェンジした。

ゴーオンジャー

ゴセイジャー

ゴーカイイエローはゴーオンブラックに豪快チェンジし、ゴーカイピンクはゴセイナイトに豪快チェンジした。

ギンガマン

メガレンジャー

ゴーカイスilverは黒騎士フルブラックに豪快チェンジし、ゴーカイレッドはメガレッドに豪快チェンジした。
入り乱れる戦士と怪人。

すると、そこに三種の叫びが聞こえてきた。

「ライダーあああああ………」

「『変身！』」

カメンライド デイクライド

怪人の海を書き分け、一号、クウガ、デイクライドがゴーカイジャーとルカリオとメタナイトと合流する。

クウガ・M「ナビィ、あの人達？」

ナビィ「そうだよ！オーイ、みんなあ！！」

ナビィのその声に反応したのか、ゴーカイジャーの六人はナビィに気が付いた。

Gメガシルバー「オイ鳥！何処行きやがってた！？」

ナビィ「あゝ、ゴメンゴメン。いい人に見付けて貰ったんだ。ほら、あのクワガタ見たいな人に」

ナビィの示す方向を見ると、地面を錬成して槍を作り出し、ドラゴンフォームに超変身する戦士がいた。

クウガ・M「超変身！」

ドラゴンロッドを振り回し、次々と封印のマークを怪人達にたたき付け、怪人達は爆破する。

ゴーカイジャーの六人は、クウガ・Dの下に行くと、元のゴーカイジャーに戻る。

ゴーカイレッド「オイ青いの」

クウガ・D「はい」

ゴーカイブルー「ナビィを見付けてくれた事には礼を言おう」

ゴーカイグリーン「そしてごめんなさい！あの一頭身の人と犬っばい人を僕達の敵と間違えちゃった！」

クウガ・D「（メタナイトさんとルカリオと戦ってたんだ）大丈夫ですって、っていうか、そろそろ片付けておかないと」

そういうクウガ・D初めの体に雷がほとばしり、クウガ・ライジングドラゴンフォームに超変身し、さらに青い装甲が黒くなり、クウガ・アメイジングドラゴンフォームに超変身した。

クウガ・AD「行きます！」

その近くで、ディケイドはケータッチを起動していた。

クウガ アギト 龍騎 ファイズ ブレイド 響鬼 カブト 電王
キバ

ファイナルカメンライド ディケイド

ディケイド・コンプリートフォームは一号の横に立ち、カードを一枚装填する。

ファイナルアタックライド イ・イ・イ 一号

電子音が響くと、一号とディケイド・Cはジャンプする。

「号& a m p・ディケイド・C」「ダブルライダーキック!!!」
ダブルライダーキック・ディケイド版が雑魚怪人の群れに衝突し、
その分雑魚怪人は減っていく。

ディケイド・C「その赤いの」

ゴーカイレッド「何だ？ピンクバーコード」

ディケイド・C「ピンク違う！これ、マゼンタ！とにかく、お前らの力を貸せ」

ゴーカイレッド「いいだろう」

すっかり了承したゴーカイレッドを見たゴーカイブルー達は首を傾げていた。

ディケイド・Cとゴーカイレッドは、ボス格の怪人・ガメルと対峙していた。

ガメルの馬鹿力で流石のディケイド・Cとゴーカイレッドはダメージを負い、ディケイド・Cはケータッチが外れ、元のディケイドに戻る。

ガメル「メズール、おれ、頑張る」

そういった、ガメルはセルメダルを自らの額に入れ、アルマジロヤミーを生み出した。

するとガメルは何故か灰色のカーテンに入って行った。

アルマジロヤミー「ガメル様を通して見て、戦い、私は知った。総

ては力、総てはパワー、総てはそれで回る。オマエラは弱い！弱い奴らに、グラウンド・シヨツカーは負けん！」

アルマジロヤミーの言葉を否定するようにデイケイドとゴーカイレツドは立ち上がり、言った。

デイケイド「当たり前だ。はなつから強い奴はいない。俺の知っている男は、生まれを気にせず、ただただ上を目指し努力している。誰かの笑顔を守るためにな」

ゴーカイレツド「俺達は、宇宙最大のお宝を手に入れる！絶対にだ！それまでは、絶対に諦めてたまるか！」

二人の熱意が届いたのか、デイケイドのライドブツカーからカードが三枚飛び出て、デイケイドはそれをキャッチする。

ブランク態から色が戻り、一枚はサーベル、もう一枚は拳銃、そして最後はゴーカイジャーのマークが書かれたカードだった。

デイケイドは、前の二枚のカードを装填する。

アタックライド ゴーカイサーベル

アタックライド ゴーカイガン

デイケイドの手元に、マゼンタカラーのゴーカイサーベルとゴーカイガンが現れる。

ゴーカイレツド「ん？ピンクか？」

デイケイド「違う！マゼンタだ！^{マゼンタ}赤紫！！」

ゴーカイレッドの間違いを正したディケイドは、ファイナルアタックライドカードを装填した。

ファイナルアタックライド　ゴ・ゴ・ゴ　ゴーカイジャー

ディケイドの持っていた、ゴーカイサーベルとゴーカイガンはレンジャーキーを挿していない状態で必殺技待機状態となり、ゴーカイレッドはゴーカイサーベルにゴーカイレッドのレンジャーキーを、ゴーカイガンにアカレンジャーをレンジャーキーを差し込む。

フアアアファイナルウエエーブ！

ディケイド& amp; ゴーカイレッド「ゴーカイス克蘭ブル！」

二丁のゴーカイガンからた光弾にゴーカイサーベルの光刃が飛び、重なり合い、アルマジロヤミーを貫く。

アルマジロヤミーは断末魔の叫び声をあげ、ディケイドとゴーカイレッドはお互いを見た。

ディケイド「やるみたいだな」

ゴーカイレッド「上等だな、お前も！」

一方、クウガ・ADはというと、ゴーカイブルーとグリーンと共闘し再生怪人ゴ・バター・バを相手にしていた。

アメイジングドラゴンロットをゴ・バター・バに突き刺し、空中に投げ飛ばす。そこをゴーカイブルーとグリーンがゴーカイサーベルで同時に切り裂く。

爆発するゴ・バター・バをバックに右からゴーカイブルー、クウガ・

A D、ゴーカイグリーンが立っていた。

ゴーカイブルー「やるな、黒クワガタ」

クウガ・A D「クウガですよ」

ゴーカイグリーン「カッコイイね！どういう原理で変身出来るの？」

クウガ・A D「えっと、超古代のエネルギーが詰まった霊石であるアマダムを使って、変身するんです。変身しない場合、ベルトは体内に入りますけどね」

ゴーカイグリーン「大昔にそんな技術が？」

クウガ・A D「ええ。それも代々伝わるベルト物で」

一方、ゴーカイイエローとゴーカイピンクは一号と共闘し、コブラカメラズーカと対峙していた。

一号「お嬢さん方、この初老の後に続きなされ！」

そういうと、一号は飛び上がり雷を纏わせコブラカメラズーカに必殺技をぶつける。

一号「電光ライダーキック！」

凄まじい威力を誇る電光ライダーキックはコブラカメラズーカの自慢の甲羅を破壊し、ゴーカイピンクとゴーカイイエローにトドメの指示を出し、二人はそれを了承し、ファイナルウェーブを繰り出す。

フアアアアイナルウエエーブ

ゴーカイイエロー「行くよ、アム」

ゴーカイピンク「はい、アムさん」

二人の放つゴーカイブラストがコブラカメラズーカを貫き、爆発させた。

そのまた一方で、ゴーカイシルバーとメタナイトとルカリオは再生ラ・ドルド・グを相手にしていた。

その際、メタナイトとルカリオは持っていたスマッシュボールを砕き、最後の切り札を発動する。

ルカリオ「波動の力を見よ！」

メタナイト「見るがいい！！」

波動の嵐とギャラクシアダークネスを再生ラ・ドルド・グに放ち隙が出ると、ゴーカイシルバーは船の碇に似たゴールドアンカーキーをゴーカイセルラーに差し込んだ。

ゴーカイシルバー「ゴールドアンカーキー！豪快チエンジン！」

ゴーカイシルバー「ゴールドモード」

ゴーカイシルバーの真上に、ゴールドアンカーキーが現れ、それがゴーカイシルバーと合体し、バイザーが下がった。

ゴーカイシルバーG「ゴーカイシルバー！ゴールドモード！！」

ファイナルウェーブ！

ゴークアイシルバーG「ゴークアイレジェンドリーム！！！！」

再生ラ・ドルド・グは堪えられず、爆発四散した。

もう敵はいないと考え、九人は変身を解いた。

友樹「そういえば、マーベラスさんだけ銀のスーパー戦隊選んだんですか？」

マーベラス「気分だ！」

ゆっくりしているのもつかの間。地中から、両腕がドリルで下半身はキヤタピラ状態の巨大シュバリアンが現れる。その進行方向は、間違いなくこちらへ向かっていた。

マーベラス達は、ゴークアイジャーに豪快チェンジしゴークアイガレオンを呼び出し、ゴークアイシルバーはゴークアイセルラーに赤いスーパー戦隊のレンジャーキーをセットして電子音が響く。

ゴークアイガレオン！

豪獣ドリル！

レッド・ブルー・イエロー・グリーン・ピンク「……海賊合体
！……」

赤い帆船・ゴークアイガレオン、青いジェット機・ゴークアイジェット、黄色いトレーラー・ゴークイトレーラー、緑のF1カー・ゴークイレーサー、ピンクの潜水艦・ゴークイマリンが次々に胴体、右腕、左足、左腕、右足に変わりやがて一つの人型兵器と化した。

レッド・ブルー・イエロー・グリーン・ピンク「……完成、ゴ
ーカイオー!!!」

そして、ゴーカイシルバーが操るドリルメカは一つの恐竜に姿を変
えた。

ゴーカイシルバー「豪獣レックス!!!」

そして、変身を解いた友樹は懐からバトルナイザーを取り出し、呼
び出す怪獣の名を叫ぶ。

友樹「いつけえ!ゴジラ!!!」

バトルナイザー モンスロード

バトルナイザーから光となって現れたのは怪獣王ゴジラ。

右からゴーカイオー、ゴジラ、豪獣レックス。巨大シュバリアンは
真っ先に豪獣レックスを右のドリルで狙う。

ゴーカイシルバー<負けるか!>

豪獣レックスの尾のドリルが、巨大シュバリアンのドリルをを破壊
し、薙ぎ倒した。

友樹「ゴジラ、メガバーストフレアで攻撃だ!!!」

ゴジラ「ゴギヤアアアオン!!!」

背鰭が発光し、ゴジラの口から熱線が放たれ巨大シュバリアンに激

突する。

そして、ゴーカーイオーに搭乗しているゴーカーイジャー達はゴーカーイオーを高速で回転させ、巨大シュバリアンに擦れ違い様に切り掛かる。

レッド・ブルー・イエロー・グリーン・ピンク「ゴーカーイ、激走斬り！」

それを受けた巨大シュバリアンは呆気なく爆発した。

友樹がゴジラを呼び戻した直後、ゴーカーイオーと豪獣レックスは灰色のカーテンに包まれ、元の世界に去って行った。

慎吾「（デイケイドと同じ様な能力……………か。面白い）」

慎吾がにいつと口角を上げ笑っていたのは、誰も知るよしも無かった。

く づ っ

六十話 海賊と破壊者と仮面ライダー 7月21日(後書き)

またまた今更ながら、アギト・コロナフォームの説明

アギト・コロナフォーム

スペックについては、オーズ・サゴーズコンボの攻撃力を数倍、ラトラーターコンボの約二分の一の速度が上げられる。

色は白一色。シャイニングカリバー・シングルモードを二本出して標準装備している。

六十一話 海と響きと戦闘 7月29日(前書き)

響鬼の新形態が出ます

六十一話 海と響きと戦闘 7月29日

友樹は今、一年振りにこの海岸に来た。しかし今日は海水浴では無い。

夜な夜なこの海岸で不審な生物が咆哮をあげているという情報を得て、唯一の目撃者に依頼され派遣に出たのが友樹の他に、マリオとリンクそして……仕事だと言うのに遊ぶ気満々の彩香の四人だ。

友樹「遊びに来た訳じゃ無いんだよ」

彩香「いやあ、ついうつかりしちゃって……てへっ」

友樹「(古ッ!)とにかく仕事終わったら遊んでいいから」

マリオ「その前に、謎の生物とやらを見付けないと、後々厄介だ」

リンク「見るべき場所は海中か、岩場。でもまだ昼前だから、先に海中を見るべきだな」

マリオ「よし。ちよっくら行ってくる」

シャチ ウナギ タコ! シャシャシャウタ! シャシャシャウタ!

オーズ・シャウタコンボに変身したマリオは、勢いよく海中に飛び込んだ。

友樹は指を口に当て、考える仕種をし、ヒビキを電話で呼び出した。

友樹「ヒビキ、今すぐ来れる?」

ヒビキ<オレ様の出番か？>

友樹「うん。もう直ぐかも知れないからね。それに、更に進化した響鬼が……」

オーズ・シャウタ「 皆逃げろ！」

突然、オーズ・シャウタの叫びが聞こえると、海中からプレシオサウルスの肉体を強化し、陸・海・空と状況に応じた戦闘が得意とされる、プレシオトロピウスが姿を現した。

大方、メズールの生成したヤミーに何らかの手を加えた様子だ。

オーズ・シャウタはウナギムチを使い、プレシオトロピウスに攻撃を加えるが、装甲が堅すぎたのか、弾かれてプレシオトロピウスの攻撃を喰らってしまい、変身が解かれ、リンクの足元にオーズドライバーが飛ばされた。マリオ自体は着地は出来たものの、ダメージが残っていた。

リンク「（仕方ない。やってみるか）マリオさん、オーズドライバ―（これ） 借ります！」

リンクはマリオの返事も待たず、タカ・コア、クジャク・コア、コンドル・コアを装填し、その隣にドラゴネイルを着けたオルタリングを出した彩香と、アークルを出した友樹が立ち、叫ぶ。

彩& amp ;リ& amp ;友「『変身！』」

タカ クジャク コンドル！タアアジャアアドルウウー！！

アギト・コロナフォーム、オーズ・タジャドルコンボ、デビルクウガが立っていた。

アギト・Cは自分のトルネイダーをスライダーモードにし、オーズ・タジャドルとデビルクウガは己の翼を広げ、そらとぶプレシオトロピウスに追撃を行った。

オーズ・タジャドルはオーリングサークルからタジャスピナーを生成し、クジャク弾とタジャスピナーから出る炎の光弾を繰り出していた。

デビルクウガは、自らの羽根一枚を原子レベルで分解しアメイジングドラゴンロッドとアメイジングタイタンソードを手に切り掛かる。

オーズ・タジャドル「ゼアラアアアア!!」

デビルクウガ「デビルスラッシュュ!!」

オーズ・タジャドルの攻撃がプレシオトロピウスの右目に、デビルクウガの攻撃が左目に当たり、プレシオトロピウスは激しく暴れだす。

その後頭部を、アギト・Cがシャイニングカリバーを振り下ろす渾身の一撃が放たれた。

アギト・C「たあああ!!」

が、やはり硬く弾かれる。一旦距離を置く三人は、溜息を着くヒマも無く、反撃する。

デビルクウガ「デビルスプラッシュドラゴン!!」

トラ チーター カマキリ バッタ ゴリラ ゾウ! ギガスキヤン!!

オーズ・タジャドル「コアチャージアタック!!」

アギト・C「コロナライダーシュート!!」

三つの技を食らっても、プレシオトロピウスは背の甲羅で防ぎ、飛行しながら冷凍光線を三人に放ち咆哮をあげた。

砂浜に落ちた三人は変身が解かれておらず、オーズ・タジャドルは仮面の奥で舌打ち言う。

オーズ・タジャドル「ちい。無理があるんじゃないか？」

デビルクウガ「というより、あの怪物には、若干だけど魔化魍の血液が流れてる。それに、そのほかの怪人の血も」

アギト・C「私も感じられたけど、魔化魍の血が濃いよ。多分：アイツが来れば……」

すると、三人の後ろでバイクのエンジン音が聞こえ、三人は振り返る。

ヒビキ「オレ様！参上!!」

バイク、ヒビキ号に乗ったヒビキがそこにいた。

ヒビキ号のエンジンを止め、ヒビキは音叉を取り出し響鬼アイムドセイバーに変身し装甲声刃を使い装甲響鬼に変化する。

デビルクウガはそんな装甲響鬼にとあるツールを投げ渡す。

デビルクウガ「ヒビキ!!」

A・響鬼「おっしゃ!!」

受けとった装甲響鬼は、受け取ったツールの内、一つを刀身に二つはマイクとスピーカーの部分に装着する。見た目、拡声器と日本刀が合体した鬼神装刀オーガソードを手に、マイク部分に叫ぶ。

A・響鬼「響鬼、覚醒！」

元々赤かった体は更に紅くなり、額の【装】の字が【鬼】の文字に変わり、姿が陣馬織りの様な姿と進化した。

鬼神響鬼の激誕！！

鬼神響鬼「オレ様！究極的に登場！見るよ見るよ！皆オレ様に目が離せてねーぜ！！」

デビルクウガ「いやいや、誰も見てないから」

オーズ・タジャドル「とつとはったおす！！」

アギト・C「同感ね」

デビルクウガ「ヒビキ！鬼神装刀の下のスイッチを三回押しして！それとあの怪物に音撃鼓をぶつけて！！」

デビルクウガの指示に従い、鬼神装刀の下のスイッチを三回押しプレスオトロピウスに音撃鼓・火炎鼓をぶつける。それと同時に音撃鼓・火炎鼓が押した分だけプレスオトロピウスの至る所に現れ、いつの間にかデビルクウガ達の手に音撃棒が握られてあった。

鬼神響鬼が自身の音撃棒・烈火を手にデビルクウガに言った。

鬼神響鬼「友樹、こいつあ一体！」

デビルクウガ「（実験成功！）もしこれから先、必要なあ…ってさ。さあ行くよ！」

鬼神響鬼「ああ。音撃打の大セッション！！音撃打・猛火怒涛の型あ！」

デビルクウガ「音撃打・空我の型あ！」

オーズ・タジャドル「音撃打・鷹孔雀荒鷲の型あ！」

アギト・C「音撃打・太陽錬舞の型あ！」

鬼神響鬼が頭部、デビルクウガは背中、オーズ・タジャドルコンボは腹部、アギト・Cが首に音撃を繰り出す。

魔化魍の血が入った事がアダとなったのか、清められたプレシオトロピウスは爆発した。

四人は変身を解き、帰路に着こうとしたその時、五人の前に蠅螂を意匠した仮面ライダーが立っていた。どこと無くカリスに似てはいるが、ベルトを見るとそれでは無いと分かる。

そしてベルトの形。それはまるで、クウガのアークルに似ていた。

友樹「ッ……！」

ただし、友樹だけは同様していた。

リンクはマスターソードを構え、謎の仮面ライダーに問い質す。

リンク「誰なんだ、あんた一体」

その仮面ライダーは何もいわず、踵を返そうとしたその時、友樹がその仮面ライダーに声をかけた。

友樹「待って！」

友樹に声をかけられた仮面ライダーは一旦足を止めた。

友樹「どうして、そのベルトを……どうして、レムの、オークルを
……！」

く　づ　っ

六十一話 海と響きと戦闘 7月29日(後書き)

今回出ました仮面ライダーレムは、破壊者のライダーに出ましたオリジナルライダーです。

そして鬼神響鬼につきましては、複数人分の清めが必要な魔化魍が現れた場合に必要な形態です。

残りは龍騎とカブトですが……全くネタが思い付きませんでした

今回は、レムとの出来事の数日後です

六十二話 ギルスノレム 8月3日（前書き）

とある世界のとある部屋。

ダクマは椅子に座り、目の前でひざまずく少年と少女に命令を下す。

ダクマ「君達には、クウガの彼とアギトの彼女を連れて来て欲しい。いいね？」

「仰せのままに…ダクマ様」

「総ては超首領様の為に、ダクマ様の為に」

少年はボサボサで黒髪で目は獲物を狙う獅子の様な赤の瞳に整った顔をしていた。

少女は赤毛のセミロングで猫のような黒い瞳に垢抜けない子猫の様な顔をしていた。

そして二人は、二つのガイアメモリを取り出す。

一つはカミキリ虫がGの字をしたガイアメモリ、もう一つはカマキリがMの字をしたガイアメモリだ。

そしてそのメモリを起動し、ガイアウイスパーを鳴らす。

ギルス

レム

「覚悟しろよ、アギト」

「覚悟してね、クウガ」

六十二話 ギルスノレム 8月3日

レムとの邂逅から数日の8月3日の午前零時。

友樹は今日もベッドの上でうなされていた。原因はワリオでもヒビキでもよくわかる。

友樹「……………つぐ、あゝあ……………ああああ!!!!」

うなされ、目が覚めた友樹は息を荒げ、額にベツトリと着いた汗を拭い横を見遣る。

彩香「大丈夫……………夫？」

心配したのか、タオルを片手に友樹の頬の汗を拭う。その彩香の表情は、いつになく暗い。月の光に照らされているが、その目尻に涙が溜まっていた。

友樹「……………また、起こさせちゃったね……………」

レムを見たその日から、友樹はうなされ、今の通りになってしまった。

部屋に備え付けられた掛け時計の針は、午前一時を指していた。

彩香「……………ねえ……………」

友樹「どう……………したの？」

彩香に声をかけられ、友樹は彼女の顔を見て応える。

彩香「あのライダー……レムって何？」

友樹は窓の向こうの月を見ながら答えた。

仮面ライダーレムは、クウガと違い現代の技術によって生まれた仮面ライダー。クウガが倒したグロンギの細胞を採取し、擬似のベルトに細胞のデータを移植する。

友樹「これが、擬似ベルト、オークルの正体。龍騎ライダーズのように制限は皆無だけど……」

彩香「誰かが、そのデータを？」

友樹「……恐らくは、僕の世界からデータを盗めば、訳無いよ」「一層表情を曇らせる友樹を見た彩香はベッドから出ると、友樹のベッドに潜り込む。

それ以上に、二人には言葉はいらなかった。二人は気が付けばもう眠っていた。

夜が明け、朝を迎え朝食を済ませた一同は乱闘を始めた。

今日の対戦カードは、ワリオ対響鬼対ピーチ対アギトだった。ルールはストック1にアイテムはモンスターボールと最後の切り札とハートの器だけである。

ステージの旧・終点では、戦況はほぼワリオが不利だった。

ワリオ「ワリオバイク!!」

響鬼「ほっ」

アギト・F「んしょ」

ピーチ「ぶべっ！」

ワリオバイクは、響鬼とアギト・Fに避けられるが、ピーチだけには当たった。キノピオガードが間に合わない程。

そして現れたモンスターボール。響鬼が手に入れ、投げるとワリオに当たりキレイハナ登場。眠り粉で眠らせて、一出した本人（響鬼）一が鬼火を繰り出す。

響鬼「たあーっ！」

ワリオ「ぎゅべっ！」

そして着地地点には…。

アギト・F「そあい！」

フレイムセイバーを構えたアギト・Fがワリオに向け炎月斬・おぼろび 隼火を繰り出す。

斬られたワリオは火傷のダメージが残る。

ピーチ「後ろがから空きよ！」

そんなワリオの背後に、フライパンを振りかざしたピーチが立っていた、振り返ったばかりのワリオを思いつ切り叩く。

べぎよっ！

フライパンで叩かれたとは思えない程の効果音が響き、ワリオは場外に吹っ飛ばされる。

そして勝者はアギト・Fだった。

乱闘後、彩香は落ち込む友樹を連れ出し、街へ連れ出した。

街は夏休みの学生で溢れ返っていた。特に女子中高生がその七割を占めていた。特に集まっているのは、人気ブランドの店だったり、スイーツの出店だったりしている。

友樹「ああ……そっか、今普通に夏休みか……」

彩香「そうねえ。私達、クウガとアギトの力を手にして無かったら……」

友樹「今頃自分が決めた進路に向けて、色々と奔走する時期だよな」

確かに。二人はもう高校三年生と同じ歳だ。となると、シンジ達も含めたライダー（マリオは除外）達は全員高校三年生だ。

しかし、もしもで総て決められては、たまったものじゃない。

友樹「……あの娘達は、アナザーに怯えることなく平和に暮らしている。僕達はライダーだけど、素顔を公表していな」

彩香「ストップ！今日は何も暗い事は考えないの！今日ね、友樹を連れて行きたい場所があるんだー！」

友樹「へえ。どういう所？」

彩香「来てからのお楽しみー！」

いつになく明るい彩香に手を引かれる友樹は、自然と笑顔になった。

「なあ！」

彩香「超能力つて、便利でしょ？」

「あああ……」げぶ！」

怯む男の背後で、友樹はカブト顔負けのハイキックをかまし、警察にその男を突き出した。

その後友樹はまたも彩香に連れられ、色々な娯楽施設に向かう。徐々にだが、その道中で心の闇が晴れる友樹は帰り道に彩香に礼を言った。

友樹「彩香、今日はありがとうね」

彩香「どーいたしまして。でも、今度は友樹が連れてってね？」

友樹「うん」

屋敷まで後少しの所で、二人の目の前に二人の少年と少女が現れる。歳は同じ位だろうその二人はゴツゴツとしたガイアメモリを手に取り、少年がしゃべり、少女もしゃべる。

「なあ、あんたが津上彩香か？」

「そして君が、五代友樹君かな？」

彩香「あなたたち……」

友樹「誰？」

すると少年はガイアメモリを起動し、ガイアドライバーを腰に当て、言った。

ギルス

「俺は須藤……優夜」

続いて少女も優夜と同じ動作をし、自身の名を言った。

レム

「私は神崎……紗耶香」

そして二人はガイアドライバーにメモリをセットし、二人揃って見覚えのある姿に変身する。その際ガイアドライバーがあった位置には、違うバックルがあった。それは、ギルスのバックルとレムのバックル—なのだ。

さしずめ、二人はギルスドーパントとレムドーパントに姿を変えた。

友樹「レム！？馬鹿な、バックルまで変わる?!」

彩香「ギルス！？で、でも……」

うるたえる友樹と彩香だが、レムドーパントとギルスドーパントは二人に襲い掛かる。

しかし、その後ろからダブルナトリガーWLTとディザオキイカロガーDWSTが銃撃でギルスドーパントとレムドーパントを狙撃する。

ギルスD「何だ……」

レムD「あなたたち……邪魔よ」

WLT「邪魔はあなたたちね」

WLT「人の心の傷をえぐる方が」

DWST「そんなお前達は、俺達が赦さない！」

ダブルのルナトリガーとデイケイドがフォームライドしたサイクロントリガーは、ギルスドーパントとレムドーパントに言い、WLTはギルスドーパントを相手し、DWSTはレムドーパントと対峙する。

ギルスD「邪魔ナンだよ……ダクマ様の御命令だ」

WLT「ダクマダクマってうるさいのよ」

WLT「やっぱりグランド・ショッカーの手先なのね」

ギルスD「正解だ。だがしかし、間もなくグランド・ショッカーは進化する。大ネオショッカーに……」

WLT「ネオショッカー！？冗談止めて！ネオショッカーはスカイライダー先輩が壊滅させた組織よ」

WLT「いよつ、流石検索女王！」

確かに、ネオショッカーは一号からスカイライダーまでの8人ライダー達が壊滅させた組織。

その近くで、DWLTはジャックフォームにフォームライドし、ライドブッカー・ソードモードで切り掛かり、レムDに問い詰める。

Dブレイド・J「貴様、ネオシヨッカーを何故!？」

レムD「今にタブーの核を超首領様に取り込むの。そしたら、総ての世界は大ネオシヨッカーの配下。生まれて来る赤ちゃんは戦闘員に育て、その他は奴隷よ。どう?素敵でしょ?」

ギルスD「今にダクマ様を初め、アポロガイスト様、ジャーク將軍様が貴様等に神に匹敵するほどの鉄槌を下す。そう、タブー以上の恐怖もな」

レムDの腰にあるマンティスクローでDブレイド・Jに袈裟切り、薙ぎ払う。

ダメージが高いために、元のデイケイドに戻る。同じくWLTも変身が解け、薫は気を失う。

ギルスDとレムDは次の標的に友樹と彩香を狙う。

ギルスD「動かないでくれるか?」

レムD「くすつ……ダクマ様がね、言ってたの」

レムDがそういうと、友樹は彩香を庇う様に立ち、レムDの言い分を聴き入る。

レムD「……超首領様の復活には、アマダムと賢者の石が必要だ……
……ってね」

友樹「アマダムと賢者の石!?!」

賢者の石。それは彩香のベルト・オルタリングの核でもある。クウガのアーケルでいうアマダムと同じ様な物。以前鬼ヶ島戦の時、仮面ライダーゴルドラが言っていた様に、賢者の石を取り出せば、彩香は間違いなく死ぬ。

友樹「……………じゃ、僕からちょっと質問。いいかな？」

ギルスD「手短にな」

友樹「……………神崎さん」

レムD「紗耶香で結構よ」

友樹「なら紗耶香、何故君は、あの時、プレシオトロピウスを倒した後、どうして僕の目の前に？」

少し間を置いたレムDは、変身を解き友樹の頬に両手を添え、言った。

紗耶香「……………敵勢調査よ。頑張つてね、GABの元副長さん」

ロイヤルストレートフラッシュ

刹那、背後で待機していたギルスDにロイヤルストレートフラッシュが放たれる。しかしギルスDは紙一重で避け、放たれた方を見た。そこには、ディステイニーブレイドが空を飛んでいた。

ディステイニーブレイド「佑理が意識戻して援護に来たと思えば、あんた達、覚悟しな！」

友樹「舞湖!？」

ギルスD「おい紗耶香、撤退だ」

紗耶香「はい。じゃあね、また会おうね〜!」

デイスティニーブレイドの介入により、ギルスDと紗耶香は撤退する。

その後、気を失った薫を慎吾が負ぶさり帰路に着くのだった。

神の間。

マスター「ハンドは、弟であるクレイジーハンドと今後について話していた。議題は勿論、超首領の復活。それに必要なタブーの核・アマダム・賢者の石。等である。」

マスター「これは困った……」

クレイジー「けどよお、どうするんだ?戦力増量する訳にはいけない。事実、複数の世界の干渉は、今がギリギリだ。これ以上他世界の戦士を呼ぶのは危険過ぎる」

マスター「だが、…今はこれといって手が無い。現に破壊者とも名高いディケイドでも苦戦した。それも劣勢でだ」

クレイジー「劣勢なのも当たり前だ。この世の何処に完全無欠の戦士が存在するんだ。好い加減に考え治せよ、兄貴!!」

クレイジーの言い分も間違っではない。

完全無欠のヒーロー、完全無欠の戦士、何でもかんでも完全無欠が付いていても、それは虚像にしか過ぎない。

マスター「パルテナから援軍の話は付いているか？」

クレイジー「馬鹿言え、ピットがいるじゃねえか」

マスター「……ロケット団、マグマ団、アクア団、ギンガ団、プラズマ団……これらの組織も今やグラウンド・シヨツカーの一翼だ……」

クレイジー「当たり前だ。あのアンドリュー・オイッコニーまでも生きてる。ピグマはどうでもいいが、アパロイドまでも掌握している。とどのつまり、大ネオシヨツカーの復活はそう遅くも無いってことだ」

もはや諦めるしか無いのか。そう思うマスターハンドだが、突然の侵入者に気付く。

「神はいつから、そんなに諦めるがちになったんだ？」

その侵入者は、黒いスーツに身を包み黒いサングラスをかけた長身の男だった。

しかし、ここは神の間。簡単に一般人の介入・侵入は不可能だ。

もし、入れるとするならばそれは……。

マスター「守護ライダーの……ブレイド！」

一真「剣崎……一真だ」

その男…一真は懐からとある資料をマスターハンドとクレイジーハ

ンドに渡す。その資料は、クウガからディケイドが真最強形態の状態で、それぞれのパーソナルカラーのマントを羽織り、そのマントには各ライダーの戦士の紋章が描かれている。

クレイジー「おいおいおい……これは……まさか……」

一真「ああ。……選ばれしライダーに与えられたその進化の証……それぞれの世界を統べる者の証……カイザーだ」

くづつ

六十二話 ギルスノレム 8月3日（後書き）

友樹は夢を見ていた。

それは、これから起こる未来の出来事ももしれない。

ある場所に、マントを羽織った十人の仮面ライダーが死闘を繰り広げていた。敵味方なく、自分以外を倒していた。

アドベント

クロックオーバー

フルチャージ

聞き覚えのある電子音。

それはまさしく、龍騎・カブト・電王だった。

そしてその上空で白くロケットの様な仮面ライダーがハイドラの上に立ち、見下ろしていた。

友樹「……………フォーゼ」

何故自分が見たことも無いライダーの名前を言ったのか。それ以前に気になるものが視界に入った。それは……

クウガとアギトが、最後に残っており、死合をしていた……………

友樹「……だ、……う、そだ……嘘だ……ッ、嘘だそんな事
おおおおおおおおおおお！……！」

クウガ？「おおおおおおおおおおお……
おおお！……！」

六十三話 龍騎、覚醒！ 8月3日～8月4日（前書き）

龍騎の真最強形態登場！

六十三話 龍騎、覚醒！ 8月3日～8月4日

クレイジー「馬鹿言え剣崎！カイザーに進化する必要があるだあ？
！冗談じゃねーぞ！」

一真「本気だ。ライダーズは現にリイマジ、オリジナル双方のライダー以上の力を付けた。だがあいつらはカイザーの能力は知らない」

剣崎から発せられたカイザーという単語にクレイジーは激怒し、マスターは考え込む。

カイザー…それはその世界に住む最強の仮面ライダーの証。言うなれば、その世界での皇帝である。故にその世界の二号ライダーでも歯が立たない程だという。

しかし、それはそのカイザーに進化する仮面ライダーが最強形態を上回る形態を見出さなければいけない。例えば、ブレイドで言えばデステイニールブレイドでクウガで言えばデビルクウガである。

しかしそれには、カブトと龍騎が更なる進化を遂げなければならぬ。ディケイドの場合はヒストリーオーナメントがすべて最強形態のコンプリートフォームがあるので、問題は皆無。

剣崎「話は終わった。帰る」

そう剣崎がいうと、灰色のカーテンに包まれ消えて行った。

しかし、マスターは未だ決断を迷っていた。カイザー以外にも変わりに仮面ライダーファイターがいるが、ファイター全員いなければ変身が出来ない。勿論オーズに変身するマリオも必要だ。

マスター「問題は山積みか……」

クレイジー「仕方ねえけどなこれしか、ねえって事か？」

マスター「龍騎^{シンジ}にはそろそろ真最強形態に出来る経験を積んだ。後は舞のカブト……ハイパーゼクターに強化パッケージを……」

一夜明けて、シンジは自分の世界に戻っていた。目的は休暇で、若葉の母親の快気祝いなので呼ばれた。

若葉の母の名は葵美穂、父の名は葵健二。美穂はシンジを快く思っているが、健二は敵意剥き出しである。

シンジ「あー、若葉。オレもしかして、居ちゃ悪かったかな？」

若葉「（大丈夫だよ。多分）」

健二「シンジ君。君は信じられないが、別の世界に居るといっが……」

シンジ「ええ」

健二「もしそうならば、若葉に近付く事は許さん！」

若葉「お父さん！」

シンジ「あははは……」

シンジはただただ苦笑いするしかなかった。

それから、健二は仕事があると言い出し、その場を去った。因みに、今いる場所は若葉の実家である。それもシンジの実家の二軒隣。

その時、シンジと若葉の耳にミラーモンスターが現れた事を知らせる耳鳴りがなった。二人は顔を見合わせ、その場を去り、若葉の部

屋の姿見鏡に向かいデッキを出し、変身する。

シンジ「変身」

若葉「変身！」

仮面ライダー龍騎、仮面ライダーファムは変身を完了させると、鏡の中に入っていく。

ライドシューターを駆り、ミラーワールドに到着する。すると何処からか金属がぶつかる音が聴こえ、音の鳴る方向へ向かう。そこには、レイドラグリーンとゲルニユートが群れをなしてナイトが対象していた。

ナイト「シンジ、帰ってたのか！」

龍騎「旬太！なんでレイドラグリーンとゲルニユートがこんなに出るんだよ！」

ナイト「分からん！若葉、ブランウイングを呼べっ！それとお前等耳塞げ！」

ナスティベント

ダークウイングが現れ、レイドラグリーンやゲルニユートの鼓膜を振動し混乱させ、その隙にファムはアドベントカードを装填する。

アドベント

呼ばれたブランウイングは翼を羽ばたかせ、突風を起こし、ゲルニユートとレイドラグリーンを吹き飛ばす。

サヴァイブ

ナイト・S「行くぞ、シンジ！」

サヴァイブ

龍騎・S「っしやあ!!！」

ナイト・サヴァイブ、龍騎・サヴァイブはそれぞれファイナルベントカードを装填。疾風斬、龍炎嵐ドラゴンファイヤーストームがレイドラグーンとゲルニユートの群れに直撃する。
しかし、それでも残った物があつた。それは、白いナイト・サヴァイブだつた。

?ナイト・S「やるな。だが、私はそう簡単に負けん」

ナイト・S「白い……俺？」

?ナイト・S「申し遅れた。私は仮面ライダーバット・サヴァイブ」

龍騎・S「……お前、グランド・シヨツカーか？」

バット・S「馬鹿を言うな。私は仮面ライダーを消す仮面ライダー。だがナイト、貴様は別だ。貴様は私が最後に引導を渡す」

突如現れた仮面ライダーバット・Sは紳士的な喋り方でダークバイザーツヴァイに似たバットバイザーツヴァイに、三枚のアドベントカードを差し込む。

アドベント

アドベント

アドベント

現れたのは、ダークレイダーに似たホワイトバード。そして、マグナギガに似たトカレテラ、エビルダイバーに似たイヴィルダイバーが姿を現す。

龍騎・S「成るほど、リュウガと同じ様なもんか」

バット・S「はっん、何を言う。こっちはミラーモンスターを入れて4。対するお前は3……明らかだよな、差は」

確かにそれは事実だ。下手すれば、龍騎・S達はホワイトバード達の餌だ。しかも、ナイト・Sとファムはとくにアドベントカードを使用したので、呼べるのはドラグランザーのみ。ストレンジベントも期待出来ない。

その時だ……。ゴルトフェニックスに腕を組み見下ろすオーディンがいた。

そのオーディンは以前白神勝人が変身していた時と、風格が違っていた。

オーディン「若葉を守らず何を躊躇うか、バカモンが！」

ファム「お父さん!？」

なんと、オーディンに変身していたのは若葉の父・健二だった。

以前、ディケイド・門谷慎吾と共に倒したオーディンだが、そのデ

ツキは直後守護ライダーが入手、そして葵健二の手に渡った。
そしてその健二が変身したオーデインは今、バット・Sが呼び出したミラーモンスターの軍団をファイナルベントで一掃した。

ファイナルベント

オーデイン「とうえええええい！！！」

そして気が付けば、残ったのはバット・Sだけであった。だがブラ
ンク体でないことからして、ホワイトバードはまだ生きている様だ。

龍騎・S「親父さん……」

オーデイン「親父と呼ぶな！……今日はこいつを渡しに来た。サウ
アイブ・業火だ」

龍騎・S「サヴァイブ・業火……」

そのカードは翼の向きが反対だと言うことを除けば、サヴァイブ・
烈火と瓜二つ。

龍騎・Sはドラグバイザー・ツヴァイを突き出し、更なる炎を呼ぶ。
そして、銃剣型から日本刀の形をしたドラグバイザー・トライにサ
ヴァイブ・業火のカードを鑄つばにある部分に装填する。そこは透けて
二枚の炎のサヴァイブが見える。

ツインサヴァイブ

その電子音が鳴り響き、龍騎・Sは更なる進化を遂げた。
元のサヴァイブ形態の肩にドラグランザーとドラグレッダーを思わ
せる頭部。脚には小型のドラグシールドが直接装着され、バックル

使用すると相手のアドベントカードの効力を鏡が割れるような音が鳴ると同時に無くなってしまふ。使用したのは、龍騎・Aだった。

龍騎・A「今度はこっちが……決める」

ファイナルベント

ドラグランザー・トライに通常時、サヴァイブ時、アドベンチャー時のファイナルベントカードを三枚装填。ドラグエンペラー・ボードモードに龍騎・Aがドラグバイザー・トライを構え、すれ違い様にバット・Sを切り裂いた。

戦いが終わると、バット・Sの正体がミラーワールドの匂太で歪んだ存在だと知った四人は、一つのテーブルを囲いお好み焼き屋に来ていた。勿論健二が支払う事に。

話の内容は、殆ど健二がシンジに対し若葉についての話だった。

健二「結論を言おう。若葉を泣かすマネをしてみる、貴様を永久に……」

とどのつまり、若葉との交際は許すが若葉を悲しませる事は絶対にしない事。

そして、お好み焼きを焼く途中シンジと若葉が青海苔の取り合いをした結果、男女三人組のグループが青海苔だらけになったのは、言うまでもない。

くづつ

六十三話 龍騎、覚醒！ 8月3日～8月4日（後書き）

龍騎・アドベンチャーはシルバーソルをモデルにしてしまいました。

御不満がございましたら、謝罪させていただきます

不可解な思いをさせてしまい誠に申し訳ありませんでした。

六十四話 God Sonic Love 8月19日(前書き)

今回でカブトの真最強形態が出ます

六十四話 God Sonic Love 8月19日

舞は実家のおでんやを切り盛りしていた。理由は簡単。舞の祖父がギックリ腰な為だからだ。

一日の始まりは、仏壇の両親に手を合わせる事である。後は開店時間までにおでんの仕込み、業者への発注、掃除位だ。

トモヒロ「お、帰ってたんだな」

まだ開店前なのに入って来たのは、内田トモヒロ。仮面ライダーガタックに変身するZECTの隊員だ。そのトモヒロの両手には買い物袋が下げられており、主にこの店のおでんの種だ。

舞は握った包丁を研ぎながらトモヒロに問うた。

舞「何で来たの？おじいちゃんならいないわよ」

トモヒロ「いや、昨日じいさんから電話きてな。舞が戻るから手伝ってやれってよ」

舞の祖父は舞とトモヒロが付き合っていると誤解していた。それが苦で舞はZECTを脱退した。因みに、それを知るのは、現在服役中の矢車刀次位だ。

それから、営業時間となった。トモヒロが接客と会計を行い、舞はその残った仕事だけだった。

場所は変わり、新設ZECT内部。矢車が失脚後新たな隊長が配属された。その名は弟切草俊^{おとぎりそうじゅん}。彼は自身の相棒コーカサスゼクターを握り、モニターに映る少女に憎しみの念を込めた視線を向ける。

俊「てえんどおお！何故戻って来たああ！！矢車隊長を虚仮こけにして
までえええ！」

俊は前隊長の矢車を慕っていた。ところが矢車がZECTを破壊し
ダブルザビーに変身しデイケイドとカブトを相手にし、結果は負け。
俊はZECT本舎が崩壊したとき、ワーム駆除の為に席を空けてい
た。そして戻れば、矢車は警察に逮捕され、ZECT本舎は崩壊し
ていた。

俊「矢車隊長おお……私は貴方を一生慕い申し上げます……」

今日はいつもより客足が多くなっていたせいか、おでんは底を付き
早めの営業終了となった。

舞は売り上げの一部を集め買い出しの用意をしていた。おでん種で
卵と大根がきれてしまったからである。トモヒロはそろそろ出勤し
なければならぬ時間帯なので、ガタツクゼクターと共に店を出た。

トモヒロ「じゃ、そろそろ行くわ」

舞「はいはい。……そういえば、トモヒロ」

トモヒロ「何だ？」

舞「新しいZECTの隊長って、誰？トモヒロじゃそんな器には見
えないけど」

トモヒロ「サラリと酷い事言うな。新しい隊長は弟切草俊。何でも、
矢車を慕っていたらしいぞ」

舞「矢車………ね」

トモヒロ「今の隊長は滅多に顔を見せない。デイケイドが来ていた時には席を外しワーム駆除に出ていた。今じゃカブティックゼクター計画の第一人者にして仮面ライダーコーカサスだ」

カブティックゼクター計画。それは舞もZECTに所属していた時に耳にしていた。ザビーと同様のプレスレットを使用し変身する。それぞれのゼクターのモデルは、金のコーカサスオオカブト、銀のヘラクレスオオカブト、銅のケンタウルスオオカブトの三種。舞は設計図こそ見たことはあるが、現物を目にしたことは無い。それと同様弟切草俊さえも見たことも無い。その間にもトモヒロは本部に戻っていた。

馴染みの八百屋を後にした舞は、カブトゼクターを握り、目の前の敵を見据えた。その足元には、二本の角を折られたガタック・ライダーフォームがグツタリとしていた。

「弱いなあ。そんな弱い戦いの神にこれが相応しいいい」

踏み付けている本人は、ガタック・Rに青薔薇を散りばめる。

「青薔薇の花言葉はああ、不可能と死だああ！」

ガタック・R「ま、………い……げ……ろ……」

舞「まさかと思うけど、完成してたのね。カブティックゼクター計画第一号………コーカサスゼクター………仮面ライダーコーカサス………!!!」

コーカサス「まあなああ。矢車隊長のおおかたああきいい！」

コーカサスが叫び、舞は買い物袋を危害が無い場所に起きカブトゼクターを呼ぶ。

舞「来て、カブトゼクター!!!」

飛来するカブトゼクターを手に、舞は天に向け指を指し言った。

舞「おじいちゃんが言った。人を見下げ、簡単に死ねと言うような輩に勝利の星は輝かない!変身!」

ヘンシン

舞は仮面ライダーカブト・マスクドフォームに変身を完了させ、カブトナイガンの銃口をコーカサスに向ける。

カブト・M「その汚い足を退けなさい。さもなければ、そんな強さに溺れた頭を撃ち抜く」

コーカサス「お前ええ、ばあかかああ?」

クロックアップ

コーカサスはクロックアップを発動し、ガタック・Rとカブト・Mに猛攻を仕掛けた。

カブト・Mはそれに対処しようと、キャストオフを行い直ぐさまクロックアップに入った。

カブト・M「キャストオフ」

キャストオフ

チェンジビートル

カブト・R「クロックアップ」

クロックアップ

クロックアップ空間に入ったカブト・Rはコーカサスを見付けると、カブトクナイガン・アックスモードで切り付ける。

しかし、コーカサスは先を読み続けるように、次々とカブト・Rの攻撃を避けていた。

コーカサス「とうー！」

カブト・Rの右脇腹にコーカサスの膝蹴りが直撃。強制的にクロックオーバーを起こしてしまう。

クロックオーバー

電子音が無情に鳴りカブト・Rは片膝を付き、同じくクロックオーバーを起こしたコーカサスを見上げる。

そのコーカサスは何処からか青い薔薇を取り出し、カブト・Rの足元に投げた。所詮カブトと言えども、旧世代のライダー。新世代であるカブティックゼクターに敵わないというのか。だが、舞は諦めず、諦めきれず、ハイパーゼクターを呼ぶ。

カブト・R「来て、ハイパーゼクター!!!」

それに答えるが如く、高く挙げた左手にハイパーゼクターが止まり、カブト・Rはそれを左腰にセット。ゼクターホーンを倒す。

カブト・R「ハイパー……………キャストオフ!!!」

ハイパーキャストオフ

チェンジハイパービートル

猛々しい赤い角、白銀の体とカブテクターが特徴の仮面ライダーカブト・ハイパーフォーム。

カブト・Hは、次元を越え呼び出したパーフェクトゼクター・ソードモードを握りしめ、コーカサス目掛け切り掛かる。

カブト・H「ダアーツ!!!」

コーカサス「しゃあらくさああい!!!」

最強形態の攻撃でさえも、通常形態のコーカサスには聞かなかった。試しにガンモードで打ち続けるが、コーカサスは多少のダメージを負いながらも、詰め寄り至近距離ライダーキックをカブト・Hは防ぐ術も無く直撃する。

ライダーキック

コーカサス「ドゥー!!!」

カブト・H「…っく、…ああああん!!!」

自慢の強度を誇るカブテクターにいくつもひびが入る。既にカブト・Hもガタツク・Rと同様最強不能。

その時、倒れ俯せの状態のカブト・Hの右手に、カバー状のパーツが現れた。カブト・Hは体にたまったダメージに堪えながらも、そのツールに手を伸ばす。

次の瞬間、カブト・Hのカブテクターの修復され、同じ様にガタツク・Rも復活を果たす。

コーカサスは訳が分からなくなっていた。あれだけ痛め付けたカブトとガタツクが復活を遂げるなどと。

コーカサス「何故だ……何故ええ！」

すると、カブト・Hは天に向かって指を立てて言った。

カブト・H「おじいちゃんが言っていた。天の道に負けはあれども諦めは無い！」

ガタツク・R「さつきはよくも痛め付けてくれたなあ。倍返しにしてやるぜ！」

コーカサス「ぬぐぐぐ……」

カブト・H「トモヒロ下がつて。こいつは私が倒す」

ガタツク・R「あいよ」

カブト・Hは手にしたツールをハイパーゼクターの前後に取り付け、再度ゼクターホーンを倒す。

カブト・H「プロミネンスキャストオフ」

プロミネンスキャストオフ

チェンジプロミネンスビートル

強化ツールを付けたハイパーゼクターはプロミネンスゼクターになり、カブト・Hは体の総てが赤く染まり、角がより本物のカブトムシと同じ様な形となり、脇から踵に渡りカブテクターが更に増えた。これこそが、仮面ライダーカブト・プロミネンスフォーム。焦りと恐怖で我を忘れ、またもライダーキックを放つコーカサスの前に、カブト・Pはハイパークロックアップを上回るプロミネンスクロックアップを発動する。

カブト・P「プロミネンスクロックアップ……」

プロミネンスクロックアップ

総ての時間が停止した空間。カブト・Pはまたもゼクターホーンを倒す。

マキシマムライダーパワー

1
2
3

カブト・Pはカブトゼクターのゼクターホーンを戻し、咳く。

カブト・P「プロミネンス……キック」

そしてゼクターホーンを倒す。

ライダーキック

ハイパーキックと同じ様に、総てのカブテクターが展開される。展開された箇所からタキオン粒子で形成された羽根と足が放出される。それはまるで、巨大なカブトムシのようだった。

飛び上がり、コーカサス目掛けプロミネンスキックを放った。

そして、砕け散ったのはコーカサスセクターとライダープレスだった。

弟切草俊も矢車と同じ刑務所にその日集監された。

舞は安全な場所に置いておいた買い物袋を手に取り、その場を後にした。その買い物袋の中に、プロミネンスツールが、夕日に照らされ、反射していた。

く づ っ

六十四話 God Sonic Love 8月19日(後書き)

後はクライマックスだぜえ！

六十五話 再会する者と転生者 9月1日(前書き)

今回は藤龍さんのコラボです！次回も出します。

そんでもって、クライマックス編突入！

六十五話 再会する者と転生者 9月1日

クウガからキバまでが真最終形態に変身可能となった。

マスターは神の間で嬉しさ半面辛さ半面だった。カイザーへの道は開かれたが、それを制御する力が備わっているのか、それが不安だった。

マスター「これは弱ったな……」

数日前、マスターは友樹の見た夢を本人から聞いた。それは紛れも無く、カイザーとなった十人の平成ライダーが争い、その上空でフォーゼが見ていたという。

友樹はフォーゼ自体見たことも聞いた事も無い。だから知るはずも無いのだ。

マスターは、より一層苦悩していた。

マスターが苦悩しているその時、屋敷に大量の再生怪人 & amp ; 改造プリムが迫って来ていた。

デビルクウガ、アギト・コロナフォーム、龍騎・アドベンチャー、ファイズ・ブラスター・アクセルフォーム、デイスティニーブレイド、鬼神響鬼、カブト・プロミネンスフォーム、超電王・ライナー、超電王、キバ・ドガバキエンペラーフォーム、デイケイド・コンプリートフォーム、デイエンド・コンプリートフォーム、ダブルサイクロンジョーカーエクストリーム、オーズ・タジャドルコンボ。

その他にはルイージが変身するバース・デイに、ハヤテが変身するライア・サヴァイブ、ヒナギクが変身するリュウガ・サヴァイブ、マリアが変身するゾルダ・サヴァイブ、アテネが変身する王蛇・サヴァイブ、そして残ったファイター達でファイターがいた。ファイ

ターに関しては、マリオとルイージ、そしてハヤテ達も必要なのが、緊急時なのか、変身が成功した。

デビルクウガ「街には行かせない！」

アギト・C「何で？どうしてこんなにも……！？？」

龍騎・A「先に屋敷を襲撃して、成功したら後は街へって奴だろ！」

ファイズ・B・A「やらせない！例え小さい炎でも、強く輝く！」

デビルクウガは己の翼の羽根を飛ばし再生怪人とプリムに当て、アギト・Cはトルネイダー・スライダーモードを操りコロナライダーブレイクを繰り出す。

龍騎・Aはドラグバイザー・トライでプリムを一気に三体切り裂き、ファイズ・B・Aはファイズブラスターをブレードモードに切り替えて迫るイマジンを切り倒す。

デイスティニーブレイド「ウエエエエイ！！！」

鬼神響鬼「つたく、これじゃ大セッションが出来ねえじゃねえか」

カプト・P「おじいちゃんが言った。諦める事は、後悔しか生まれない！！！」

超電王・L「モモタロス！しっかりサポート頼む！！！」

超電王「おっしゃ！行くぜ、行くぜ、行くぜええ！」

キバ・DGBKE「でえい！！！」

ディステイニーブレイドが右腕と一体化したキングラウザーを振るい、鬼神響鬼が鬼神装刀を再生牛鬼に突き刺し、カブト・Pはパーフェクトゼクターを握り締めフィロキセラワームとメタルプリムを切り、超電王・Lのスーパーデンカメンソードが屑ヤミーを切り、超電王がボイスターズシャウトを繰り出し、キバ・DGBKEはザンバットソードとガルルセイバーの二刀流。

ディケイド・C「大樹、行けるか？」

ディエンド・C「わからんが、左と右、痛みは一瞬だ！」

ファイナルフォームライド ダ・ダ・ダ W

WCCX「痛っ！」

プリズムマキシマムドライブ

WJJX「大樹、後で殴るわよ！」

プリズムマキシマムドライブ

オーズ・タジャドル「孔雀弾頭弾！」

ディケイド・Cはライドブッカー・ソードモードで再生メ・ギヤリド・ギを突き刺し、ディエンド・Cはファイナルフォームライドカードを使用しダブルサイクロンジョダガル並ダタ由シサホダロル並ダオカエカエストーリームWCCXとWJJXにファイナルフォームライドさせ、WCCXとWJJXはプリズムソードでプリズムマキシマムドライブを発動してエナジードーパントとドドンゴドーパントをメモリブレイクして、オーズ・タジャドルは周囲一帯の雑魚総

てに孔雀弾こと孔雀弾頭弾を発射する。

ピッコクスマッシュャー

セルバースト

バース・デイ「ブレストキャノン！シュート！！」

アビリティー ディアボロス
魔神掌

ファイター「うおらっ！！」

ステイングベント

ライア・S「はああああ！！」

ソードベント

リュウガ・S「たああああ！！」

シュートベント

ゾルダ・S「ハッ！！」

ステイングベント

王蛇・S「ていつ！！」

バース・デイはセルメダルを投入しブレストキャノンを成体ヤミーの群れに当て、ファイターはカードの能力を解放しアンキロサウルスヤミーを貫き、ライア・Sとリュウガ・Sとゾルダ・Sと王蛇・Sも同じくカードの力を解放する。

それでも怪人達の進行は止まない。

オーズ・タジャドルはメダジャリバーに三枚のセルメダルを装填し、オースキャナーで読み取る。

トリプルスキャニングチャージ

オーズ・タジャドル「せいやあああ！」

オーズバッシュという名の亜空切断が空間と共に雑魚軍団を切り裂き、空間だけ元に戻り、雑魚軍団を切り裂いた。

だが、それでも雑魚軍団は進軍を続けていた。その一端が街に近付こうとしていた。

デビルクウガ「させるか！」

しかし、街へ救助に行こうとするデビルクウガの行く先を十面鬼ユム・ケケルが邪魔をする。空中でデビルクウガのデビルタイタンソードと十面鬼の杖が弾く音が鳴り響く。

すると、プリムが数体集まると同時に、空に浮かび大型のモニターと化した。

四分割された画面には、かつてこの世界に訪れたもう一人のディケイド・門矢士とディエンド・海東大樹、そしてクウガ・小野寺ユウスケとキバーラ・光夏海が街に侵入するアナザーを討伐していた。二つ目の映像はまたもこの世界に訪れたドラえもん一行だった。ドレイク・野比のび太、サソード・郷田武、ザビー・骨川スネ夫そしてライダーではないが、ドラえもん和源静香の二人は空から援護射撃を行っていた。

三つ目の画面には、一夏等六人が自身の専用機を展開し、プリムやデュオン、ンガゴグを討っていた。

そして四つ目の画面には、見知らぬ少年と少女が並んで立っていた。

少年の手には、隼の剣・改と竜神王の盾が握られ、体を竜神王の鎧で纏っていた。

その隣の少女は、一つの槍を装備していた。

「…………行くぞ」

「…………ええ」

少年の名は神谷^{かみや}聖夜^{ノエル}。少女の名はフィーナ・アルノミア。

聖夜は雷に打たれ一度死んだ身である。だが、神を名乗る爺によってチート転生し、ドラゴンクエストの世界で復活。フィーナとはその世界で出会った。

フィーナはアナザー軍団を見遣り、聖夜に残念そうに呟いた。

フィーナ「…駄目。もう一人も善が見付からない…………」

聖夜「……………」

聖夜は奥歯を噛み締め、鋭い眼差しをアナザーに向け隼の剣・改を改めて握り締める。

聖夜「人々の幸せを奪う奴らには容赦しない…………」

フィーナも幻想の槍を構え、戦闘体制に入った。

プリムを切り裂き、再生メ・ギノガ・デを突き刺した。しかし化け猫との戦闘では全くもって、二人は歯が立たなかった。

聖夜「ちいっ！作成^{メイク}・音叉鬼角！」

相手が魔化魍だった事を知ってか、響鬼の世界のライダーの変身アイテムを作成し、手中に収め、角を展開し指で弾き、額に寄せた。聖夜の体を紫の炎が包み、彼の体を鬼の戦士が現れる。仮面ライダー響鬼。

響鬼「さあて、フィーナサポート頼む！」

フィーナ「うん！」

響鬼の鬼爪と鬼火が化け猫に嫌というほど当たる。それを邪魔するアナザーをフィーナが幻想の槍で突き刺す。

やがて化け猫が弱まった所を確認した響鬼は、ベルトのバックル部分にある音撃鼓・火炎鼓をぶつけ音撃棒を両手に握り、構え、叫ぶ。

響鬼「音撃打・猛火怒涛の型！はああああ！！！」

ドンドンと激しい音が化け猫を中心に鳴り響く。そして、演奏が終わると、化け猫は枯れた木の葉と化し、散った。

続けて現れたのは、トリアルFだった。響鬼は変身を解き、叫ぶ。

聖夜「作成・ブレイバツクル！」

聖夜の腰にはブレイバツクルが現れ、レバーを引いた。仮面ライダーに変身する時のプロセスを叫びながら。

聖夜「変身！」

ターンアップ

ブレイド「おっしゃー！」

ディステイニーブレイド「もう一人の……ブレイド？」

ディステイニーブレイドは誰がブレイドに変身しているのか分からないが、加戦し、ブレイドに問うた。

ディステイニーブレイド「あんた、一体誰なの！」

ブレイド「後で教える！」

ディケイド「ユウスケ、海東、夏みかんへばるんじゃないぞ」

クウガ・M「分かってるよ士。俺だって負けてられないからな」

ディエンド「夏メロン、僕の足を引っ張らないよう頑張ってくれたまえ」

キバーラ「夏海です！」

士一行が変身するディケイド達は小型化されたガレオム数機と戦闘していた。

一行に減る兆しも無かった。その時、二つの電子音が鳴り、二つの技がガレオム数機に当たる。

ダイヤ10

ダイヤJ

ダイヤQ

ダイヤK

ダイヤA

ロイヤルストレートフラッシュ

一つは一点集中放射のロイヤルストレートフラッシュ。

ブリザード キック マツハ ブリザードソニック

二つは冷気を纏った高速キックだった。

ギャレン・K^{キング}「助太刀に来たぜ、兄さん」

レンゲル「馬鹿、人違い」

ギャレン・Kはユウスケが変身していたクウガ・Mを兄と勘違いし、レンゲルはすかさず突っ込んだ。勿論ギャレン・Kの変身者の五代智とレンゲルの変身者の奈美河マリカは土達を知らないが、マリカは勘で気付いていた。

デビルクウガ「……………土さんとユウスケさん？後智！」

ディケイド「友樹か」

クウガ・M「何その黒いライアル!？」

ディエンド「やあ、ショートシャギー君」

ギャレン・K「兄さん!うっそ、何で黒いのさ!」

デビルクウガ「智と海東さん後で絞める。話は後で!」

「夏「はああああ！」

もう何度雪片でアナザーを切り裂いたか、覚えていない。体力面もそろそろ限界を向かえていた。

篤、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラの五人もそれは同じ事。シールドエネルギーは紅椿の絢爛舞踏で事なきを得るが、やはり数は減らない。

アクセルマキシマムドライブ

突如として聞こえてきた電子音。アナザー達は派手に爆発し、アナザー達がいた場所には、赤い体に青の単眼モアイの仮面の戦士、仮面ライダーアクセルがそこにいた。

アクセル「お兄さん方！大丈夫ですか？！」

「夏「ああ、助かったよ」

エメラ「進、手を休め無いで！！あなたたちも！」

ラウラ「言われなくとも！！！」

エメラが炎術魔法を発動し進と一夏達に向かい叫び、ラウラが言い返すと、アギト・Cが合流していた。

アギト・C「進、エメラちゃん」

アクセル「かーちゃん！？うっわ、まあたこの世界かよ。だったら

とつとつ……」

トランザム

アクセル「終わらせてやる！トランザム！！」

トランザムマキシマムドライブ

深紅のトランザムメモリを起動したアクセルは、エンジンブレードにトランザムメモリを装填。マキシマムドライブを発動させる。

アクセル「トランザム……ライザアアアア！！」

エンジンブレードの刀身に赤い粒子が纏い、それが巨大なビームブレードと化す。振り下ろすと、大量にいたアナザーの中に居た魔化魍でさえも消滅した。

エメラ「装備強化魔法……ソードアーム 剣装！」

エメラが呪文を唱えると、左手に握られていたレイピアが硬さを増した。

エメラ「てええええい！！！」

そのレイピア一振りで、大量に居たモルイマジンは消滅した。

それを見たアギト・Cは二つのシャイニングカリバーを一つにした手裏剣の様な形をしたシャイニングカリバー・クロスモードをアナザーが密集している地点に投げ込んだ。

ドレイク・R「撃つても撃つてもキリが無いよお！」

ザビー・R「おいのび太、手を休めるな！ジャイアン、どうして何だろう？」

サソード・R「だったらとことん切り捨てるだけだ！」

ドラえもん「空気砲！ドカーン！」

静香「シヨックガン！」

五人は苦戦していた。数は減らず増える一方でスタミナは減りつつあった。

マキシマムライダータイフーン

その電子音になると、アナザーの殆どを消し飛ばした。

カプト・P「おじいちゃんが言った。努力は積み重ねる事によって、大きな夢へと繋ぐって」

ザビー・R「その声、舞さん！？」

ドレイク・R「カプト……！？」

カプト・P「皆、必殺技をぶつけてみて。多分一杯減ると思うから舞に促されたドレイク・R達は必殺技の構えに移った。

ドレイク・R「ライダーシユート！」

ライダーシュート

ザビー・R「ライダーステイング！」

ライダーステイング

サソード・R「ライダースラッシュユ！」

ライダースラッシュ

カブト ザビー ドレイク サソードパワー オールゼクターコン
バイン

マキシマムライダーサイクロン

ドレイク・R、ザビー・R、サソード・R、カブトPは自身の技を
放ち、事なきを得た。

ギルス・Dとレム・DはWCCXとWJJXを相手にしていた。

街の住人のスマブラライダーズを応援する風が二人のダブルを包み、
ダブルイサ印が由成をストダサ探ヨシ月五カ止をストリーム
WCCGXとWJJGXが黄金の六枚の翼をたなびかせ、プリズム
ビッカーを構える。

WCCGX「さ、準備はいいかしら？」

WJJGX「ドーパント相手には、私達が相手よ」

ギルス・D「邪魔ナンだよ！」

レム・D「クウガの彼とアギトの彼女を狙おうと思ったのに……」

二人のダブルは目の前のドーパントに向かって、叫んだ。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

ギルス・D「うぜんだよ！おらあ！」

レム・D「たあああ！」

各地点で各々の戦闘が行われていたその時、亜空間で三体の怪人がタブーの核と紫の巨大な邪龍を眺めていた。邪龍はグツタリとして鋭いハズの目は白目を向いていた。

三体の怪人の内、一人は黄金色を仮面をしたジャーク将軍。もう一人は赤い仮面に白いマントを羽織ったアポロガイスト。そして白色の体をしたン・ダクマ・ザバ。

ジャーク将軍「もうすぐ、超首領様の復活だ！」

アポロガイスト「これで、大ネオシヨツカーは日の目を浴びる！！」

タブーの核と邪龍はその間を徐々に狭めて行く。歓喜するジャーク将軍とアポロガイストの後ろで、ン・ダクマ・ザバは二人に近付き、ボソリと呟いた。

ン・ダクマ・ザバ「……残るは、従者の魂二つだ……」

ジャーク将軍とアポロガイストが振り返るよりも早く、ン・ダクマ・

ザバは二体の胸を貫き、二体を絶命させた。二体の亡きがらを、ン・ダクマ・ザバは核と邪龍に投げ付ける。すると、核と邪龍の融合する速度が早まった。人間体に戻ったダクマは、シヨツカー戦闘員が操るテレビ局で使うカメラに向かって喋りだした。

アナザー軍団が一瞬の内に消滅した。それはまるで霧の様に消えてしまった。

今まで戦っていたスマブラライダーズ、土一行、一夏一行、ドラえもん一行、そしてこの世界に訪れた聖夜とフィーナ達は、虚空にあった巨大なモニターを見た。そこには、友樹が最も嫌悪しているダクマが映っていた。

ダクマ<総ての世界に住んでいる下等生物の諸君。時は迫った。大ネオシヨツカーの復活が!>

モニターはダクマから紫の巨大な邪龍を映していた。そして、その近くにはスマブラファイター達が二度と見たくも無いタブーの核があった。

ダクマ<今に、超首領様の復活がする。その時が全世界の破滅を導く!>

そういった画面の中のダクマは高笑いしていた。画面がズームアウトすると、カザリ、ウヴァ、メズール、ガメルがダクマに向かってひざまづいていた。そして画面上から赤い鳥を思わすグリードが姿を現す。

ダクマ<紹介しよう。グリード五天王の一人にして最強の、ラ・ア

ンク・グだ！>

五人のグリード、グラント・シヨツカーから大ネオシヨツカーへの
改名、そして新たな黒幕。
戦いは、これからだった。

く づ っ

六十五話 再会する者と転生者 9月1日(後書き)

藤龍さん。これで宜しかったですでしょうか？

六十六話 食費パニックと覚醒・帝王と代用者 9月2日〜9月10日(前書き)

今回のキーワードは三つ

一つ、カイザーの覚醒

二つ、藤龍さんとのコラボ後編

そして三つ、作者初の十ページ

ダクマの宣言と新たなグリードのアंकの登場から一日が経った。マスターが呼んだのか定かでは無いが、昨日現れたこの世界に訪れた一行は次の日の今日になっても、帰ってはいない。というか、あの戦線の後灰色のカーテンは現れず、士達写真館一行を含めた来訪者達は、そのままこの世界に滞在していた。

友樹「はあー……」

聖夜「どうした？」

神谷聖夜も他の連中と同じく、未だこの世界で役目を果たしていない内の一人で、フィーナ・アルノミアと共にこの世界に来ていた。そんな聖夜が頭を抱え悩んでいる友樹に話し掛ける。その友樹の手元には、キャンパスノートにビッシリと数字やレシートが書かれたり貼ってあった。

友樹「……………んだ」

聖夜「あ？」

友樹「食費が足りないんだ！土さん達で四人、ドラえもん達で五人、一夏達で六人、君等二人の食費の追加で……金が無いんだ！食費がっ……」

聖夜「…………」

呆れた。そう思う聖夜だが、確かに食費が無ければ食べる事は難し

い。聖夜はスマブラライダーの一ヶ月の食費がどのくらいか、想像は出来ないが、それ程困ったと見える。

すると、大きな地鳴りが聞こえてきたかと思えば、外に巨大界魔口ポット・シサアギが灰色のカーテンを経て現れた。

その存在を知った友樹は、直ぐさま屋敷の屋上に走る。

のび太「どうしたんだろう?」

一夏「さあ?その前に、あの馬鹿でかいのどうするんだよ!!」

一夏が叫ぶと、スマブラライダーの内、フォックスとウルフがスマッシュボールを取り出し外に出た。

外に出ると同時に、スマッシュボールを砕き、最後の切り札を発動させる。

フォックス「ランドマスターああああ!!」

ウルフ「こいつで遊んでやる!!」

二機のランドマスターが現れ、シサアギを狙い撃つがびくともしない。

そしてまた灰色のカーテンが現れ、二機の巨大ロボットが現れる。

一気は赤、青、黄、緑、ピンクの色を宿し、以前この世界に現れたゴーカイジャーが操るゴーカイオー。もう一機は右腕がドリルで青色の色を宿した豪獣神。六人のゴーカイジャーも追ってこの世界にやってきた。

聖夜「……………干渉者…の影響か?」

聖夜が呟くが、ゴーカイオーと豪獣神は苦戦していた。それもその

はずシサアギは全長100mもあり、二倍以上の相手をするゴークイオーと豪獣神に勝つ見込みは薄かった。

バトルナイザー モンスロード

この電子音が鳴るまでは。

屋上に着いた友樹は、バトルナイザーを取り出し叫ぶ。

友樹「いつけえ！ゴジラ！」

バトルナイザー モンスロード

シサアギを踏み潰すかの様に登場したゴジラは猛々しい咆哮をあげ、ゴークイオーと豪獣神の隣に立つ。

ゴジラを見掛けた、ゴークイオーから友樹が以前から聞き覚えがある男の声がした。ゴークイレッド<この馬鹿でかいトカゲ……またこの世界か…>

ゴジラ「ゴガアアオン！！」

返事とばかりにゴジラは肯定の咆哮をあげた。

友樹は食費がまた足りなくなる苛立ちと目の前の倍はあるシサアギを見て、一気にライジングアルティメットクウガに変身する。と同時に、ゴジラの全長もシサアギに合わせ倍になり、体中赤い模様が入ったメルトダウンゴジラに変化した。

RUクウガ「ゴジラ、メルトダウンバースト！」

スネ夫「そうだよ、グルメテーブルかけがあるじゃない！」

ドラえもん「それが……修理に出してまして……」

スネ夫「うつそーん」

ハカセ「この世界のお金の単位は？」

慎吾「普通に日本円だ。まさか、あるのか？」

鎧「それが……」

ジヨー「金庫番が何て言うか……」

ルカ「……何人をジト目で見るとよ」

智「だったら、ギャーギャーわーわー騒ぐよりも、川へ行って魚を捕まえ、山に登って肉やキノコ採取して、海に潜って魚介類をゲットした方がいいんじゃないですか！」

進「さすが智伯父さん！」

かくして、川・山・海と食材を手に入れる三部隊と乱闘でファイトマナーを稼ぐ部隊とアナザー討伐担当部隊がある。

ファイトマナー部隊にはゼルダの伝説組とハヤテとCファルコンそして慎吾。

川で食材を手に入れる部隊には友樹と智とマリカと彩香と一夏と箒とドラえもんとのび太そして聖夜。

山で食材を手に入れる部隊にはマリオを始め、舞とスネ夫、武とセ

シリア、マーベラスとアィムと鎧そしてファイナ。海で食材を手に入れる部隊にはセシリアとスターフォックス組とヒナギクとマリアとハカセとジョーとルカ、静香とポポとナナそしてヒビキ。そしてアナザー討伐担当部隊はその残り。正午頃に、それぞれ分かれ移動した。

友樹達一行は、流れが穏やかな溪流に訪れた。

結構魚はいるそうで、早速落ちていた木の枝に釣り糸を付けて釣りの開始だ。

友樹「……のんびりとするのも、いいもんだねえ」

智「兄さん、食費と食材って何か違うような気がするんだけど……」

友樹「食費より食材を多く確保しておけば、後々楽でしょ？」

智「まあ……そうなんだけど……」

友樹「ところで、いつの間にギラファアンデット封印したの？」

智「つい一週間位前に」

友樹「ふーん」

智「あ、自分から聞いたって流すのかよ！興味無しかよ！」

友樹「うるさいよ。魚が逃げるって」

智「……ったく」

静かに釣りをしている兄弟だが、その他のメンバーはと言うと……。

一夏「なあ…IS展開して魚を取るって、俺は熊か何かか？」

マリカ「問答無用よ。篝ちゃんもお願い出来るかしら？」

篝「む……本来なら余り気は乗らないだろうが、今回だけは特別に」

そういうと篝は紅椿を展開。一夏と熊の様に魚を取りはじめた。

その近くでは、ドラえもんとのび太が集めた牧を聖夜が火を付けようとして、彩香はクーラーボックスに川の水を溜めていた。

彩香「よしつと、ドラえもんもう牧はいいわよ」

ドラえもん「わかりました」

のび太「もおへとへと〜……」

聖夜「二人は休んでくれ。後は俺が火を付ける」

聖夜が火を付けるのにそんなに時間はかからなかった。時間はまだ午後2時。釣った魚の一部を焼き魚として食べる為に火を起こしたという。

後は魚が釣れるのを待つだけ。と思っていたその時。川下から何か歩いてきた。それは黒基調のアギト・バーニングフォームだった。別名・悪のバーニングフォーム^{イビル}。

彩香「アギト!？」

ドラえもん「で、でも黒い！」

イビルバーニング「……………」

聖夜「ちい、同じアギトがいるって事は干渉者の影響か何か？行くぜ！^{メイク}作成・キバット！」

^{メイク}Mキバット「キバって、行くぜ！がぶっ！」

聖夜「変身！」

マリカ「変身！」

オープンアップ

彩香「変身！」

聖夜がキバに変身し、マリカはレンゲルに変身した直後ジャックフオームに変化。そして彩香はアギト・グランドフオームに変身する。

アギト・G「はあああ！！！」

アギト・Gがイビルバーニングに挑むが、軽く流される。レンゲルJが巨大化した腕でイビルバーニングのベルトを狙うが、又しても流される。キバの華麗なる動きにも対処出来ていた。アギト・Gはドラゴネイルを出現し、バーニングフオームに超変化する。

同じバーニングフオームならば、腕は同等だろうと考えるのだが、そんな甘い考えは通らなかった。同じバーニングフオームでも、イビルバーニングの力量が上回っていた。

キバ「反則じゃねえか！」

レンゲル・J「ええ……」

アギト・B「でも、こっちは安心出来る仲間が、いるのよね」

突如、イビルバーニングの背後で爆発が起きた。白式と紅椿が己の刀の光刃で攻撃していたのだ。イビルバーニングは多少よろめいたが、何処からか一つのガイアメモリを取り出し、起動する。

シャイニング

太陽の光がSの字を象ったガイアメモリを己のバツクルに取り付けた。イビルバーニングの装甲が剥がれ、イビルシャイニングに姿を変えた。

バーニングからシャイニングに変わると、攻撃力が下がってしまうデメリットがあるが、スピードが上がるメリットがある。それがイビルシャイニングは攻撃力は下がるところか逆に上がり、スピードアップした。

イビルシャイニングの手刀だけで、アギト・B以外戦闘不能に陥ってしまった。

アギト・B「……強い。勝てるの……私が？無理よ、どうしても勝てない！」

イビルシャイニングの戦闘能力の高さに腰が抜けたアギト・Bはその場を動く事さえ出来なかった。

そして無慈悲にも、イビルシャイニングはバツクルからシャイニングガリバーを生成し、エマージュモードのまま、倒れているレンゲ

ル・Jに殴る様に握ったシャイニングカリバーをぶつける。

アブソープクイーン

しかし、イビルシャイニングは突然聞こえた電子音に耳を傾け、手を止めた。

エヴォリユーションキング

ギャレン・K「お前は、俺が墮す！！今日、ここで！！」

重醒銃キングラウザーの銃口から紅色の銃弾が放たれ、イビルシャイニングのシャイニングカリバーを撃ち落とす。

隙が出来たと思い、アギト・Bは一気にコロナフォームに変身する。

アギト・C「はあああ！！」

白いシャイニングと黒いシャイニングがぶつかり合い、お互いの力量を惜しみ無く出していく。殴り、蹴り、叩き潰す。

一定の距離を開けたアギト・Cに変化が起こる。オルタリングを中心に発光しアギト・Cを包むと、今度はアギトの戦士の紋章が浮かび、アギトの更なる姿が現れる。

ボディはベルトを除くと胸にオーズの様に自身の戦士の紋章が浮かび、両肩にはフレイムとストームのショルダーアーマーが合わさっており、白を基調としていた。そして背中にはアギトの戦士の紋章がプリントされた白いマントがたなびいていた。

これぞ、アギト・カイザー。

ギャレン・K「何なんだよ……何なんだよ、これは！？」

レンゲル・J」「……つく……う……」

ギャレン・K「先輩、大丈夫ですか？」

レンゲル・J「平気よ……それよりも、何なのあのアギトは……まるで…皇帝？」

カイザー。それはドイツ語で皇帝を意味する。その名の通り、その世界の最強のライダーの証であり、リ・イマジネーションライダーどころか、原典ライダーよりも最強と謳われる程。

イビルシャイニングは恐れる事を知らず、アギト・カイザーに飛び蹴りを繰り出すが、アギト・カイザーはそれをものともせず、右手一本で受け止めた。

一夏「つ……、強い」

篝「おい聖夜、これは一体どういう事だ！」

キバ「さあな。俺でも分からねえよ」

チエンジドラゴンフライ

ドレイク・R「一夏さん、皆！」

クウガ・U「……あのアギト……（前に夢に出ていた……アギト……）」

アギト・カイザーはイビルシャイニングの猛攻を軽くあしらうと、必殺の構えに入る。

足元にアギトのライダーマークを生成し、それをイビルシャイニン

グの足元へ移動させ動きを止める。それに目掛けアギト・カイザーはカイザーライダーキックを繰り出す。受けたイビルシャイニングは爆発し、使用されていたシャイニングメモリも破壊された。

ドレイク・Rはアギト・カイザーの下へ称賛の意を表そうとするが、アギト・カイザーはドレイク・Rを突き飛ばし、クウガ・Uがそれを受け止めた。

ドレイク・Rをドラえもんになせたクウガ・Uはゆっくりと暴走していると思われるアギト・カイザーに歩み寄った。

クウガ・U「……………今度は、僕が君を止めるよ！」

アギト・カイザー「……………」

クウガ・U「二度も僕は君に助けられた。その度に君は涙を流してしまった。僕はもう、誰かの流す涙なんか見たくない！カイザーを押しやるのがカイザーの役目なら、僕はそれを担う。取り戻すんだ、いつものように笑顔が良く似合う彩香に！」

それを聞いたアギト・カイザーは突然苦しむ様に頭を押さえた。

それと同時に、クウガ・Uは変身のポーズを取ると、アークルを中心に発光しクウガ・Uを包むと、次第に光が収まり、赤いマントをたなびかせ、デビルクウガの胴とマントにクウガの戦士の紋章が描かれていた。

これがクウガ最強の姿、クウガ・カイザー。

クウガ・カイザー「さあて。彩香、ちょっと痛いけど、我慢してね」

アギト・カイザー「っ……………あああああっ！！」

暴走も無しにカイザーをコントロール出来たクウガ・カイザーはア

ギト・カイザーを呼ぶ。アギト・カイザーは咆哮をあげ、クウガ・カイザーにシャインングカリバーを取り出し、ツインモードにして逆手に持ち襲い掛かる。対するクウガ・カイザーは翼の羽を取り、アメイジングドラゴンロッドに変え、対処する。

クウガ・カイザー「はあああ!!」

アギト・カイザー「あああああ!!」

互いの武器が擦れる音と互いの雄叫びが交わり、穏やかだった河川敷は既に戦場と化し至る所に窪みが出来ていた。やがて、互いの武器は音を立てて折れて使い物にならなくなってしまった。

クウガ・カイザー「はあ……はあ……」

アギト・カイザー「はあ……はあ……」

一夏達は敢えて手を出さなかった。それは友樹がたった一人で彩香を助け出したいと願い、思い、今に至る。

どちらも息が上がっており、どちらも倒れてもおかしくも無い。次が最後の一撃。

クウガ・カイザー「僕は彩香程器用じゃないから、この手しか使えない!!」

アギト・カイザー「あああああ……!!」

どちらも必殺キックの構えをとった。

クウガ・カイザーはマントの下にある翼を広げ、急上昇してからの

急降下キックのドロップカイザーキック。

アギト・カイザーはイビルシャイニングの時に放った技とは別に三度足元にライダーマークを生成し、吸収してガイアナキックを繰り出す。

上下にぶつかる二つのキックは高エネルギーを放ち、爆発を起こす。爆煙が晴れると、地面には気を失った友樹と彩香が倒れていた。

屋敷に置かれた十の医療ポッドの中には友樹と彩香の他にシンジや舞等クウガからディケイドに変身する十人がカイザーの進化を迎え、ある者は暴走し、あるものは制御出来ていた。

ボブ「心拍数、血圧、脈拍、他多数異常無しです」

レッド「異常無し?」

セシリア「でしたら何故暴走を起こしても尚異常が無いのですか?」

ボブ「と、言われましても……逆におかしいんですよ、マスターが言うカイザーとやらになる過程に戦闘があり、そこで真最強形態になり、ポケモンでいう経験値が貯まりに貯まって、カイザーが発動されたと聞いています」

士「カイザー……か」

ユウスケ「知っているのか、士!」

士「大体知らん」

海東「ショートシャギー君や皆は、乱闘とやらで経験を積んで、お

まけにショートシャギー君には錬金術が使えるそうじゃないか」

フィーナ「特別なフアクター等もですか？」

ガノンドロフ「特に友樹はどこぞの種割れの主人公見たく試験管ベビーベビーとやらだがな」

ラウラ「私と同じだと？」

シャルロット「世界が沢山ある分その世界の人がいるんな暮らしや生まれを持つてるんだね」

しかし大変なのはこれからだ。クウガからデイケイドまでのライダーは最短でも一週間は療養しなければならぬ。龍騎以降ならまだしもクウガとアギトは友樹と彩香の体内に存在するため他の人物がライダーにはなれない。電王はイマジンが憑依してデンオウベルトを使えば問題は無い。ライナーフォームも同等。龍騎の変身システムは制限が皆無な為ワリオでも変身出来る。

しかし、ファイズドライバーの適合は今のところウルフと友樹のみ。ブレイドはアイクに同じく友樹。残る響鬼、カブト、キバ、デイケイドの適合は未だない。

この日は全員休養するしかなかった。

次の日。ハヤテが目を覚めたのは、ワームが町に向かうというロボのアナザーセンサーの報告だった。指定されたのはハヤテで、おまけとしてのび太とスネ夫そして武の四人だった。町で暴れる数体のワームの内一体が突然しゃべりだす。

アラクネアワーム「大ネオショッカーに従え！さらば、命だけは助

けてやるう。奴隷としてな！」

ハヤテ「そうはさせません！」

ハヤテは予め巻いたカブトのベルトを見せ付け、手を掲げ呼ぶ。

ハヤテ「来て下さい。カブトゼクター！」

ハヤテに呼応するかのようにカブトゼクターは彼の手中に収まる。それと同じくして、のび太達も同じく相棒のゼクターの名を叫ぶ。

のび太「ドレイクゼクター！」

スネ夫「ザビーゼクター！」

武「サソードゼクター！」

そして四人はライダーのプロセスを叫びそれぞれの変身アイテムにゼクターをセットする。

「「「変身！」「「「

ヘンシン

マスクドフォームに変身した各ライダー達は戦闘準備は万全だった。カブトクナイガン、ドレイクゼクターから赤と青の銃弾が放たれフォーム達の間接部分を撃ち抜き、サソード・マスクドフォームが切り捨てる。

フォーム達が一斉に脱皮を行うと、それと同時にカブト・M等もキャストオフを行った。

カブト・M「キャストオフ！」

キャストオフ

チェンジビートル

ドレイク・M「キャストオフ！」

キャストオフ

チェンジドラゴンフライ

ザビー・M「キャストオフ！」

キャストオフ

チェンジワスプ

サソード・M「キャストオフ！」

キャストオフ

チェンジスコープオン

カブト・R「さて皆さん、行きますよ！クロックアップ！」

クロックアップ

ドレイク・R「はい！クロックアップ！」

クロツクアップ

ザビー・R & amp・サソード・R「クロツクアップ!!」

クロツクアップ

クロツクアップ

超高速移動の中、カブト・R達が異常なだけか段々とワーム達を押され、必殺技の隙を作ってしまった。

1
2
3

カブト・R「ライダーキック!」

ライダーキック

ドレイク・R「ライダーシューティング!」

ライダーシューティング

ザビー・R「ライダーステイング!」

ライダーステイング

サソード・R「ライダースラッシュ!」

ライダースラッシュ

四種の技が数十のワームを四散した。

時同じくして、聖夜とフィーナを引き連れた佑理と薫はドーパント騒ぎの事件の場所に現れた。

佑理の手にはガイアメモリモードのファングメモリがあり、薫の手にはジョーカーメモリの代わりにメタルメモリがあった。

ファング

メタル

薫&・佑理「変身！」

ファングメタル

佑理の体を素体に現れたのは仮面ライダーダブルメタルWFM。ファングジョーカーのジョーカーサイドをメタルに変える事により、白と鋼色のダブルが誕生する。

WFMはメタルシャフトを握り締める。

聖夜「このダブルは初めて見るな」

WFM「たまにファングの別形態やろうかってね」

WFM「さあて。行くわよ」

因みに、ファングを使用しているので、「」は佑理で『』は薫である。

聖夜「相手がドーパントなら………フィーナ準備はいいか？」

フィーナ「えっ……う、うん」

聖夜「なら行くぜ！作成・ダブルドライバー！」

聖夜が作成して呼び出したダブルドライバーには、御丁寧にサイクロンメモリとジョーカーメモリまでもあった。

聖夜「ほらフィーナ、サイクロンメモリ持って。後は薫さん達と同じ様にして」

フィーナ「うん！」

聖夜がダブルドライバーを腰にセットすると、フィーナの腰にもダブルドライバーが現れ、二人揃ってガイアウィスパーを鳴らす。

サイクロン

ジョーカー

聖夜「変身！」

フィーナ「へ、変身！…でいいのかな？」

フィーナはWFMに促され、サイクロンメモリを右スロットに装填。同時にフィーナは意識を失い、座るように倒れる。

フィーナの意識が乗ったサイクロンメモリが聖夜のダブルドライバーの右スロットに現れ、聖夜はそれを装填する。そしてジョーカーメモリを左スロットに装填してベルトを開く。

サイクロンジョーカー

WCJ「さあ、お前等の罪を数える！」

WCJ「何言ってるの、^{ノエル}聖夜？つて、あれ私！？えっ何で？」

WCJ「細かい事は気にするな。さて、行くぞ」

WFM「私達も行くわよ！」

WFM「オツケー！！」

WCJの風を纏った拳と蹴りがホッパードーパントに次々と決まり、WFMのメタルシャツはファングの能力により鋭さを増しエナジードーパントをたたき付ける。

頃合いを見てか、WCJは必殺の構えに出た。

WCJ「行くぞフィーナ。俺に合わせる！」

WCJ「うん！」

WCJはジョーカーメモリをマキシマムスロットに装填する。

ジョーカーマキシマムドライブ

WCJの足元から風が舞い、WCJ本体を空中に押し上げ、マキシマムスロットのスイッチを叩く。

WCJ「ジョーカーエクストリーム！！」

「ご存じ半分こキックがホッパードーパントこ直撃。見事メモリブレイクが決まった。そしてホッパードーパントに変身していた屑ヤミ―も消滅した。」

WCJ「なるほどな。ウヴァの作った屑ヤミ―を素体にガイアメモリでドーパントにしたんだな」

WCJ「ちょっと聖夜！半分になるなんて聞いて無いよ！！！」

WCJの中身が言い合ってる中、WFMも同じくマキシマムドライブの構えに入り、メタルメモリをメタルシャフトに装填する。

メタルマキシマムドライブ

マキシマムドライブを発動したWFMは槍と化したメタルシャフトを高速回転し、周囲のドーパントを一掃する。

WFM「メタルスライサー！！！」

あつという間にエナジーメモリ、オーシャンメモリ、アパトサウルス等のメモリがブレイクされ変身元の屑ヤミ―も消滅する。

二人のダブルは変身を解くと、聖夜とフィーナの近くに灰色のカーテンが現れる。どうやらお迎えの時間らしい。

フィーナ「お世話になりました」

礼儀正しくお辞儀するフィーナは薫と佑理に世話になった感謝を述べた。

薫「いいわよ別に。でも聖夜、ツインマキシマムは慣れない内は真

スネーク「一か八か！」

木製の桶をイッタンモメンの目に当たる部分に投げ付け、脱衣所に急ぐ。

途中でイッタンモメンが攻撃を繰り返すが、寸前で避ける。そして、音角を手に取り角を展開し壁に叩き、額に寄せ響鬼に変身する。

響鬼「うむ。行くぞ！」

響鬼は鬼爪を展開し、イッタンモメンに戦いを挑んだ。勝敗は勿論響鬼が勝ち、一人で修理を行った。

それから日付が変わって9月5日。

オリマーがアナザーを相手にしている場所は、屋敷を出て三分位の場所だ。彼の隣にピットがいるだけでも、心細かった。

アナザーはアナコンダイマジンとシアゴーストの二体だ。

オリマー「……モモタロス、変身して」

そう呟くオリマーの片手には、何故か弱点帳が握られてあった。同伴していたモモタロスは青ざめ、渋々オリマーに憑依。デンオウベルトを巻き、赤いスイッチを押してパスと一緒に赤ピクミンをバツクルにタッチする。

M・オリマー「変身！」

ソードフォーム

赤ピクミン「びくみーん」

電王・S「俺、参上！」

続けてピットも龍騎のカードデッキを構え、変身する。

ピット「変身！」

龍騎の影がオーバーラップし、ピットを龍騎に変えた。

電王・S「行くぜピット！！」

龍騎「わかりました！」

その後、やって来た一夏にウラタロスが、後を追って来た筈にキンタロスが、同じくセシリアにリュウタロスが、そしてまたも同じく鈴音にジークが憑依される。

U・一夏「君いいねえ。体借りるよ！」

U・一夏（え、何で？何で俺伊達眼鏡とスーツ？！青いメッシュも！？ああ、もういい！変身するぞ！）

U・一夏「変身！」

ロッドフォーム

電王・R「僕に釣られてみる？」

続いて筈の今の姿は、正に和服美女だった。黄色いメッシュユが一際目立つ。

K・篝「泣けるわよ！」

K・篝（この姿も、悪くないな。うん）

K・篝「变身！」

アックスフォーム

電王・A「俺の強さにお前が泣いた！」

R・セシリア「イエーイ！体借りちゃってるけどいいよね？答えは聞いてない！」

その姿は紫のメッシュに正にパンクファッション。慣れない服装に体の持ち主が細りと呟く。

R・セシリア（慣れない服は余り……もうよろしいですわ！どうにでもなってしまうえすわ！！）

R・セシリア「变身」

ガンフォーム

電王・G「倒しちゃうけど、いいよね？答えは聞いてない」

最後に鈴音だが、その姿は白いファーに編み込みの髪に白いメッシュが目立つ。

G・鈴音「变身！」

ウイングフォーム

電王・W「降臨。満を持して」

電王・W（何で変身してるのよ！！）

その後また三体のイマジンが現れる。

二日後、マルスはキバットとゴーカイジャーの面々と共にアナザー退治をする所だ。

数はアナザーが二十を超していた。

ゴーカイジャーの面々が「豪快チェンジ（変身）を行うと同時にマルスは叫ぶ。

マルス「キバット！」

キバット「おっしゃー！キバって行くぜ！！」

右手を前に突き出したマルスの指にキバットが噛み付き、魔皇力が流れ王族のマルスの頬にステンドグラスの模様が走った。そしてマルスはライダーのプロセスを叫ぶ。

マルス「変身」

そのマルスの姿はキバに変わり、ファルシオンがその手に握られていた。

ゴーカイレッド「派手に行くぜ！」

ゴーカイシルバー「ギンツギンに行くぜー!!!」

キバ「まったく、美しく無いね。このボクのように美しく行くことじゃないか」

変身してもナルシストなのか、口に出たキバはファルシオンを構えると流星の様にアナザーを切り裂いた。

キバ「さてとキバット、素早く行くよ?」

キバット「おっしゃー!ガルルセイバー!!!」

キバ・Gの左手にガルルセイバー、右手にはファルシオンが握られており、更に流れるように切って行った。

ゴーカイブルー「ハカセ!」

ゴーカイグリーン「分かった!」

ゴーカイブルーはゴーカイグリーンにゴーカイガンを投げ渡し、ゴーカイグリーンはゴーカイブルーにゴーカイサーベルを投げ渡した。

ゴーカイイエロー「アーム!」

ゴーカイピンク「承りました!」

ゴーカイピンクはゴーカイサーベルを投げ渡し、ゴーカイイエローはゴーカイガンを投げ渡す。

あらかた数は減った所で、キバ・Gはトドメの一撃を放つ。

キバット「ガルルバイト!!」

ガルルセイバーの刃を噛んだキバットが叫ぶと同時に、周囲は暗くなる。

キバ・Gの口にはガルルセイバーがセットされていた。キバ・Gは高くジャンプし、ガルルハウリングスラッシュを繰り出し、残ったアナザーを全て討伐した。

キバット「いいねえ……」

また日付が変わって9月10日。

進とマリオとリュカの目の前には恐らくガメルを苗床として生んだであろう、クジャクバクヤミーとバツタゾウヤミーとウニアルマジロヤミーが、町に出現。お菓子を一杯食べたいという欲望なのか、店の駄菓子や子供のおやつを奪い取って腹に収めていた。

進はアクセルドライバーとアクセルメモリを取り出し、マリオはデイクイドライバーを腰にセットし、リュカはオーズドライバーをセットする。

アクセル

進「変、身！」

アクセル

マリオ「変身！」

カメンライド デイクーイド

リュカ「変身！」

シャチ ゴリラ チーター！

仮面ライダーアクセル、仮面ライダーディケイドそして仮面ライダーオーズ・シャゴリターがそれぞれに攻撃を開始する。

アクセルはバツタゾウヤミーに何度もエンジンブレードで切り裂く。

アクセル「食い過ぎナンだよー！」

エンジン

ジェット

エンジンブレードから放たれる熱の籠った物体がバツタゾウヤミーに当たる。

ディケイド「小手調べに………これだ」

フォームライド オーズ ラトラーター

ライオン トラ チーター！ ラッタラッタ〜！ラトラーター！

Dオーズ・ラトラーター「行くぜ！ライオディマス太陽光線！！」

Dオーズ・ラトラーターのライオディマス太陽光線に目をやられたクジャクバクヤミーは怯む。

クジャクバクヤミー「うあああああ！！目がああああ！！」

オーズ・シャゴリーターはゴリバゴーンをウニアルマジロヤミーに向け発射し、シャチヘッドから水流も発射。水流に押されたゴリバゴーンはウニアルマジロヤミーに当たる。そうして隙が出来る時、今度はリボルスピッキクの嵐を浴びせた。

オーズ・シャゴリーター「次はこのメダル！」

サイ ウナギ タコ！

今度はオーズ・サウタにメダルチェンジして再度メダルをスキャンする。

スキヤニングチャージ

タコレッグの吸盤で地面に張り付き、ウナギ鞭で拘束し引き寄せ、近付いた所でサイヘッドの角でぶっさす。

次はアクセルだ。アクセルはトリアルメモリを取り出し、起動する。

トリアル

ガイアウイスパァーが鳴り、アクセルドライバーにトリアルメモリをセットする。

トリアル

すると、アクセルは一度赤から黄色に変わり、更にピストンパーツの物体が現れアクセルの装甲が剥がれ、すっきりとしたフォルムのアクセルトリアルに変身する。

アクセルトリアル「オレのビッグバンは、止められないぜええええ！」

アクセルトリアルはトリアルメモリを引き抜き、マキシマムスイッチを押し、上に投げる。

制限時間は十秒。その間アクセルトリアルは超高速で動きバツタゾウヤミーに接近。高速の連続キックを打ち込む。それが次第にTの字を象り、落ちてきたトリアルメモリをキャッチし再度マキシマムスイッチを押しした。

アクセルトリアル「9.3……それがお前の絶望へのタイムだ！」

必殺技のマシガンスパイクが決まり、バツタゾウヤミーは四散。セルメダルが十枚ほど雨の様に降っていた。

そして、Dオーズ・ラトラーターはまたもフォームライドカードを装填する。

フォームライド クウガ アルティメット

Dクウガ・Uにフォームライドして、ファイナルアタックライドカードを装填する。

ファイナルアタックライド ク・ク・ク クウガ

Dクウガ・U「アルティメット……キイイイイイイイイイック！
！！！！」

炎を宿したアルティメットキックがクジャクバクヤミーを貫き、クジャクバクヤミーは爆発する。

屋敷に全員揃ったその時、外には灰色のカーテンが現れる。士一行も既にこの世界を立ち去り、一夏一行とドラえもん一行そして進とエメラ達も自分のいる世界に戻った。

リンク「戦いは………まだ始まったばかりなのか？」

く づ っ

六十六話 食費パニックと覚醒・帝王と代用者 9月2日～9月10日(後書)

藤龍さん、今回もこれでよろしかったでしょう？

六十七話 皇・帝・制・御 10月3日

カイザーの疲労から回復した友樹達はカイザーに変身する以前と同じ動きに戻れていた。

乱闘しても強さは変わらない。それだけでも幸と言った方がいいだろう。

リンクは友樹と買い出しに出ていた。そのほかに佑井とキバットも同行している。

友樹「あとは……「同人誌」……これはどうする？」

リンク「って言っても、何の同人何だか書いて無いのか？」

佑井「綺麗さっぱり何も書かれて無いわ」

キバット「だったらジャンプ買ってくれるか？」

佑井「明日ね」

キバット「そりゃあねえぜ！」

あらかた買い物が終わった一行は早く安く上手い牛丼屋に来ていた。

リンク「牛丼メガ盛り」

友樹「白髪葱牛丼大盛り」

佑井「ハンバーグあいがけ牛丼並盛り」

キバット「イチゴパフェ」

それぞれ昼飯を堪能していると、店内のテレビ番組のニュースで大ネオシヨツカーの活動は留まる所を知らず、二つの町を焼いたと言
う。

リンク「痛いもんだな」

キバット「けどよお、カイザーの力を使えばいいんじゃないか？下
手にボロボロになるより遥かにマシだろ？」

友樹「それもそうかも知れない。一応僕は扱えるけど疲労は溜まる
し……………佑井…は？」

佑井「その……………私も暴走してしまっ……………」

友樹「だよねえ。実を言うと、僕のアークルのヒビがまだ治って無
いから、門谷君からベルト借りてきてるんだ」

リンク「俺はルイージさんからバースドライバーを借りてるけどな」

友樹「そういえば、あんまりルイージさんがバースに変身した機会
って少なかったよね」

キバット「……………言うなよ」

それから昼食を食べ終え店を出る。

暫くブラブラして本屋、和菓子屋、CDショップ等を行き、帰路に
つくころ、異変が生じた。灰色のカーテンから赤い鳥を思わすグリ
ードのアンクと猫をモチーフにしたグリードのカザリと海に関連す

る体でシャチの様な頭部をしたメズールが現れる。

アंक「……………ねえ、アイスって美味しいの？」

友樹「アイス？」

カザリ「ダクマ様が食べてるところを見てた見たいでね」

リンク「あんたらが出たって事は……」

メズール「あなたたちの命を、絶つ！！」

佑井「だったら、返り討ちにしてあげるわ！」

キバット「おっしゃー！キバって行くぜ！」

友樹「変身！」

カメンライド デイケイイド

リンク「変身！」

佑井「変身！」

キバット「がぶっ！」

デイケイイドはアंक、バースはカザリ、そしてキバはメズールに攻撃を仕掛ける。

そのうち、キバの攻撃は徐々にだがメズールに押されていた。元々戦闘力は少し高い方だったのだが、幹部系怪人相手だと、流石に苦

劣する様だ。

キバット「おい佑井……ドガバキじゃねーときついぞ」

キバ「分かった。行くよ……」

キバット「ガルルセイバー！バツシャーマグナム！！ドツガハンマ
ー！！！！」

メズール「あら？随分とまあテンコ盛りなこと」

キバ・DGBK「余計なお世話よ！」

キバ・DGBKのドツガハンマーとメズールの水流がぶつかり合い、メズールが一歩手前までリードしていた。キバ・DGBKの不利点は使用制限が極端に短いというもの。それまでに片を付けられるかが問題だ。友樹ならば、それは皆無だろうとキバ・DGBKの脳裏を過ぎる。

キバットはこれでは勝てないと思ったのか、キバ・DGBKに向かって、言った。

キバット「おい佑井……タツロットを呼べ」

キバ・DGBK「大丈夫、まだ行ける」

キバット「だが、あの魚女の力量は今のキバの鎧以上だ。ここは、解放するしかない！解放するしかねえんだよ！それに、負けたかねえだろ！！」

キバ・DGBK「キバット……」

キバット「俺を信じろ」

キバ・DGBK「……………うん」

キバ・DGBKはメズールから距離をとると、エンペラーフェイスを取り出し、キバットに噛ませた。そして現れる金色の龍。

タツロツト「ビュンビュンビュン お手伝いしますよ。変身」

タツロツトはキバ・DGBKの左腕に止まり、そのキバの姿を、キバの鎧を金色に染め上げた。これぞ、キバ・ドガバキエンペラー。

キバ・DGBK「ザンバットソード！」

キバット「ウェイクアップ！」

タツロツト「ウエ〜イクアップ……………ファイバ〜」

メズール「なにっ！何よこれ、何なのよ!？」

ウェイクアップとウェイクアップファイバーを同時に発動する事と、今のキバの鎧の力がザンバットソードに更なる力がその刀身に宿り、赤黒く光る。それに恐怖したメズールは恐れをなしていた。一方のカザリはと言うと…。

ドリルアーム

バース・デイ「さあな」

セルバースト

バース・デイ「そういうのって……」

セルバースト

バース・デイ「神のみぞ知るって奴だな」

セルバースト

バース・デイ「充填完了！プレストキャノン……シユート！！」

カザリ「なにっ?!」

バース・デイの胸のプレストキャノンから高エネルギーのビームが放たれる。間一髪の所でカザリは避けたが、そこを狙っ手かカッターウィングのブーメランと疾風のブーメランが飛び交い、カザリを惑わした。

そして、デイケイドはと言うと。

アタックライド プラスト

デイケイド「はっ！」

アंक「ふっ！」

射撃ともなればデイケイドプラストと火炎弾がぶつかり、格闘戦ともなればデイケイドとアंकはどちらもほぼ互角だった。

アंक「……ねえ、アイスって……何なの？」

ディケイド「何をいきなり!？」

アंक「ダクマ様がね、美味しそうに食べてた。僕達グリードってね、味覚が無いんだ。触感も聴覚も視覚も、五感……っていえばいいのかな?それが無いんだ……」

ディケイド「そう……なんだ……。だけど、それとこれと、どういった関係が……!」

アंक「ダクマ様がね、言ったんだ。君を倒せば、五感をくれるって」

ディケイド「そんなのっ……!」

アंक「僕は欲しいんだ!五感が!アイスが!」

ディケイド「君の言うことも分かるけど、僕は、負けるわけにはいかないんだ!超変身!」

フォームライド オーズ プトティラ

プテラ トリケラ ティラノ! プットティラアアノザウルウウス
!!

Dオーズ・プトティラ「更に!」

アタックライド メダガブリュー

Dオーズ・プトティラ「はあああ!!」

アंक「なにっ!?!くっ!」

Dオーズ・プトティラの呼び出したメダガブリューの斬激を僅かな距離で避けるアंकは何処か必死だった。すると、アंकは距離を取りDオーズ・プトティラに話し掛ける。

アंक「見事だね。そして分かるよ」

Dオーズ・プトティラ「……………何が?」

アंक「君は……………」

アंकが言おうとしたその時、二つの悲鳴が聞こえた。一つは男、もう一つは女なのだが、カザリでもメズールによるものではない。リンクと佑井だ。

Dオーズ・プトティラ「リンク、佑井!」

アंक「あつれ?苦戦してたようだね、カザリとメズール」

カザリ「たいした事は無かった……………とは言いつらいけど、正直危なかったな」

メズール「ただの飾りの様な強さだったし。テンコ盛りだったら勝ちってわけじゃないわ」

アंक「じゃ、先あがって。僕は少し楽しんでからにするよ」

コクリと頷くカザリとメズールは灰色のカーテンに潜り、この場を去った。

Dオーズ・プトティラの後ろで佑井は愛用のバイオリン、ブラッディローズを祈り引き奏でる。奏でる彼女の体は、光に包まれそれにキバットとタツロットが彼女をキバ・エンペラーフォームに変身させ、更にその姿を変えた。

キバ・Eの体が光に包まれたかと思ったその瞬間、それは大きな龍にも蝙蝠にも見えた。

これぞ、エンペラーバット、別名キバ飛翔態。

エンペラーバット「クエエエエエ!!!」

アंक「なっ!」

キバ飛翔態の口から火球が飛び出て、アंकを攻撃する。避けるのが精一杯のアंकだが、その注意はキバ飛翔態にしか向けられていなかった。だから……

Dオーズ・プトティラ「貰った!!!」

ザシュツ!

アंक「がはっ!」

Dオーズ・プトティラの接近を許し、尚且つ紫のオーズの力が反映されているのか、アंकの中のコアメダルの内クジャク一枚にヒビが入った。

アंक「コアが、……………僕のコアがあああああああああああ

!!!!!!!!!!!!!!」

叫んだアंकも退却した。

戦闘は終了した。キバ飛翔態も光に包まれ戻る。筈だったが、何故かその光は歪み、止むとそこにはキバ・カイザーが立っていた。

胴にはキバのライダークレスト、マントは深紅から漆黒に変わりキバの紋章も描かれていて、黄金のキバの鎧は白金に輝いていた。そして何よりもペルソナアイが緑に輝き、キバットがベルトに埋まるように存在していた。

キバ・カイザー「うがああ！」

Dオーズ・プトティラ「あらら……これ佑ーに見せたら……でも、止めて見せる！」

キバ・カイザーの怒涛の連続キックとDオーズ・プトティラのテールアタックがぶつかり合う。

キバ・カイザーは生身での飛行が可能なのか、マントをはためかせDオーズ・プトティラを空へと誘い込む。

アタックライド 覇邪百獣剣

覇邪百獣剣とメダガブリューを携えたDオーズ・プトティラとザンバットソードを携えたキバ・カイザーがぶつかり合い、火花を散らす。

日は既に沈み、辺りは暗くなっていた。リンクはと言うと、既に佑ーを呼ぶために帰っている。

空中でお互いは距離を開け、Dオーズ・プトティラはファイナルアタックライドカードを、キバ・カイザーはウエイクアップフェッスルを取り出し、必殺技を放った。

ファイナルアタックライド オ・オ・オ オーズ

プットッティラアアノヒツサアツ!!

キバット「ウェイクアップ!」

ストレインドームと超絶ファイナルザンバット斬の二つの技がぶつかり、双方消滅した後、メダガブリューは消えた。

覇邪百獣剣を握ったDオーズ・プトティラはキバ・カイザーに刃先を向けた。しかし、そこに佑一が現れ、攻撃を止めた。

佑一「待ってくれ、友樹! 佑井は……オレに任せてくれ!!」

Dオーズ・プトティラ「わかった」

佑一「変身!!」

スーパーライナーフォーム

超電王・Lが現れると同時に、Dオーズ・プトティラは変身を解いた。

キバ・カイザーは地表に降り立つと、超電王・Lに斬激を繰り出し、対する超電王・Lもスーパーデンカメンソードで応戦する。

キバ・カイザー「がああああ!!」

超電王・L「佑井! 目を覚ませ! 覚ますんだ!!」

超電王・Lの呼び掛けも聞かず、キバ・カイザーは超電王・Lを振

じ伏せた。

もう駄目かと超電王・Lは思った。が、そこに馴染みのイマジン五人が現れる。

モモタロス「大丈夫か、佑一！」

ウラタロス「佑一！」

キンタロス「佑一、今来たで！」

リュウタロス「おねーちゃんもうやめて!!！」

ジーク「佑一氏！」

そうイマジンスが超電王・Lとキバ・カイザーの近くに現れた。超電王・Lの返事も待たずに、五人は一気に超電王・Lに憑依する。

カイザー

デンオウベルトから出た電子音。それを合図にしたのか、バックルを中心に発光し電王のライダークレストが浮かぶ。止むとそこには赤・青・黄色・紫・白と五色のマントに電王のライダークレスト、胴体にはまたも電王のライダークレストが浮かぶ。両腰にはデンガツシャーが五種納められていた。ボディと電仮面はライナーフォームと同じで色は白いオーラスキンに赤・青・黄色・紫のオーラアーマーになっていた。

これぞ、電王・カイザー。

電王・カイザー「行くぞ！」

主導権は佑一なのか、イマジン達はカイザーの力を押さえ込んで
いるのだろう。キバ・カイザーと電王・カイザーの戦いはまるでロン
ドを奏でているようだった。
そして二人は必殺技の体制に入った。

キバット「ウェイクアップ3」

タツロット「ウェイクアップファイバー3」

チャージ& amp ;アップ

フルチャージ

キバ・カイザーの超々超絶ファイナルザンバット斬と電王・カイザ
ーのボイスターズナツクルがぶつかり、爆発した。
大地に大きく穿つクレーターの中には、倒れた佑井と佑一が居た。
キバットとタツロット、それにモモタロス達は地面に上半身だけが
刺さっており犬神家状態となっていた。

友樹「これが……………カイザー……………」

いかにカイザーの力が恐ろしいのか身を以って知った友樹だった。

くづつ

六十七話 皇・帝・制・御 10月3日(後書き)

今回出たアंकはロストアंकの方のアंकです

因みに、グリードは皆完全体です

六十八話 決戦 11月9日(前書き)

剣崎「時は来た」

乾「決戦の時だ」

紅「大ネオシヨツカーの本拠地に」

良太郎「スマブライダースは向かう」

津上「超首領の復活は迫り」

日高「少年少女達は、立ち向かう」

天道「おばあちゃんは言っていた。大志を抱けと」

城戸「仮面ライダー対シヨツカー改め」

五代「スマブライダース対大ネオシヨツカー！」

門矢士「大体分かった。これが、決戦だ！」

六十八話 決戦 11月9日

カイザーの制御を果たしたライダーズは、決戦に備え特訓を積んでいた。

大ネオショッカーのアジトもついに公となり、ついにアジトに乗り込みダクマを倒すだけとなった。

ブレイド・カイザー「……………うん。完全に制御出来てるわ」

ブレイド・カイザーは全身のアーマーが金色になり、超醒剣カイザーラウザーという太刀を携え、青いマントと胸にはブレイドの戦士ライダーの紋章マークが描かれてあった。

その他に、同じく胸と赤いマントに戦士の紋章が描かれ更にマントの下にはサヴァイブの翼が収納されている龍騎・カイザー、フォトンブラッドが全身に高い強度を誇る鎧と化し更に同じく黒いマントと胸に戦士の紋章が描かれたファイズ・カイザー。

響鬼・カイザー「……………んっ、調子いいぞオレ様も」

紅蓮に燃えた陣羽織りに鬼神装刀が進化を遂げた憂津怪之刀うつけのかたなという日本刀型清めの剣を携えており、紅蓮色のマントと胸には響鬼の戦士の紋章が描かれていた。

カブトの場合、ボディはカブト・プロミネンスとさほど変わりは無いが、胸と鋼色のマントに戦士の紋章が描かれたカブト・カイザー。そしてディケイドはヒストリーオーナメントのカードが総てカイザーライダーのライダーカードに変わっており、胸には戦士の紋章は描かれてはいないものの、クウガからキバまでのカイザー状態のマントと違い、三叉になっていた。しかも色はマゼンタ。

そのほかにも、仮面ライダーディエンド・コンプリートフォームの

他にも、WFJXに仮面ライダーオーズ・プトティラコンボ、そして仮面ライダーファイター等もいる。

因みに、屋敷はマスターの力で見えなくしてくれている。

クウガ・カイザー「大ネオショットカーのアジトは、……スマッシュ
海岸沖か……」

クウガ・カイザーは言うのと、ライジングビートゴウラムに乗り込む
因みにゴウラムはマスターハンドがこの日の為に、自衛軍に開発さ
せた代物。

マシントルネイダーに跨がるアギト・カイザー、三首龍サザンドラ
グレッダー・バイクモードに跨がる龍騎・カイザー。

続いては、ジエットスライガーをベースに改造したマツハスライダ
ーを操縦するファイズ・カイザー、マシンブレイダーをオリハルコ
ンで外装を補強したブルースペードを操縦するブレイド・カイザー、
やたら豪華で昔の暴走族が乗っていた様なバイク・ヒビキ号スペシ
ヤルに乗る響鬼・カイザー、お馴染みのライナーバイクに乗る電王・
カイザー。

その後ろにはブロンブースターキバードに乗るキバ・カイザー、お
馴染みのマシンディケイダーに乗るディケイド・カイザー、マシン
ディエンダーに乗るディエンド・コンプリートフォーム、Wギャリ
ーに乗るWFJX、マリオチエイサーとライドベンダーを合体させ
たプトティライドベンダーに乗るオーズ・プトティラコンボ、そし
てライジングトライゴウラムに乗り込む仮面ライダーファイターが
走行していた。

十四のバイクの行く先を、量産型バイクに乗るショットカーライダー
とライオトルーパー等が邪魔をする。

ファイズ・カイザー「あーもー、ミサイルはっ……」

「その必要は無い！」

その声が響くと、十四のバイクが現れる。乗っているのは、一号からJまでのライダー軍団が応援に駆け付けてきた。

クウガ・カイザー「師匠、父さん、伯父さん!？」

一号「行け、我が弟子よ！」

ブラックRX「お前はお前の未来に突き進め！」

J「分かるだろ？仮面ライダーが何なのかを!!！」

クウガ・カイザー「……解りました。行ってきます！」

ディエンド・C「これはORE達の礼だ。とつときな」

カメンライド ブラック

電子音がなると、ディエンドライダーからバトルホッパーに乗った仮面ライダーブラックが現れ、加勢した。

ブラックRX「昔の俺か。懐かしいものを」

ブラック「俺の名は、仮面ライダーブラック！」

十五人の昭和ライダー軍団は、一斉にライオトルーパーやショッカーライダーの軍勢を屠っていく。

ライダー軍団に後押しされたライダーズにレッドランバスとグリーンクローバーに乗ったギャレン・キングフォームとレンゲル・キングフォームが合流した。

ギャレン・K「兄さん！」

クウガ・カイザー「智、僕達の闘いは、本当の闘いはこれからだ。だから頼む、僕達に力を貸してくれ!!」

ギャレン・K「ああ。もうこんな闘い、もう終りにしてやる!!」

16人の仮面ライダーはすでに海岸線の大ネオシヨツカーのアジトの付近に到着した。戦闘員の警備という警備は、グリーンクローバーとマツハスライダーに装備されているミサイルランチャーによって排除されていく。

上へ行くには階段を登るのだが、

ディケイド・カイザー「こんなの登る奴が居るか!バイクで行くぞ!!」

というのが居るのでバイクで進むのだった。

暫く昇った階で、レム・ドーパントとギルス・ドーパントが待ち構えた。

クウガ・カイザー「また君達……………か」

アギト・カイザー「……………決着を着けるときが来たのね」

バイクを降りようとする、クウガ・カイザーとアギト・カイザーを遮るようにWFJXがWギャリーから降り、プリズムビツカーを取

り出す。

相手はドーパントだから、本業のライダーが相手にするのも同然だろう。

そう判断したクウガ・カイザーはアギト・カイザーの手を取り、バイクに誘導し、WFJX以外のバイクは発進し先に進んだ。

レム・D「あら、何？貴女達だけで？」

ギルス・D「どうやら死にてえらしいな」

WFJX「いいえ。クウガとアギトじゃ、ドーパント倒せないの分かってるでしょ？使用者ごと死んじゃうもの」

ギルス・D「だったな。じゃ、遠慮はいらねーな」

レム・D「私は、クウガの彼に様があるの」

ギルス・D「俺はアギトだ！」

WFJX「……佑理」

WFJX『薫…もう検索は要らないわね』

WFJX「さあ、あなたたちの罪を数えて！！」

また数階登り、広いフロアに出た。

そこには、五人のグリードが居た。カザリ、メズール、ガメル、ウヴァそしてアंक。それを見たオース・プトティラコンボはメダジヤリバーとメダガブリューを両手に持ち、残りのカイザーライダー

ズとファイターに言った。

オーズ・プトティラ「行け！大ネオシヨツカーの野望を砕く為に！」

アंक「君も、メダルで戦うんだ」

アंकは両手を腰に当て、先に行ったカイザーライダーズとファイターを見ながら、オーズ・プトティラに言った。

対するオーズ・プトティラは凍てつくフィールドをプテラウィングを羽ばたかせる事で生成し、言った。

オーズ・プトティラ「おまえらと話している暇は無い。残念だが、おまえらのコアをぶつつぶす！」

また数階登り、同じ様なフロアに到達。

そこでもやはり、ダークライダーが待ち受けていた。全ての電仮面が歪んだネガ電王・クライマックスフォームと漆黒のキバのキングの鎧であるダークキバ・エンペラーフォームが居た。

電王・カイザー「ここでも……………か」

電王・カイザー（行くぜ佑一！まねっこ野郎を許しちゃおけねえぜ！）

キバ・カイザー「キングのキバ……………」

キバット「おっしやー！キバって行くぜー！」

ネガ電王・Cと電王・カイザー、ダークキバ・Eとキバ・カイザーが各々の武器を構え、ぶつけ火花を散らす。
電王・カイザーはデンガツシャー・ソードとアックスを両手に持ち、ネガ電王・Cの攻撃を防ぎつつ攻撃を仕掛ける。
キバ・カイザーはザンバツソードを構え、対するダークキバ・Eもザンバツソードを構えた。互いに剣をぶつけ火花を散らす。

また数階登り、新たなフロアに到達。そこにはダークカブトを始めカブティックライダー達が待ち構えていた。

ここで降りるのは、カブト・カイザーだけだ。

カブト・カイザー「……皆は先に行つて。ここは私が」

デイエンド・C「おい、いいのかそれで!？」

カブト・カイザー「おじいちゃんが言つてた。仲良しごっこが通用する場合としない場合があるって。だからね、ここは必要無いの」

デイエンド・C「……………」

しばし悩むデイエンド・Cだったが、カブト・カイザーの信念を理解したのか、何も言わず他のライダー達と共に先に進んだ。

カブト・カイザーは先に進んだ仲間達を背中で見送り、カブトクナイガンとパーフェクトゼクターを構え、立ち向かう。

また進んだ先には、リュウガ・サヴァイブにグレイブジャックフォームが待ち構えていた。

ここで龍騎・カイザーとデイエンド・Cが相手をし、他のライダー

は先に進む。

ディエンド・C「……それじゃ、行くか」

龍騎・カイザー「ああ」

アタックライド 劇場版

アドベント

ディエンド・C「仮面ライダーディエンド・コンプリートフォーム、目標を狙い撃つ！」

また進んだ先には、オーガとサイガが居た。

ファイズ・カイザーはファイズフォンを操作しオートバジン・バトルモードを呼び出し、ファイズプラスターをブレードモードに移行する。

ファイズ・カイザー「さあて、どう料理されたい？帝王のライダーさん」

地の帝王のベルト・オーガと空の帝王のベルト・サイガをファイズの世界の皇帝^{カイザー}は見据えた。

味方達が先に行ったのを確認し、オーガに切り掛かった。

また暫く行くと、歌舞鬼とワイルドカリスが待ち構えていた。

降りるのは響鬼・カイザーとブレイド・カイザーだ。先に行けと響鬼・カイザーは首で促し憂津怪乃刀を構え、ブレイド・カイザーは

カイザーラウザー構え歌舞鬼とワイルドカリスに己の武器を振り下ろす。しかしそれは避けられてしまい、相手に攻撃のチャンスを与えてしまった。

ガキイーン！！

しかし、寸前で憂津怪乃刀とカイザーラウザーで防ぎ、火花を散らす。

また新たな階に到達する。その階で待ち受けていたのは、片角のアギトのミラージュアギトと黒く目が歪んだダークデイケイド激情態だった。

デイケイド・カイザー「面白い。友樹とファイターは先に行け」

クウガ・カイザー「門谷……君」

アギト・カイザー「心配しないで。友樹はダクマとの決着をつけて来て」

悩み、迷うクウガ・カイザーは決心しファイターとギャレン・Kとレンゲル・Kを連れ、最上階を目指した。

アギト・カイザーは拳に太陽の輝きを纏わせ、デイケイド・カイザーはライドブツカー・ソードモードの刃先を撫で言った。

デイケイド・カイザー「目標を、破壊する！」

最上階。そこでダクマは王座に座り、超首領の姿を見ていた。紫の

邪龍は既にタブーの核との融合を終え、復活まで休息の睡眠を取っていた。

そこへ、四台のバイクの走行音が聞こえてきた。ダクマはその音が誰の物か知っているのだろうか、振り返る訳でもなく超首領だけを見ていた。

クウガ・カイザー「……………ダクマ」

ダクマ「待っていたよ、君がここに来るって事を」

ファイター「……………一つ気になることがある」

ダクマ「…なに？」

ファイター「お前は超首領を復活させて、一体何がしたいんだ？」

ダクマ「簡単なこと。全ての世界を融合して、世界を一つだけにする。それだけなら、かつての大ショッカーとなんら変わらない。だから、僕は一つの世界を敢えて残す。そして、アマゾンの世界のように大ネオショッカースクールを設立！更に住民は全て大ネオショッカーの下僕！生け贄！！実験台！！！そうさ、大ネオショッカーは全ての頂点に立つ！忌ま忌ましい仮面ライダーなどの存在など、根本から、一号から、消してくれる！！」

言い切ったダクマは、怪人体ン・ダクマ・ザバに変身。そして、天上からゆっくと、何者かが降り立つ。見たところ鷹をモチーフにした怪人である事に間違いは無い。

その怪人は、降り立つと同時に両腕を大きく広げ、自らの信ずる存在の名を叫んだ。

「シヨオオオオツカアアアアア!!」

ン・ダクマ・ザバ「仮面ライダーファイター、君の相手はこのシヨツカーグリードだ!!」

ファイター「なある。行くぜ、友樹！」

クウガ・カイザー「……うん」

ギャレン・K「行くぜ、兄さん、先輩！」

レンゲル・K「いくよー！」

決戦の時が、今、幕を開けた。

それは、伝説になるのかも知れない闘いだっただ。

く づ っ

六十八話 決戦 11月9日(後書き)

次回は、オーズ・プトティラSIDE

六十九話 決戦オーズ編 11月9日（前書き）

とある国のとある公園。

ある旅人は公園の水道で自身の象徴と言える下着パンツを洗濯していた。旅人の名は、火野映司。かつて欲望の王のベルトを使い、グリードを相手に死闘を繰り広げたオーズの変身者である。

映司「よしつと。次は、何処行こうかな？」

次の旅の行き先を考えていると、目の前に灰色のカーテンが現れ、映司より年下の少年と少女が現れた。

「貴方の力を、貸していただけますか？」

「俺達の友達が、危険なんだ！今から助けに行かないと！！」

会って突然そんな事を言われても、映司は同じく、懐に閉まった砕けたタカ・コアを取り出し、決心した様な表情をし少年と少女に言った。

映司「わかった。協力するよ」

少年と少女は映司の手を取り、灰色のカーテンを潜った。

六十九話 決戦オーズ編 11月9日

WFJXの次に仲間を送り出し、五体のグリードと対決するオーズ・プトティラコンボのマリオ・マリオはメダガブリューとメダジャリバーを構え、アंक・ウヴァ・カザリ・ガメル・メズールの五体を睨んでいた。

オリジナル・オーズの紫のメダルは暴走効果が付属されて初見で変身すると、自由が利かなくなり、本能のまま破壊の限りを尽くしてしまう。リ・イメージションのオーズであるマリオは紫のメダルによる暴走は起きてない。実際、紫のメダルはマスターハンドによる産物。所謂コピーに過ぎないが、オリジナル・オーズとの大差は無い。

オーズ・プトティラ「行くぞ！」

ガメル「メズールを、いぢめるなあああ！！！」

目標をメズールに決めたオーズ・プトティラだが、ガメルがそれを阻止し変わりに相手する。

ガメル事態五体の中では重量級で馬鹿力が特徴的だ。生半可な攻撃は、どう取るうとも通用しない……

オーズ・プトティラ「ハッ！！！」

ざしゅっ！

ガメル「うわああ！！！」

……紫のメダル以外なら。

紫のメダルは、無欲の結晶。故に人の欲望から生まれず、逆に無機物からヤミーが生まれる。それ以上に厄介なのは、コアメダルの破壊能力だ。何故このようなメダルが存在するのか、マリオは知らず、メダガブリューとメダジャリバーの斬撃を止めない。加勢にメズールが参戦する。

メズール「威勢がいいね」

オーズ・プトティラ「そりやどーも」

ガメル「メズールうゝ……こいつ強いいゝ……」

メズール「大丈夫よ、私も着いているから」

メズールはトリッキーな動きをし、その手から流水攻撃を繰り出す。すかさず冷気を繰り出し、防御し氷の壁を作った。が、ガメルはそれを壊しながらオーズ・プトティラに突進する。不意打ちを喰らったオーズ・プトティラはガードしそこない、倒れ、追い撃ちをかけられる様にカザリの風塵とウヴァの雷撃にメズールの流水攻撃を受けた。

多大なダメージを受けたせいか、変身が解かれてしまった。

マリオ「……うっ……がはっ……!!」

口から鉄の味がする液体が吐き出された。それが血である事に気付いたのは、しばらく経ってからだ。

目の前には完全体のグリード五体。逆にこちらは、ボロボロの三路手前のオツサン。勝敗は目に見えている。

自暴自棄になってしまったのか、スマッシュボールを砕き、マリオファイナルを発動。回転する炎の渦は間違はなくアंक達に進む。

しかし、アंक達はそれを避けようともせず、ましては抵抗するわけでも無い。そのマリオファイナルは寸前で消えてしまったのだ。

アंक「やっぱり駄目だね君は。クウガの彼はやっぱり僕とおんなじ存在なんだしさ」

マリオ「……………どういこうった……………？」

アंकの言った言葉に、違和感を感じるマリオ。アंकは、マリオに近付き、彼の頭を踏み付け言った。

アंक「知つての通り、クウガの彼は造られた存在。でもね、いくら何でも昭和ライダー軍団の連中がいとまたやすく遺伝子操作出来ると思うのかい？」

マリオ「……………つぐ…何が……………言いたい?!」

アंक「……………元々、先代のクウガの適合者は皆、グロンギの技術を用いられていたそうなんだ。だからグロンギも見んなクウガの彼と同じ様な体の作りをしているんだ」

マリオ「つまり……………友樹は……………」

アंक「改造人間でもあり、怪人なんだよ」

マリオ「……………そんな嘘を信じてたまるか!友樹は人間だ!試験管ベビーだろうが何だろうが、彼は人間だ!!」

何とかアंकの足を退け、マリオは立ち上がる。その彼の背後で灰色のカーテンが現れ、中から三人の男女が現れる。

一人はエスニック風の服装の男・火野映司^{ひの エイジ}、後の二人は以前この世界に来た聖夜とフィーナだ。

映司「この世界のグリードって……」

聖夜「映司さん、俺達は援軍なんだ。マリオさん、そういう訳で」

フィーナ「お手伝いします！」

マリオ「有難うよ。映司……だっけか？あんだ、何者だ？」

映司「火野映司……元オーズだけどね。メダルはみんな無くなっちゃって……」

聖夜「メダルの心配はするな。俺が手を回す。作成^{メイク}・コアメダル」

聖夜の手には、オレンジ色のコアメダルが三枚現れる。爬虫類系のメダルだ。

そのついでにオーズドライバーをまたも二個と六枚コアメダルも作成する。

映司「すっご……」

聖夜「映司さんはブラカワニコンボでいいですか？」

映司「あ、うん……（蛇嫌いだけど、仕方ないか）」

四人は列び、オーズドライバーを腰にセット、メダルを入れオーズキャナーで読み込む。

マリオ「変っ身！」

タカ クジャク コンドル！ タアアジャアアドルウウ！

映司「変身！」

コブラ カメ ワニ！ ブラカアアワニツ！

聖夜「変身！」

サイ ゴリラ ゾウ！ サゴーズ サゴーズ！

フィーナ「へっ、変身！」

シャチ ウナギ タコ！ シャシャシャウタ！シャシャシャウタ！

マリオはオーズ・タジャドルコンボに、映司はブラカワニコンボに、聖夜はサゴーズコンボ、そしてフィーナはオーズ・シャウタコンボに変身。

五対四の状況ではオーズ・タジャドル達が不利だ。が、彼等は諦めていなかった。

オーズ・ブラカワニ「ハッ！」

オーズ・ブラカワニのワニレッグによる強烈なキック、

オーズ・サゴーズ「ロケット……パアアアンチ……！」

オーズ・サゴーズによる爆裂的な攻撃力を誇るバゴーンプレッシュ
ー、

オーズ・シャウタ「はあああああ!!!」

オーズ・シャウタによる頭部流水波、

オーズ・タジャドル「いいいいいいいい………ヤッフウウウウウウウウ!!!」

そしてオーズ・タジャドルによるコンドルレッグの鋭さを活かした飛び蹴りに踵落とし、それらの技を食らうグリード達はたまらず、体の中にあつたコアメダルが勢いよく飛び出て、オーズ・ブラカワ二の手中に収まった。

オーズ・ブラカワ二「こつちのアンクはロストアンクなんだな。けど、儲けた儲けた」

自身の知っているアンクが生きていれば言うていただろっ台詞がいつの間にか映司の口から発せられた。

完全体では無くなったのか、それぞれ体の一部分、その下を曝す。何も覆われていない素肌同様の体が。

四人のオーズは一斉に必殺技スキヤニングチャージの発動を行った。

スキヤニングチャージ

スキヤニングチャージ

スキヤニングチャージ

スキヤニングチャージ

オーズ・タジャドル「はあああああー!!」

オーズ・ブラカワニ「はあああああ………せいやあああああああ
!!!!!!!!」

オーズ・サゴゾ「サゴゾ………インパクト!!!!!!」

オーズ・シャウタ「はあああああ!!!!!!」

プロミネンスドロップ、ワーニンググライド、サゴゾインパクト、
オクトバニツシュ。

四つの技を受けた五体のグリードは、コアメダルだけに崩れてしま
った。

プテラ トリケラ ティラノ! プットティラアアノザウルウス!

オーズ・タジャドルから姿を変えたオーズ・プトティラはアンク達
グリードの意思を宿したコアメダルを五つ拾い、その右手で砕いた。
四人のオーズは変身を解き、下の階から来た仲間を迎えた。その中
には……

翔太郎「お、お前は……!?!」

フィリップ「君は……オーズ……」

映司「え、ダブル!?!」

風都を守る風の切り札を持つ戦士と欲望の王の戦士が、再び相見え
たのだった。

くづつ

六十九話 決戦オーズ編 11月9日(後書き)

次回はダブルです

七十話 決戦ダブル編 11月9日(前書き)

ここは心地好い風がいつも吹くエコな都市、風都。
かもめビリヤードの二階にある探偵事務所の扉が、いつにもまして
勢いよく開いた。

「しょーたるーくん！しょーたるーくん！！」

翔太郎「だー！おい、亜樹子！一体全体なんだってそんな……」

亜樹子「大変よしよーたるーくん！ダーリン……竜君と買い物し過ぎて、お金がすっからかんに……」

翔太郎「おまつ、一体何をそんなに買ったら残金無くなるんだよ！！」

亜樹子「こーなったら……事務所は手放すしか……」

翔太郎「ばっきやるー！！おやつさんの遺してくれた場所をおお！！」

亜樹子「事務所の件は冗談くだりだけど」

翔太郎「いや、冗談かよ！！」

結婚してから色々とおかしくなったのか、照井亜樹子……旧姓鳴海
亜樹子は翔太郎と共に漫才を繰り広げてしまふ始末。因みに夫の照
井竜は警察官。以上。

また別の扉が開くと、その奥からフィリップ……本名園崎来斗は何

故か家計簿を片手に現れた。

フィリップ「大変だよ翔太郎。一週間後に家賃を払わないと……」

翔太郎「なんじゃそりゃ!」

亜樹子「こう聞いちゃ不謹慎だけど、お父さんの遺産は……?」

フィリップ「……orz」

翔太郎「おいフィリップ!? フィリィィィィップ!!!!」

ぎゃーぎゃーわーわー叫ぶ三人。しかし、その事務所の扉がノックする音が聞こえ、馬鹿騒ぎを終える三人。もしこれが依頼だとすれば、この日の依頼で約二ヶ月振りだ。

入り口の扉を開くと、そこには翔太郎と変わらない年齢の青年が立っていた。

「仮面ライダーダブルのお二人に、依頼に来ました」

見ず知らずの人間から自分達が仮面ライダーである事を指摘され、身構える三人。因みに、亜樹子に至っては緑のスリッパに『誰やねん!!』と金の文字で書かれた物を取り出している。

しかし、そのシリアスな空気は、

キバット「渡う……お前もう少しは言葉えらぼうぜ?」

翔太郎 & amp; 亜樹子「蝙蝠が喋ったあああ!!!!」

フィリップ「バットショットに似た物が口を利いてメモリも無しに

飛んでいる！？興味深い……ゾクゾクする……」

青年の後ろから出て来た金の蝙蝠……もといキバット・バット三世
によって崩壊された。

青年……もとい紅 渡は短いため息を吐いて懐からある封筒を取り
出した。

渡「ここに百万円入ってます」

怪しく思った亜樹子が中身を確認すると、確かに百万円……千円札
が千枚入っていた。

亜樹子「って、千円札でかい！！なんでやねん！！！」

渡「仮面ライダーダブル。とある世界で危機を迎えています。貴方
達の力を貸してください。これは前金です、成功報酬で一千万……勿
論一万円札でお渡しします」

亜樹子「承りました！！！」

翔太郎「はあ……これは探偵の仕事じゃないが、例え風都の人間
以外も、俺が救ってやるよ」

フィリップ「翔太郎、この場合『俺』ではなく、『俺達』だよ」

翔太郎「そうだなフィリップ！」

渡「急いで下さい既にオースも向かっています」

翔太郎「あいつもか……」

フィリップ「じゃあ、亜樹ちゃん。後はよろしく！照井竜に『後は頑張ってくれたまえ』と伝えてくれたまえ」

翔太郎とフィリップはそう言って、外に出て灰色のカーテンに向かってハードボイルダーに乗り窓越しの事務所内の亜樹子に向かい手を振り、潜った。

七十話 決戦ダブル編 11月9日

一番最初に仲間達を送り、WFJXは目の前のレム・ドーパントと
ギルス・ドーパントにプリズムビッカーを構える。

ギルス・D「俺達は、アギトとクウガに用があんだよ」

レム・D「パツと出の半分こには、用が無いの」

WFJX「ガイアメモリは、私達が専売特許なのよ」

WFJX「もはや検索は必要無いわね。薫」

WFJX「ええ。佑理」

WFJX「さあ、あなたたちの罪を数えなさい！！！！」

言うところWFJXはプリズムメモリの代わりに、赤く透き通った試作メモリのトランザムメモリを取り出し、ガイアウィスパーを鳴らし、ビッカーソードの柄に挿入した。

トランザム

抜き取った刃は赤く輝き、人々の思いを載せた光刃が振り下ろされる。

避けるのはたやすいと思っただレム・Dとギルス・Dは何故か避ける事が出来ず直撃を受けた。

多大なダメージを受けてしまったが、レム・DはWFJXに腰の螭螂の鎌状の剣を取り出し、振りかざす。逃げようとするWFJXだ

が、ギルス・Dの背から伸びた触手がその動きを止めた。それにより、レム・Dの攻撃が当たる。反撃とばかりに、WFJXはプリズムビッカーに四本のメモリを挿入する。

サイクロンマキシマムドライブ

ヒートマキシマムドライブ

ルナマキシマムドライブ

トリガーマキシマムドライブ

ジョーカーメモリをトリガーマメモリに変える事で連射性能の上がった技が生まれる。

WFJX「ビッカーファイナルイリユージョン!!!!」

これにはレム・Dとギルス・Dは避けるのは精一杯。レム・Dは弓の形状から上半分を前後逆に回し、それをWFJXに振り下ろす。

WFJX「成る程。みての通り、メ・ガリマ・バの武器の改良型の様ね」

レム・D「御明察。その通りよ、この武器・レムアローは通常のアローモード、片方を前後逆にするツインサイズモード、そして上下分けて二本でのサイズモード……カリスやメ・ガリマ・バをモデルにしたドーパント、それがレム・ドーパントよ」

ギルス・D「それと、この俺に設けられたメモリのモデルは、アギ

トの世界のライダー……ギルス。奴の特徴は踵のヒールクロウに背から生える触手。後は腕に備え付けられた鎌だ」

WFJX「随分とおしゃべりなのね。余裕こくなんて、私らナメられたものね」

WFJX「さつさとちゃっちゃんとメモリブレイクしちゃいましょうか」

レム・Dとギルス・Dの講義を受けたWFJXはプリズムビッカーを四等分に分け、サイクロン側を左腕、ヒート側を右腕、ルナ側を右足、ジョーカー側を左足に装着する。

そしてT2メモリを次々とメモリスロットに挿入する。

ハミングバードマキシمامドライブ

スーパーホーネットマキシمامドライブ

ニンジャマキシمامドライブ

ホークマキシمامドライブ

ハチドリ、スズメバチ、忍者、鷹。それぞれの記憶を宿したガイアメモリを使用し、マキシمامドライブを発動させる。そして、右腰のスロットにトランザムメモリを装填。マキシمامドライブを起動した。

トランザムマキシمامドライブ

使用者自身のスペックを三倍にするトランザムメモリ、その効力を

駆使しレム・Dとギルス・Dに蹴りの応酬を喰らい、対するレム・Dはレムアローをツインサイズモードに切り替え、徐々にだかだがダメージを与える。

ギルス・Dはその二人から距離を取り、ガイアメモリを取り出す。

エクシード

ギルス・D「見せてやるぜえ………本当のギルスをよお!!」

ガイアウイスパーの音声から、エクシードギルスに姿を遂げると直感したWFJXはレム・Dを押し退け、ギルス・Dに向かって叫んだ。

WFJX「ダメよ！メモリの多量服用は……！！」

ワイルド

レム・D「でもね、ダクマ様に忠誠を誓い、クウガとアギトの石を手に入れる。そのためならば、私達なんて、ただの………人形だもん」

同時に、ワイルドメモリを起動。レム・Dとギルス・Dはワイルドメモリとエクシードメモリをベルトのバックルに挿入。すると、夥しいオーラと、絶望に満ちた叫びに似た電子音声が鳴り、エクシードギルス・Dとワイルドレム・Dのその姿を曝す。

エクシードギルス・Dは、オリジナルのエクシードギルスを基に作ったのか、その姿が如実に現れている。

ワイルドレム・Dはクウガの世界のメ・ガリマ・バとワイルドカリスを合わせた姿。

その二人は、通常時と比べものにならない程の圧倒的スピードでW

FJXの背後を捉え、ダブルキックを繰り出す。それがピンポイントだったのか、WFJXの変身が解かれ、薫と佑理に別れてしまった。エクシードギルス・D「さすがエクシードメモリ……動きが違うな」

ワイルドレム・D「でも、慣らしてダメージを喰らってボロボロなんて……意味ないじゃん」

薫「……な、慣らし……?!」

佑理「嘘でしょ……あれで?」

勝てない。圧倒的敗北を味わった薫と佑理。トランザムメモリ以外のT2ガイアメモリはエクシードギルス・Dとワイルドレム・Dによって先程砕かれてしまった。

その時だ。室内なのに、風を感じた。微風はやがて強風になり、灰色のカーテンが現れた。

そこから現れたのは二人の男。一人はソフト帽を被り、もう一人はヘアピンで髪を固定し本を片手に現れていた。

エクシードギルス・D「貴様ら、何者だ!」

エクシードギルス・Dに問い質された二人は、紫と緑のガイアメモリを取り出し、ガイアウイスパーを鳴らす。

「僕達は……」

サイクロン

「俺達は……」

ジョーカー

「二人で一人の、仮面ライダーだ！」

翔太郎「行くぜ、フィリップ」

フィリップ「分かったよ、翔太郎」

翔太郎「その二人」

薫「な……何よ」

フィリップ「君達もダブルなら、僕達と共に戦おう」

佑理「そうね……」

薫と翔太郎はダブルドライバーを腰にセット。佑理とフィリップの腰にもダブルドライバーが現れ、佑理はファンゲメモリを、フィリップはサイクロンメモリを取り出し、四人は変身プロセスを叫ぶ。

薫 & amp ; 佑理「変身！」

翔太郎 & amp ; フィリップ「変身！」

ファンゲジョーカー

サイクロンジョーカー

そこへ、エクストリームメモリが二つ飛来。一つは薫が、もう一つ

はフィリップを吸収しそのままWFJとWCJの下へ行き、四人で二人のダブルを最強形態に変えた。

エクストリーム

エクストリーム

そして、街の住民が仮面ライダー達を応援する黄金色の風が、それを越える最強形態に変えた。

ダブルアジタカヒダーストダサキイザロガカヒダーストリーム

WFJGXとWCJGXが、プリズムビッカーを構え、エクシードギルス・Dとワイルドレム・Dを迎え撃つ。

二人のダブルの背中には黄金色の六つの翼が存在しており、上空からエクシードギルス・Dとワイルドレム・Dを翻弄する。

WCJGX「そろそろトドメとすっか？」

WCJGX『僕は彼等のメモリにはもう興味はないね』

WFJGX「行くわよ、佑理」

WFJGX『いつでもオツケー』

上空で余裕をこいている二人のダブル目掛け、触手を放つエクシードギルス・Dと鋭弓を放つワイルドレム・Dだが、それが意図もたやすく避けられてしまった。

上空で二人のダブルは、エクストリームメモリを閉じ、再度開いた。

エクストリームマキシマムドライブ

エクストリームマキシマムドライブ

W F J G X 「『ゴールデンエクストリーム!!』」

W C J G X 「『ダブルゴールデンエクストリーム!!』」

強力な二つのキックは、二体のドーパントのガイアメモリをメモリブレイクさせる事に成功。しかし、使用者の二人、須藤優夜と神崎紗耶香は気を失って倒れていた。

変身を解いた四人は顔を見合わせ、薫と佑理はWギャリーに跨がり、翔太郎とフィリップはハードボイルダーに乗り上の階へと向かった。やがて、オーズのいる階層に到着。すると、そこには……

翔太郎「お、お前は……!?!」

フィリップ「君は……オーズ……」

映司「え、ダブル!?!」

欲望の王のベルトを使いし戦士・オーズの火野映司が聖夜とフィーナ、そしてマリオ達と共に居た。どうやら先程戦闘を終えた様だ。

マリオ「皆の迎えに行くぞ!」

プロテクトライドベンダーにはサイドカーが後左右に設置することが可能な為、聖夜とフィーナそして映司を乗せ、また上の階層へと走り出した。

くづつ

七十話 決戦ダブル編 11月9日(後書き)

次回は電王・カイザー & amp; キバ・カイザーの決戦編!

七十一話 決戦電王& a m p・キバ編 11月9日(前書き)

キヤッスルドラン内部。

王座にてワタルは街を見ていた。

ライダー大戦から2年近く経った。あれからワタルの世界は人間とファンガイアのいざこざは珍しくないが、ここ最近平和続きだ。

ただ、ワタルは何故か違和感を感じていた。違和感というよりも、嫌な予感とも言つべきか、これから何かが起きる。それだけは確かだった。

そしてそれが、具現化した。

M・良太郎「俺、参上！」

ワタル「なっ、なんなんですか！？貴方は」

M・良太郎「お前がリイマジネーションってやつの子バか？」

ワタル「確かに僕はキバですけど…！」

リイマジキバット「おい、どうしたワタルう？」

M・良太郎「リイマジのキバットだな？お前も来い！」

突如として現れたモモタロス憑依の良太郎はワタルとリイマジキバットを抱え、後ろを振り返る。そこには灰色のカーテンを背後に立つ紅渡だった。

渡「モモタロス、援軍として呼ばれているんだからもうちょっと慎重なまなきや駄目だよ」

M・良太郎「悪い、渡」

ワタル「え？」

渡「僕はオリジナルのキバの紅渡。君達リイマジネーションライダーと僕達守護ライダーとはある世界への援軍に行きます」

ワタル「とある……世界？」

渡「ここでは十二のライダーが守っていましたが、とある事情により、援軍要請が出ました。その中に、かの破壊者、門矢士やリイマジクウガの小野寺ユウスケも来る予定です」

ワタル「ユウスケも!？」

渡「このままだと、その世界に蔓延る大ネオショッカーが他の世界に干渉し滅亡させようと企てています。お願いです、君の力を貸してくれませんか？」

別世界の事情が、よもや自分の世界にまで影響を起こすなどと夢にも思わなかった。だが、今行かないと後悔する。それだけは確かだ。

ワタル「連れていって下さい。僕も手伝います！」

M・良太郎「気に入った。俺はモモタロス。この体は野上良太郎」

渡「では行きましょう。スマブラライダーズの世界へ！」

そして三人と一匹は、灰色のカーテンを潜った。異世界の危機を救

し
為
に
。

七十一話 決戦電王& amp・キバ編 11月9日

電王・カイザー「うおらあああ!!」

ネガ電王・C「……」

電王・カイザーはデンガツシャー・ソードモードをネガ電王・Cに振り下ろすが、同じくネガ電王・Cのデンガツシャー・ソードモードの刃で受け止められた。

援護に向かおうとするキバ・カイザーだが、ダークキバ・エンペラーに阻害される。

キバット「ヒュー、やるなああのキングのキバ。だが俺から言わせてもらうが、親父はあれ程弱くは無い」

キバ・カイザー「何を言ってるの!?!」

キバットの言った言葉を、キバ・カイザーはダークキバ・Eの猛攻をザンバットソードで防ぎながら問う。キバットは溜息を返し、キバ・カイザーに答えた。

キバット「簡単に言えば、そのキングのキバはニセモンだ。ファイナルウェイクアップで行くぞ!」

キバ・カイザー「ええ。佑一!」

電王・カイザー「合点承知!」

キバット「ファイナルウェイクアップ!」

タツロツト「ファ〜イナル…ウエ〜イクア〜ツプ…ファイ〜バ〜」！

フルチャージ& amp ;アップ

電王・カイザー& amp ;キバ・カイザー「はあああああああ
あ！！！！！！」

ダブルライダーキックが発動し、ネガ電王・Cとダークキバ・Eに直撃する。

舞う土煙。直撃したのは床だった。ネガ電王・Cとダークキバ・Eは空中で回転し、華麗に着地する。しかし、それだけで終わらなかつた。

ネガ電王・Cとダークキバ・Eは突然姿を変えた。ネガ電王・Cの背中に新たに電仮面が生えた。隣のダークキバ・Eは胴と両腕が変移した。超ネガ電王とダークキバ・ドガバキエンペラーがその姿を曝し、電王・カイザーとキバ・カイザーにその拳を鳩尾に食らわず。衝撃で後方の壁に減り込むように直撃。ダメージは先程の物より桁が違つた。

電王・カイザー「……つぐ、……やるー…ハンパなく強くなりやつて……」

キバ・カイザー「カイザーの力さえも上回るなんて……真似っ子にも程があるわ！……たた……」

立ち上がる程まだ体力はあつた。

だが、そこから電王・カイザーとキバ・カイザーにターンは回らなかつた。

しかし、突然の来訪者によって、それは免れた。

灰色のカーテンから四人のライダーが現れた。

電王・ライナーフォーム、超電王、キバ・エンペラーフォーム、キバの四人だ。しかし、その四人の正体を電王・カイザーとキバ・カイザーは知らない。だが、それは電王・カイザーの希望だということが分かる。

電王・L「僕は野上良太郎。オリジナルの電王！」

超電王「同じく、モモタロスだ！」

超電王（せんぱあい、自分だけ目立ちすぎだよ？）

超電王（俺らの力に、泣けるで）

超電王（手伝ってもいいよね？答えは聞いてない！）

超電王（行くぞ、下臣共）

電王・カイザー「……待ってたよ。奇跡を、希望を」

電王・カイザー（ここからが、クライマックスだぜ！）

キバ・E「僕は紅渡。オリジナルのキバで守護ライダーの一人。野上君もそう」

キバ「僕はワタル。リイマジネーションのキバです」

キバ・カイザー「……心強いわね」

超電王、電王・L、電王・カイザー、キバ・カイザー、キバ・E、
キバの六人は列んで立ち、必殺技の構えに出た。

チャージ& amp; アップ

ウラロッド キンアックス リュウガン モモソード

フルチャージ& amp; アップ

キバット「ファイナルウエイクアップ！」

タツロット「ザンバット、フィ〜バ〜！」

リイマジキバット「ウエイクアップ！」

超ボイスターズキック、

超電王「必殺、俺の必殺技！スペシャルバージョン！！」

フルスロットルブレイクならぬ電車斬り、

電王・L「電車斬り！」

カイザーボイスターズキック、

電王・カイザー「うおおおおおおお！！」

カイザームーンブレイク、

キバ・カイザー「はああああ！！」

エンペラームーンプレイク、

キバ・E「はあああああ!!」

そしてダークムーンプレイク、

キバ「はあああああ!!」

六つの技が、それぞれ超ネガ電王とダークキバ・DGBKEに直撃。流石に六つの技を喰らったせいも、超ネガ電王とダークキバ・DGBKEは爆発四散する。

下の階からオーズ組とダブル組みが上つてきた。

その際翔太郎とフィリップは紅渡を見た瞬間、戸惑うばかり。しかし、それを知るのは渡を含めた翔太郎達三人である。

佑一「ここに居てもラチがあかない。早く上階うへに行つて戦いを見届けるんだ。友樹の……五代友樹の決着を！」

それに賛同し、頷く佑井達。

ある者は専用バイクに無いものはそれに同乗し進む。しかし、それを邪魔するが如く、シヨツカー戦闘員が下階から押し寄せてきた。

マリオ「マンマミーア!!……ゲン達……負けたのか？」

聖夜「ここは俺が……」

フィーナ「駄目よ!無駄に戦力を……」

「その必要は無い」

突然現れた灰色のカーテンから出て来たのは、長髪の少年と黒髪の少女。少年は赤いガイアメモリを、少女は魔法陣から太刀を生み出し、佑一達に向かって言った。

「ここはオレら二人が押さえておく。皆は早く、とーちゃん……の決着を見届けてくれよ」

「御安心を。伊達に、二代目スマブライダースを名乗ってる訳では無いので」

少年は赤いガイアメモリの起動キーを押しガイアウイスパーを鳴らす。

アクセル

進「オレの名は、五代進！変、身！」

アクセル

少年…五代進は仮面ライダーアクセルに変身し、エンジンブレードを携え突撃する。

エメラ「私はエメラ・ヤマト。魔法剣士よ」

未来からの援軍である五代進…仮面ライダーアクセルとエメラ・ヤマトは佑一達を先に行かせる。が、やはり回り込んだジンファイターとドグマファイターを道を塞ぐ。

しかし、そこを青いラインの入ったデンライナーが通過。ジンファイターとドグマファイターを蹴散らした後、そのデンライナーが通り過ぎた場所に一人の男が立っていた。

幸一「じいちゃん！」

佑一「お前、幸一……って……」

またも未来からの援軍。野上幸一。またの名を、仮面ライダー……

幸一「変身！」

ストライクフォーム

NEW電王「NEW電王！助太刀に参上！」

デンガツシャー・ソードモードを携え、雑魚を一掃し、佑一達の道を切り開く。

道がデストロン戦闘員で埋まる前に、佑一達は上階へと向かった。

く づ っ

七十一話 決戦電王&mp・キバ編 11月9日(後書き)

次回はカブト編!?

総司さんとソウジさんの邂逅が出来るかどうか不安です

七十二話 決戦カブト編 11月9日(前書き)

ハイパークロックオーバー

カブト・H「……ここがリイマジネーションカブトの世界か」

リイマジネーションのカブトの世界にハイパークロックアップを使い現れた仮面ライダーカブト・ハイパーフォームは言った。

とにかく変身を解き、総司はある店の前で足を止めた。店の名は天堂屋というおでん屋。

店内から出汁の利いたいい露の香りに惹かれた総司は自分のリイマジネーションを探すのを忘れ、店内へと歩んだ。

ソウジ「……いらっしやい」

中に居たのは三十路を越えたかどうかの年齢の男。

とにかく総司はおでんを注文する。出されたおでんに眉を潜め、言った。

総司「ここのおでんは、大根に卵、がんもどきしかないのか？」

ソウジ「嫌なら別の店で食べ。食うんだったら熱い内に食べ。そして黙って食べ」

それ程味に自信があるのか、そう思った総司は箸で大根を二つに分ける。大根は出汁が染み込んでいて柔らかい。口に運ぶと出汁と大根本来の味が広がっていた。

出されたおでんを総て食べた総司はこのおでんの味で、自分のリイマジネーションを見付けたと確信し、会計を済ませ、ソウジに話し

掛ける。

総司「十分でいい。ちょっと顔を貸してくれないか？」

ソウジ「……文句は受け付けないが」

総司「そうじゃない。お前の力を貸してほしい」

と、半ば強引に総司はソウジを店の裏手に引き連れ、自分がこの世界に來た理由と、これから起こりうる事を総司は自信のカブトゼクターを見せて言った。

対するソウジも自信のカブトゼクターを呼び寄せ、その手に握り締めた。

ソウジ「……少し前に、土と言う男とその仲間達とで、訳の分からない生命体や巨大な要塞と戦って帰ってきたら、ベルトは直っていた。だから俺は今こうして、ここにいる。以前の俺はクロックアップの世界で一人ぼっちだった」

総司「……」

ソウジ「それでも家族は守れる事に変わりはない。だから俺は家族を守る。力を貸すぞ」

総司「……では行くぞ」

総司とソウジは一気にカブト・ライダーフォームに変身し、総司が変身したカブト・Rはハイパーフォームに変化する。

二人のカブトは手を繋ぎ、自分の名前を言った。

カブト・H「俺は天の道を往き総てを司る男。天道総司」

カブト・R「俺もテンドウソウジ。字は天に議事堂の堂、ソウジは片仮名だ」

カブト・H「ふむ。では行くぞ」

カブト・R「ああ」

ハイパークロックアップ

二人のカブトは、まるでそこには存在しなかったかのように忽然と消え去った。

行き先は勿論。スマブラライダーズの世界だ。

七十二話 決戦カブト編 11月9日

カブト・カイザーは一人で四人のライダーを相手に戦っている。だが、技を流すだけで攻撃がままならなかった。

カイザー状態ならプロミネンスクロックアップから通常のクロックアップまで自由に扱える。だが、カブティックライダー相手には、その隙を与えてはくれない。

カブトクナイガン・アックスモードとパーフェクトゼクター・ソードモードの二刀流で、ケタロスとヘラクスをいなす。不意打ちのコーカサスの一撃も流すだけで精一杯。

カブト・カイザー「……（何かおかしい。コーカサスはプロミネンスフォームで倒した。じゃあこれは私が倒した強化版？）……考えてもラチが開かないわね。プロミネンスクロックアップ！」

プロミネンスクロックアップ

ハイパークロックアップより上級のクロックアップ。以前カブト・カイザーが自分の世界で使用した切り札にして決め手。

さすがにカブティックライダー達はその力に抗える訳も無く、カブト・カイザーの直撃を被った。

慣性の法則に従い、カブティックライダー達はダークカブトの後方の壁に減り込んだ。

プロミネンスクロックオーバー

プロミネンスクロックオーバーの電子音が鳴り響くと、カブト・カイザーはパーフェクトゼクター・ガンモードとカブトクナイガン・ガンモードの銃口をダークカブトに向けた。

乱れ飛ぶ球。しかし、ダークカブトはそれを避けようとせず、華麗な身のこなしでそれを避けていく。どれも球の軌跡を読んでいるように避け続けた。

ダークカブト「……………」

ダークカブトは何と球と球の間をすり抜け、ゆっくりとだが、カブト・カイザーへと近づいていく。そしてその左手には、ハイパーゼクターが握られてあった。恐らくはコーカサスのハイパーゼクターを抜き取ったのだろう。

そして近付きながら、ハイパーゼクターを装着。ハイパーキャストオフを行った。

ダークカブト「……………はいばーきやすとおふ」

ハイパーキャストオフ

チェンジハイパービートル

発せられたダークカブトの声はその身体に似合わない程の幼い声。そのダークカブトはハイパーフォームに変化。その姿のままゆっくりとカブト・カイザーに近付いていく。

ダークカブト・H「……………ねえ、おねえちゃん」

身構えるカブト・カイザーだが、ダークカブト・Hに声をかけられ更に警戒を増す。

ダークカブト・H「おねえちゃんは、どうしてたたかつの？ぼく、おねえちゃんとおともだちになりたいんだ」

カブト・カイザー「何を言っているの？今は私は貴方の敵よ」

ダークカブト・H「てきつて、なあに？ねえ、ぼくとあそぼうよ。ぼくは惣治そしつていうんだ。おねえちゃんは？」

カブト・カイザー「天の道を往き、舞う女。天道舞よ」

ダークカブト・H「ふふふ、おねえちゃんおもしろいおなまえだね。それじゃあ、あそぼうか」

ハイパークロックアップ

カブト・カイザー「……ハイパークロックアップ」

ハイパークロックアップ

ハイパークロックアップ空間の中で、カブト・カイザーとダークカブト・Hは拳と蹴りの応酬を繰り返していた。

ダークカブト・Hは口調通りの純粹さで攻め、カブト・カイザーは流しつつも確実に一打一打当てていく。カブト・カイザーの信念の籠った拳と蹴りと、ダークカブト・Hの純粹過ぎる拳と蹴りは幾度と無く続き、ハイパークロックオーバーが起こる。

ダークカブト・Hが距離を取ると、同時に今まで気を失っていたカブティックライダー達が意識を取り戻し、ダークカブト・Hの前に並び立った。

カブト・カイザー「……惜しい。とても惜しいわ」

パーフェクトゼクター・ガンモードを握り締める手は強さを増し、

ギリリと音が鳴った。詰んだ。

その時だ。タキオン粒子の擦れる様な聞こえてきた。

ハイパークロックオーバー

その電子音が鳴ると、カブト・ライダーフォームとカブト・ハイパーフォームが姿を現す。

カブト・R「ここで、いいのか？」

カブト・H「ああ、そんなものだ」

ダークカブト・H「……おにいちゃんたち、だれ？」

ダークカブト・Hに名を問われた二人のカブトは名を名乗った。

カブト・Hは天に向かって指を指すように伸ばし、名乗った。

カブト・H「俺は、天の道を往き、総てを司る男。天道総司」

続けてカブト・Rも名乗りをあげた。

カブト・R「俺は、天堂ソウジ」

カブト・カイザー「さしずめ、オリジナルのカブトとリイマジのカブトとお見受けします」

カブト・H「まあ、そうなるな。俺はオリジナルのカブト」

カブト・R「俺はリイマジのカブト」

三人のカブトは頷き横に並び、必殺技の構えを取った。

マキシマムライダーカイザー

マキシマムライダーパワー

1 2 3

カブト・カイザー「カイザーキック」

カブト・H「ハイパーキック」

カブト・R「ライダーキック」

ライダーキック

ライダーキック

ライダーキック

やがて三人は跳躍し、キックの体勢を取った。対するダークカブト・H達もライダーキックとハイパーキックを繰り出す。

数ではダークカブト・H達が四人に対し、カブト・カイザー達三人が押していた。

何故だ。何故押されている。ダークカブト・Hの頭の中ではどうしても解明出来なかった。たった一人足りないというのに、何故こちらより勝っているのかが。

ダークカブト・Hの仮面の奥で苦虫をかみつぶした表情を読み取ったカブト・Hはその答えを述べた。

カブト・H「おばあちゃんは言っていた。未来を願う心と勇氣は、何物にも敗れず、輝き続ける！」

カブト・カイザー「そしておじいちゃんが言っていた」

カブト・Hに続き、カブト・カイザーも答えを述べた。

カブト・カイザー「支配という言葉を経々しく口にするよりも、明日を信じて生きなさい！それが、総ての命に与えられた大切な物！」

それを聞いたダークカブト・Hは仮面の奥で目を見開き、やがてダークカブト・Hにカブティックライダー達は、カブト・カイザー達の力に押し負けてしまった。

カブティックライダー達は屑ヤミーが変身していたが、ダークカブトに変身していたのは、まだ年端も行かぬ少年だ。見た目五、六歳程の子供だ。

カブト・カイザー達は変身を解いた。しかし、ソウジだけは何故か疑問に思っていた。

ソウジ「……クロックアップの世界から、解放されて気分がいい」

総司「それは良いことだな。これで家族と居られるだろう」

ソウジと総司が話していると、下の階からオーズ、ダブル、キバそして電王の変身者がバイクに掴まり到着した。

マシンキバーに跨がっていた渡はカブトエクステンダーに跨がった総司に向かって確認するように言った。

渡「……リイマジネーションのカブトに会えましたか？」

総司「ああ。思っていたより、楽だったよ」

その近くで、フィーナは何かを感じ取り、皆に言った。それも恐れを感じ取ったかの様に。

フィーナ「……上から、とてつもなく邪悪な気が流れてきます」

フィリップ「そうかな？だとしたら、実に興味深い。……ゾクゾクするよ」

とにかく、更にも上に行くしかないと確認した渡はその場に居た全員に号令を掛けた。

渡「立ち止まっている暇はありません！全世界の明日を破壊しようとする大ネオショッカーの愚行を、これ以上許す訳にはいきません！」

その渡の言葉に、翔太郎もフィリップも映司も、聖夜もフィーナも薫も佑理も、その場にいた全員は頷き、バイクで更に上階へと進んだ。

くづつ

七十二話 決戦カブト編 11月9日(後書き)

次回は、龍騎・カイザー&ディエンド・コンプリートフォーム編

七十三話 決戦龍騎&ディエンド編 11月9日（前書き）

A T A S H E ズジャーナルの一角に、辰巳シンジのデスクはあった。あれから、スーパークライス要塞やらドラスやら騒々しい事から、今の平凡な日々に戻り、辰巳シンジは退屈という物を覚えていた。最近の写真撮っても、生き生きしないものが多かった。スランプというやつだろうか。

龍騎となったあの時の出来事は今でも覚えていた。土達がこの世界に訪れた時、編集長でもある桃井怜子が殺害されたその時、自分は裁判員制度で龍騎として選ばれ、真犯人で副編集長だった鎌田の殺害トリックを暴くため、タイムベントを使用した。

早い話が、過去に戻って編集長の殺害は止められたので、裁判所から受領した龍騎のデッキを持ったまま返還していかないということだ。だがそのお陰で、スーパーショッカーの野望を止めることが出来たから、既に自分の所有物になっていた。

「辰巳さん。受付にお客様が来てます」

桃井「シンジ、行ってあげて。休憩入れても構わないから」

辰巳「はい、編集長」

受付まで行くと、そこには男が二人居て、辰巳シンジを待っていた。近場の喫茶店に行き、城戸真司と海東大樹の話聞いた。

真司「ってな訳で、協力してくれる？」

海東「出来れば弁護士君も一緒に来てほしいんだ」

要約すると、別の世界で悪の組織が世界を支配せんとしているという事。

たまには息抜きしようと考えた辰巳シンジは二つ返事です承。

城戸が代金を払い、喫茶店の路地裏にまで行き、灰色のカーテンを出現させる。

真司「協力してくれた事に感謝するよ」

辰巳「世界の危機って事は、こっちにも影響が出るって事でもあるんでしょう？やりますよ、俺は」

海東「交渉成立。それじゃあ行こうか。スマブライダーズの世界へ」

三人が灰色のカーテンを潜ると同時に、役目を終え消えた。

七十三話 決戦龍騎&ディエンド編 11月9日

三首烈火無双龍：サザンドラグレッダー。そのミラーモンスターは龍騎・カイザーの契約モンスターである。

対するは暗黒無双龍：ブラックドラグランザー。目の前にいるリュウガ・サヴァイブの契約モンスターである。

両者はアドベントカードで自身の契約モンスターを呼び出し、同時に両契約モンスターは威嚇を始め、主人の命令が出るまで制止していた。

一方では、G4、リュウガ、オーガ、グレイブ、歌舞鬼、コーカサス、ネガ電王、アーク、スカルを背後に従わせているディエンド・コンプリートフォームは目の前にいるグレイブ・ジャックフォームに視線を向けていた。

ディエンド・C「まずはてめえのベルトを狙い撃つ！」

アタックライド GNライフル

アタックライド クロスアタック

二枚のカードの効果が発動する。

ディエンド・Cの手に呼び出したGNライフルが出現する。しかしそれにはトリガーやグリップは存在しなかった。それは、ディエンドライバーに装着するためのアタッチメントの一つだからだ。

もう一枚のアタックライドカードのクロスアタックの効力により、G4からスカルまで各々のライダーが数の暴力でグレイブ・ジャックフォームに必殺技をかけた。

しかし、グレイブ・Jは背中中の羽根を展開。後は自由に飛び回り、G4を切り裂いた。

「ディエンド・C「狙い撃つ！」

ファイナルアタックライド ディ・ディ・ディ ディエンド

狙撃型の強化ディメンジョンシユートがグレイブ・Jに吸い込まれるように放たれる。しかしそれは、グレイブ・Jがラウズするカードの効力で阻止された。

メタル

ブレイドのカードの一枚であるトリロバイトメタル。その防御力で塞がれた。そのメタルが解かれると、今度はラウズカードを二枚ラウズする。

マイティ マツハ テンペスト

ジャックウイングを広げたグレイブ・Jは滑空しながら擦れ違い様に、G4からスカルまで切り捨てた。それを見越してか、ディエンド・Cはアタックライドカードを使用する。

アタックライド イリユージョン

五人に分身したディエンド・Cはそれぞれカメンライドカードを使用する。

それぞれ別のライダーが召喚された。

カメンライド G3マイルド

カメンライド アナザーアギト

カメンライド エターナル

カメンライド カイザ

カメンライド デルタ

G3マイルド、アナザーアギト、エターナル、カイザ、デルタはそのままグレイブ・Jへと立ち向かう。

その近くでは、自身の翼で飛ぶ龍騎・カイザーとブラックドラグレンザーの背中に立つリュウガ・Sが空中戦を繰り広げていた。

ソードベント

リュウガ・S「……！」

龍騎・カイザー「させん！」

カイザーバイザーの刃がブラックドラグバイザー・ツヴァイの刃を弾く。

カイザーバイザー
帝王用聖剣型召喚機には、アドベントカードを三枚装填することが出来る。そしてカードは龍騎ライダーの総てのカードを所持している。勿論オルタナティブタイプのカードでさえも。それが龍騎・カイザーなのだ。

龍騎・カイザーはオルタナティブ・ゼロのカードであるアクセルベント、そしてガイのカードであるコンファインベントを使用する。超加速を得た龍騎・カイザーはリュウガ・Sを切り捨て、コンファインベントの能力でリュウガ・Sのアドベントの能力を打ち壊す。それにより、ブラックドラグレンザーは何処かへと消え去った。

イける。勝てる。ディエンド・Cも龍騎・カイザーも、仮面の奥でニヤリと口角を上げた。この音声が鳴り響くまでは。

サヴァイブ

アブソープクイーン

フュージョンジャック

アブソープクイーン

フュージョンジャック

リュウガ・Sとグレイブ・Jの背後から、三人のライダーが現れる。一人は、ライアとガイの力を所持している王蛇・サヴァイブ。

残る二人は、グレイブ・Jの様に金色の六枚の翼を得たランス・ジャックフォームとラルク・ジャックフォームだった。

王蛇・Sは三枚のアドベントカードを装填し、ユナイトベントカードを装填。ジェノサイダーが君臨する。王蛇の契約モンスターのベノスネーカー、ライアの契約モンスターのエビルダイバー、ガイの契約モンスターのメタルゲラス。その三体のミラーモンスターを種とした、王蛇・Sの契約モンスター……ジェノサイダーはサザンドラグレッダーに襲い掛かる。

龍騎・カイザー「くっ……海東！」

翼を広げ、ラルク・Jとランス・Jの攻撃をかわしながら龍騎・カイザーはディエンド・Cを読んだ。

「デイエンド・C」どうした！何がしたい！！」

リユウガ・Sと王蛇・Sによって、先程召喚したライダーが消え失せ、今デイエンド・Cはグレイブ・Jに圧倒されていた。

龍騎・カイザー「出来る限りで良い！ライダーを呼べ！」

デイエンド・C「無理だ！これ以上使っちゃったら、もう手が出ねえ！…うわぁ！」

龍騎・カイザーに応答したデイエンド・Cは今のカードの残量を見て言うが、グレイブ・J、ラルク・J、ランス・Jの猛攻を浴び、アタツチメントのGNライフルが消えてしまった。更にその間に、リユウガ・Sと王蛇・Sのストライクベントを喰らう。

体勢を立て直す龍騎・カイザーとデイエンド・Cだが、相手も伊達にカードライダーと名乗るほどヤワではない。少量のカードで幾重にも与えていくダメージ。それが骨にまで響いていく。

ストレンジベント

トリックベント

龍騎・カイザーのストレンジベントの能力でトリックベントが発動。しかし、それでも状況を打破することさえも叶わない。

続けて駄目押しとばかりにブラストベントを装填。サザンドラグレッツダーの第二、第三の首の口から竜巻が流れ出る。それで突進するラルク・Jとランス・Jを食い止める事が出来たが、リユウガ・Sのシュートベントが龍騎・カイザーとデイエンド・Cに直撃。衝撃で壁に吹き飛ばされ、龍騎・カイザーはアドベンチャーに戻り、デイエンド・Cは完全に変身が解けてしまった。

大樹「……かはっ！………かつこ…つかねえな………」

龍騎・A「まだだ！まだ終わらんよ！！」

吐血する大樹。諦められないが体のダメージに立つことさえ叶わない龍騎・A。

ファイナルベント

マイティ

容赦無く、無慈悲に、リュウガ・Sとグレイブ・Jは必殺技のカードを装填。ブラックファイヤーストームとジャック・グラビティスタップが発動し、龍騎・Aと大樹に襲い掛かる。しかし、それを邪魔するが如く灰色のカーテンが揺らめき、中から三人の男が居た。その中の一人は、以前この世界に訪れた人物が居た。

真司「っしやあ！着いたぜ！！」

守護ライダーであり、オリジナルの龍騎である城戸真司。

辰巳「………黒い…龍騎？！」

リイマジネーションの龍騎であり、裁判員制度によって龍騎となった辰巳シンジ。

海東「待たせたね、スマブラライダーズの龍騎とディエンド君」

そして、土の仲間にして自称トレジャーハンターの海東大樹だった。三人は変身の準備をし、龍騎・Aと大樹を挟む様に並んだ。

カメンライド…

龍騎・A「…あんたら…どうしてここに？」

何故守護ライダーとリイマジネーションライダーがこの世界に訪れるのか、何故またも海東がこの世界に訪れるのか。

だがそれは今はどうでもいい。今は目の前の壁となっているリュウガ・サヴァイブ、王蛇・サヴァイブ、グレイブ・ジャック、ランス・ジャック、ラルク・ジャックを倒すのみ。

二人の龍騎は変身を遂げ、城戸の方はサヴァイブカードを使用する。

「『変身！』」

ディエンド

サヴァイブ

龍騎・A「じゃ、こっちも行くか。はあーっ！」

体中の力を爆発させ、カイザーへと姿を変える。

そして大樹もディエンドライバーにカードを装填。自身もディエンドへと変身し、ケータツチを使用する。

G 4 リュウガ オーガ グレイブ 歌舞鬼 コーカサス ネガ電
王 アーク スカル

そして、自身の戦士ライダーの紋章をタッチする。

ファイナルカメンライド デイエーンド

龍騎・S、龍騎、龍騎・カイザー、ディエンド・C、ディエンドが並ぶとそれぞれ必殺技の体勢に入った。

そうはさせまいと突撃するランス・Jとラルク・Jが迫って来るが、ディエンドのアタックライドカードのバイオの効力で拘束された。

ファイナルベント

ファイナルベント

ファイナルベント

ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ デイエンド

ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ デイエンド

ドラゴンファイヤーStormがランス・Jを焼き、ドラゴンライダーキックがラルク・Jを貫き、ドラゴンカイザーキックがリュウガ・Sを貫き、強化ディメンジョンシュートがグレイブ・Jを破壊し、ディメンジョンシュートが王蛇・Sを爆ぜさせる。

戦闘が終わる頃には、下から来る仲間達が上がってきた。その中には、援軍だろうか、守護ライダー達とリイマジネーションライダー等が居た。

ホツと下のもつかの間。下から屑ヤミーとマスカレイドドーパントの大群が押し寄せてきた。

オーストライバーとロストドライバーを構える映司と翔太郎だが、聖夜が前に出てそれを阻止した。

聖夜「皆は先に行け！ここは俺が食い止める。作成・烈火大斬刀！」
創造の力で聖夜の手に、侍戦隊シンケンジャーの世界のシンケンレ
ツドの専用武器が収まった。
しかしフィーナは彼何故そのような行為に出たのか問い質した。

フィーナ「どうして！？あなた…死ぬ気?!」

聖夜「……なわけねえよ。ただな、ここは仲良しごっこが通じるハ
ズもねえんだよ。誰かが犠牲になっても、先に行く戦友達の邪魔
を食い止めるんだ」

フィーナ「だったら私も残る！皆さんは先に行って下さい！ここは
私達二人で食い止めます!!」

聖夜「なっ!」

フィーナに言われたスマブラライダーズを含めた守護ライダー達とリ
イマジネーションライダー達は自分のバイクに乗り込み、階段を登
り上がっていく。

烈火大斬刀を地面に突き刺した聖夜はフィーナに詰め寄り、彼女の
肩に両手を置いた。

フィーナは叱責が来るのだと思い、思いつ切り目を閉じる。しかし、
来たのは軽いデコピンだった。

フィーナ「あたっ…」

聖夜「……どうなっても知らねえぞ」

フィーナ「それでもいい。私は貴方の手足になりたい！剣になりた

いの!!」

聖夜「俺だつて、フィーナ、お前の手足になりたい! 剣になりたいんだ!! 作成メイク・ダブルドライバー!」

サイクロン

フィーナ「いくよ、聖夜」

ジョーカー

ジョーカー「ああ、フィーナ」

二人は背中を合わせ、腕で『W』の形を作るとサイクロンメモリとジョーカーメモリ、そしてエクストリームメモリを手に、叫ぶ。

フィーナ「変:」

聖夜「しいん!」

サイクロンジョーカー

エクストリーム

人々の安らかな平和への願いを背に仮面ライダーダブルフェイスWCJGXが今ここに現れる。

先程地面に突き刺した烈火大斬刀を握り締め、新たに作成メイクしたガイアメモリを使用する。

シンケンジャーマキシマムドライブ

W C J G X 「俺達の…」

W C J G X 『私達の…』

W C J G X 「愛の力で消え去るがいい！！烈火大斬刀、百花繚乱！！！！！！」

く づ っ

七十二話 決戦龍騎&ディエンド編 11月9日(後書き)

次回は、決戦ファイズ・カイザー編！

戦わなければ、生き残れない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7120m/>

スマブラ & 仮面ライダーズ+

2012年1月6日22時46分発行